心細さよりも、飽かず悲しう口惜しき事ぞ、いとゞまさりける。人々も(女房)「世の常に疎々しくなもてなし聞え給ひそ。限なき御心の程をば、今しもこそ見奉り知らせ給ふ樣をも、見え奉らせ給ふべけれ。」など聞ゆれど、人づてならず、ふと差し出で聞えん事の猶つゝましきを、やすらひ給ふ程に、宮出で給はんとて、御罷申に渡り給へり。いと清らに引き繕ひ假粧じ給ひて、見る甲斐ある御樣なり。中納言は此方になりけりと見給ひて、(自)「何どかむげに差し放ちては出し居ゑ給へる。御あたりには餘り怪しと思ふまで後安かりし心寄せを、我爲は嗚呼がましき事もやと覺ゆれど、さすがにむげに隔て多からんは、罪もこそ得れ。近やかにて、昔物語も打語らひ給へかし。」など、聞え給ふ物から、(自)「さはありとも、餘り心緩びせんも又如何にぞや。疑はしき下の心にもぞあるや。」と、打返しの給へば、一方ならず煩らはしけれど、我御心にも、哀深く思ひ知られにし人の御心を、今しも疎なるべきならねば、かの人も思ひの給ふめるやうに、古の御代りとなずらへ聞えて、かう思ひ知りけりと、見え奉る節もあらばやとおぼせど、さすがにとやかくやと、方々に安からず聞えなし給へば、苦しうおぼされけり。

○限なき御心　薫のなり。
○御あたり　中君邸を指して云ふ。
○一方ならず云々　中の君の心なり。

やどりぎ

此卷は薫君二十四歳の夏より二十六歳の夏までの事を記せり。卷名は歌に「やどりぎと思ひ出でずは木のもとの旅寢もいかにさびしからまし」とあるに取りたり。

其頃藤壺と聞ゆるは、故左大臣殿の女御になんおはしける。まだ春宮と聞えさせし時、人より先に參り給ひにしかば、睦しう哀なる方の御思は殊に物し給ふめれど、そのしるしと見ゆる節も無くて年經給ふに、中宮には、宮達さへ數多こゝら大人び給ふめるに、さやうの事も少くて、唯女宮一所をぞ持ち奉り給へりける。我がいと口惜しう人に壓され奉りぬる宿世、歎かしく覺ゆる代りに、此宮をだに、如何で行末の心も慰むばかりにて、見奉らんと、かしづき聞え給ふこと疎ならず。御容貌もいとをかしくおはすれば、帝もらうたきものに思ひ聞えさせ給へり。女一宮を、世に類無き樣にもてかしづき聞えさせ給ふに、大方の世の覺こそ及ぶべうもあらね、內々の御有樣はをさ〳〵劣らず。父大臣の御勢、嚴しかりし名殘いたく衰へねば、殊に心もとなき事など無くて、侍ふ人々のなり姿より始め、たゆみ無く時々に付けつゝ、調へ好みて、今めかしく故々しき樣にもてなし給へり。十四になり給ふ年、御裳着せ奉り給はんとて、春より打始めて、異事なく思し急ぎて、何事もなべてならぬ樣にとおぼし設く。古より傳りたりける寶物ども、此折にこそはと搜し出でつゝ、いみじく營み給ふに、女御夏頃靈氣に煩ひ給ひて、いとはかなく亡せ給ひぬ。言ふ甲斐なく口惜しき事を、內にもおぼし歎く。心ばへなさけ〳〵しく、懷かしき所おは

○其頃　椎本の初の頃。
○藤壺　故左大臣の三君にて麗景殿女御と號せり。明石中宮より早く參りし人なり。
○中宮　明石中宮。
○我がいと口惜しう云々　藤壺の心なり。
○御容貌もいとをかしく　女二宮のさまなり。
○女一宮　明石中宮の腹なり。
○十四になり給ふ　女二宮がなり。
○古より　古左大臣より。
○心ばへなさけ〳〵しく　藤壺のさまなり。

○聞し召して　叡聞に達するなり。
○黒き御衣にやつれて　母の服衣を着たまふさまなり。

○御心一つ　今上の御心。
○御方に　女二宮の御方に。

○朱雀院の姫宮を云々　朱雀院が女三宮を源氏へ渡し給ひし例を思ひ給ふなり。

○源中納言　薫君。
○ともかくも御覧ずる世に

しつる御方なれば、殿上人どもゝ、こよなく淋々しかるべき事かなと、惜み聞ゆ。大方さるまじき際の女官などまで、忍び聞えぬは無し。宮はまして若き御心地に、心細う悲しく思し入りたるを、聞し召して心苦しく哀に思し召さるれば、御四十九日過ぐる儘に、忍びて参らせ給へり。日々に渡らせ給ひつゝ見奉らせ給ふ。黒き御衣にやつれておはする様、いとゞらうたげにあてなる氣色まさり給へり。御心ざまもいとよく大人び給ひて、母女御よりも、今少し靜やかに、重りかなる所はまさり給へるを、後安くは見奉らせ給へど、誠には御母方とても、後見と頼ませ給ふべき舅などやうの、はかばかしき人も無し。僅に大藏卿修理太夫など云ふは、女御にも異腹なりけり。殊に世の覺重りかにもあらず。やんごとなからぬ人々を頼もし人にておはせんに、女は心苦しき事多かりぬべきこそ、いとほしけれなど、御心一つなるやうに、思し扱ふも安からざりけり。

御前の菊移ろひ果てゞ盛なる頃、空の氣色も哀に打ちしぐるゝにも、先づこの御方に渡らせ給ひて、昔の事など聞えさせ給ふに、御答なども大どかなる物から、いはけなからず打聞えさせ給ふを、うつくしく思ひ聞えさせ給ふ。斯様なる御様を見知りぬべからん人の、もてはやし聞えんも、何どかは有らざらん。朱雀院の姫宮を六條院に讓り聞え給ひし折の定どもなど、おぼし出づるに、暫しはいでや飽かずもあるかな。さらでもおはしなまし、と聞ゆる事ども有りしかど、源中納言の人より異なる有様にて、かく萬を後見奉るにこそ、そのかみの御覺衰へず、やんごとなき様にてはながらへ給ふめれ。さらずは御心より外なる事ども出で來て、自ら人に輕められ給ふ事もやあらまし、など思し續けて、ともかくも

や云々　御在世の中に薫君に降嫁せんと思召すなり。
○其序　女三宮の例。

○徒に日を送る云々　白氏文集に「送春唯有酒、餘日不過碁、」とあるに取れり。

○花　菊の花。

○此花一枝許す　朗詠集に「聞得園中花養艶、請君許折二一枝春、」とある意を取り女二宮を花に喩へての給ひしなり。

御覽ずる世にや、思ひ定めまし、と思し寄るには、やがて其序の儘に、この中納言より外に宜しかるべき人また無かりけり。宮達の御傍に差し並べたらんに、何事もめざましくはあらじを、もとより思ふ人持たりとて、聞き惡き事など打雜ずまじう、はたあゝめるを、遂にはさやうの事無くてしも得あらじ。然らぬ先に、さもや仄めかしてまし、など折々思し召しけり。

御碁など打たせ給ふ。暮れ行く儘に時雨をかしき程に、花の色も夕ばえしたるを御覽じて、人召して、(帝)「只今殿上に誰々か。」と問はせ給ふに、(侍臣)「中務の親王、上野の親王、中納言源の朝臣侍ふ。」と奏す。「中納言の朝臣こなたに。」と仰言ありて、参り給へり。實にかく取り別きて召し出づるも甲斐ありて、遠く薫れる匂より始め、人に異なる樣し給へり。(帝)「今日の時雨常より殊に長閑なるを、遊などすさまじき方にて、いと徒然なるを、徒に日を送る戯にても、これなん宜かるべき。」とて、碁盤召し出でゝ、御碁の敵に召し寄す。何時もかやうに氣近く習しまつはし給ふに習ひたれば、さにこそはと思ふに、(帝)「宜き賭物はありぬべけれど、輕々しくはえ渡すまじきを、何をかは。」などの給はする御氣色如何が見ゆらん。いと心づかひして侍ひ給ふ。さて打たせ給ふに、三番に數一つ負けさせ給ひぬ。(帝)「妬き事かな。」とて、(帝)「まづ今日は此花一枝許す。」との給はすれば、御答聞えさせて、下りて面白き枝を折りて参り給へり。

(薫)「世の常の、垣根に匂ふ、花ならば、心の儘に、折りて見ましを。」と奏し給へる屑意淺からず見ゆ。

○霜に敢へず云々　母女御を閨に寄せ女二宮を菊に寄せて詠み給へるなり。
○例の心の癖　薫の性癖なり。
○左大臣殿　夕霧。
○思の外なる事　薫を譬に思はれしに女二宮をとあればなり。
○兵部卿宮　匂宮。
○聞え給ふ　六君になり。
○水漏るゝまじく　伊勢物語の歌に「などてかくあふごかたみになりにけん水もらさじとむすびしものを」とある意にて仲の睦めてよきをいふ。

（薫）「霜に敢へず、枯れにし園の、菊なれど、殘の色は、あせずもあるかな。」

との給はす。かやうに折々仄めかし給ふ御氣色を、人づてならず承はりながら、例の心の癖なれば、急がしくも覺えず。いでや本意にもあらず。樣々にいとほしき人々の御事どもをも能く聞き過しつゝ年經ぬるを、今更に聖樣の者の世に返り出でん心地すべき事と思ふも、且は怪しや。殊更に心を盡す人だにこそあゝなれ、とは思ひながら、后腹におはせばしも、と覺ゆる心の中ぞ、餘りおほけなかりける。

かゝる事を左大臣殿ほの聞き給ひて、六の君はさりとも此君にこそは、濃々なりともまめやかに恨み寄らば、遂にはえ否び果てじと思しつるを、思の外なる事出で來ぬべかゝめりと、妬く思されければ、兵部卿の宮はた、態とにはあらねど、折々に付けつゝ、をかしき樣に聞え給ふ事絶えざりければ、さばれ等閑の御すきにはありとも、さるべきにて、御心とまるやうも何どか無からん。水漏るまじく思ひ定むとても、なほ〳〵しき際に下らん將いと人わろく飽かぬ心地すべし、など思しなりにたり。女子後めたげなる世の末にて、帝だに婿求め給ふめる世に、ましてたゞ人の盛過ぎんも愛無しなど、譏らはしげにの給ひて、中宮にもまめやかに恨み申し給ふこと度重りければ、聞し召し煩ひて、（中宮）「いとほしく斯くおふな〳〵、思ひ志して年經給ひぬるを、あやにくに遁れ聞え給はんも、なさけ無きやうならん。御子達は御後見からこそ、ともかくもあゝなれ。上の御世も末に成り行くとのみ思しの給ふめるを、たゞ人こそ一方に定りぬれば、又心を分けん事も難げなゝめれ。それだに彼の大臣の、いとまめだちながら、此方彼方羨み無くもてなして、物し給はずやはある。

○思ひ置きて聞ゆる事　匂宮立坊の事。
○我御心　匂の宮のなり。
○この大臣　夕霧。
○按察大納言　柏木の弟、當時右大臣たり。
○紅梅の御方　右大臣の繼女、母は楓桂。
○さも聞え出でば云々　薫君の女宮の事を申し出でば許さんと思召すなり。
○口惜しき品なりとも云々　下萬なりとも大君に似たらばとなり。
○昔ありけん香の烟　反魂香のことなり。
○二條院の對の御方　宇治の中君。

ましてこれは思ひ置きて聞ゆる事も叶はゞ、數多も侍はんに何どかあらん。」など、例ならず言續けて、あるべかしう聞えさせ給ふに、我御心にも、もとより持て離れてはた思さぬ事なれば、あながちには何どてかはあるまじき樣にも聞えさせ給はん。唯いと事麗しげなるあたりに取り籠められて、心安く習ひ給へる有樣の、所狹からん事を生苦しく思すに、物憂きなれど、實にこの大臣に餘り怨ぜられ果てんも愛無からん、などやう〳〵思し弱りにたるなるべし。あだなる御心なれば、かの按察の大納言の紅梅の御方をも、猶思し絶えず、花紅葉に付けてもの給ひ渡りつゝ、何れをもゆかしうは思されけり。されど其年は更りぬ。

女二宮も御服果てぬれば、いとゞ何事にかは憚り給はん。さも聞え出でばと思し召したる御氣色になんと、告げ聞ゆる人々もあるを、餘り知らず顏ならんも僻々しうなめげなり、など思し起して、さるべきたよりして、氣色ばみ聞え給ふ折々もあるに、はしたなきやうは何どてかあらん。その程に思し定めたゝなりとつてにも聞き、自ら御氣色をも見れど、心の中には、猶飽かで過ぎ給ひにし人の悲しさのみ、忘らるべき世なく覺ゆれば、うたて斯く契深く物し給ひける人の、何どてかはさすがに疎くては過ぎにけんと、心得難く思ひ出でらる。口惜しき品なりとも、彼の御有樣に少しも覺えたらん人は、心も留りなんかし。昔ありけん香の烟に付けてだに、今一度見奉るものにもがな、とのみ覺えて、やんごとなき方ざまに、いつしかなどは急ぐ心も無し。

左の大殿は急ぎ立ちて、八月ばかりにと聞え給ひてけり。二條院の對の御方には聞き給ふ

○いとしも名殘なく云々　一向に中絶ゆることはなくとゞまとなり。
○草の下　故郷の宿りをいふ。
○つしやか　動かぬさま。
○中納言　薫君。
○亡き御影とも　父宮や姉君の亡き魂。
○例ならぬ樣に云々　中の君の懷姙し給ふをいふ。

に、さればよ、如何でかは數ならぬ有樣なゝめれば、必ず人笑に憂き事出で來ん物ぞとは、思ふ〳〵過しつる世ぞかし。あだなる御心と聞き渡りしを、頼もしげ無く思ひながら、目に近くては、殊につらげなる事も見えず、哀に深き契をのみし給へるを、俄に變り給はん程、如何がは安き心地はすべからん。たゞ人の仲らひなどのやうに、いとしも名殘無くなどはあらずとも、如何に安げ無き事多からん。猶いと憂き身なゝめれば、遂には山住に歸るべきなゝめり、など思すにも、やがて跡絶えなましよりは、山賤の待ち思はんも人笑なりかし。返す〴〵も故宮のの給ひ置きし事に違ひて、草の下を離れにける心輕さを、恥かしうもつらくも思ひ知られ給ふ。故姫君のいとしどけなく、物はかなき樣にのみ、何事をも思しの給ひしかど、心の底のつしやかなる所は、こよなくもおはしけるかな。中納言の君の、今に忘らるべき世無く、歎き給ふめれど、若し世におはせましかば、又かやうに思す事はありもやせまし。それをいと深う、如何でさはあらじと思ひ入り給ひて、とざまかうざまに持て離れん事を思して、容をも變へてんとし給ひしぞかし。必ずさる樣にてぞおはせまし。今思ふに、如何に重りかなる御心掟ならまし。亡き御影どもゝ、我をば如何にこよなき淡つけさと見給ふらんと、恥かしう悲しく思せど、何かは甲斐なき物から、かゝる氣色をも見え奉らんと、忍び返しつゝ、聞きも入れぬ樣にて過し給ふ。

宮は常よりも、哀に懷かしう起き臥し語らひ契りつゝ、此世のみならず、長き事をのみぞ頼め聞え給ふ。さるは此五月ばかりより、例ならぬ樣に惱ましうし給ふ事もありけり。こちたく苦しがりなどはし給はねど、常よりも物參ることいとゞ無く、臥してのみおはする

○見知り給はねば　匂宮はなり。
○いと恥かしう云々　中君がなり。
○其日　六君入輿の日。
○女君　中君。
○かく渡り給ひにし後は　中君の渡り給ひし後は。
○俄に如何に思ひ給はんと　後に夜離し給はん時中君がなり。
○習はし聞え給ふ　夜離のつらきをなり。
○花心　あだなる心。
○今めかしき方　六君。
○然も習ひ給はで　夜離に慣れ給はで。
○昔の人　大君をいふ。
○かの御事　大君の御事。

を、まださやうなる人の有樣など、よくも見知り給はねば、たゞ暑き頃なれば、かくおはするなゝめりとぞ思しける。さすがに怪しと思し咎むる事もありて、(匂)「若し如何なるぞ。さる人こそさやうには惱むなれ。」など、の給ふ折もあれど、いと恥かしうし給ひて、さりげ無くのみもてなし給へるを、差し過ぎ聞え出づる人も無ければ、たしかにも得知り給はず。

八月になりぬれば、其日など外よりぞ傳へ聞き給ふ。宮は隔てんとにはあらねど、言ひ出でん程心苦しういとほしく思されて、さもの給はぬを、女君はそれさへぞ心憂く覺え給ふ。忍びたる事もあらず、世の中なべて知りたる事を、其程などだにの給はぬ事と、如何が怨めしからざらん。かく渡り給ひにし後は、殊なる事無ければ、内に參り給ひても、夜泊る事は殊にし給はず、此處彼處に御夜離なども無かりつるを、俄に如何に思ひ給はんと心苦しき紛らはしに、此頃は時々御宿直とて、參りなどし給ひつゝ、かねてより習はし聞え給ふをも、唯つらき方にのみぞ思ひ置かれ給ふべき。

中納言殿も、いと〳〵ほしき事かなと聞き給ふに、花心におはする宮なれば、哀とは思すとも、今めかしき方に必ず御心移ろひなんかし。女方も、いとしたゝかに物し給ふわたりにて弛び無く聞えまつはし給はゞ、月頃も然も習ひ給はで、待つ夜多く過し給はんこそ、哀なるべけれなど、思ひ寄るに付けても間無しや。我心よ、何しに讓り聞えけん。昔の人に心を染めてし後、大方の世をも思ひ離れて、澄み果てたりし方の心も濁り初めしかば、唯かの御事をのみ、とざまかうざまには思ひながら、さすがに人の心許されであらん事は、

○人は心にもあらず云々　大君は薫に逢ふ事を本意ならぬ樣に持て做して。
○本意ならぬ方　中君を指す。
○堅てありき云々　匂宮を導きし事を云ふ。
○其折の事など　其時の拳公をも。
○御女　女二宮。
○此君　中君。
○彼の御ゆかり　大君のゆかり。
○天翼りても　大君の亡魂がなり。

初より思ひし本意なかるべしと憚りつゝ、唯如何にして少しも衰と思はれて、打解け給へらん氣色をも見んと、行く先のあらまし事のみ思ひ續けしに、人は心にもあらずもてなして、さすがに一方にてもえ差し放つまじう思ひ給へる慰めに、同じ身ぞと言ひ做して、本意ならぬ方におもむけ給ひしが妬く怨めしかりしかば、先づその心掟を違へんとて、急ぎせしわざぞかしなど、あながちに女々しう物狂ほしく、率てありきたばかり聞えし程、思ひ出づるもいと怪しからざりける心かなと、返す〳〵ぞ悔しき。宮もさりとも其程の有樣思ひ出で給はゞ、我が聞かん所をも少しは憚り給はじやと思ふに、いでや今は其折の事など、掛けてもの給ひ出でざゝめるかし。猶あだなる方に進み移り易なる人は、女の爲のみにもあらず、賴もしげ無く、輕々しき事もありぬべきなゝめりかしなど、憎く思ひ聞え給ふ。我が誠に餘り一方に沁みたる心習に、人はいとこよなくもどかしく見ゆるなるべし。かの人を空しう見奉り做してし後、思ふには帝の御女を賜はんと思し置きつるも、嬉しくもあらず。此君を得ましかばと覺ゆる心の月日に添へて增さるも、唯彼の御ゆかりと思ふに思ひ離れ難きぞかし。同胞と云ふ中にも、限なく思ひかはし給へりしものを、今はとなり給ひにし果にも、留らん人を同じ事と思へとて、萬は思はずなる事も無し。唯彼の思ひおきてし樣を違へ給へるのみなん。口惜しう怨めしき節にて、此世には殘りぬべきとの給ひしものを、天翔りても、かやうなるに付けては、いとゞつらしとや見給ふらんなど、つく〴〵と人やりならぬ獨寢し給ふ夜な〳〵は、はかなき風の音にも目のみ覺めつゝ、來し方行く先の人の上さへ、味氣なき世を思ひ運らし給ふ。無氣のすさびに物をも言ひ觸れ、氣近く使ひなら

○かの君達　宇治の姫君たち。
○尋ね取りつゝ　女三宮の方になり。
○今はと世を背き離れん時云々　世を背かん時のほだしになるべければ女に心をとめじと思ひしとの意なり。
○明くる間咲きて　古歌に「朝顏は常無き花の色なれや明くる間咲きて移ろひにけり。」
○北の院　二條院。
○今朝の間の　はかなく消え易き花と思へども猶愛でたき色かなとなり。

し給ふ人々の中には、自ら憎からず思さるゝもありぬべけれど、誠には心留るも無きこそさわやかなれ。さるは彼の君達の程に劣るまじき際の人々も、時世に隨ひつゝ衰へて、心細げなる住居するなどを、尋ね取りつゝあらせなど、いと多かれど、今はと世を背き離れん時、此人こそ取り立てゝ、心とまる絆になるばかりの事は無くて、過してんと思ふ心づかひ深かりしを、いで然も惡く我心ながら拗けてもあるかなど、常よりもやがてまどろまず、明し給へる晨に、霧の籬より、花の色々面白く見え渡る中に、朝顏のはかなげにて雜りたるを、猶殊に目留る心地し給ふ。「明くる間咲きて。」とか、常無き世にもなずらふるが、心苦しきなンめりかし。格子も上げながら、いと假初に打臥しつゝ明し給へば、この花の開くる程をも、唯一人のみぞ見給ひける。

人召して、(薫)「北の院に參らんに、事々しからぬ車差出でさせよ。」との給へば、(侍)「宮は昨日より內裏になんおはしますなる。昨夜御車率て歸り侍りにき。」と申す。(薫)「さばれ、かの對の御方の惱み給ふなる、とぶらひ聞えん。今日は內裏に參るべき日なれば、日たけぬ先に、」との給ひて、御裝束し給ふ。出で給ふ儘に、下りて花の中にまじり給へる樣も、殊更に艶だち色めきても持て做し給はねど、怪しう唯打見るに、なまめかしう耻かしげにて、いみじう氣色だつ色好どもになずらふべくもあらず、自らをかしうぞ見え給ひける。朝顏を引き寄せ給ふに、露いたうこぼる。

(薫)「今朝のまの、色にやめでん、置く露の、消えぬにかゝる、花と見るゝ。はかな。」など獨言ちて、折りて持給へり。女郎花をば見過ぎてぞ出で給ひぬる。明け離る

○女郎花をば見過ぎて　古今集に「をみなへし憂しと見つゝぞ行き過ぐる男山にし立てりと思へば。」

○めざましうおはすかし　目を立て驚く意なり。

○驚き顔にもあらす云々　しとやかに物なれたるさまなり。

○猶あしこもとに　中君にあそこまでおはせといふなり。

○はか〳〵しくも云々　中君がなり。

○兄弟やうの云々　兄弟の如くになり。

○あらまし樣に　あらん樣にの意。

る儘に、霧立ち渡る空をかしきに、女どちはしどけなく朝寝し給へらんかし。格子妻戸などうち叩き、聲作らんこそ初々しかるべけれ。朝まだき來にけりと思ひながら、人召して、中門の開きたるより見せ給へば、「御格子ども皆參りて侍るべし。女房のけはひなどし侍りつ。」と申せば、下りて、霧の紛れに樣よく歩み入り給へるを、宮の忍びたる所より歸り給へるにやと見るに、露にうちしめり給へる薫、例のいと樣異に匂ひくれば、猶めざましうおはすかし。心を餘り治め給へるこそ憎けれ、など間無く若き人々などは聞え合へり。驚き顔にもあらず、よき程に打ちそよめきて、御褥さし出でなどする樣も、いと目安し。(薫)「これに侍へと許させ給ふ程は、人々しき心地すれど、猶かゝる御簾の前に、差し放たせ給へる憂はしさになん。屢も得侍はぬ。」との給へば、(女房)「さらば如何がは侍るべからん。」と聞ゆ。(薫)「北面などやうの隱れぞかし。かゝる古人などの侍はんに、ことわりなる息所は、それも亦唯御心なれば。憂へ聞ゆべきにも侍らず。」とて、長押におしかゝりておはすれば、例の人々、「猶あしこ許に」などそゝのかし聞ゆ。もとよりけはひ早りかに雄々しくなどは物し給はぬ人がらなるを、愈しめやかにもてなし治め給へれば、今は自ら聞え給ふ事も、やう〳〵うたてつゝましかりし方少しづゝ薄らぎて、面馴れ給ひにたり。(薫)「惱ましう思さるらん樣も、如何なれば。」など問ひ聞え給へど、はか〴〵しくも御いらへ聞え給はず、常よりもしめり給へる氣色の、心苦しきも、哀に推し量られ給ひて、細やかに世の中のあるべき樣などを、兄弟やうの者のあらまし樣に、教へ慰め聞え給ふ。聲などもわざと似給へりとも覺えざりしかど、怪しきまで唯それとのみ覺ゆるに、人目見苦しかるまじ

○心から悲しきこと　大君のことをいふ。

○やう〳〵赤みもて行く朝顔の花の移ろふさまなり。

○よそへてぞ云々　中君を朝顔の花に寄せて詠めり、大君によそへて君を見るべかりけりとなり。

○置きながら　露のおきながらなり。

○消えぬ間に云々　大君を花に寄せ中君自身を露に寄せて詠めり。

○何にかゝれる金葉集に、「たのめ置く言の葉だにも無きものを何にかゝれる露の命ぞ。」

○庭も籬も云々　古今集に「里荒れて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる」

○故院　六條院。

くば、簾も引き上げて、差向ひ聞えまほしく、打惱み給へらん容ゆかしう覺え給ふも、猶世の中に物思はぬ人も、えあるまじき事にやあらんとぞ、思ひ知られ給ふ。(薫)「人々しくきら〳〵しき方には侍らずとも、心に思ふ事あり。歎かしく身をもて惱む樣になどは無くて、過しつべき此世と、自ら思ひ給へしを、心から悲しき事も、をこがましく悔しき物思をも、方々に安からず思ひ侍るこそいと間無けれ。官位など云ひて、大事にすめることわりの憂に付けて、歎き思ふ人よりも、これや今少し罪の深さはまさるらん。」など言ひつゝ、折り給へる花を、扇に打置きて見居給へるが、やう〳〵赤みもて行くもなか〳〵色のあはひをかしう見ゆれば、やをら差入れて、

(薫)「よそへてぞ、見るべかりける、白露の、契りか置きし、朝顔の花。」

殊更びてしももてなさぬに、露を落さで持給へりけるよと、をかしく見ゆるに、置きながら枯るゝ氣色なれば、

(中君)「消えぬ間に、枯れぬる花の、はかなさに、後るゝ露は、尙ぞ優れる。」

何にかゝれる、」と、いと忍びて言も續けず、つゝましげに言ひ消ち給へる程、猶いとよく似給へるかなと思ふにも、先づぞ悲しき。(薫)「秋の空は今少し眺のみ優り侍る。徒然の紛らはしにもとて、先つ頃宇治に物して侍りき。庭も籬も誠に荒れ果てゝ侍りしに、堪へ難き事多くなん。故院の亡せ給ひて後、二三年ばかりの末に、世を背き給ひし嵯峨の院にも、六條院にも、さしのぞく人の、心治めん方無くなん侍りける。木草の色に付けても、水の流に添へても、涙に暮れてのみなん歸り侍りける。かの御あたりの人は、上下心淺き人無

○忘草生ふして後　悲傷を忘るゝ程を經ての意。
○宮達　明石中宮の御腹なり。
○さる世に類なき悲しさ　源氏の雲隱の時の事を云ふ。
○かの古の悲しさ　六條院の世を去り給ひし事を云ふ。
○この近き夢　大君に死別れし事を云々。
○同じ如云々　大君も源氏も同じ死別の悲なれどもとなり。
○此人　薫君。

○世の憂きよりは　古歌に「山里は物さびしきことこそあれ世の憂きよりは住みよかりけり」
○この二十日餘の程は云々　御父八宮の忌日に當ればなり。
○聞えさせばやと　匂宮に申さばやと。

くなん惑ひ侍りける儘に、方々つどひ物のせられける人々も、皆所々に別れ散りつゝ、各思ひ離るゝ住居をし給ふめりしに、はかなき程の女房などは、まして心治めん方無く覺えける儘に物覺えぬ心に任せつゝ、山林に行き雜り、すゞろなる田舍人になりなど、哀に惑ひ散るこそ多く侍りけれ。さてなか〳〵皆荒し果て、忘草生ふして後なん、この左の大臣も渡り住み、宮達なども方々物し給へば、昔に返りたるやうに侍るめる。さる世に類なき悲しさと見給へし程の事も、年月經れば、思さます折の出で來るにこそはと見侍るに、實に限ある事なりけりとなん見え侍りし。かくは聞えさせながらも、かの古の悲しさは、まだいはけなく侍りける程にて、いと然しも沁まぬにや侍りけん。猶この近き夢こそ、覺すべき方無く思ひ給へらるゝは、同じ如世の常無き悲しびなれど、罪深き方は優りて侍るにやと、それさへなん心憂く侍る。」とて、泣き給へる程、いと心深げなり。昔の人をいとしも思ひ聞えざらん人だに、此人の思ひ給へる御氣色を見んには、すゞろにたゞにもあるまじきを、まいて我も物を心細く思ひ亂れ給ふに付けては、いとゞ常よりも面影に戀しく、悲しく思ひ聞え給ふ心なれば、今少し催されて、物も得聞え給はず、ためらひかね給へるけはひを互にいと哀と思ひかはし給ふ。(中君)「世のうきよりは」など、人は言ひしをも、さやうに思ひ比ぶる心も殊に無くて、年頃は過し侍りしを、今なん猶如何で靜なる樣にても、過さまほしく思ひ給ふるを、さすがに心にも協はざゝめれば、辨の尼こそ羨ましく侍れ。この二十日餘の程は、かの近き寺の鐘の聲も聞き渡さまほしく覺え侍るを、忍びて渡させ給ひてんやと、聞えさせばやとなん、思ひ侍りつる。」との給へば、(薫)「荒さじと思ほすとも、如何でかは。心安き男だに、いと往來の程、荒ましき山道に侍れば、思ひつゝなん、月日隔たり侍る。故宮の御忌日は、かの阿闍梨に、さるべき事ども皆言ひ置き侍りにき。彼處は猶尊き方に思し讓りてよ。時々見給ふるに付けては、心惑の絶えせぬも愛無きに罪失ふ樣になし侍りなばやとなん思ひ侍るを、また如何が思しおきつらん。ともかくも定めさせ給はんに隨ひてこそはとてなん。あるべからんやうにの給はせよかし。何事も疎からず承はらんのみこそ、本意かなふにては侍らめ。」など、まめだちたる事どもを聞え給ふ。經佛など、この上も供養じ給ふべきなゝめり。かやうなる序にことづけて、やをら籠り居なばやと、おもむけ給へる氣色なれば、(薫)「いとあるまじき事なり。猶何事も心のどかに思し做せ。」など敎へ聞え給ふ。日さしあがりて、人々參り集りなどすれば、餘り長居も事あり顏ならんにより、出で給ひなんとて、(薫)「何處にても御簾の外には習ひ侍らねば、はしたなき心地し侍りてなん。今又かやうにも侍はん。」とて立ち給ひぬ。宮の何どか無き折には來つらんと、思ひ給ひぬべき御心なるも、煩はしくて侍の別當なる右京の大夫召して、(薫)「昨夜まかゝでさせ給ひぬと承りて參りつるを、まだしかりければ口惜しきを、內裏にや參るべき。」との給へば、(右京)「今日はまかゝでさせ給ひなん。」と申せば、(薫)「さらば夕つ方も。」とて出で給ひぬ。

猶この御けはひ有樣を聞き給ふ度毎に、何どて昔の人の御心掟をもて違へて、思隈無かりけんと、悔ゆる心のみまされば何ぞや人やりならぬ心ならんと、思ひ返し給ふ。其儘に未だ精進にて、いとゞ行をのみし給ひつゝ、明し暮し給ふ。母宮は猶いと若く大どきて、物

○故宮　八宮。
○彼處は猶尊き方に云々　宇治宮は寺にし給ふべしとなり。
○あるべからんやうに云々　思し召すまゝにの給へとなり。

○何處にても御簾の外には　ならひ侍らねば　何方にてもかく御簾の外にはならはぬを中君ばかりかく外ざまにあへしらひ給ふがうれはしとなり。
○今又かやうにも侍はん　簾の外にても今に又參らん。
○侍の別當　殿上の別當。
○この御けはひありさま　中君のなり。
○其儘に　大君の死後其儘に。
○母宮　女三宮。

○獨月　夕霧の使頭中將。
○獨月を見給ひそよ　白氏文集に「莫ㇾ對二月明一思ㇾ往事一、損二君顏色一減二君年一」

○御文聞え給へりける　中君へなり。
○らうたげなる有樣　中君のなり。

○左の大殿　夕霧。
○六條院の東の大殿　紫葉の宮の住み給ふ所なり。
○待ち聞え給ふに　匂宮をなり。
○客內し給へば　御迎に人を遣はし給へば。
○思す人　中君を指す。

○幾世しもあらじを　我身はなり。
○甲斐ある樣にて見え給へ　出家などし給ふなとなり
○此世にては云々　若し出家し給はゞなり。

しどけなき御心にも、かゝる御氣色を、いと危くゆゝしと思して、「幾世しもあらじを、見奉らん程は、甲斐ある樣にて見え給へ。世の中を思ひ捨て給はんをも、斯かる身にては妨げ聞ゆべきにもあらぬを、此世にては、言ふ甲斐なき心地すべき心惑に、いとゞ罪や得らん。」との給ふが辱くいとほしくて、萬を思ひ消ちつゝ、御前にては物思無き樣を作り給ふ。左の大殿には、六條院の東の大殿を磨きしつらひて限無く萬を調へて、待ち聞え給ふに十六日の月やうゝ差上るまで、心もとなければ、いとしも御心に入らぬ事にて、如何ならんと安からず思して、案內し給へば、「この夕つ方內裏より出で給ひて、二條院になんおはしますなる。」と人申す。思す人持給へればと、心疚しけれど、今宵過ぎんも人笑なるべければ、御子の頭中將して聞え給へり。

（夕）「大空の、月だに宿る、我宿に、待つ宵過ぎて、見えぬ君かな。」

宮はなかゝ今なんとも見えじ。心苦しとおほして、內裏におはしけるを、御文聞え給へりける、御返りや如何がありけん。猶いと哀に思されければ、忍びて渡り給へりけるなり。らうたげなる有樣を見捨てゝ、出づべき心地もせず。いとほしければ、萬に契りつゝ、慰めかねて、諸共に月を眺めておはする程なりけり。女君は日頃も萬に思ふ事多かれど、如何で氣色に出さじと、萬に念じ返しつゝ、つれなき樣し給ふ事なれば、殊に聞きも咎めぬ樣に、大どかにもてなしておはする樣、いと哀なり。中將の參り給へるを聞き給ひて、さすがに彼もいとほしければ、出で給はんとて、（匂）「今いと疾く參り來ん。獨月な見給ひそよ。心空なれば、いと苦し。」と聞え置き給ひて、猶傍痛ければ、隱れの方より寢殿へ渡り給ふ。御後手を見送るに、ともかくも覺えねど、唯枕の浮きぬべき心地のすれば、心憂き物は人の心なりけりと、我ながら思ひ知らる。幼き程より心細く哀なる身どもにて、世の中を思ひ止めたる樣にもおはせざりし一所を頼み聞えさせて、さる山里に年經しかど、唯何時となく徒然にすごうはありながら、いとかく心に沁みて、世を憂き物とも思ひ知らざりしに、打ち續きあさましき御事どもを思ひし程は、世に又と留りて片時經べくもおぼえず、戀しう悲しき事の、類あらじと思ひしを、命長くて今までもながらふれば、人の思ひたりし程よりは、人數にもなる樣なる有樣を長かるべき事とは思はねど、薄らぎて在り經つるを、此折節の身の憂さはた言はん方無く、限と覺ゆるわざなりけり。ひたすら世に亡くなり給ひにし人々よりは、さりとも是は時々も何どかはとも思ふべきを、今宵かく見捨てゝ出で給ふつらさに、來し方行く先皆搔亂り、心細くいみじきが、我心ながら思ひ遣る方なく心憂くもあるかな。自らながらへばなど、慰めん事を思ふに、更に姨捨山の月のみ澄み昇りて、夜更くる儘に萬思ひ亂れ給ふ。松風の吹き來る音も、荒ましかりし山風に思ひ比ぶれば、いとのどかに懷かしう目安き御住居なれど、今宵はさも覺えず、椎の葉の音には劣りて覺ゆ。

（中君）「山里の、松の蔭にも、斯くばかり、身に沁む秋の、風は無かりき。」

來し方に忘れにけるにやあらん。老人どもなど、（老人）「今は入らせ給はね。月見るは忌み侍る物を。あさましうはかなき御菓物をだに御覽じ入れねば、如何にならせ給はん。あな見苦しや、忌々しう思ひ出でらるゝ事も侍るを、いとこそわりなけれ。」など云ふ。若き人々

○繼うしろで　匂宮のうしろ姿。
○枕の浮きぬべき云々　拾遺集に「涙川水まさればやしきたへの枕の浮きてとまらざるらん」
○一所　故八宮。
○打ち續き云々　父君姉君に死別れ給ひし事どもを云ふ。

○此折節　六の君のことなり。
○是は　匂宮は。

○姨捨山の月のみ　古今集に「我が心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」
○椎の葉の云々　松風は宇治にて聞きし椎の葉の音には劣りて身に沁むとなり。
○山里の云々　匂宮の打捨て給へるが身に沁むとなり。
○月見るは忌み侍る　當時の習なりゝ見ゆ。

○そのかみの人々　大君の時より侍る老人などをいふ。

○人の御ほどさゝやかに　六の君のさまなり。

○對　中君の居給ふ所なり。

○普き　平等なる。

○御返りも云々　六の君の御返事も殿殿にて見んと思せどもとなり。

は心憂の世やと打ち歎きて、(人々)「いでやこの御事よ。さりとも斯くて疎にはよもなり果て給はじ。さ云へど、もとの志深う思ひ初めつる中は、名殘なからぬ物ぞ。」と言ひ合へるも、様々に聞き憎く、今は如何にも〳〵掛けて言はざらなん。たゞにこそ見め、と思さるゝは、人には言はせじ、我一人恨み聞えん、とにやあらん。いでや中納言殿の、さばかり哀なる御心深さをなど、そのかみの人々言ひ合はせて、人の御宿世の怪しかりける事よ、と言ひ合へり。

宮はいと心苦しく思しながら、色めかしき御心は、如何でめでたき様に待ち思はれんと心假粧して、えならず焚き染め給へる御けはひ言はん方なし。待ち付け給へる所の有様も、いとをかしかりけり。人の御程さゝやかに、あえかになどはあらで、よき程に成り合ひたる心地し給へるを、如何ならん、物々しくあざやぎて、心ばへもたをやかなる方は無く、物誇りかになどやあらん。さあらんこそうたてあるべけれ、など思せど、さやうなる御けはひにあらぬにや、御志疎なるべうも思されざりけり。秋の夜なれど更けにしかばにや、程も無く明けぬ。

歸り給ひても、對へはふとも得渡り給はず。しばし大殿籠りて、起きてぞ、御文書き給ふ。御氣色怪しうはあらぬなゝめりと、御前なる人々突きじろふ。對の御方こそ心苦しけれ。天の下に普き御心なりとも、自ら氣壓さるゝ事もありなんかし、など、たゞにしもあらず皆馴れ仕う奉りたる人々なれば、安からず打言ふ事どもありて、すべて猶妬げなる事にぞありける。御返りも此方にてこそはと思せど、夜の程の覺束無さも、常の隔てより

○あいなく涙ぐまれて　匂宮の中君の心を察してのことなり。

○さまゝ〳〵にせさすること　祈禱などの事をいふ。

○御志の云々　六の君の方に心のひくにやとなり。

は如何がと心苦しければ、急ぎ渡り給ふ。ねくたれの御容いとめでたく見所ありて、入り給へるに、臥したるもうたてあれば、少し起きあがりておはするに、打ち赤み給へる顏の匂など、今朝しも殊にをかしげさ增さりて見え給へば、愛無く涙ぐまれて、暫し打守り聞え給ふを、恥かしく思して、打ちうつぶし給へる髮のかゝり簪など、猶いと有り難げなり。宮もなまはしたなきに、細やかなる事などは、ふともえ言ひ出で給はず、面隱しにや、(匂)「何ど斯くのみ惱ましげなる御氣色ならん。暑き程の事とかの給ひしかば、何時しかと涼しき程待ち出でたるも、猶晴れ〴〵しからぬは見苦しき事かな。様々にせさする事も、怪しう驗無き心地のみこそすれ。さはありとも、修法は又延べてこそは宜からめ。驗あらん僧もがな。なにがし僧都をぞ夜居に侍はすべかりける。」などやうなる、まめ事をの給へば、かゝる方にも言善きは心づき無く覺え給へど、むけに答へ聞えざらんもうたてあれば、(中君)「昔も怪しう人に似ぬ有様にて、かやうの折は侍りしかど、自らいと善く怠るものを。」との給へば、(匂)「いと善くこそ爽なれ。」と打ち笑ひて、なつかしう愛敬づきたる方は、之に竝ぶ人はあらじかし、と思ひながら、猶又疾くゆかしき方の心いられも立ち添ひ給へるは、御志の疎にもあらぬなゝめりかし。されど見給ふ程は變るけぢめも無きにや、後の世までと誓ひ頼め給ふ事どもの盡せぬを、聞くに付けても、(中君)「實に此世はいと短かかゝめる命待つ間もつらき御心は見えぬべければ、後の契や違はぬ事もあらん、と思ふにこそ、猶懲りずまに又も頼まれぬべけれ。」とていみじう念ずべかゝめれど、得忍び敢へぬにや、今日は泣き給ひぬ。日頃も如何で斯く思ひけりと見え奉らじと、萬に思ひ紛はしつ

○強ひて引き向け　匂宮が中君をなり。
○あが君　中君をさしていふ。
○いみじう言選りして聞ゆとも云々　六君へ眞實心の移らば如何に繕ひ言ふとも自ら外れ〳〵に見ゆべき物をとなり。
○身を心ともせぬ　後撰集に「いなせとも言ひ放たれず憂き物は身を心ともせぬ世なりけり」
○此南面　西の對中君の方
○海人の刈る云々　海人が被く玉藻のやうに緣の衣裳を被き埋もれたる。
○さしぐみは　うちつけには。
○繼母の宮　落葉の宮。
○宣旨書にてもうしろめたのわざや　自筆ならでも文の返事た中の君の見給ふは六の君の爲に遺憾なり。

るを、樣々に思ひ集むる事し多かれば、さのみもえ持て隱されぬにや。こほれ初めては頓にもえためらひ給はぬを、いと恥かしく侘しと思ひて、いたく背き給へば、強ひて引き向け給ひつゝ、(匂)「聞ゆる儘に、哀なる御有樣と見つるを、猶隔てたる御心こそ物し給ひけれな。さらずば夜の程に思し變りにたるか。」とて、我御袖して涙を拭ひ給ひへば、(中君)「夜の間の心變こそ、の給ふに付けて推し量られ侍りぬれ。」とて少しほゝゑみぬ。(匂)「げにあが君や、幼の御物言や。されど誠には心に隈の無ければいと心安し。いみじう言選りして聞ゆとも、いと著かるべき事ぞ。むげに世のことわりを知り給はぬこそ、らうたきものからわりなけれ。よし我御身になしても思ひ運らし給へ。身を心ともせぬ有樣なりかし。若し思ふやうなる世もあらば、人に優りける志の程も知らせ奉るべき一節なんある。容易く言出つべき事もあらねば、命のみこそ。」などの給ふ程に、かしこに奉り給へる御使、いといたう醉ひ過ぎにければ、少し憚るべき事も忘れて、けざやかに此南面に參れり。海人の刈る珍しき玉藻に、被き埋もれたるを、さなンめりと人々見る。何時の程に急ぎ書き給ひつらんと見るも、安からずはありけんかし。宮もあながちに隱すべきにはあらねど、差含は猶いとほしきを、少しの用意は有れかしと、なま傍痛けれど、今は甲斐無ければ、女房して御文取り入れさせ給ふ。同じくは隔無き樣にもてなし果てゝんと思して、引き開け給へるに、繼母の宮の御手なンめりと見ゆれば、今少し心安くて打置き給へり。宣旨書にてもうしろめたのわざや、(落葉消息)「さかしらは傍痛さに、唆かし侍れど、いと惱ましげにてなん、

それをうしろめたしといへるなり。
○さかしらは　さかしらに代筆せんは。
○女郎花云々　六君を女郎花に寄せ匂宮の情を朝露に寄せて詠めり。
○託言がましげなるも　かこち顏なるも。
○思へばこれはいと難したゞ人などのやうにしておはせんことあり難しとなり。
○みづから　中君。
○餘りに習はし給ひて　夜離になり。
○いと遙にのみ思し　中君の食し給はぬ樣を云ふ。
○今めかしきに云々　匂宮は。
○物思はしき人　中君をいふ。
○山の蔭のみ戀しくて　宇治の山里の戀しくて、古今集に「鹿の鳴きつるなべに

女郎花、萎れぞ增さる、朝露の、如何に置きける、名殘なるらん。」
あてやかにをかしう書き給へり。(匂)「託言がましげなるも煩はしや。誠は心安くて暫しはあらんと思ふ世を、思の外にもあるかな。」などはの給へど、又二つ無くて、さるべき物に思ひ習ひたるたゞ人の中こそ斯樣なる事の怨めしさなども、見る人苦しくはあれ。思へばこれはいと難し。終に斯かるべき御事なり。宮達と聞ゆる中にも、筋異に世の人思ひ聞えたれば、幾人もく〳〵得給はん事も、もどきあるまじければ、人も此御方をいとほしなど思ひたらぬなるべし。かばかり物々しくかしづき居ゑ給ひて、心苦しき方疎ならず思したるをぞ、幸におはしけるとは聞ゆる。自の心にも、餘りに習はし給ひて、俄にはしたなかるべきが、歎かしきなンめり。かゝる道を如何なれば、淺からず人の思ふらんと昔物語などを見るにも、人の上などにても、怪しう聞き思ひしは、實に疎なるまじき事なりけりと、我身になしてぞ、何事も思ひ知られ給ひける。宮は常よりも、哀に打ち解けたる樣にもてなし給ひて、(匂)「むげに物參らざるなるこそ、いと惡しけれ。」などの給ひて、由ある御菓子召し寄せ、又さるべき人召して、殊更に調ぜさせ給ひなどしつゝ、そゝのかし聞え給へど、いと遙にのみ思したれば、見苦しき事かなと歎き聞え給ふに、暮れぬれば、夕つ方寢殿へ渡り給ひぬ。風涼しく大方の空をかしき頃なるに、今めかしきに進み給へる御心なれば、いとゞしく艶なるに、物思はしき人の御心の中は、萬に忍び難き事のみぞ多かりける。蜩の鳴く聲にも、山の蔭のみ戀しくて、
(中君)「大方に、聞かまし物を、蜩の、聲恨めしき、秋の暮かな。」

日は暮れぬと思ふは山の蔭にぞありける」
○大方に云々　昔の山里の儘ならば大方にのみ聞くべき物を、京にて斯く物思ふ折節は蜩の聲も悲しとなり。
○海人も釣する　古歌に「戀をして音をのみ泣けば敷妙の枕の下に海人ぞ釣する」涙の海となるをいふ。
○いみじう命短き族なれば　母君も姉君も早世の筋なれば。
○又いと罪深うもあなる　懷姙にて亡せたらんには罪深かるべしとなり。
○后の宮　明石中宮。
○大臣　夕霧。
○今宵　三ケ夜なり。
○この君　薫君。
○おはしましたり　匂宮がなり。
○珍しからぬこと云々　草子地のあやなり。
○頓にも出で給はず　匂宮が御酒宴の席へなり。

今宵はまだ更けぬに出で給ふなり。御前驅の聲の遠くなる儘に、海人も釣するばかりになるも、我ながら憎き心かなと、思ふ〳〵聞き臥し給へり。初より物を思はせ給ひし有樣などを、思ひ出づるも疎ましきまで思ほゆ。この惱ましき事も如何ならんとすらん。いみじう命短き族なれば、かやうならん序にもや、はかなくなりなんとすらんなど、思ふには惜しからねど、悲しうもあり、又いと罪深うもあゝなる物をなど、まどろまれぬ儘に思ひ明し給ふ。

其日は后の宮惱ましげにおはしますとて、誰も〳〵參りつどひ給へれど、些なる御風におはしましければ、異なる事もおはしまさずとて、大臣は晝まかゝで給ひにけり。中納言の君さそひ聞え給ひて、一つ御車にてぞまかゝで給ひにける。今宵の儀式如何ならん。清ら を盡さんと思すべかゝめれど、限あらんかし。此君も心恥かしけれど、親しき方の覺は、我方ざまに又さるべき人もおはせず、物のはえにせんに、心殊に將おはする人なればなゝめりかし。例ならず忙がしう詣で給ひて、人の御上に見なしたるを、口惜しとも思へらず、何やかやと諸心に扱ひ給へるを、大臣は人知れず生妬しとぞ思しける。

宵少し過ぐる程におはしましたり。寢殿の南の廂、東に寄りておまし參れり。御臺八つ、例の御皿など、麗しげに清らにて、又小き臺二つに、花足の皿ども、いと今めかしうせさせ給ひて、餅參らせ給へり。珍しからぬ事書き置くこそ憎けれ。大臣渡り給ひて、夜いたう更けぬるをと、女房してそゝのかし聞え給へど、いとあざれて、頓にも出で給はず。北の方の御兄弟の、左衞門督、藤宰相などばかり物し給ふ。辛うじて出で給へる御樣、いと見る甲斐ある心地す。主人の頭中將、御盃捧げて御臺參る。次々の御土器、二度三度參り給ふ。源中納言のいたう勸め給へるに、宮少しほゝゑみ給へり。煩はしきわたりをと、ふさはしからず思ひて言ひしを、思し出づるなゝめり。されど見知らぬやうにていとまめなり。東の對に出で給ひて、御供の人々もてはやし給ふ。覺ある殿上人どもいと多かり。四位六人は、女の裝束に細長添へて、五位十人は、三重襲の唐衣、裳の腰も皆けぢめあるべし。六位四人は、綾の細長、袴など、且は限ある事を飽かずおぼしければ、物の色仕樣などをぞ清らを盡し給へりける。召繼舍人などの中に、漫がはしきまで、嚴めしうなんありける。實にかく賑はゝしう華やかなる事は、見る甲斐あれば、物語などにも、先づ言ひ立てたるにやあらん。されど委しうは得ぞ數へ立てざりけるとや。

中納言殿の御前の中に、生覺鮮ならぬや、暗き紛れに立ちまじりたりけん、歸りて打歎きて、(供人)「我殿の何どかおいらかに、此殿の御婿に打成らせ給ふまじき。味氣なき御獨住なりや。」と中門の下にてつぶやきけるを、聞き付け給ひて、をかしとなん思しける。夜の更けてねぶたきに、かの持てかしづかれける人々は、心地よけに醉ひ亂れて、寄り臥しぬらんかしと、羨ましきなゝめりかし。

君は入りて臥し給ひて、はしたなげなる事かな。事々しげなる樣したる親の出で居て、離れぬ仲らひなれど、これかれ火明う挑げて、勸め聞ゆる盃などを、いと目安くもてなし給ふめりつるかなと、宮の御有樣を目安く思ひ出で奉り給ふ。實に我にても佳しと思ふ女子を持たらましかば、この宮を措き奉りて、內裏にだにえ參らせざらましと思ふに、誰も誰

○主人の頭中將　夕霧の子息なり。
○源中納言　薫君。
○されど見知らぬやうにて　薫のさまなり。
○召繼　申次などする召使。
○舍人　御厩の舍人。
○中納言殿　薫君。
○我殿　薫君。
○此殿　夕霧。
○聞き付け給ひて　薫君が。
○かのもてかしづかれける人々　匂宮の供人どもをいふ。
○いと目安く云々　薫の匂宮の禮を譽むるなり。

○内裏の御氣色あること　女二宮の事。
○故君　宇治の大君。
○按察の君　女三宮に侍ふ人なり。
○打渡し云々　人目を憚るやうに物し給ふを許無きと詠めり。關川は逢坂の關の小川なり、見馴れは水馴れを掛けたり。
○此空　八月十五夜なり。
○妹にをかしきことの云々　薫君は殊更に人に情々しく艶なる事を好ましく盡さんとし給はねどもとなり。
○世を背き給へる宮　薫君の母宮、女三宮。

も宮に奉らんと志し給へる女は、猶源中納言にこそと、取々に言ひならぶなるこそ、我覺の口惜しくはあらぬなゝめれ。さるはいと餘り世づかず、古めいたる物をなど、心驕もせらる。内裏の御氣色あること、誠に思したらんに、かくのみ物憂く覺えば、如何がすべからん。面立たしき事にはありとも、如何がはあらん。如何にぞ故君にいとよく似給へらん時に、嬉しからんかし、と思ひ寄らるゝは、さすがにえ持て離るまじき心なゝめりかし。例の寢覺勝なる徒然なれば、按察の君とて、人よりは少し思ひ增し給へるが、局におはして、その夜は明し給ひつ。明け過ぎたらんを、人の咎むべきにもあらぬに、苦しけに急ぎ起き給ふを、たゞならず思ふべかゝめり。

（按察）「打渡し、世に許無き、關川を、見馴れ初めけん、名こそ惜しけれ。」

いとほしければ、

（薫）「深からず、上は見ゆれど、關川の、下の通ひは、絶ゆる物かは。」

深しとの給はんにてだに、頼もしげ無きを、この上の淺さはいとゞ心疚しう覺ゆらんかし。妻戸を押し明けて、（薫）「誠は此空を見給へ。如何でか之を知らず顔にては明さんとよ。艶なる人眞似にはあらで、いとど明し難く成り行く夜なゝの寢覺には、此世後の世までなん思ひ遣られて哀なる。」など言ひ紛はしてぞ出で給ふ。殊にをかしき事の數を盡さねど、樣のなまめかしき見做しにやあらん、情無くなどは人に思はれ給はず。假初の戯言をも、言ひ初め給へる人の、氣近くてだに見奉らばやとのみ思ひ聞ゆるにや、あながちに世を背き給へる宮の御方に、緣を尋ねつゝ、參り集りて侍ふも、哀なる事、程々に付けつゝ多かるべ

○宮　匂宮。
○女君　六君。
○おほきさよきほどなる　六君のありさまにて今年廿一二歳なり。
○二十に一二ぞ云々　六君の年齢なり。
○彼の對の御方　中君。
○よき若人ども　六君の女房達なり。
○三條殿腹の大君　雲井雁の生み給へる大姫君。
○二條院　中君の方。
○え引き避きても云々　六君を避きて中君へ得渡り給はずなどしてなり。
○斯からんずる事とは　以下中君の心なり。
○忍び渡りなん　宇治へ。

し。

宮は女君の御有樣、晝見聞え給ふにいとゞ御志增さりにけり。大きさよき程なる人の樣體いと清げにて、髮のさがりば頭つきなどぞ、物より殊にあなめでたと見え給ひける。色合餘りなるまで匂ひて、物々しく氣高き顔の、目見いと恥かしげに勞々しう、凡て何事も足らひて、容貌よき人と謂はんに飽かぬ所無し。二十に一二ぞ餘り給へりける。いはけなき程ならねば、片生に飽かぬ所無く、鮮に盛の花と見え給へり。限無くもてかしづき給へるにかたほならず、實に親にては心も惑はし給ひつべかりけり。唯柔に愛敬づきらうたき事ぞ、彼の對の御方は先づ思し出でられける。物の給ふいらへなども、はぢらひ給へれど、又餘り覺束無くはあらず。凡ていと見所多く、稜々しげなり。よき若人ども三十人ばかり、童六人、かたほなる無く、裝束なども、例の麗しき事は目馴れて思さるべかゝめれば、引き達へ心得ぬまで、好み過し給へる。三條殿腹の大君を、春宮に參らせ給へるよりも、此御事をば、いと殊に思ひおきて聞え給へるも、宮の御覺有樣からなゝめり。

かくて後、二條院に、え心安くも渡り給はず。輕らかなる御身ならねば、おほす儘に、晝の程なども え出で給はねば、やがて同じ南の町に、年頃ありし樣におはしまして、暮るれば又え引き避きても渡り給はずなどして、待遠になる折々あるを、斯からんずる事とは思ひしかど、差當りては、いと斯うしもやは名殘無かるべき。げに心あらん人は、數ならぬ身を知らで交らふべき世にもあらざりけりと、返すゞも山路分け出でけん程、うつゝとも覺えず、悔しく悲しければ、猶如何で忍びて渡りなん。むげに背く樣にはあらずとも、暫

○一日の御事　八宮の第三年の法事を薫君のいみじくし給ひし事。
○如何にいとほしく　亡き人の爲如何に痛はしからん。
○然りぬべくは自らも　然るべき折あらば自らも申し述べたしとなり。
○例はこれより云々　薫君の心なり。
○宮　匂宮。
○今めかしく云々　六君を。
○思し怠りにける　中君を
○さ思ひ給ふる樣侍る云々　御忌日の法事を沙汰せる由を申さば君の宇治へ行かんとの給ふべしとて忍びたりとなり。
○今侍ひてなん　今參上仕りて申し上げんとなり。
○人知れず思ふ心　中君への懸想なり。
○怪しかりし夜の事　宇治にて添臥し給ひし事。

し心をも慰めばや。憎氣にもてなしなどもせばこそ、うたてもあらめ、など心一つに思ひ餘りて、恥かしけれど、中納言殿に御文奉れ給ふ。(中君消息)「一日の御事は、阿闍梨の傳へたりしに、委しう聞き侍りにき。かゝる御心の名殘無からましかば、如何にいとほしくと思ひ給へらるゝにも、疎ならずのみなん。然りぬべくは自らも、」と聞え給へり。檀紙に、引きも繕はず、まめだちて書き給へるしも、いとをかしけなり。故宮の御忌日に、例の事どもいと尊くせさせ給へりける喜び聞え給へる樣の、おどろ〳〵しうはあらねど、實に思ひ知り給ふなゝめりかし。例はこれより奉る御返りをだに、打解けずつゝましげに思して、はか〴〵しくも續け給はぬを、自らとさへの給へるが、珍しく嬉しきに、心ときめきもしぬべし。宮の今めかしく好み立ち給へる程にて、思し怠りにけるを、實に心苦しく推し量らるれば、いと哀にて、をかしやかなる事も無き御文を、打も置かず引き返し引き返し見居給へり。御返は、(薫消息)「承はりぬ。一日は聖だちたる樣にて、殊更に忍び侍りしも、さ思ひ給ふる樣侍る頃ほひにてなん。名殘との給はせたるこそ、少し淺くなりにたるやうにと、怨めしう思ひ給へらるれ。萬は今侍ひてなん。あなかしこ。」と、すくよかに、白き色紙のこはゞ〳〵しきにてあり。

さて又の日の夕つ方ぞ渡り給へる。人知れず思ふ心し添ひたれば、愛無く心づかひ甚うせられて、なよゝかなる御衣どもを、いゝど匂はし添へ給へるは、餘りおどろ〳〵しきまであるに、丁子染の扇の、持て馴し給へる移香などさへ、喩へん方無くめでたし。女君も怪しかりし夜の事など、思ひ出で給ふ折々無きにしもあらねば、まめやかに哀なる御心ばへの、人に似ず物し給ふを見るに付けても、さてあらましをとばかりは、思ひやし給ふらん。いはけなき程にしおはせねば、怨めしき人の御有樣を思ひ比ぶるには、何事もいとゞこよなく思ひ知られ給ふにや、常には隔多かるもいとほしく、物思ひ知らぬ樣に思ひ給ふらんなど思ひ給ひて、今日は御簾の内に入れ奉り給ひて、母家の御簾に几帳添へて、我は少し引き入りて、對面し給へり。(薫)「態と召とは侍らざりしかど、例ならず許させ給へりし悅に、すなはちも參らまほしく侍りしを、宮渡らせ給ふと承りしかば、折惡しくやはとて、今日になし侍りにける。さるは年頃の驗もやう〳〵現はれ侍るにや、隔少し薄らぎ侍りにける御簾の内よ。珍しく侍るわざかな。」との給ふに、猶いと恥かしく、言ひ出でん言の葉も無き心地すれど、(中君)「一日嬉しく聞き侍りし心の中を、例の唯結ぼゝれながら過し侍りなば、思ひ知る片端をだに、如何でかはと口惜しさに。」と、いとつゝましげにのみの給ふが、いたく退きて、絶え〴〵仄に聞ゆれば、心もとなくて、(薫)「いと遠くも侍るかな。まめやかに聞えさせ承らまほしき世の物語も侍るものを。」との給へば、げにとおぼして、少しみじろき寄り給ふけはひを聞き給ふにも、ふと胸うちつぶるれど、さりげ無くいとゞ鎭めたる樣して、宮の御心ばへ思はずに淺うおはしけりとおぼしく、且は言ひも疎め、又慰めも方々に、靜々と聞え給ひつゝおはす。女君は、人の御怨めしさなどは、打ち出で語らひ聞え給ふべき事にもあらねば、唯「世やは憂き」などやうに思はせて、言少に紛はしつゝ、山里にあからさまに渡し給へと思しく、いと懇に思ひての給ふ。(薫)「それはしも心一つに任せては、え仕う奉るまじき事に侍るなり。猶宮に唯心美しう聞えさせ給ひて、その御氣色

○怨めしき人　匂宮を指す
○宮渡らせ給ふと云々　昨日は匂宮渡らせ給へりと聞きしかばとなり。
○唯結ぼゝれながら云々　心に思ふのみにて過ぎたらば。
○いたく退きて　甚く奥深くおはして。
○人の　匂宮の。
○世やは憂き　古歌に「世やは憂き人やはつらき譬の刈る藻に住む蟲の我からぞ憂き」
○それはしも云々　宮のゆ

るし給はではとなり。
○然だにあるまじうは　せめて宮の御氣色のさやうなる憚だにあるまじくばとなり。
○物にもがなや　古歌に「取返す物にもがなや世中をありしながらの我身と思はん」
○いと繁う侍りし道　宇治の道なり。
○昔思ひ出でらるゝ　大君の面影の思ひ出でらるゝ。
○忍びては宜かるべう云々　先に中君が忍びてこそ善からめとの給ひしを薫君のあらぬ樣に取做して中君に寄り付き給ふなり。

に隨ひてなん善く侍るべき。さらずは少しも違目ありて、心輕〻もなど思し物せんに、いと惡しう侍りなん。然だにあるまじうは、道の程の御送迎も、おり立ちて仕う奉らんに、何の憚かは侍らん。後安く人に似ぬ心の程は、宮も皆知らせ給へり。」などは言ひながら、折々は過ぎにし方の悔しきを、忘るゝ折無く、「物にもがなや」と、取返さまほしき樣など仄めかしつゝ、やう〻〻暗う成り行くまでおはするに、いとうるさく覺えて、(中君)「さらば心地も惱ましくのみ侍るを、又宜しく思ひ給へらん程に、何事も。」とて、入り給ひぬる氣色なるがいと口惜しければ、(薫)「さても何時ばかりに思し立つべきにか。いと繁う侍りし道の草も、少し打ち拂はせ侍らんかし。」と、心取りに聞え給へば、暫し入り差して、(中君)「この月は過ぎぬべかゝめれば、ついたちの程にもとこそは思ひ侍れ。唯いと忍びてこそ善からめ。何か世の許など事々しうは。」との給ふ聲の、いみじうらうたげなるかなと、常よりも昔思ひ出でらるゝに、えつゝみ敢へで、寄り居給へる柱の下の簾の下より、やをら及びて、御袖を捉へつ。女、然りや、あな心憂と思ふに、何事かは言はれん。物も言はで、いとゞ引き入り給へば、それに付きていと馴れ顏に、半は内に入りて添ひ臥し給へり。(薫)「あらずや。忍びては宜かるべう思す事もありけるが、嬉しきは、僻耳かと聞えさせんとぞ。疎々しく思すべきにもあらぬを、心憂の御氣色や。」と怨み給へば、いらへすべき心地もせず。思はずに憎く思ひ成りぬるを、せめて思ひ鎭めて、(中君)「思の外なりける御心の程かな。人の思ふらん事よ。あさまし。」とあばめて、泣きぬべき氣色なる、少しはことわりなれば、いとほしけれど、(薫)「これは答あるばかりの事かは。かばかりの對面は、古をも

○過ぎにし人　大君。
○せん方なく云々　中君の心なり。
○悔しきにも云々　新古今集に「ならはねば人のとはぬもつらからず悔しきにこそ音は泣かれけれ」
○男君　薫君。
○腰の驗　懷妊の着帶を云ふ。

思し出でよかし。過ぎにし人の御許もありし物を、いとこよなう思されにけるこそ、なかなかうたてあれ。すき〻しく目覺ましき心はあらじと心安く思せ。」とて、いとのどやかに持て做し給へれど、月頃悔しと思ひ渡る心の中の、苦しきまで成り行く樣を、つぶ〻〻と言ひ續け給ひて、許すべき氣色にもあらぬに、せん方なくいみじとも世の常なり。なかなかむげに心知らざらん人よりも、恥かしう心づき無くて、泣き給ひぬるを、(薫)「こは何ぞ。あな若々し。」とは云ひながら、言ひ知らずらうたげに、心苦しきものから、用意深く恥かしげなるけはひなどの、見し程よりも、こよなくねびまさり給へりけるなどを見るに、心から餘所人にしなして、かく安からず物を思ふ事と、悔しきにも又げに音は泣かれけり。近う侍ふ女房二人ばかりあれど、すゞろなる男の入り來たるならばこそは、こは如何なる事ぞとも參り寄らめ、かく疎からず聞えかはし給ふ御仲らひなゝめれば、さる樣こそはあらめと思ふに、傍痛ければ、知らず顏にてやをら退きぬるぞ、いとほしきや。男君は古を悔ゆる心の忍び難きなども、いと鎭め難かりぬべかゝめれど、昔だに有り難かりし御心の用意なれば、猶いと思の儘にも持て做し聞え給はざりけり。かやうの筋は、細にも得なんまねび續けざりける。甲斐なき物から、人目の愛無きを思へば、萬に思ひ返して出で給ひぬ。

まだ宵と思ひつれど、曉近うなりにけるを、見咎むる人もや有らんと、煩はしきも、女の御爲のいとほしきぞかし。惱ましけに聞き渡る御心地はことわりなりけり。いと耻かしと思ひ給へりつる腰の驗に、多くは心苦しう覺えても止みぬるかな。例の嗚呼がましの心や

○例の嗚呼がましの心や　今皆中君をたゞに容し給ひしことを云ふ。

○更に見では　中君を見ではなり。

○立ち離れたりとも覺えず　面影にそふたいふなり。

○御文　薫より中君になり。

○徒に云々　昔もかやうの事はありきとなり。

○ことわり知らぬつらさ　古歌に「身を知れば恨みぬものをなぞも斯くことわり知らぬつらさなるらん」

○少し世の中をも云々　中君の樣を薫の思ひ續くるなり。

と思へど、なさけ無からん事は、猶いと本意無かるべし。又たちまちの我心の亂れに任せて、あながちなる心を使ひて後、心安くしも得あらざらん物から、わりなく忍びありかん程も心盡しに、女の方々思し亂れん事よなど、さかしく思ふに堰かれず、今のまも戀しきぞわりなかりける。更に見では得あるまじく覺え給ふも、返すゞ〳〵生憎なる心なりや。昔よりは少し細やぎて、あてにらうたげなりつるけはひなどは、立ち離れたりとも覺えず、身に添ひたる心地して、更に異事も覺えずなりにたり。宇治にいと渡らまほしげにおぼい給ふめるを、さもや渡し聞えてましなど思へど、まさに宮は許し給ひてんや。さりとて忍びて將いと便無からん。如何樣にしてかは人目見苦しからで、思ふ心の行くべきなど、心もあくがれて、眺め臥し給へり。

まだいと深き晨に、御文あり。例のうはべは、いとけざやかなる立文にて、

（薫消息）「徒に、分けつる道の、露繁み、昔覺ゆる、秋の空かな。

御氣色の心憂さは、ことわり知らぬつらさのみなん、聞えさせん方なく。」とあり。御返り無からんも、人の例ならず見咎むべきを、いと苦しければ、（中君消息）「承りぬ。いと惱ましうて、え聞えさせず。」とばかり書き給へるを、餘り言少なるかなと、淋々しくて、をかしかりつる御けはひのみ戀しう思ひ出でらる。少し世の中をも知り給へる故にや、さばかりあさましう理なしとは思ひ給へりつる物から、ひたぶるにいぶせくなどはあらで、いと勞々しく恥かしげなる氣色も添ひて、さすがに懷かしう言ひこしらへなどして、出し給へる程の御心ばへなどを、思ひ出づるも、妬うも悲しうも樣々に、心に懸りて、わびしく覺ゆ。何事も古には、いと多くまさりて思ひ出でらる。何かは此宮離れ果て給ひなば、我を頼もし人にし給ふべきにこそはあゝめれ。さても顯はれて心安き樣にはえあらじを、忍びつゝ又思ひ增す人無き心の留りにてこそはあらめ、など唯この事のみつと覺ゆるぞ、怪しからぬ心なるや。さばかり心深げに賢しがり給へど、男と云ふものゝ心憂かりける事よ。亡き人の御悲しさは、言ふ甲斐なき方にても、いと斯う苦しきまでは無かりけり。これは萬にぞ思ひ運らされ給ひける。今日は宮渡らせ給ひぬなど人の云ふを、聞くにも後見の心は失せて、胸うちつぶれて、いと羨ましう覺ゆ。

宮は日頃になりにけるは、我御心さへ怨めしう思されて、俄に渡り給へるなりけり。何かは心隔てたる樣にも見え奉らじ。山里にと思ひたつにも、頼もし人に思ふ人も、疎ましき心添ひ給へりけりと見給ふに、世の中いと所狹う思ひなられて、猶いと憂き身なりけりと、唯消えせぬ程はあるに任せて、おいらかならんと思ひ果てゝ、いとらうたげに、心美しき樣に、もてなして居給へれば、いとゞ哀に嬉しく思されて、日頃の怠など、限無くの給ふ。御腹も少し膨らかになりにたるに、かの恥ぢ給ふ驗の帶の、引き結ばれたる程など、いとあはれに、まだ斯かる人を氣近くても見給はざりければ、珍しくさへ思したり。打解けぬ所にならひ給ひて、萬の事心安く、懷かしう思さるゝ儘に、疎ならぬ事どもを、盡せずの給ひ契るを、聞くに付けても、斯くのみ言善き事にやあらんと、あながちなりつる人の御氣色も思ひ出でられて、年頃哀なる御心ばへとは思ひ渡りつれど、斯かる方ざまにては、哀をもあるまじき事と思ふにぞ、この御行く先の頼めは、いでやと慰ひながらも、少し耳

○何事も古には云々　中君のさま萬事昔にまさりたるとなり。

○忍びつゝ又思ひ增す人なき　古歌に「思ひ增す人し無ければ增鏡うつれる影と書をのみぞ泣く」

○これは　中君のことなり

○何かは云々　中君の心なり。

○頼もし人に思ふ人　薫君を指す。

○斯ゝる人　懷妊の人。

○打解けぬ所　六君の御方を指す。

○斯くのみ言善き事にやあらん　男は皆斯く言巧なる者にやあらん。

○斯かる方ざまにては　懸想めきたる方にては。

○この　匂宮の。

○さてもあさましう云々　中君の薫のことを思ふなり
○昔の人に疎くて過ぎにし事　大君に實事なくて過ぎにし事。
○さればよ云々　匂宮の心なり。
○さるは云々　草子地なり
○我こそ先に　拾遺集に「人なれば我こそ先に忘れなめつれなきをしも何か頼まん」
○又人に云々　中君を怨み給ふ歌なり。
○如何がはとて　いかでかく恨むやとて。
○見馴れぬる云々　斯許の移香に捨て給ふにやとなり。身を見に掛け香を斯に掛けたり。

留りける。さてもあさましうたゆめ〳〵て、入り來たりし程よ。昔の人に疎くて過ぎにし事など語り給ひし心ばへは、實に有り難かりけれど、猶打解くべくはたあらざりけりかしなど、愈心づかひせらるゝにも、久しく跡絶え給はん事は、いと物恐ろしかるべく覺え給へば、言に出でゝは言はねど、過ぎぬる方よりは、少し纏はし樣にもてなし給へるを、宮はいとど限なう哀と思したるに、かの人の御移香の、いと深う染み給へるが、世の常の香の香にいれ、焚き染めたるにも似ず、著き匂なるを、其道の人にしおはすれば、怪しと咎め出で給ひて、如何なりし事ぞと氣色取り給ふに、殊の外に持て離れぬ事にしあれば、言はん方なくわりなくて、いと苦しと覺えたるを、さればよ。必ずさる事はありなん。よもたゞには思はじと思ひ渡る事ぞかし、と御心騷ぎけり。さるは單衣の御衣なども、脱ぎ更へ給ひてけれど、怪しう心より外にぞ身に染みにける。斯ばかりにては、殘ありてしもあらじと、萬に聞きにくゝの給ひ續くるに、心憂くて、身ぞ措き所無き。(匂)「思ひ聞ゆる樣異なる物を、我こそ先になど、かやうに打背く際は、殊にこそあれ。又御心置き給ふばかりの程やは經ぬる。思の外に憂かりける御心かな。」と總てまねぶべくもあらず、いといとほしけに聞え給へど、ともかくも答へ給はぬさへ、いと妬くて、

(匂)「又人に、馴れける袖の、移香を、我身に染めて、怨みつるかな。」

女はあさましうの給ひ續くるに、言ふべき方もなく、如何はとて、

(中君)「見馴れぬる、中の衣と、賴みしを、かばかりにてや、懸離れなん。」

とて打泣き給へる氣色の、限無う哀なるを見るにも、かゝればぞかしと、いとゞ心疚しく

○かゝればぞかしと　かゝれば薫も心をとゞめ給ふぞかし。
○こしらへ　すかしなぐさむる事。
○人々の姿　中君の方の女房どもの姿。
○君は　中君。
○薄色　紫のなり。此頃の詞のつかひざまなり。
○盛なる人　六君を指す。
○志の疎ならぬに云々　匂宮の志深き故に好く思ひ做されて恥かしからずとなり。
○かゝる御移香などの云々　匂宮の心なり。
○如何でか只にも思はん　如何でか繼ひ慕はざらん。
○わざとし　しは例の强め辭なり。
○かの人　薫君。
○差放たん　中君が薫君をなり。

て、我もほろ〳〵とこぼし給ふぞ、色めかしき御心なるや。誠にいみじき過ありとも、ひたぶるには得ぞ疎み果つまじく、らうたけに心苦しき樣のし給へれば、得も怨み果て給はずの給ひさしつゝ、且はこしらへ聞え給ふ。

又の日も心のどかに大殿籠り、起きて御手水御粥なども此方に參らす。御しつらひなども、さばかり輝くばかり、高麗唐土の錦綾を裁ち重ねたる目移しには、尋常に打馴れたる心地して、人々の姿も、萎えばみたる打雜りなどして、いと靜に見廻さる。君はなよゝかなる薄色どもに、瞿麥の細長襲ねて、打ち亂れ給へる御樣の、何事もいと麗しく、事々しきまで盛なる人の御裝、何くれに思ひ比ぶれど、氣劣りても覺えず。懷かしうをかしきは、志の疎ならぬに、恥なきなンめりかし。麿に美しく越え給へりし人の、少し細やぎたるに、色は愈白うなりて、あてにをかしげなり。かゝる御移香などの、いちじるからぬ折だに、愛敬づきらうたき所などの、猶人には多く優りて思さるゝ儘には、これを兄弟などにはあらぬ人の氣近く言ひ通ひて、事に觸れつゝ、自ら聲けはひをも聞き見馴れんは、如何でかは只にも思はん。必ず然思ひ寄りぬべき事なるをと、我がいと限無き御心習に、思し知らるれば、常に心を懸けて、著き樣なる文などやあると、近き御厨子小唐櫃などやうの物を、然りげ無くて見給へど、然る物も無し。唯いとすくよかに言少にて、直々しきなどぞ、憖とし無けれど、物に取り雜ぜなどしてもあるを、怪し、猶いと斯くのみはあらじかしと、疑はるゝに、いとゞ今日は安からず思さるゝことわりなりかし。かの人の氣色も、心あらん女の哀と思ひぬべきを、何どてかは事の外には差放たん。いと好き間なれば、互にぞ思

○六條院　六の宮の方なり
○中納言の君　薫君。
○籠りおはする　二條院になり。
○人々　中君の方に侍ふ人々。
○立たむ月　來月。
○只なる　未だ染めぬをいふ。
○自　中君。
○腰　引腰。
○結びける云々　中君を匂宮に讓りしは我からの事なれば中君を恨まん樣も無しとなり。
○取りあへぬ樣の云々　薫の大輔に言ひつくる詞なり。

ひかはすらんかしと、思ひ遣るぞわびしく腹立たしく妬かりける。猶いと安からざりければ、其日もえ出で給はず。六條院には、御文をぞ二度三度奉れ給ふを、何時の程に積る御言の葉ならんと、つぶやく老人どもゝあり。

中納言の君は、宮のかく籠りおはするを聞くにも、心疚しく覺ゆれど、わりなしや。我心の嗚呼がましう惡しきぞかし。後安くと思ひ初めてしあたりの事を、斯くは思ふべしやと、強ひてぞ思ひ返して、さは云へど得思し捨てざゝめりかしと、嬉しくもあり。人々のけはひなどの懷かしき程に、萎えばみたゝめりしを思ひ遣り給ひて、母宮の御方に參り給ひて、(薫)「宜しき設の物どもや侍ふ。遣ふべき事なん。」と申し給へば、(母宮)「例の立たむ月の法事の料に、白き物どもなどやあらん。染めたるなどは今は態とも仕置かぬを、急ぎてこそせさせめ。」との給へば、(薫)「何か事々しき用にも侍らず。侍はんに隨ひて。」とて、御匣殿などに問はせ給ひて、女の裝束ども數多領に、清げなる細長どもゝ、只あるに隨ひて、只なる絹綾など取り具し給ふ。自の御料と思しきには、我御料にありける紅の打目なべてならぬに、白き綾どもなど、數多重ね給へるに、袴の具は無かりけるに、如何にしたるにかありけん。腰の一つありけるを、引き結び加へて、

(薫)「結びける、契殊なる、下紐を、唯一筋に、怨みやはする。」

大輔の君とて、大人々々しき人の睦しげなる人に遣はす。(薫)「取り敢へぬ樣の見苦しきを、つきぐしう持て隱してなん。」との給ひて、御料のは忍びやかなれど、箱にて包も異なり。御覽ぜさせねど、前々斯やうなる御心しらひは、常の事にて目馴れにたれば、氣色

○人々に取り散らしなどしたれば　大輔君が私の取計らひにて人々に配りたれば。
○誰かは何事をも云々　中君を後見する者は薫ならで誰かあらんとなり。
○童など　中君の方の童女ども。
○世に響きたる云々　六君の方のなり。
○宮　匂君。
○中納言の君　薫。
○稚る　中君をなり。
○今ぞ又例の云々　前に有合せ物を贈り此度は又仕立てゝ送らすとなり。
○此君　薫君。
○故親王　八宮。

ばみ返しなど、引こじろふべきにもあらねば、如何がなども思ひ煩はで、人々に取り散らしなどしたれば、各差縫ひなどす。若き人々の御前近う仕う奉るなどをぞ、取り別きては繕ひ立つべき。下仕どもの、いたう萎えばみたりつる姿どもなど、白き袷などにて、揭焉ならぬぞなか〳〵目安かりける。誰かは何事をも後見聞ゆる人のあらん。宮は疎ならぬ御志の程にて、萬を如何でと思しおきてたれど、細なる內々の事までは、如何がはおほし寄らん。限りも無く人にのみかしづかれて、習はせ給へれば、世の中の打合はず淋しき事、如何なる物とも知り給はぬ、ことわりなり。艶にそゞろ寒く、花の露を翫びて、世は過すべき物と思したる程よりは、思ほす人の爲なれば、自ら折節に付けつゝ、まめやかなる事までも扱ひ知らせ給ふこそ、有り難く珍らかなる事なゝめれば、いでやなど誹らはしげに聞ゆる御乳母などもありけり。童などの裝鮮ならぬ、折々打雜りなどしたるを、女君はいと恥かしう、なか〳〵なる住居にもあるかなど、人知れず思す事無きにしもあらぬに、況て此頃は、世に響きたる御有樣の華やかさに、且は宮の內の人の見思ふらん事も、人げ無きことゝ、思し亂るゝ事も添ひて、歎かしきを、中納言の君は、いとよく推し量り聞え給へば、疎からんあたりには、見苦しうくだ〳〵しかりぬべき心しらひの樣も侮るとはなけれど、何かは事々しく仕立顏ならんも、なか〳〵覺無く見咎むる人やあらんと、思すなりけり。今ぞ又例の目安き樣の物どもなどせさせ給ひて、御小袿織らせ、綾の料賜はせなどし給ひける。此君しもぞ、宮にも劣り聞え給はず。樣異にかしづき立てられて、かたはなるまで心驕もし、世を思ひ澄して、あてなる心樣はこよなけれど、故親王の御山住を見初

○かくて猶云々　中君の事を斷念せんと思へども猶戀しきをいふ。
○あへしらはんも　もてなさんも。
○かの山里の云々　宇治よりつき奉る女房どもなり。
○故姫君　大君。
○此事　薫君の嘱想の事。
○男君　薫君。

め給ひしよりぞ、淋しき所のあはれさは樣殊なりけりと、心苦しう思されて、なべての世をも思ひ運らし、深き情をも習ひ給ひにける、いとほしの人習はしやとぞ。

かくて猶如何で後安く、大人しくて止みなんと思ふにも隨はず、心に懸りて苦しければ、御文などを、ありしよりは細やかにて、ともすれば忍び餘りたる氣色見せつゝ聞え給ふを、女君いとわびしき事添ひにたる身と思し歎かる。偏に知らぬ人ならば、あな物狂ほしと、はしたなめ差放たんにも安かるべきを、昔より樣異なる賴もし人に習ひ來て、今更に仲惡しうならんも、なか〳〵人目惡しかるべし。さすがに淺はかにもあらぬ御心ばへ有樣の、哀を知らぬにはあらず。さりとて心かはし顏にあへしらはんも、いとつゝましく、如何がはすべからんと、萬に思ひ亂れ給ふに、侍ふ人々も、少し物の言ふ甲斐ありぬべく若やかなるは、皆新しき心地して、見給ひ馴れたる人とては、かの山里の古女ばらなり。思ふ事をも同じ心に懷かしう言ひ合はすべき人の無き儘には、故姫君を思ひ出で聞え給はぬ折無し。おはせましかば、此人もかゝる心も添へ給はましやと、いと悲しう、宮のつらくなり給はん歎よりも、此事いと苦しう覺ゆ。

男君も强ひて思ひわびて、例のしめやかなる夕つ方おはしたり。やがて端に御茵差出させ給ひて、(中君)「いと惱ましき程にてなん、え聞えさせぬ。」と人して聞え出し給へるを聞くに、いみじうつらくて、涙の墮ちぬべきを、人目につゝめば、强ひて紛はして、(薫)「惱ませ給ふ折は、知らぬ僧なども近く參り寄るを、醫師などの列にても、御簾の內には侍ふまじうやは。かく人づてなる御消息なん、甲斐なき心地する。」と聞え給ひて、いと物しげなる御

○一夜物の氣色見し人々　先夜薫君が中君の傍に近づき給ひしを見し女房達。
○夜居の僧　宿直して加持する僧。
○女君　中君。
○昔の人　大君をいふ。
○聞き給ひて　薫君がなり
○人に問ひ侍りしかば　懷妊したる人の樣をなり。
○昔の人も云々　姉君も斯樣におはしき。
○誰も千年の松ならぬ　古歌に「憂くも世の思ふ心にかなはぬか誰も千歳の松ならぬに。
○かの御耳一つには　中君には。
○聞き居たりけり　少將は

氣色なるを、一夜物の氣色見し人々、實にやいと見苦しう侍るめり、とて母屋の御簾打下して、夜居の僧の座に入れ奉るを、女君誠に心地もいと苦しけれど、人の斯う言ふに、うたて揭焉ならんも、又如何がとつゝましければ、物憂ながら少しゐざり出でゝ、對面し給へり。いと仄に、時々物の給ふ御けはひの、昔の人の惱み初め給へりし頃、先づ思ひ出でらるゝも、ゆゝしう悲しうて、搔き昏す心地し給へば、頓に物も言はれず、ためらひつゝぞ聞え給ふ。こよなく奥まり給へるもいとつらくて、簾の下より几帳を少し推し入れて、例の馴れ〳〵しげに近づき寄り給ふが、いと苦しければ、わりなしと思して、少將の君と云ふ人を近う召し寄せて、(中君)「胸なん痛き。暫し押へて。」との給ふを聞き給ひて、(薫)「胸は押へたるいと苦しう侍るものを。」と打ち歎きて居直り給ふ程も、げにぞ下安からぬ。(薫)「如何なれば斯くはしも常に惱ましうは思さるらん。人に問ひ侍りしかば、しばしこそ心地も惡しかゝなれ。さて又宜しき折あり、などこそ敎へ侍りしか。餘り若々しくもてなさせ給ふなゝめりかし。」との給ふに、いと恥かしうて、(中君)「胸は何時とも無く斯くこそは侍れ。昔の人もさこそは物し給ひしか。長かるまじき人のするわざとか、人も言ひ侍るめる。」とぞの給ふ。實に誰も千年の松ならぬ世をと思ふには、いと心苦しう哀なれば、この召し寄せたる人の聞かんもつゝまれず、傍痛き筋の事をこそ選り止むれ。昔より思ひ聞ゆる樣などを、かの御耳一つには心得させながら、人は又かたはにも聞くまじき樣に、樣善く目安くぞ言ひ敎し給ふを、實に有り難き御心ばへにもと聞き居たりけり。何事に付けても、故君の御事をぞ盡せず思ひ給へる。(薫)「いはけなかりし程より、世の中を思ひ離れて止み

○思ひそめ云々　大君をなり。
○慰め　大君を思ふ心の慰め。
○心の引く方の強からぬ事なりければ　心のひく方につけて心強くも忍び離きになり。
○今はこれよりなど云々　今は此方より申し驚す事などもありつれ。
○いと賢き事に云々　薫に渡り給へと仰せありし事をなり。
○限りだにある　六帖に「戀しさの限りだにある世なりせばつらきを強ひて歎かざらまし」
○音無の里　拾遺集に「戀ひわびぬ音をだに泣かん聲立てゝ何處なるらん音無の里」
○みたらし川近き心ちする　古今集に「戀せじとみたらし川にせしみそぎ神はらけずゆなりにけらしな」
○人形こそ云々　人形は川へ流す物なれば大君の爲いとはしとなり。
○黄金求むる繪師　王昭君略を贈らざりしかば繪師その肖像を惡樣に畫きし故事。
○きりげなくもてなし給へり　薫が中君の手をとらへ給へるを少將に知らせじとてさらぬ體に裝ひ給へるなり。
○疎くは思ふまじけれど異腹の妹なれば疎くは思はざれども。
○世に在らんとも知らざりし人　浮舟を指す。
○形見云々　中君を大君の形見と薫のの給ふなり。
○いとさしもあるまじき人異腹なれば然樣に似るまじき人がなり。
○思したりし　八宮がなり

ぬべき心づかひをのみ習ひ侍りしを、さるべきにや侍りけん、疎きものから疎ならず思ひ初め奉りし一節に、かの本意の聖心は、さすがに違ひやしにけん。慰めばかりに、此處にも彼處にも行きかゝづらひて、人の有樣を見んに付けて、紛るゝ事もやあらんなど、思ひ寄る折々侍れど、更に外ざまには靡くべうも侍らざりけり。萬に思ひ給へわびては、心の引く方の強からぬ事なりければ、すきがましきやうに思さるらんと恥かしけれど、あるまじき心の掛けても侍らばこそ目覺ましからめ。唯かばりの程にて、時々思ふ事をも聞えさせ承りなどして、隔無くの給ひ通はんを、誰かは咎め出づべき。世の人に似ぬ心の程は、皆人にもどかるまじく侍るを、猶後安く思しなれ。」など、怨み、泣きみ闌え給ふ。(中君)「うしろめたく思ひ聞えば、かく怪しと人も見思ひぬべきまでは、聞え侍るべくや。年頃此方彼方に付けつゝ、見知る事どもの侍りしかばこそ、樣殊なる賴もし人にて、今はこれよりなど驚し聞ゆれ。」との給へば、(薫)「さやうなる折も覺え侍らぬ物を、いと賢き事に思し置きての給はするや。この御山里出立急ぎに辛うじて召し使はせ給ふべき。それも實に御覽じ知る方ありてこそはと、疎にやは思ひ侍る。」などの給ひて、猶いと物怨めしけなれど、聞く人あれば、思ふ儘にも如何でかは續け給はん。外の方を眺め出したれば、やう〳〵暗うなりにたるに、蟲の聲ばかり紛れ無くて、山の方小暗くて、何の文目も見えぬに、いとしめやかなる樣して寄り居給へるも、煩はしとのみ内にはおぼさる。「限だにある」など、いと忍びやかに打誦じて、(薫)「思う給へわびて侍り。音無の里も求めまほしきを、かの山里のわたりに、態と寺などは無くとも、昔覺ゆる人形をも作り、繪にも書き取りて、行ひ侍らんとなん思う給へなりにたる。」との給へば、哀なる御願に、又うたてみたらし川近き心地する。人形こそ思遣りいとほしう侍れ。黄金求むる繪師もこそなど、うしろめたうぞ侍るや。」との給へば、(薫)「そよ。その工匠も繪師も、如何でか心には協ふべきわざならん。近き世に花降らせたる工匠も侍りけるを、さやうならん變化の人もがな。」など、とざまかうざまに忘れん方なき由を歎き給ふ氣色の、いと心深げなるも、いとほしう煩はしうて、今少しすべり寄りて、(中君)「人形の序に、いと怪しく思ひ寄るまじき事をこそ思ひ出で侍れ。」との給ふけはひの少しなつかしきも、いと嬉しく哀にて、(薫)「何事にか。」と言ふ儘に、几帳の下より手を捉ふれば、いとうるさく思ひならるれど、如何樣にして斯かる心を止めて、なだらかにあらんと思へば、この近き人の思はん事の愛無くて、さりげ無くもてなし給へり。(中君)「年頃は世に在らんとも知らざりし人の、此夏頃遠き處より物して、尋ね出でたりしを、疎くは思ふまじけれど、亦うちつけに、然しも何かは睦び思はんと思ひ侍りしを、さいつ頃來たりしこそ、怪しきまで、昔の人の御けはひに通ひたりしかば、哀に覺えなり侍りしか。形見など、斯う思ほしの給ふめるは、なか〳〵何事もあさましう持て離れたりとなん皆人々も言ひ侍りしを、いとさしもあるまじき人の、如何でかはさはありけん。」との給ふを、夢語りかとまで聞く。(薫)「さるべき故あればこそは、さやうにもむつび聞えらるらめ。何どか今まで斯くもかすめさせ給はざらん。」との給へば、(中君)「いさや。その故も如何なりけん事とも思ひ分れ侍らず。物はかなき有樣どもにて、世に落ちとまりさすらへんとすらんとのみ、後めたげに思したりし事どもを、唯一人搔集めて思ひ知られ侍

○一人　我身一人。
○忍草摘み置きたりけるなるべし　八宮の落胤腹などなるべしとなり。後選集に「結び置く形見の子だに無かりせば何に忍ぶの草を摘まゝし」
○海中にも云々　方士勤を奉じて楊貴妃の魂を東海の中に尋ねし故事。
○寤めん方なきよりは　浮舟をだに見んといふ意なり。
○古の御許も無かりし事を　八宮の御子とも歎へ給はざりしを。
○ほのかなりしかばにや　火影などにてほのかに見し故にやとなり。
○佛　山里の本尊。
○さまではいかでかは　さ程までは待遇し給はずともとなり。
○さすがに云々　しかしながら浮舟を見たく思ひ給ふとなり。
○男君　薫君。
○我爲も　中君の爲にも我爲にも。
○おりたち練じたる心ならねば　薫は戀には熟練せねばとなり。
○似たりとの給ひつる人　浮舟なり。
○人の本意にも云々　大君に似て我思ふに適はぬ樣にもあらば。
○いゞしく云々　宇治宮のさまなり。
○いと恐ろしげに侍れば　我身苟く老いていと恐ろしげなる形になり侍れば。
○老人　辨の尼。
○人の上にて云々　大君が中君の身上につき匂宮の御跡絶を歎き給ひしも此頃なりきとなり。

るに、又愛無き事をさへ打ち添へて、人も聞き傳へんこそ、いといとほしかるべけれ。」との給ふ氣色を見るに、宮の忍びて物などの給ひけん人の、忍草摘み置きたりけるなるべしと見知りぬ。似たりとの給ふゆかりに耳とまりて、かばかりにても同じうは言ひ果てさせ給ひてよ。」と、訝しがり給へど、さすがに傍痛くて、得こまかにも聞え給はず。(中君)「尋ねんと思す心あらば、そのわたりとは聞えつべけれど、委しうはしもえ知らずや。又餘り言はゞ、御心劣もしぬべき事になん。」との給へば、(薫)「世を海中にも、魂のありか尋ねんには、心の限進みぬべきを、いと然までは思ふべきにはあらざゝなれど、いとかく慰めん方無きよりはと思ひ寄り侍る。人形の願ばかりには、何どてかは山里の本尊にも思ひ侍らざらん。猶たしかにの給はせよ。」とうちつけに責め聞え給ふ。(中君)「いさや。古の御許も無かりし事を、斯うまでも漏し聞ゆるも、且はいと口輕けれど、變化の工匠覓め給ふいとほしさにこそ、斯くもとて、いと遠き所に年頃經にけるを、母なる人のいと憂はしき事に思ひて、あながちに尋ね寄りしを、はしたなくもえいらへで侍りしに、物したりしなり。仄なりしかばにや、何事も思ひし程よりは、見苦しからずなん見えし。これを如何樣にもてなさんと歎くめりしに、佛にならんはいとこよなき事にこそはあらめ、さまでは如何でかは。」など聞え給ふ。さりけ無くて斯ううるさき心を如何で放つわざもがなと、思ひ給へると見るはつらけれど、さすがにあはれなり。あるまじき事とは深く思ひ給へるものから、顯證にはしたなき樣には得もてなし給はぬも、見知り給へるにこそはと思ふ心時めきに、夜もいたう更け行くを、內には人目いと傍痛く覺え給ひて、打弛めて入り給ひぬれば、男君ことわりとは返す〳〵思へど、猶いと怨めしう口惜しきに、思ひ鎭めん方も無き心地して涙のこぼるゝも人わろければ、萬に思ひ亂るれど、ひたぶるに淺はかならんもてなし將、猶いと轉て我爲も愛無かるべければ、念じ返して、常よりも歎勝にて出で給ひぬ。

かくのみ思ひては如何がすべからん。苦しうもあゝべいかな。如何にしてかは、大方の世のもどきあるまじき樣にて、さすがに思ふ心の叶ふわざをばすべからん、など下り立ち練じたる心ならねばにや、我が爲人の爲も心安かるまじき事を、わりなく思ほし明かす。似たりとの給ひつる人をも、如何でかは誠かとは見るべき。さばかりの際なれば、思ひ寄らんに難くはあらずとも、人の本意にもあらずば、うるさくこそあるべけれ、など猶そなたざまには心も立たず。

宇治の宮を久しう見給はぬ時は、いとゞ昔遠くなる心地して、すゞろに心細ければ、九月二十日餘の程におはしたり。いとゞしく風のみ吹き拂ひて、心すごう荒ましげなる水の音のみ宿守にて、人影も殊に見えず。見るに先づ搔き昏し、悲しき事ぞ限なき。辨の尼召し出でたれば、障子口に、靑鈍の几帳差出でゝ參れり。(辨)「いと畏けれど、ましていと恐ろしげに侍れば、つゝましくてなん。」とまほには出で來ず。(薫)「如何に眺め給ふらんと思ひ遣るに、同じ心なる人も無き物語も聞えんとてなん。はかなくも積る年月かな。」とて、涙を一目浮けておはするに、老人はいとゞ更に堰きも敢へず。(辨)「人の上にて、愛無く物を思ほすめりし頃の空ぞかしと、思ひ給へ出づるに、何時と侍らぬ中にも、秋の風は身に沁みてつらう覺え侍りて、實にかの歎かせ給ふめりしも著き世の中の御有樣を、仄に承るも樣

○秋の風は身に沁みて　古歌に「秋吹くはいかなる風の色なれば身にしむばかり人の繼しき」
○味氣無く思し沁みけん　中君のなり。
○此頃の御有樣は　匂宮が六君の方にのみおはするを云ふ。
○かの山寺　阿闍梨の寺。
○いとたうときことゝ云々　寺建立の功德を阿闍梨の申す詞なり。
○昔の人　八宮。
○其御志も云々　八宮も此處を寺にと思しながらも姫君達の爲を思し遣りて志を遂げ給はざりけんとなり。
○兵部卿宮の北の方　中君。
○かの宮　匂兵部卿宮。
○屍を包みて云々　觀音勢至因位の時共に繼母に殺されければ其親屍を頸に懸けて歎きしが終に佛道に入りし事を云ふ。
○偏に怠々しき御事なり　然るべからざる御事なり。

々になん。」と聞ゆれば、(薫)「とある事もかゝる事も、ながらふれば直るやうもあるを、味氣無く思し沁みけんこそ、我が過のやうに猶悲しけれ。此頃の御有樣は、何かそれこそ世の常なれ。されどうしろめたけには見え聞え給はざゝめり。言ひても〳〵、空しき空に昇りぬる煙のみこそ、誰も遁れぬ事ながら、後れ先だつ程は、猶いと言ふ甲斐無かりけれ。」とて又泣き給ひぬ。

阿闍梨召して、例のかの御忌日の經佛の事などの給ふ。(薫)「さて此處にかく時々物するに附けても、甲斐無き事の安からず覺ゆるが、いと益無きを、この寢殿毀ちて、かの山寺の傍に、堂建てんとなん思ふを、同じうは疾く始めてん。」との給ひて、堂幾つ、廊ども、僧房など、あるべき事ども書き出での給ひなどせさせ給ふを、(阿闍梨)「いと尊き事。」と聞え知らす。(薫)「昔の人の故ある御住居に、占め造り給ひけん所を、引き毀たんも情無きやうなれど、其御志も、功德の方には進みぬべく思しけんを、留り給はん人々を思し遣りて、え然はおきて給はざりけるにや。今は兵部卿宮の北の方こそは知り給ふべければ、かの宮の御料とも謂ひつべくなりにたり。されば此處ながら、寺になさんことは便無かるべし。心に任せて然も得せじ。處の樣も餘りに川面近く、顯證にもあれば、猶寢殿を失ひて、異樣にも造り變へんの心にてなん。」との給へば、(阿闍梨)「とざまかうざまに、いとも畏う尊き御心なり。昔別を悲みて、屍を包みて、數多の年頸に懸けて侍りける人も、佛の御方便にてなん、かの屍の囊を捨てゝ、遂に聖の道にも入り侍りにける。この寢殿を御覽ずるに附けて、御心動きおはしますらん、偏に怠々しき御事なり。又後の世の御勸ともなるべき事に侍り

○佛　故宮の持佛。
○京の宮　中君の方をいふ。
○故權大納言の君　柏木。
○珍らしくおはしますらん御有樣　薫君の誕生を云ふ。
○見奉り侍るなん　薫君なり。
○樣々の事　柏木八宮大君などの事なり。
○宮　中君をいふ。
○故姫君　大君。

けり。急ぎ仕う奉らすべし。曆の博士の選び申して侍らん日を承はりて、物の故知りたらん工匠二三人を賜はりて、こまかなる事どもは、佛の御敎の儘に仕う奉らせ侍らん。」と申す。とかくの給ひ定めて、御庄の人ども召して、此程の事ども、阿闍梨の言はん儘にすべき由など仰せ給ふ。はかなく暮れぬれば、其夜はとまり給ひぬ。

この度ばかりこそは見めと思して、たちめぐりつゝ見給へば、佛も皆かの寺に移してければ、尼君の行の具のみあり。いとはかなげに住ひ居たるを、哀に如何にして過すらんと見給ふ。(薫)「この寢殿は變へて建つべき樣あり。造り出でん程は、かの廊に物し給へ。京の宮に取り渡さるべき物などあらば、御庄の人召して、あるべからんやうに物し給へ。」など、まめやかなる事どもを語らひ給ふ。他にては斯ばかり定過ぎたらん人を、何にかと見入れ給ふべきにもあらねど、夜も近く臥せて、昔物語などせさせ給ふ。故權大納言の君の御有樣も、聞く人無きに心安くて、いと細やかに聞ゆ。(辨)「今はとなり給ひし程に、珍しくおはしますらん御有樣を、いぶかしき物に思ひ聞えさせ給ふめりし御氣色などの、思ひ給へ出でらるゝに、かく思ひ懸け侍らぬ世の末に、かくて見奉り侍るなん。かの御世に睦しう仕う奉り置きし驗の、自ら侍りけると、嬉しくも悲しくも思ひ給へ知られ侍る。心憂き命の程にて、かく樣々の事を見給へ過し、思ひ給へ知り侍るなん、いと恥かしう心憂く侍る。宮よりも「時々は參りて見奉れ。覺束なく絶え籠り果てぬるは、こよなう思ひ隔てけるなンめり。」など、の給はする折々侍れど、忌々しき身にてなん、阿彌陀佛より外には、見奉らまほしき人も無くなりにて侍る。」など聞ゆ。故姫君の御事ども將盡きもせず、年頃の御

○宮の御方　中君。

○形代の事　中君のほのかに語り給ひし浮舟の事。
○故宮　八宮。

○中將の君　浮舟の母。

○又とも御覽じ入るゝ　中將の君をなり。

○陸奥の守　今の常陸の守

○その君たひらかに物し給ふ由　浮舟の無事におはする由。
○此わたり　八宮。
○常陸になりて　常陸の守となり。
○かの宮　中君。
○かの君　浮舟。

有様など語りて、何の折何との給ひし、花紅葉の色を見ても、はかなく詠み給ひける歌語りなどを、つき無からず打わなゝきたれど、兒めかしう、言少なるものから、をかしかりける人の御心ばへかなとのみ、いとゞ聞き添へ給ふ。宮の御方は今少し今めかしきものから、心許さゞらん人の爲には、はしたなくもてなし給ひつべくこそ物し給ふめるを、我にはいと心深くなさけ〳〵しとは見えて、如何で過してんとこそ思ひ給ひつれなど、心の中に思ひ比べ給ふ。さて物の序に、かの形代の事を言ひ出で給へり。(辨)「京に此頃侍らんとはえ知り侍らず。人づてに承りし事の筋なゝなり。故宮のまだかゝる山住もし給はず、故北の方亡せ給へりける程近かりける頃、中將の君とて侍ひける上臈の、心ばせなども怪しうは侍らざりけるを、いと忍びて、はかなき程に物の給はせけるを、知る人も侍らざりけるに、女子をなん產みて侍りけるを、然もやあらんと思す事のありけるからに、愛無く煩はしう物しきやうに思しなりて、又とも御覽じ入るゝ事も侍らざりけり。愛無く其事に思し懲りて、やがて大方聖にならせ給ひにけるを、はしたなく思ひて、え侍はずなりにけるが、陸奥の守の妻になりて下りけるを、一年上りて、其君平らかに物し給ふ由、此わたりにも仄めかし申したりけるを、聞し召し附けて、更にかゝる消息あるべき事にもあらず、との給はせ放ちければ、甲斐なくてなん歎き侍りける。さて又常陸になりて下り侍りにけるが、此年頃音にも聞え給はざりつるが、此春上りて、かの宮には尋ね參りたりけるとなん仄聞き侍りし。かの君の年は、二十ばかりになり給ひぬらんかし。いと美しく生ひ出で給ふが、悲しき事などこそ、中頃は文にさへ書き續けてなん侍ッめりしか。」と聞ゆ。委しう聞き明らめ給ひて、さらば誠にてもあらんかし。見ばやと思ふ心出で來ぬ。(藁)「昔の御けはひに掛けても觸れたらん人は、知らぬ國までも尋ね知らまほしき心地のあるを、數まへ給はざりけれど、思ふに氣近き人にこそあッなれ。態とは無くとも、此わたりに音なふ折あらん序に、斯くなん言ひしと傳へ給へ。」などばかりの給ひ置く。(辨)「母君は故北の方の御姪なり。辨も離れぬ仲らひに侍るべきを、そのかみは外々に侍りて、委しうも見給へ馴れざりき。さいつ頃京より、大輔が許より申したりしは、「かの君なん、如何でかの御墓にだに參らんとの給ふなる。さる心せよ。」など侍りしかど、まだ此處に差延へては音なはず侍るめり。今然らば然樣の序に、かゝる仰言など傳へ侍らん。」と聞ゆ。明けぬれば歸り給はんとて、昨夜後れて持て參れる絹綿などやうの物、阿闍梨に送らせ給ふ。尼君にも賜ふ。法師ばら尼君の下衆どもの料にとて、布など云ふ物をさへ召してたぶ。心細き住居なれど、かゝる御とぶらひたゆまざりければ、身の程には、いと目安くしめやかにてなん行ひける。木枯の堪へ難きまで吹き通したるに、殘る梢も無く散り敷きたる紅葉を、踏み分けゝる跡も見えぬを、見渡して、頓にもえ出で給はず。いと氣色ある深山木に、宿りたる蔦の色ぞまだ殘りたる。小丹など少し引き取らせ給ひて、宮へと思しくて持たせ給ふ。

(藁)「宿木と、思ひ出でずば、木の下の、旅ねも如何に、淋しからまし。」

と獨言ち給ふを聞きて、尼君、

(辨)「荒れ果つる、朽木の下を、宿木と、思ひ置きける、程の悲しさ。」

飽くまで古めきたれど故無くはあらぬをぞ、些の慰めには思されける。

○昔の御けはひに云々　大君に似られた人は。

○辨も離れぬ仲らひ　中將の君は辨のいとこ姪なり。
○大輔　浮舟の女房なり。
○かの君　浮舟。
○かの御墓　八宮の御墓。

○心細き住居なれど　辨は不便なるさまにて住めども。

○宿木と云々　昔の名殘を思はずば此處の旅寢は如何に淋しからんとなり。宿木は宿りきを掛けたり。
○荒れ果つる云々　昔を思して荒れ果つる此古宮に宿り給ひし御心の程ぞあはれなる。

○宮に紅葉云々　薫の中君になり。
○男君　匂宮。
○南の宮　三條の宮。
○峯の朝霧　古今集に「雁の來る峯の朝霧晴れずのみ思邊きせぬ世の中の憂さ」
○能くもつれなく云々　能くも何事も無く書き給へるよ。
○見じや　我は其返事の文をば見じ。
○嚴の中　古今集に「如何ならん嚴の中に住まばかは世の憂きことの聞え來ざらん」
○雲に出でぬ云々　匂宮の中君を疑ひて歎み給へるなり、表には出さざれど裏には物思ふらしとなり。
○秋果つる云々　下の意は宮の我を飽き給へる事は六君に心を移し給へる樣にて知らるとなり。
○我身一つの　古歌に「大方の我身一つの憂きからになべての世をも怨みつるかな」
○花の中に偏に　朗詠に不二是花中偏愛菊、此花開後更無花、とあり。
○某の御子の云々　西宮左大臣の故事。
○昔こそ云々　故宮の御事なり。
○かの君に云々　薫君には隱し給ふまじとなり。

宮に紅葉奉れ給へれば、男宮おはします程なりけり。南の宮よりとて、何心も無く持て參りたるを、女君例のむつかしき事もこそと、苦しく思せど、取り隱さんやは。宮（匂）「をかしき蔦かな。」と、たゞならずの給ひて、召し寄せて見給ふ。御文には「日頃何事かおはしますらん。山里に侍りて、いとゞ峯の朝霧に惑ひ侍りつる、御物語も自らなん。彼處の寢殿、堂に爲すべき事、阿闍梨に言ひ付け侍りにき。御許侍りてこそは、外に移す事も物し侍らめ。辨の尼君に、さるべき仰言は遣はせ。」などぞある。（匂）「能くもつれなく書き給へる文かな。麿ありとぞ聞きつらん。」との給ふも、少しは實にさやありつらん。女君は事無きを嬉しと思ひ給ふに、あながちに斯くの給ふを、わりなしと思して、打怨じて居給へる御樣、萬の罪も許しつべくをかし。（匂）「返事書い給へ。見じや。」とて外ざまに背き給へり。甘えて書かざらんも怪しければ、（中君消息）「山里の御ありきの羨ましくも侍るかな。かしこは實にさやうにてこそ宜くと思ひ給へしを、殊更に又嚴の中求めんよりは、荒し果つまじう思ひ侍るを、如何にも然るべき樣に爲させ給はゞ、疎ならずなん。」と聞え給ふ。斯う憎き氣色も無き御睦びなゝめりと見給ひながら、我御心習に、たゞならじと思すが安からぬなるべし。

枯れ〴〵なる前栽の中に、尾花の物より殊に、手を差出でゝ招くがをかしう見ゆるに、まだ穗に出でさしたるも、露を貫き留むる玉の緒、はかなげに打靡きなど、例の事なれど、夕風猶あはれなる頃なりかし。

（匂）「穗に出でぬ、物思ふらし、篠薄、招く袂の、露繁くして。」

なつかしき程の御衣どもに、直衣ばかり着給ひて、琵琶を彈き居給へり。黃鐘調の搔合せを、いと哀に彈き做し給へば、女君も心に入り給へる事にて、物怨じもえし果て給はず。小き御几帳のつまより、脇息によりかゝりて、仄に差出で給へる、いと見まほしくらうたけなり。

（中君）「秋果つる、野邊の氣色も、篠薄、ほのめく風に、附けてこそ知れ。我身一つの、」とて涙ぐまるゝが、さすがに恥かしければ、扇を紛らはしておはする、心の中もらうたく推し量らるれど、かゝるにこそ人もえ思ひ放たざらめと、疑はしきがたゞならで、怨めしきなゝめり。菊のまだよくも移ろひ果てゞ、態と繕ひ立てさせ給へるは、なか〳〵遲きに、如何なる一本にかあらん。いと見所ありて移ろひたるを、取別きて折らせ給ひて、「花の中に偏に」と誦じ給ひて、（匂）「某の御子の、此花めでたる夕ぞかし。古天人の翔りて、琵琶の手敎へけるは、何事も淺くなりにたる世は物憂しや。」とて、御琴さし措き給ふを、口惜しう思して、（中君）「心こそ淺くもあらめ。昔を傳へたらん事さへは、何どてか然しも。」とて、覺束なき手などをゆかしげにおぼいたれば、（匂）「さらば獨言は淋々しきに、さしいらへし給へかし。」とて、人召して箏の御琴取り寄せさせて彈かせ奉り給へど、（中君）「昔こそまねぶ人物し給ひしかど、はか〴〵しう聞きも留めずなりにし物を。」とて、つゝましげにて手も觸れ給はねば、（匂）「かばかりの事も、隔て給へるこそ心憂けれ。此頃見るあたりは、まだいと心解くべき程にもあらねど、片生なる初事をも隱さずこそあれ。凡て女は柔に、心美しきなんよき事とこそ、その中納言も定むめりしか。かの君にはた斯

○伊勢の海　催馬樂の律の歌なり。
○二心おはします　匂宮のなり。
○我御前　中君を云ふ。
○三四日籠りおはして　匂宮の二條院に御逗留あるなり。
○大臣　夕霧左大臣。
○あなたに渡り給ひて云々　舞殿に渡り給ひて夕霧に對面し給ふなり。
○人々のぞき見奉りて　夕霧をなり。
○御みづから　中君。
○猶心安く云々　心安く字治に隱遁せんこと目安からめとなり。
○又々始め添へさせ給ふ　初より行はるゝ修法の上に此度又々加へらるるをいふ。
○さるは女二の宮の云々　此間女二宮の母藤壺の服解けたれば御裳着の事を急がせらるゝなり。
○男方　薫の方。
○この御事　中君の事。
○直物　定例の除目の後更に官位の叙任あるを云ふ。
○此宮　匂宮。
○此方におはします　匂宮が。
○下りて答の拜し給ふ　花鳥餘情に云く、拜賀などに來る人には主人南階に降り

うもつゝみ給はじ。こよなき御中なンめれば。」などまめやかに怨みられてぞ、打歎きて少し調べ給ふ。ゆるびたりければ、盤渉調に合せ給ふ。搔合せなど、爪音をかしう聞ゆ。伊勢の海諸ひ給ふ御聲のあてにをかしきを、女ばら物の後に近づき參りて、笑み廣ごりて居たり。(女房)「二心おはしますはつらけれど、それもことわりなれば、猶我御前をば、幸人とこそ申さめ。かゝる御有樣に交らひ給ふべくもあらざりし年頃の御住居を、又歸りなまほしげに思しての給はするこそいと心憂けれ。」など唯言ひに言へば、若き人々は、「あなかまやな。」など制す。御琴ども敎へ奉りなどしつゝ、三四日籠りおはして、御物忌などことつけ給ふを、かの殿には怨めしく思して、大臣內裏より出で給ひける儘に、此處に參り給へれば、宮(匂)「事々しげなる樣して、何しにいましつるぞとよ。」と、むつかり給へど、あなたに渡り給ひて對面し給ふ。(夕)「異なる事無き程は、此院を見で久しうなり侍るも哀にこそ。」など、昔の御物語など少し聞え給ひて、やがて引伴れ聞え給ひて出で給ひぬ。御子どもの殿ばら、さらぬ上達部殿上人なども、いと多く引き續き給へる御勢こちたきを見るに、並ぶべくもあらぬぞ屈し痛かりける。人々のぞきて見奉りて、(女房)「さも清らにおはしける大臣かな。さばかり何れともなく、若う盛りにて、清げにおはさうずる御子どもの、似給ふべきもなかりけり。あなめでたや。」と云ふもあり。又(女房)「さばかりやんごとなけなる御樣にて、態と御迎に參り給へるこそ憎けれ。安げ無の世や。」など打ち歎くもあるべし。御自も、來し方を思ひ出づるより始め、かの華やかなる御仲らひに、立ち交るべくもあらず。かすかなる身の覺をと、愈心細ければ、猶心安く籠り居なんのみこそ、目安から

め、などいとゞ覺え給ふ。はかなくて年も暮れぬ。

正月の晦方より、例ならぬさまに腦み給ふを、宮又御覽じ知らぬ事にて、如何ならんと思し歎きて、御修法など、所々にて數多せさせ給ふに、又々始め添へさせ給ふ。いといたう煩ひ給へば、后の宮よりも御とぶらひあり。かくて三年になりぬれど、一所の御志こそ疎ならね。大方の世には、物々しうももてなし聞き給はざりつるを、此折ぞ、何處にも〳〵聞し召し驚きて、御とぶらひども聞え給ひける。中納言の君は、宮の思し騷ぐらんにも劣らず、如何におはせんと歎きて、心苦しく後めたく思さるれど、限ある御とぶらひばかりこそあれ、餘りもえ詣で給はで、忍びてぞ御祈禱などもせさせ給ひける。さるは女二の宮の御裳着、たゞ此頃になりて、世の中響き營みののしる。萬の事、帝の御心一つなるやうにおはし急げば、御後見無きしもぞ、なか〳〵めでたけに見えける。女御の仕置き給へる事をばさるものにて、作物所さるべき受領どもなど、取々に仕う奉る事どもいと限無し。やがて其程に、參り初め給ふべきやうにありければ、男方も心づかひし給ふ頃なれど、例の事なれば、其方ざまには、心も入らで、この御事のみいとほしう思し歎かる。

二月のついたち頃に、直物とか云ふ事に、權大納言になりて、右大將兼け給ひつ。右の大殿左にておはしけるが、辭し給へる所なりけり。悅に所々ありき給ひて、此宮にも參り給へり。いと苦しうし給へば、此方におはします程なりければ、やがて參り給へり。僧など侍ひて、いと便無き方にと驚き給ひて、鮮なる御直衣、御下襲など奉り、引き繕ひて、下りて答の拜し給ふ。御有樣ども取々にいとめでたし。やがて今宵官の人に祿賜ふ饗の所に

て答拜揖讓の作法ある也。
○垣下　饗に相伴するものをいふ。

○大將殿　薫君。

○官の御私事　匂宮の御自分にて賄はせらるゝをいふ。
○屯食　握飯。
○碁手の錢　斯樣の時に碁など打たせて遊ばする其賭物の錢。
○子持　中君を云ふ。
○ふずく　饂飩の類なり。
○官の大夫　中宮の大夫。
○宮の始めて云々　匂宮の始めての御子なれば如何でか心を用ゐざらん。

○御自　中君。

と請じ奉り給ふを、腦み給ふ人によりてぞ思したゆたひ給ふめる。左の大殿のし給ひけるでなん集ひ給ひける。この宮も渡り給ひて、靜心無ければ、まだ事果てぬに、急ぎ歸り給へるを、大殿の御方には、いと飽かずめざましうとの給ふ。劣るべうもあらぬ御程なるを、只今の覺の華やかさに思し驕りて、押立ちてもてなし給へるなゝめりかし。

辛うじて其曉に、男にて生れ給へるを、宮もいと甲斐ある樣にて嬉しく思したり。大將殿も喜に添へて、嬉しくおぼす。昨夜おはしましたりし畏まりに、やがて此御悅も打ち添へて、立ちながら參り給へり。かく籠りおはしませば、參り給はぬ人無し。御產養、三日は例の唯宮の御私事にて、五日の夜は、大將殿より屯食五十具、碁手の錢、椀飯などは、世の常のやうにて、子持の御前の衝重三十、兒の御衣五重襲にて、御襁褓などぞ、事々しからず忍びやかにしなし給へれど、こまかに見れば、いと態と目馴れぬ心ばへなど見えける。宮の御前にも、淺香の折敷、高抔どもにて、粉熟參らせ給へり。女房の御前には、衝重をばさるものにて、檜破籠三十、樣々しつくしたる事どもあり。人目に悉くは殊更にしなし給はず。七日の夜は、后の宮よりの御產養なれば、參り給ふ人々いと多かり。宮の大夫を始めて、殿上人上達部、數知らず參り給へり。內にも聞し召して、「宮の始めて大人び給ふなるには、如何でかは。」との給はせて、御太刀奉らせ給へり。九日も、大殿より仕う奉らせ給へり。宜しからず思すあたりなれど、宮の思さん所あれば、御子の君達など參り給ひて、凡ていと思ふ事無げにめでたければ、御自も月頃物思はしく、心地の惱ましきに付

○大人び果て　子持給へるをいふ。

○おぼし立ちぬること云々　帝の御心ばへをいふなり

○臨靈の宮　女二宮。

○左の大臣　夕霧。

○かの母宮　女三宮。
○人も許されぬ物を　人も許さぬ落葉宮を。
○宮は　落葉の宮は。
○大藏卿　女二宮の母方の甥なり。
○かの御前　薫の方の人人。
○私事のやうにぞありける　凡人の婿君あつかひの如しとなり。

けても、心細う思し渡りつるに、かく面立たしう、今めかしき事どもの多かれば、少しは慰みもやし給ふらん。大將殿は、かくのみ大人び果て給ふめれば、いとゞ我方ざまは氣遠くやならん。又宮の御志も、え疎ならじ、と思ふは口惜しけれど、又初よりの心おきてを思ふには、いと嬉しうもあり。

かくて其月二十日餘の程にぞ、藤壺の宮の御裳着の事ありて、又の日なん大將參り給ひける。其夜の事は忍びたる樣なり。天の下響きて、いつくしく見えつる御かしづきに、ただ人の具し奉り給ふぞ、猶飽かず心苦しく見ゆる。さる御許はありながら、只今斯くしも急がせ給ふまじき事ぞかしと、譏らはしけに思ひの給ふ人もありけれど、おぼし立ちぬること、淸々しうおはします御心にて、來し方のためし無きまで、同じくは持て做さんと、思しおきつるなゝめり。帝の御婿になる人は、昔も今も多かれど、かく盛の御世に、たゞ人のやうに、婿どり急がせ給へる類は、少くやありけん。左の大臣も、(タ)「珍しかりける人の御覺え宿世なり。故院だに、朱雀院の御末にならせ給ひて今はと俏し給ひし際にこそ、かの母宮を得奉り給ひしか。我はまいて人も許されぬ物を、拾ひたりしや。」との給ひ出づれば、宮は實にとおぼすに、恥かしうて、御答もえし給はず。

三日の夜は大藏卿より始めて、かの御方の心寄せになさせ給へる人々、家司に仰言給ひて、忍びやかなれど、かの御前、隨身、車添、舍人などまで祿賜はす。其程の事どもは、私事のやうにぞありける。かくて後は、忍び〳〵に參り給ふ。心の中には、猶忘れ難き古樣のみ覺えて、晝は里に起き伏し眺め暮らして、暮るれば心より外に急ぎ參り給ふも、習はぬ心地

○御念誦堂　女三宮のなり。

○心の闇は同じ事になん云云　主上も女の子を思し召す道は同じことゝなり。

○奏せさせ給ふ事など云々　女三宮より主上へ奏聞ある事は能く聞し召し入るゝとなり。

○今少し重々しく云々　薫君の樣なり。

○今はさりとも云々　中君の心なり。

○對面し給へり　中君が。

○ありしながらの御氣色　大君の御氣色なり。

○宮　匂宮。

に、いと物憂く苦しうて、まかンでさせ奉らん事をぞ思しおきてける。母宮はいと嬉しき事に思して、おはします寢殿を讓り聞え給ふべくの給へど、いと忝からんとて、御念誦堂のあはひに、廊を續けて造らせ給ふ。西面に移ろひ給ふべきなンめり。東の對どもなども燒けて後、麗しく新しくあらまほしきを、愈磨き添へつゝ、こまかにしつらはせ給ふ。かゝる御心づかひを、內にも聞し召して、程無く打ち解け移ろひ給はんを、如何がと思したり。帝と聞ゆれど、心の闇は同じ事になんおはしましける。母宮の御許に、御使ありける御文にも、唯この御事をのみなん聞えさせ給へりける。故朱雀院の取別きて、此尼宮の御事をば聞え置かせ給ひしかば、かく世を背き給へれど衰へず。何事も元の儘に、奏せさせ給ふ事などは、必ず聞し召し入れ、御用意深かりけり。斯くやんごとなき御心どもに、かたみに限も無くもてかしづき騷がれ給ふ面立たしさも、如何なるにかあらん、心の中には、殊に嬉しくも覺えず、猶ともすれば、打眺めつゝ、宇治の寺造る事をば急がせ給ふ。宮の若君の五十日になり給ふ日數へ取り給ひて、その餅のいそぎを心に入れて、籠物檜破籠などまで見入れつゝ、世の常のなべてにはあらずと、思し志して、沈、紫檀、白銀、黃金など、道々の細工どもいと多く召し侍はせ給へば、我劣らじと、樣々の事どもを仕出づめり。自も、例の宮のおはしまさぬ隙におはしたり。心の做しにやあらん、今少し重々しく、やんごとなげなる氣色さへ添ひにたりと見ゆ。今はさりともむつかしかりしすゞろごとなどは、思ひ紛れ給ひにたらんと、心安くて對面し給へり。されどありしながらの氣色に先づ涙ぐみて、(薫)「心にもあらぬ交らひ、いとゞ思の外なる物にこそ、と世を思ひ給へ

○それも我有樣のやうにぞ　我が六君の事を煩ふ樣に女二宮の事を煩ひ給はんとなり。

○羨み無く　中君と大君と物思は同じ程なるを云ふ。

○ゆかしがり聞え給へば　薫がなり。

○わりなき事　薫の心かけ給ふ事なり。

○高やかに物語し　小兒の何となく物言ふ如き樣するを云ふ。

○言ふ甲斐無くなり給ひにし人　大君。

亂るゝ事のみなん增さりにたる。」と、間隔無くぞ憂へ給ふ。(中君)「いとあるまじき御事かな。人もこそ自ら仄にも漏り聞き侍れ。」などはの給へど、かばかりめでたげなる事どもにも慰まず、忘れ難う覺え給ふらん心深さよと、哀に思ひ聞え給ふに、疎にもあらず思ひ知られ給ふ。おはせましかばと、口惜しう思ひ出で聞え給へど、それも我有樣のやうにぞ、羨み無く身を怨むべかりけるかし。何事も數ならでは、世の人めかしき事も、あるまじかりけりと覺ゆるにぞ、いとゞ彼の打ち解け果てゞ已みなんと、思ひ給へりし御心掟は、猶殊に重々しう思ひ出でられ給ふ。若君を切にゆかしがり聞え給へば、恥かしけれど、何かは隔て顏にもあらん、わりなき事一つに付けて、怨みらるゝより外には、如何で此人の御心に違はじと思して、自らはともかくもいらへ聞え給はで、乳母して差出でさせ給へり。更なる事なれば、憎氣ならんやは。ゆゝしきまで白く美しうて、高やかに物語し、打笑み給へる顏を見るに、我物にて見まほしう、羨ましきも、世の思ひ離れ難くなりぬるにやあらん。されど言ふ甲斐なくなり給ひにし人の、世の常の有樣にて、かやうならん人をも留め置き給へらましかばとのみ覺えて、此頃面立しけなる御あたりに、何時しかなどは思ひ寄られぬこそ、餘りすべ無き君の御心なンめれ。斯く女々しくねぢけて、まねびなすこそいとほしけれ。然わろび偏ならん人を帝の取別き切に近づけて、睦び給ふべきにもあらじ物を、誠しき方ざまの御心掟などこそは、目安く物し給ひけめとぞ推し量るべき。實にいと斯く幼き程を見せ給へるも哀なれば、例よりは物語などこまやかに聞え給ふ程に、暮れぬれば、心安く夜をだにふかすまじきを、苦しう覺ゆれば、歎く〳〵出で給ひぬ。をかしの

○折りつれば　古今集に「折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやこゝに鶯のなく」とあり。

○公事にて云々　女二宮の催し給ふにはあらで帝の御沙汰にて催すとなり。
○三宮　匂宮。
○常陸宮　匂宮の御弟。
○宮の御方　女二宮の御方。
○入道宮　女三の宮。
○笛はかの夢に傳へし云々　横笛の卷に見ゆる柏木の笛なり。
○樓器　磬。
○兵衛督　髭黒の息なり。

人の御匂や「折りつれば」とか云ふやうに、鶯も尋ね來ぬべかゝめり、など煩はしがる若き人もあり。

夏にならば、三條の宮ふたがる方になりぬべしと定めて、四月朔日頃節分とか云ふ事まだしき先に渡し奉り給ふ。明日とての日、藤壺に上渡らせ給ひて、藤の花の宴せさせ給ふ。南の廂の御簾あげて、御倚子立てたり。公事にて、主の宮の仕う奉り給ふにはあらず。上達部殿上人の饗など、藏司より仕う奉れり。左の大臣、按察の大納言、藤中納言、左兵衛督、親子達は、三宮、常陸宮など侍ひ給ふ。南の庭の藤の花の下に、殿上人の座はしたり。後涼殿の東に、樂所の人々召して、暮れ行く程に、雙調吹きて、上の御遊に、宮の御方より、御琴ども笛など出させ給へば、大臣を始め奉りて、御前に取りつゝ參り給ふ。故六條院の御手づから書き給ひて、入道宮に奉らせ給ひし琴の譜二卷五葉の枝に付けたるを、大臣取り給ひて奏し給ふ。次々に、琴、箏の御琴、琵琶、和琴など、朱雀院の物どもなりけり。笛はかの夢に傳へし古の形見のを、又無き物の音なりとめでさせ給ひければ、此折の清らより、又は何時かははえぐしき序のあらんと思して、取出給へるなゝめり。大臣和琴、三宮琵琶、など取々に賜ふ。大將の御笛は、今日ぞ世に無き音の限は吹き立て給ひける。殿上人の中にも、唱歌につき無からぬどもは召し出でつゝ、いと面白う遊ぶ。宮の御方より、粉熟參らせ給ふ。沈の折敷四つ、紫檀の高抔、藤の村濃の打敷に折枝繡ひたり。銀の楊器、瑠璃の御盃、瓶子は紺瑠璃なり。兵衛督まかなひ仕う奉り給ふ。御盃參り給ふに、大臣頻りては便無かるべし。宮達の御中に、はた然るべきおはせねば、大將に讓り聞え給ふを、憚り申し給へど、御氣色も如何がありけん。御盃捧げて、をしとの給へる聲遣もてなしさへ、例の公事なれど、人に似ず見ゆるも、今日はいとゞ見做しさへ添ふにやあらん。差返し賜はりて、下りて舞踏し給へる程、いと類無し。上臈の御子達大臣などの賜はり給ふだに、めでたき事なるを、是はまして御婿にて、もてはやされ奉り給へる御覺疎ならず珍しきに、限あれば、降りたる座に歸り着き給ふ程、心苦しきまでぞ見えける。按察の大納言は、我こそ斯かる目も見んと思ひしか。妬のわざや、と思ひ居給へり。この宮の御母女御をぞ、昔心懸け聞え給へりけるを、參り給ひて後も、猶思ひ離れぬ樣に聞え通はしなどし給ひて、果は宮を得奉らんの心つきたりければ、御後見望む氣色漏し申しけれど、聞し召しだに傳へずなりにければ、いと心疚しと思ひて、(按察)「人柄は實に契殊なゝめれど、何ぞ時の帝の斯くおどろ〳〵しきまで、婿かしづき給ふべき、又有らじかし。九重の内におはします殿近き程にて、唯人の打ち解け侍ひて、果は宴や何やと持て騷がるゝ事は、」など、いみじう譏りつぶやき申し給ひけれど、さすがにゆかしければ、參りて心の中にぞ腹立ち居給ひける。紙燭さして歌ども奉る。文臺の下に寄りつゝ、置く程の氣色は、各したり顏なりけれど、例の如何に怪しけに古めいたりけんと思ひ遣れば、あながちに皆も尋ね書かず。上の町の上臈とて、御口つきどもは異なること見えざゝめれど、印ばかりとて、一つ二つぞ問ひ聞きたりし。是は大將の君の下りて、御挿頭花折りて參り給へりけるとか。

(禦)「皇の、挿頭に折ると、藤の花、及ばぬ枝に、袖懸けてけり。」

受張りたるぞ憎きや。

○御盃捧げて　禦がなり。
○差返し　細流抄に云く盃を移して天盃をば懷中する也別盃を差返しと云ふ也。
○按察の大納言　紅梅大臣なるべし。
○御母女御　藤壺の女御。
○宮　女二宮。
○聞し召しだに　今上がなり。
○人柄は　禦の人柄は。
○さすがに云々　按察の心中をいふ。
○上の町　第一流。
○御口つき　歌の口つき。
○皇の云々　女二宮の事を含めて詠めり。

○紫の雲　慶雲。
○世の常の云々　今日の薫の華やかなる事を含めて詠めり。
○片方は　半は。多くは。
○あなたふと　催馬樂の歌
○官の御方　女二宮の御方。
○官罷ンでさせ奉り給ひける　三條宮へなり。
○さながら　藤宴に伺候して其儘。
○本所の人々　薫の方よりの御迎の人々。
○いとをかしげに云々　女二宮のさまなり。
○過ぎにし方の　大君の事の。

（帝）「萬世を、掛けて匂はん、花なれば、今日をも飽かぬ、色とこそ見れ。」
又誰とか、
（夕霧）「君が爲、折れる挿頭花は、紫の、雲に劣らぬ、花の氣色か。」
（紅梅）「世の常の、色とも見えず、雲井まで、立昇りける、藤浪の花。」
是やこの腹立つ大納言のなりけんとこそ見ゆれ。片方は僻事にもやありけん。かやうに、殊なるをかしき節も無くのみぞあンなりし。夜ふくる儘に、御遊いと面白し。大將の君のあな尊諂ひ給へる聲ぞ、限無くめでたかりける。按察も昔勝れ給へりし御聲の名殘なれば、今もいと物々しうて、打合はせ給へり。左の大殿の御七郎、童にて箏の笛吹く。いと珍しかりければ、御衣賜はす。大臣下りて舞踏し給ふ。曉近くなりてなん歸らせ給ひける。祿ども、上達部、親王達には、上より賜はす。殿上人樂所の人々には、宮の御方より品々賜ひけり。
其夜なん、宮罷ンでさせ奉り給ひける。儀式いと心殊なり。上の女房さながら御送仕う奉らせ給ひける。廂の御車にて、廂無き糸毛三つ、檳榔毛の黄金作六つ、たゞの檳榔毛二十、網代二つ、女房三十人、童下仕八人づゝ侍ふに、又迎の出し車十二、本所の人々乘せてなんありける。御送の上達部殿上人、六位など、言ふ限無う淸らを盡させ給へりけり。
かくて心安く打解けて見奉り給ふに、いとをかしげにおはす。さゝやかに、あてに、しめやかにて、こゝはと見ゆる所なくおはすれば、宿世の程口惜しからざりけりと、心驕せらるゝ物から、過ぎにし方の忘られればこそはあらめ、猶紛るゝ折無く、物のみ戀しく覺ゆれば、此世にては慰めかねつべき事なッめり。佛になりてこそは、怪しくつらかりける契の程を、何の報とあきらめて、思ひ離れめ、と思ひつゝ、寺のいそぎにのみ心を入れ給へり。加茂の祭など、騷がしき程過して、二十餘日の程に、例の宇治へおはしたり。造らせ給ふ御堂見給ひて、すべて事ども掟ての給ひなどして、さて例の朽木の下を見給ひ過ぎんが、猶哀なれば、其方ざまにおはするに、女車の事々しき樣にはあらぬ一つ、荒ましき東男の腰に物負へる數多具して、下人數多く賴もしげなる氣色にて、橋より今渡り來る見ゆ。田舍びたる物かなと見給ひつゝ、殿は先づ入り給ひて、御前どもなどはまだ立ち騷ぎたる程に、此車も此宮を指して來るなりけりと見ゆ。御隨身どもかやくゝといふを制し給ひて、何人ぞと問はせ給へば、聲打ちゆがみたる者の、「常陸の前司殿の姫君の、初瀨の御寺に詣でゝ歸り給へるなり。初も此處になん宿り給へり。」と申すに、おいや、聞きし人なンなりと思し出でゝ、人々をば異方に隱し給ひて、（供人）「はや御車入れよ。此處に又人宿り給へど、北面になん。」と言はせ給ふ。御供の人も皆狩衣姿にて、事々しからぬ姿どもなれど、猶けはひや著からん。煩はしげに思ひて、皆馬ども引き下げなどしつゝ、畏まりつゝぞ居る。車は入れて、廊の西のつまにぞ寄する。この寢殿はまだあらはにて、簾も懸けず、おろし籠めたる中の二間に、立て隔てたる障子の孔より覗き給ふ。御衣の鳴れば、脫ぎ置きて、直衣指貫の限を著てぞおはする。頓にもおりで、尼君に消息して、斯くやんごとなげなる人のおはするを、誰ぞなど案内するなるべし。君は車をそれと聞き給へるより、（薫）「ゆめ其人に麼在りとの給ふな。」と、先づ口固めさせ給ひてければ、皆さ心得て、（供人）「はやおりさせ給

○寺　宇治の寺。
○朽木の下　辨の方を云ふ。前に見ゆる辨の歌に因りて云ふ。
○女車の　浮舟の車なり。
○殿　薫。
○おいや　合點したる時に發する感動詞。おう。
○御供　薫の御供。
○車は　浮舟の車は。
○君　薫君。

○若き人　浮舟の供の女房なり。
○御前ども　かの東男なり。
○おろゝを見れば　浮舟の車より下るゝさまを薫君の見るなり。
○扇をつとさし隠したれば　浮舟の顔を隠して車よりおろゝなり。
○常陸殿など云々　常陸の受領の女とは見えず。
○やう〳〵云々　薫はなり。
○やう〳〵云々　薫はなり
○老人　二番めに車より下りたるおとなびたるとある人なるべし。

へ。客人は物し給へど、異方になん。」と言ひ出したり。若き人のある、先づおりて、簾打上ぐめり。御前どもの様よりは、此御許馴れて目安し。又大人びたる人今一人おりて、「早う」と言ふに、「怪しくあらはなる心地こそすれ。」と云ふ聲、仄なれどいとあてやかに聞ゆ。（女房）「例の御事、此方は前々もおろし籠めてのみこそは侍るめれ。さては又何處のあらはなるべきぞ。」と、心を遣りて云ふ。つゝましげにおるゝを見れば、先づ頭つき樣體細やかに、あてなる程は、いと能う物思ひ出でられぬべし。扇をつと差隠したれば、顔は見えぬ程、心許なくて、胸打ち潰れつゝ見給ふ。車は高く、おるゝ所は下りたるを、この人々は安らかにおりなしつれど、いと苦しげに稍見て、久しくおりてゐざり入る。濃き袿に、撫子とおぼしき細長、若苗色の小袿着たり。四尺の屏風を、この障子に添へて建てたるが、上より見ゆる孔なれば、殘るべくもあらず。此方をば後めたげに思ひて、彼方ざまに向きてぞ、添ひ臥しぬる。（供人）「さも心苦しげにおはしましつるかな。泉河の船渡りも、誠に今日はいと恐ろしうこそありつれ。この二月には、水の少かりしかば宜かりしなりけり。いでや歩行は、東路を思へば、何處か恐ろしからん。」など、二人して苦しとも思ひたらず、言ひ居たるに、主は音もせで平伏したり。腕を差出でたるが、圓らかにをかしげなる程も、常陸殿などいふべくも見えず、誠にあてなり。やう〳〵腰痛きまで立ちすくみ給へど、人のけはひせじとて、猶動かで見給ふに、若き人、（供人）「あなかうばしや。いみじき香の香こそすれ。尼君の焚き給ふにやあらん。」と驚く。老人、（老人）「誠にあなめでたの物の香や。京人は猶いとこそみやびかに今めかしけれ。天下にいみじき事と思したりしかど、東に

○鈍色青鈍色　辨の尼の裝束なり。
○二人　前の若人と老人となり。
○おぼろげならでは云々　大方の事にては心留まらず。
○尼君　辨の尼。
○この殿　薫君。
○此君を　薫が浮舟を。
○思ひて　辨が。
○打假粧じて　辨の樓を云ふ。
○客人の方　浮舟の方。
○かばらか　さわやか。清爽。
○無期に　限無く久しく。
○起せば　浮舟を起さんとせしに。

てかゝる薫物の香は、え合はせ出で給はざりきかし。此尼君の住居は、かくいと幽におはすれど、裝束のあらまほしう、鈍色青鈍と云へど、いと清らにぞあるや。」など譽め居たり。あなたの簀子より童來て、「御湯など參らせ給へ。」とて、折敷どもゝ取り續きて差入る。菓子取寄せなどして、物承はる。これなど起せど驚かねば、二人して、栗などやうの物にや、ほろ〳〵と食ふも、聞き知らぬ心地には、傍痛くて退き給へど、又ゆかしくなりつゝ、猶立ち寄り〳〵見給ふ。これより優る際の人々を、后の宮を始めて、此所彼處にて容よきも、あてならをも、こゝら飽くまで見集め給へど、おぼろけならでは、目も心も留まらず、餘り人にもどかるゝまで物し給ふ御心地に只今は、何ばかり勝れて見ゆる事も無き人なれど、斯く立ち去り難く、あながちにゆかしきも、いと怪しき心なり。

尼君はこの殿の御方にも、御消息聞え出したりけれど、（人々）「御心地惱ましとて、今の程うちやすませ給へるなり。」と、御供の人々心しらひて言ひたりければ、此君を尋ねまほしげに思しの給ひしかば、かゝる序に物言ひ觸れんと思すによりて、日を暮し給ふにやと思ひて、かく覗き給ふらんとは知らず、例の御庄の預どもの參れる破籠や何やと、此方にも入れたるを東人どもにも食はせなど、事ども行ひ置きて、打假粧じて、客人の方に來たり。譽めつる裝束、げにいとかばらかにて、みめも猶由々しく、清げにぞある。（辨）「昨日おはし着きなんと待ち聞えさせしを、何どか今日も日たけては。」といふめれば、この老人（老人）「いと怪しう苦しげにのみせさせ給へれば、昨日はこの泉河の渡にとゞまりて、今朝も無期に御心地ためらひてなん。」と答へて起せば、今ぞ起き居たる。尼君を羞らひて、側み居た

○これより　薫の方より。
○かれ　大宮。
○これ　浮舟。
○宮の御方　中君。

○通ひ聞えたらん人　大君に似通ひたらん人。
○知られ奉らざりけれど　八宮に見知られざりけれと。
○蓬萊まで尋ねて云々　玄宗皇帝方士を遣はして楊貴妃を尋ねしめ給ひしに形見の釵を傳へて見給ひし故事。

○君　薫君。
○かの聞えし事は　何日しか頭み讃きし事は。

る傍目、これよりはいと能く見ゆ。誠にいと由ある目見の程、髪差のわたり、かれをも委しくつくぐとしも見給はざりし御顔なれど、これを見るに付けて、唯それと思ひ出でらるゝに、例の涙落ちぬ。尼君の答打する聲けはひの仄なれど、宮の御方にもいとよく似たりと聞ゆ。哀なりける人かな。斯かりけるものを、今まで尋ねも知らで過しける事よ。これより口惜しからん際の品ならんゆかりにてだに、斯ばかり通ひ聞えたらん人を見ては、疎にえ思ふまじき心地するに、況て是は知られ奉らざりけれど、誠に故宮の御子にこそはありけれと、見なし給ひては、限無う哀に嬉しく覺え給ふ。只今も這ひ寄りて、世の中におはしけるものをと、言ひ慰めまほし。蓬萊まで尋ねて、釵の限を傳へて見給ひけん帝は、猶いといぶせかりけん。是は別人なれど、慰め所ありぬべき樣なりと覺ゆるは、この人に契のおはしけるにやあらん。尼君は物語少しして疾く入りぬ。人の咎めつる薫を、近くて覗き給ふなゝめりと心得てければ、打ち解け言ども語らはずなりぬるなるべし。

日暮れもて行けば、君もやをら出でゝ、御衣など着給ひてぞ、例召し出づる障子口に、尼君召し出で給ひて、有樣など問ひ給ふ。(薫)「折しも嬉しく詣で來合ひたるを、如何にぞ、かの聞えし事は。」との給へば、「然仰言侍りし後は、さるべき序侍らばと待ち侍りしに、去年は過ぎて此二月になん、初瀬詣の便に對面して侍りし。かの母君に、思し召したる樣は仄めかし侍りしかば、いと傍痛く、辱き御よそへにこそは侍るなれ、などなん侍りしかど、其頃ほひは、のどやかにもおはしまさずと承はりし折、便無く思ひ給へ愼みて、かくなんともず聞えさせ侍らざりしを、又この月にも詣でゝ、今日歸り給ふなゝめり。往き還りの中宿には、斯う睦びらるゝも、唯過ぎにし御けはひを尋ね聞えらるゝ故になん侍るめる。かの母君は障る事ありて、此度は獨物し給ふめれば、斯くおはしますとも、何かは物し侍らん。」と聞ゆ。(薫)「田舍びたる人どもに忍び寢れたるありきも見えじとて、口固めつれど、如何があらん。下衆ども隱れあらじかし。さて如何がすべき。一人物し給ふらんこそなかく心安かゝなれ。かく契深くてなん、參り來合ひたる、と傳へ給へかし。」との給へば、(辨)「うちつけに何時の程なる御契にかは。」と、打笑ひて、(辨)「さらば然傳へ侍らん。」とて入るに、

(薫)「顔鳥の、聲も聞きしに、通ふやと、繁みを分けて、今日ぞ尋ぬる。」

唯口ずさみのやうにの給ふを、入りて語り聞えけり。

○唯過ぎにし云々　故宮の御事を思し召すなり。
○斯くおはしますとも云々　斯く君のおはします事も知らせずとなり。
○下衆どもは云々　下人どもは早漏しつらんとなり。

○顔鳥の云々　大君に顔のよく似給ふ浮舟の君は聲も似通ふかと今日尋ぬ寄るとなり。
○入りて　辨が浮舟の方に入りて。

○筑波山を分け見まほしき云々　古今集に「筑波山端山しげ山繁けれど思ひ入るにはさはらざりけり」とあり。浮舟の君は常陸の守の繼子なれば斯くいへり。上の卷の下より讀みつゞけて味ふべし。

○歌ならましかば　物の歌なる身ならましかば浮舟を蕉に參らせんものをとなり

○取り雜ぜても云々　浮舟を常陸守の子どもと打雜ぜて置く樣ならば、

○同じ子と思はせても云々　浮舟の容貌の大方にもあらば人に常陸が子と思はせても置くべけれど類無く勝れて生ひ出で給へれば然せんは惜しく心苦しとなり。

東屋

此卷は薫君二十六歳の秋の事を記せり。卷名は歌に「さしとむる葎や繁き東屋のあまり程ふる雨注かな」とあるに取れるなり。

筑波山を分け見まほしき御心はありながら、端山の茂りまで、あながちに思ひ入らんも、いと人聞輕々しう、傍痛かるべき程なれば、おほし憚りて、御消息をだにえ傳へさせ給はず。かの尼君の許よりぞ、母北の方にの給ひし樣など、度々ほのめかしおこせけれど、まめやかに、御心とまるべき事とも思はねば、唯さまでも尋ね知り給ふらん事とばかり、をかしう思ひて、人の御程の、只今の世に有り難げなるをも、數ならましかばなどぞ、萬に思ひける。

守の子どもは、母亡くなりにけるなど、數多此腹にも姫君と付けてかしづくあり。まだ幼きなど次々に、五六人ありければ、樣々に子の扱をしつゝ、他人と思ひて隔てたる心のありければ、常にいとつらき物に守をも怨みつゝ、如何で引き勝れて、面立たしき程にしなしても見えにしがなと、明暮この母君は思ひ扱ひける。樣容の、なのめに取り雜ぜてもありぬべくば、いと斯うしも何かは苦しきまでも、もて惱まゝし。同じ子と思はせてもありぬべき世を、物にも雜らず、哀に忝く生ひ出で給へば、あたらしく心苦しき物に思へり。女多かりと聞きて、なま君達めく人々も、音なひ言ふ、いと數多ありけり。初の腹の二三人は、皆樣々に配りて、大人びさせたり。今は我姫君を、思ふやうにて見奉らばやと、明暮

○徳嚴めしうなどあれば　嚴めしく富有の人なれば。
○だみたる　なまりたる。
○直々しきあたりと謂はず　常陸守を身分卑しとも謂はず。
○物語　物語合。
○才　學問。
○通ひし所なども絶えて　妻を未だ定めぬをいふ
○かゝるあたりを云々　有禮なりと雖受領の女を又誰か所望せんとなり。
○この御方に取り次ぎて　少將よりの文を中將自ら浮舟に取次ぎて。
○守こそ疎に思ひ做すとも　浮舟を常陸守こそ他人として疎略に思ひ做すとも。

まもりて、撫でかしづく事限無し。守も賤しき人にはあらざりけり。上達部の筋にて、交際も物穢き人ならず。徳嚴めしうなどあれば、程々に付けては思ひ上りて、家の内もきら〳〵しく、物清げに住み做し、事好したる程よりは、怪しう荒らかに、田舍びたる心ぞ付きたりける。若うより、さる東の方の遙なる世界に埋もれて、年經ければにや、聲など殆うちゆがみぬべく、物打言ふ、少し訛みたるやうにて、豪家のあたり恐ろしく、煩はしき物に憚り怖ぢ、凡ていと全く、隙間無き心もあり。をかしき樣に、琴笛の道は遠う、弓をなんいと能く引きける。直々しきあたりとも謂はず、勢に引かされて、よき若人ども集ひ、裝束有樣はえならず調へつゝ、腰折れなる歌合、物語、庚申をし、まばゆく見苦しく、遊び勝に好めるを、この懸想の君達、らう〳〵しくこそあるべけれ。容なんいみじかゝなるなど、をかしき方に言ひ做して、心を盡し合へる中に、左近少將とて、年廿二三ばかりの程にて、心ばせしめやかに、才ありと云ふ方は、人に許されたれど、きら〳〵しう今めいてなどは、えあらぬにや、通ひし所なども絶えて、いと慇懃に言ひ渡りけり。この母君數多斯る事言ふ人々の中に、この君は人柄も目安かゝなり。心定りて、物思ひ知りぬべかゝめるを、人もあてなりや。これより優りて、事々しき際の人はた、かゝるあたりを、さは云へど尋ね寄らじ、と思ひて、この御方に取次ぎて、さるべき折々は、をかしき樣に返事などせさせ奉る。心一つに思ひ設けて、守こそ疎に思ひ做すとも、我は命をも讓りてかしづきてん。樣容のめでたきを見つきなば、さりとも疎になどは、よも思ふ人あらじ、と思ひ立ちて、八月ばかりと契りて、調度を設け、はかなき遊物をせさせても、樣殊に樣をかし

○目を總に差出づるばかり　頭は數多の調度の間より總に目を出すばかりとなり。埋もれたる惑なり。
○さすがに　荒々しき人のしかしながらにとなり。
○初より傳へそめける人　媒介人。
○かう思ひ立ちにたる　八月にと契りたるを云ふ。
○思ふ人具したるは　父親のある子は。
○この君　浮舟。

しう、蒔繪螺鈿のこまやかなる心ばへ勝りて見ゆる物をば、この御方にと取り隱して、劣のを是なん好きとて見すれば、守は能くしも見知らず。そこはかとなき物どもの、人の調度といふ限は唯取り集めてならべ居るつゝ、目を纔に差出づるばかりにて、琴琵琶の師として内教坊のわたりより迎へ取りつゝ習はす。手一つ彈き取れば、師を起ち居拜みて喜び、祿を取らすること、埋むばかりにて、持て騷ぐ。早りかなる曲の物など教へて、師とをかしき夕暮などに、彈き合せて遊ぶ時は、涙もつゝまづ嗚呼がましきまで、さすがに物めでしたり。かゝる事どもを、母君は少し物の故知りて、いと見苦しと思へば、殊にあへしらはぬを吾子をば思ひ貶し給へりと、常に怨みけり。

かくてかの少將契りし程を待ち付けて、同じくは疾くと責めければ、我心一つに斯う思ひ急ぐも、いとつゝましう、人の心の知り難さを思ひて、初より傳へ初めける人の來たるに、近う呼び寄せて語らふ。（中將）「萬多く思ひ憚る事のあるを、月頃斯うの給ひて程の經ぬるを、並々の人にも物し給はねば、辱う心苦しうて、かう思ひ立ちにたるを、親など物し給はぬ人なれば、心一つなるやうにて、傍痛う、打合はぬ樣に見え奉る事もやと、かねてなん思ふ。若き人々數多侍れど、思ふ人具したるは、自らと思ひ讓られて、この君の御事をのみなんはかなき世の中を見るにも、後めたくいみじきを、物思し知りぬべき御心ざまと聞きて、かう萬のつゝましさを忘れぬべかゝめるに、若し思はずなる御心ばへも見えば、人笑に悲しうなんあるべき。」と云ひけるを、少將の君に參でゝ、しか〴〵と申しけるに、氣色惡しくなりぬ。（少將）「初より更に守の御女にあらずと云ふ事をなん聞かざりつる。同じ事なれど、人

○能うも案内せで　能くも聞き定めで。
○いとほしくなりて　媒の心になり。
○守のにこそは　常陸の女にこそは。
○悲しうし給ひて　甚く可愛がり給ひて。

○君　少將。
○今樣の事　當世風の事。

○源少納言讃岐の守　兩人先腹の婿。
○此人　媒酌人。

○守の主　常陸守。

○事打合はぬ　事の調はぬ

聞も氣劣りたる心地して、出入せんにも宜からずなんあるべき。能うも案内せで、浮びたる事傳へける。」との給ふに、いとほしくなりて、(媒)「委しくも知り給へず。女どもの知るたよりにて、仰言を傳へ始め侍りしに、中にかしづく女とのみ聞き侍れば、守のにこそはとこそ思ひ給へつれ。他人の子持給へらんとも問ひ聞き侍らざりつるなり。容心も勝れて物し給ふこと、母上の悲しうし給ひて、面立たしう氣高き事をせんと、崇めかしづかると聞き侍りしかば、如何で彼の邊の事、傳へつべからん人もがなとの給はせしかば、さるたより知り給へりと、取り申しゝなり。更に浮びたる罪侍るまじき事なり。」と、腹惡しく詞多かる物にて申すに、君いとあてやかならぬ樣にて、(少將)「さやうのあたりに行き通はん、人のをさ〳〵許さぬ事なれど、今樣の事にて、咎あるまじう持て崇めて、後見だつに、罪隱してなんある類もあゝめるを、同じ如内々には思ふとも、よその覺なん詔ひて人言ひ做すべき。源少納言讃岐の守などの、受張りたる氣色にて出で入らんに、守にもをさ〳〵受けられぬ樣にて、交らはんなん、いと人氣なかるべき。」との給ふ。此人追從あり、うたてある人の心にて、これをいと口惜しう、此方彼方にいとほしう思ひければ、(媒)「誠に守の女とおぼさば、まだ若うなどおはすとも、しか傳へ侍らんかし。中に當るなん、姫君とて、守はいと悲しうし給ふなると聞ゆ。(少將)「いさや、初より然言ひ寄れる事を、措きて、又言はんこそうたてあれ。されど我本意は、かの守の主の人柄も物々しく、おとなしき人なれば、後見にもせまほしう、見る所ありて思ひ始めし事なり。もはら顏容の勝れたらん女の願も無し。品貴に艶ならん女を願はゞ、易く得つべし。されど淋しう事打合はぬみやび好める人の、果々は物淸くも無く、人にも人とも覺えたらぬを見れば、少し人に譏らるゝとも、なだらかにて、世の中を過さん事を願ふなり。守にかくなんと語らひて、然もと許す氣色あらば、何かは然も。」との給ふ。

○何かは然も　何かは然樣に否とは言はゝ。
○此西の御方　浮舟の御方

此人は、妹の此西の御方に在る便にかゝる御文なども取り傳へ始めけれど、守には委しくも見え知られぬ者なりけり。唯行きに守の居たりける前に行きて、(媒)「取り申すべき事ありてなん。」と言はす。守このわたりに時々出入はすと聞けど、前には呼び出でぬ人の、何事言ひにかあらんと、なま荒々しき氣色なれど、(媒)「左近少將殿の、御消息にてなん侍ふ。」と言はせたれば、會ひたり。語らひ難ゆなる顏して、近う居寄りて、(媒)「月頃内の御方に消息聞えさせ給ふを御許ありて、此月の程にと契り聞えさせ給ふ事侍るを、日を計らひて、何時しかと思ほす程に、或人の申しけるやう、誠に北の方の御腹に物し給へど、守の殿の御女にはおはせず。君達のおはし通はんに、世の聞えなん詔ひたるやうならん。受領の御婿になり給ふ樣の君達は、唯私の君の如く、思ひかしづき奉りて、手に捧げたる如思ひ扱ひ後見奉るにかゝりてなん、さる振舞し給ふ人々物し給ふめるを、さすがに其御願はあながちなるやうにて、をさ〳〵受けられ給はで、氣劣りておはし通はんこと、便無かりぬべき由をなん、切に譏り申す人々數多侍るなれば、只今おぼし煩ひてなん。初より唯きら〳〵しう、人の後見と賴み聞えんに、甚へ給ふべき御覺を選び申して、聞え始め申しゝなり。更に他人物し給はんと云ふ事知らざりければ、本の御志の儘にまだ幼きも數多おはするを、許い給はゞ、いと嬉しくなん。御氣色見て參で來と仰せられつれば。」と云ふに、守(守)

○手に捧げたる如　大切にする樣を云ふ。

○他人物し給はんこと云々　常陸の子ならぬ人のありとは知らざりければとなり。

○會ひたり　媒に守の會ひたるなり。

○ゆるい　許しの音便。
○之を　浮舟をなり。
○いとらうたしと云々　下に十五六の程にてとある女なり。
○の給ふ人々あれど　妻にとの給ふ人々あれど。
○故大將殿　この少將の親。
○家の子にて云々　少將幼少の時見奉りしかば、
○遙なる處　陸奥常陸。
○此人の思ひ給へん事を北の方の思はくを。
○然樣の邊ばみたらん云々　實女にてもなきに通ふが如き留がましき振舞はすべきにあらずとなり。
○人柄は　以下少將の事を譽めて言ふ。
○まだ頃の御德無きやうなれど　まだ今の程は御勢無き樣なれど。
○頭　藏人頭。
○ごて給へるなり　宣給へるなり。
○萬の事云々　以下三句媒が帝の少將に宣給ひし事と僞り語るなり。
○かの殿　少將。
○頂にも捧げ奉りてん　大切にして後見せん。
○敢へずして　命堪へずして。
○これは　此娘は。
○これ彼の御爲にも云々　御後見せん事は少將の爲にも娘の爲にも幸福なるべし。先づそれには拘はらず御後見は心許無かるまじ。
○あなた　浮舟の母の方。

「更にかゝる御消息侍る由、委く承はらず。誠に同じ事に思ひ給ふべき人なれど、善からぬ童部數多侍りて、はか〴〵しからぬ身に、樣々思ひ給へ扱ふ程に、母なる者も、之を異人と思ひ別けたる事、とくねり言ふこと侍りて、ともかくも口入れさせぬ人の事に侍れば、仄に然なん仰せらるゝ事侍るとは聞き侍りしかど、某を、取所に思しける御心は知り侍らざりけり。さるはいと嬉しく思ひ給へらるゝ御事にこそ侍るなれ。いとらうたしと思ふ女の童侍り。數多の中に之をなん、命にも換へんと思ひ侍る。の給ふ人々あれど、今の世の人の御心定無く聞え侍るに、なか〳〵胸痛き目をや見んの憚に、思ひ定むる事も無くてなん。如何で後安くも見給へ置かんと、明暮悲しく思ひ給ふるを、少將殿におき奉りては、故大將殿にも若くより參り仕う奉りき。家の子にて見奉りしに、いと警策に、仕う奉らまほしと心付きて思ひ聞えしかど、遙なる處に打續きて過し侍る年頃の程に、初々しく覺え侍りてなん參りも仕う奉らぬを、かゝる御志の侍りけるを、返す〴〵畏まりながら、仰の如奉らんは易き事なれど、月頃の御心違へたるやうに、此人思ひ給へん事をなん思ひ給へ憚り侍る。」と、いとこまやかに言ふ。宜しげなゝめり、と嬉しく思ふ。(媒)「何かと思し憚るべきにも侍らず。彼の御志は、唯一所の御許侍らんを願ひ思して、いはけなく年足らぬ程におはすとも、眞實の親の、やんごとなく思ひおきて給へらんをこそ、本意叶ふにはせめ。專ら然樣の邊ばみたらん振舞すべきにもあらずとなんの給ひつ。人柄はいとやんごとなく、覺心憎くおはする君なりけり。若き君達とて、すき〴〵しくあてびてもおはしまさず。世の有樣もいと能く知り給へり。傾じ給ふ所々もいと多く侍り。まだ頃の御德無きやうなれど、自ら人の御けはひのありけるやう、直人の限なき富と云ふめる勢には優り給へり。來年四位になり給ひなん。此度の頭は疑無く、帝の御口づからごて給へるなり。萬の事足らひて目安き朝臣の、妻をなん定めざゝなるはや。然るべき人選りて後見を設けよ。上達部には朕しあれば、今日明日と云ふばかりに成し擧げてん、とこそ仰せらるなれ。何事も唯此君ぞ、帝にも親しく仕う奉り給ふなる。御心はた、いみじう警策に、重々しくなんおはしますめる。あたら人の御婿を、かう聞え給ふ程に、思ほし立ちなんこそ宜からめ。かの殿には、我も〳〵婿とり奉らんと申す處々侍るなれば、此處に澁々なる御けはひあらば、外樣にも思しなりなん。是唯後安き事を取り申すなり。」と、いと多く宜げに言ひ續くるに、いと淺ましく鄙びたる守にて、打ち咲みつゝ聞き居たり。(守)「此頃の御德などの心許なからん事は、なの給ひそ。某命侍らん程は、頂にも捧げ奉りてん。心許なく何を飽かぬとか思すべき。縱令敢へずして仕う奉りさしつとも、遺の寶物領じ侍る所々、一つにても又取り爭ふべき人無し。子ども多く侍れど、これは樣殊に思ひ初めたる者に侍り。唯眞心に思し顧みさせ給はゞ、大臣の位を求めんと思し願ひて、世に無き寶物をも盡さんとし給はんに、無き物侍るまじ。當時の帝しか惠み申し給ふなれば、御後見は心許なかるまじ。これ彼の御爲にも、某が女の童の爲にも、幸とあるべき事にやとも知らず。」と、宜しげに言ふ時に、いと嬉しくなりて、妹にも斯かる事ありとも語らず、あなたにも寄り付かで參りぬ。

守の言ひつる事をいとも〳〵宜げにめでたしと思ひて聞ゆれば、君少し鄙びてぞあるとは

○君　少將。
○少し鄙びてゞ云々　常陸守を少し田舍びたる人とは聞けど。
○賤勞　物錢を出して位を望むこと。
○中のこのかみ　兄弟の中の姉。
○賢き　利に賢き。
○御方　浮舟。
○親　八の宮。
○おはせずなりにたりとも　八宮のたきあとなりとも。
○大將　薫大將。
○此方　浮舟の方。

聞き給へど、憎からず打ち咲みて聞き居給へり。大臣にならん贖勞を取らんなどぞ、餘りおどろ〳〵しき事と、耳留りける。(少將)「さてかの北の方には斯くと物しつや。彼の志は殊に思ひ始め給へらんに、引き違へたらん、僻々しくねぢけたる樣に取り做す人もあらん。いざや。」と思したゆたひたるを、(媒)「何か北の方も、かの姫をば、いとやんごとなき物に思ひかしづき奉り給ふなりけり。唯中の姉にて、年も大人び給ふを、心苦しき事に思ひて、そなたにと趣けて、申されけるなり。」と聞ゆ。月頃は又なく、尋常ならずかしづくと言ひつるものゝ、うちつけに斯く言ふも如何ならんと思へども、猶一わたりは辛しと思はれ、人には少し譏らるとも、ながらへて賴もしき事をこそと、いと全く賢き君にて、思ひ取りてければ、日をだに取換へで、契りし暮にぞおはし始めける。

北の方は人知れず急ぎ立ちて、人々の裝束せさせ、しつらひなど由々しうし給ふ。御方をも頭沐はせ、取り繕ひて見るに、少將など云ふ程の人に見せんも、惜しくあたらしき樣を、哀や親に知られ奉りて、生ひ立ち給はましかば、おはせずなりにたりとも、大將殿の給ふらん樣に、おほけなくとも何どかは思ひ立たざらまし。されど內々にこそかく思へ、ほかの音聞は守の子とも思ひ別かず。又實を尋ね知らん人も、なか〳〵貶しめ思ひぬべきこそ悲しけれ、など、思ひ續く。如何がはせん、盛過ぎ給はんも愛無し。賤しからず目安き程の人の、かく慇懃にの給ふめるをなど、心一つに思ひ定むるも、媒の斯く言好くいみじきに、女はまして賺されたるにやあらん。明日明後日と思へば、心あわたゞしく忙しきに、此方にも心のどかに居られたらず、そゝめきありくに、守外より入り來て、長々

○長々と云々　媒のいひしことを長々と語るなり。
○吾子　中の女を指す。
○本意なしとて　少將の本意にあらずとて。
○御心と許し申しつる　少將の御心の儘にと許し申したり。
○親無しと聞き侮りて　少將の心を謂ふ。
○合ひ〳〵にたる　守と少將と心相似て意氣投合したる意。
○我君　浮舟を指す。
○斯く心口惜しくいましける君　少將を謂ふ。

と滯る所も無く言ひ續けて、(守)「我を思ひ隔てゝ、吾子の御懸想人を奪はんとし給ひけるか。おほけなく心幼き事。めでたからん親王の御女をば用ぜさせ給ふ君達あらじ。賤しく異樣ならん某等が女子をこそ、賤しうも尋ねの給ふめれ。賢く思ひ企てられけれど、專ら本意なしとて、外樣へ思ひなり給ひぬべかゝなれば、同じくはと思ひてなん、さらば御心と許し申しつる。」など、怪しく奥無く、人の思はん所も知らぬ人にて、言ひ散らし居たり。北の方あきれて物も言はれで、とばかり思ふに、世の中の心憂さを搔き列ね、涙も墮ちぬばかり思ひ續けられて、やをら立ちぬ。

此方に渡りて見るに、いとらうたげにをかしげにて居給へるに、さりとも人には劣り給はじとは思ひ慰む。乳母と二人、心憂き物は人の心なりけり。己は同じ如思ひ扱ふとも、この君のゆかりと思はん人の爲には、命をも讓りつべくこそ思へ。親無しと聞き侮りて、まだ幼く成り合はぬ人を、差越えて、斯くは言ひなるべしや。かく心憂く近きあたりに見じ聞かじと思ひぬれど、守の斯く面立たしきに思ひて受け取り騷ぐめれば、あさましく合ひ〳〵にたる世の人の有樣を、總て斯かる事に口入れじと思ふに、(北方)「如何で此處ならぬ所に、暫し在りにしがな。」と打ち歎きつゝ云ふ。乳母もいと腹だゝしく、我君をかく貶しむる事と思ふに、(乳母)「何か是も御幸にて違ふ事とも知らず。斯く心口惜しくいましける君なれば、あたら樣をも見知らざらまし。我君をば心ばせあり、物思ひ知りだらん人にこそ見せ奉らまほしけれ。大將殿の御樣容の、仄に見奉りしに、さも命延ぶる心地し侍りしかな。哀にはた聞え給ふなり。御宿世に任せて、さも思し寄りねかし。」と云へば、(北方)「あな恐ろ

○かの母宮　女三の宮。
○宮の上　二條院の中君。
○このいと云々　常陸の守を指して云ふ。
○さばらかさわぬか。清爽。

しや。人の言ふを聞けば、年頃おほろけならん人をば見じとの給ひて、左の大殿、按察大納言、式部卿宮などの、いと慇懃に仄めかし給ひけれど、聞き過して、帝の御かしづきむすめを得給へる君は、如何ばかりの人をか、まめやかには思さん。かの母宮などの御方に在らせて、時々も見んとは思しもしなん。それはた實にめでたき御あたりなれども、いと胸痛かるべき事なり。宮の上のかく幸人と世に申すなれど、物思はしげに思したるを見れば、如何にも〳〵二心無からん人のみこそ、目安く頼もしき事にはあらめ。我身にても知りにき。故宮の御有樣は、いとなさけ〳〵しく、めでたくをかしくおはせしかど、人數にも思さゞりしかば、如何ばかりかは心憂くつらかりし。此いと言ふ甲斐なく情なく、樣惡しき人なれどひた趣に二心無きを見れば。心安くて年頃をも過しつるなり。折節の心ばへのかやうに愛敬なく、用意なき事こそ憎けれ、歎かしく怨めしき事も無く、互に打ち諍ひても心に合はぬ事をば諦らめつ。上達部親王達にて、みやびかに心恥かしき人の御あたりと云ふとも、我數ならでは甲斐あらじ。萬の事我身からなりけり、と思へば、萬に悲しくこそ見奉れど、如何にして人笑ならず、仕立て奉らん。」と語らふ。

守は急ぎ立ちて、(守)「女房など此方に目安き數多あゝなるを、此程は在らせ給へ。やがて帳なども、新しく仕立てられたゝめる方を事俄になりたゝめれば、取り渡し、とかく改むまじ。」とて、この西の方に來て、立ち居とかくしつらひ騒ぐ。目安き樣にさばらかに、あたり〳〵あるべき限したる所を、さかしらに屏風ども持て來ていぶせきまで立て集めて、厨子、二階など、怪しきまで仕加へて心を遣りて急げば、北の方見苦しく見れど、口入れじと云

○人　中將を指す。
○乳母二人　妹姫の乳母なり。
○裾　髪のすそ。
○人の　中將を指す。
○男君　少將。
○かの御方の乳母　浮舟の乳母。
○宮の北の方の御許に云々　二條院なる中君の方へ浮舟を預けたき旨の文を奉るなり。
○其事と侍らでは　用事なき時は。
○暫し處變へさせんと　浮舟になり。
○あぶれん　零落せん。
○大輔　中君に侍ふ女房。
○尋ひ遣り　中將がなり。

ひてしかば、たゞに見聞く。御方は北面に居給へり。守、「人の御心は見知り果てぬ。唯同じ子なればさりともいと斯くは思ひ放ち給はじとこそ思ひつれ。されば世に母無き子は無くやはある。」とて、女を晝より乳母二人撫で繕ひ立てたれば、憎げにもあらず。年十五六の程にて、いと小やかにふくらかなる人の、髪美しげにて、小袿の程なる裾いと總やかなり。之をいとめでたしと思ひて撫で繕ふ。(守)「何か人の異樣に思ひ構へられける人をしもと思へど、人柄のあたらしく警策に物し給ふ君なれば、吾も〳〵と、婿に取らまほしくする人の多かゝなるに、取られなんも口惜しくなん。」と、かの媒に謀られて言ふもいと嗚呼なり。男君も此程の、嚴しく思ふやうなる事と、萬の罪あるまじう思ひて、其夜も變へず來初めぬ。

母君かの御方の乳母、いとあさましく思ふ。僻々しきやうなれば、とかく見扱ふも心づきなければ、宮の北の方の御許に御文奉る。(北方消息)「其事侍らでは、馴れ〳〵しくやと畏まりて、え思ひ給ふる儘にも聞えさせぬを、愼むべき事侍りて、暫し處變へさせんと思ひ給ふるに、いと忍びて侍ひ給ひぬべき隱れの方候はゞ、いとも〳〵嬉しくなん。數ならぬ身一つの影に隱れも敢へず、哀なる事のみ多く侍る世なれば、頼もしき方には先づなん。」と、打泣きつゝ書きたる文を、哀とは見給ひけれど、故宮のさばかり許し給はで止みにし人を、我獨殘りて、知り語らはんもいとつゝましく、見苦しき樣にて、世にあぶれんも知らず顔にて聞かんこそ心苦しかるべけれ。異なる事無くて、互に散りぼはんも、亡き人の御爲に見苦しかるべき事を、思し煩ふ。大輔が許にも、いと心苦しげに言ひ遣りたりけれ

○すぐい　過しの音便。
○暫しの程　暫しの程おはせ。
○御方　浮舟。
○語ひいとあらまほしく少將もいと嬉しがりしなり
○客人　少將。
○源少納言　守の先腹の娘を妻れる婿。
○住ませ奉らん　浮舟を。
○宮　二條院の中君の方。
○殊に許い給はざりしあたりを　中君の方はなり。
○年頃かく遙なりつれど。中將は年頃、中君と斯く隔て居たれど。

ば、（大輔）「さる樣こそは侍らめ。人憎くはしたなくもなの給はせそ。かゝる劣の物の人の御中に交り給ふも、世の常の事なり。餘りいと情なくの給ふまじき事なり。」など聞えて、（大輔）「さらばかの西の方に隱ろへたる所仕出でゝ、いとむつかしげなゝめれど、さても過い給ひつべくば、暫しの程。」と言ひ遣はしつ。いと嬉しと思ほして、人知れず出で立つ。御方も彼の御あたりをば睦び聞えまほしと思ふ心なれば、なか〳〵斯かる事どもの出で來たるを、嬉しと思ふ。守少將の扱を、如何ばかりめでたき事をせんと思ふに、そのきらきらしかるべき事も知らぬ心には、唯粗らかなる東絁どもをおし團がして投げ出でつ。食物も所狹きまでなん運び出でゝのゝしりけるを、下衆などは、それをいと畏きなさけに思ひければ、君もいとあらまほしく、心賢く取り寄りにけりと思ひけり。北の方この程を見捨てゝ、知らざらんも僻みたらんと思ひ念じて、唯する儘に任せて見居たり。客人の御出居侍しつらひ騷げば、家は廣けれど源少納言東の對には住み、男子などの多かるに處も無し。此御方に客人住み着きぬれば、廊など邊ばみたらんに住ませ奉らんも飽かずいとほしく覺えて、とかく思ひ運らす程、宮にとは思ふなりけり。

此御方ざまに數まへ給ふ人の無きを、侮るなゝめりと思へば、殊に許い給はざりしあたりを、あながちに參らす。乳母若き人々、二三人ばかりして、西の廂の北に寄りて、人氣遠き方に局したり。年頃かく遙なりつれど、疎く思すまじき人なれば、參るときは、恥ぢ給はず、いとあらまほしくけはひ殊にて、若君の御扱をしておはする御有樣羨ましく覺ゆるもあはれなり。我も故北の方には離れ奉るべき人かは。仕う奉ると云ひしばかりに、數

○此處　浮舟の方。
○宮渡り給ふ　匂宮二條院へおはしたるなり。
○我繼子　常陸守の先妻の子。
○あはれこは何人ぞ　中將が匂宮の御有樣を見て驚く心なり。
○七夕ばかり　伊勢物語に「契りけん心ぞつらき七夕の年に一度逢ふは逢ふかは」とある意なり。
○女君　中の君。
○惱ましとて云々　匂宮は。
○御臺　御膳。
○我がいみじき事を盡すと思へど云々　常陸守の家の樣を思ひ比ぶるなり。

まへられ奉らず口惜しくて、かく人には侮らるゝと思ふには、かく强ひて睦び聞ゆるも味氣なし。此處には御物忌と云ひてければ人も通はず。二三日ばかり母君も居たり。此度は心のどかに此御有樣を見る。

宮渡り給ふ。ゆかしくて物のはざまより見れば、いと淸らに、櫻を折りたる樣し給ひて、我が賴もし人に思ひて、辛う怨めしけれど、心には違はじと思ふ常陸守より、樣容も人の程も此上無く見ゆる五位四位ども、相跪き侍ひて、この事かの事と、あたり〳〵の事ども家司どもなど申す。又若やかなる五位ども、顏も知らぬ供も多かり。我繼子の式部の丞にて藏人なる、內の御使にて參れり。御あたりにもえ近く參らず。此上無き人の御けはひを、あはれ、こは何人ぞ。斯かる御あたりにおはするめでたさよ。よそに思ふ時は、めでたき人々と聞ゆとも、つらき目見せ給はゞと、物憂く推し量り聞えさせつらん淺ましさよ。この御有樣容を見れば、七夕ばかりにても、かやうに見奉り通はんは、いといみじかるべき事かな、と思ふに、若君抱きてうつくしみおはす。女君短き几帳を隔てゝおはするを、推し遣りて、物など聞え給ふ。御容どもいと淸らに似合ひたり。故宮の淋しくおはせし御有樣を思ひ比ぶるに、宮達と聞ゆれど、いとこよなき事にこそありけれと覺ゆ。几帳の內に入り給ひぬれば、若君は乳など玩び聞ゆ。人々參り集れど、惱ましとて大殿籠り暮しつ。御臺こなたに參る。萬の事氣高く、心殊に見ゆれば、我がいみじき事を盡すと思へど、直々しき人のあたりは、口惜しかりけりと思ひ成りぬれば、我女もかやうにて、さし並べたらんに片端ならじかし。豐けき勢を恃みて、父主の、后にも爲してんと思ひたる人

○后の宮　明石中宮。

○何でふ事無き人　俗に云ふなんでもない人の意。何でふは何と云ふの約。
○此御方　浮舟。
○かじけたる　まだ成長せぬを云ふ。

○打見給ひて　匂宮が。
○御心地　明石中宮の。

○女君　中君。

々は同じ我子ながら、けはひこよなきを思ふも、猶今より後も心は高く使ふべかりけりと、夜一夜あらまし事に思ひ續けゝり。

宮日闌けて起き給ひて、(匂)「后の宮例の惱ましくし給へば、參るべし。」とて、御裝束など

し給ひておはす。ゆかしう覺えてのぞけば、麗はしく引き繕ひ給へる、はた似る物なく、氣

高く愛敬つき清らにて、若君をえ見捨て給はで、玩びおはす。御粥強飯など參りてぞ、此

方より出で給ふ。今朝より參りて、侍の方にやすらひける人々、今ぞ參りて物など聞ゆる

中に、清げだちて、何でふ事無き人のすさまじき顏したる、直衣着て太刀佩きたるあり。

御前にて何とも見えぬを、(女房)「彼ぞ此常陸の守の婿の少將な。初は此御方にと定めける

を、守の女を得てこそいたはられめなど云ひて、かじけたる女の童を得たるなゝなり。いざ

此御あたりの人は掛けても云はず、守の君の方より、能く聞く便のあるぞ。」など、己がど

ち云ふ。聞くらんとも知らで、人の斯く云ふに付けても胸つぶれて、少將を目安き程と思

ひける心も口惜しく、實に異なる事無かゝべかりけりと思ひて、いとゞしく侮らはしく思

ひなりぬ。若君の這ひ出でゝ、御簾のつまより覗き給へるを、打見給ひて、立ち返り寄り

おはしたり。(匂)「御心地宜しく見え給はゞ、やがて罷ゝでなん。猶苦しくし給はゞ、今夜

は殿居にぞ。今は一夜を隔つるも、覺束無きこそ苦しけれ。」とて、暫し慰め遊ばして、出

で給ひぬる樣の返すゞ〳〵見るとも〳〵、飽くまじく匂やかにをかしければ、出で給ひぬる

名殘淋々しくぞ眺めらるゝ。

女君の御前に出で來て、いみじくめで奉れば、田舍びたると思して笑ひ給ふ。(中將)「故上

の亡せ給ひし程は、言ふ甲斐なく幼き御程にて、如何にならせ給はんと、見奉る人も故宮も思し歎きしを、こよなき御宿世の程なりければ、さる山懷の中にも生ひ出でさせ給ひしにこそありけれ。口惜しく故姫君のおはしまさずなりにたるこそ、飽かぬ事なれ。」など、打ち泣きつゝ聞ゆ。君も打ち泣き給ひて、(中君)「世の中の怨めしく心細き折々も、又斯くながらふれば、少しも思ひ慰めつべき折もあるを、古頼み聞えける蔭どもに後れ奉りけるは、見奉り知らずなりにければ、なか〳〵に世の常に思ひ做されてあるを、猶この御事は盡せずいみじくこそ。大將殿の、萬の事に心の移らぬ由を憂へつゝ、淺からぬ御心の樣を見るに付けても、いとこそ口惜しけれ。」との給へば、(中將)「大將殿は、さばかり世にためし無きまで、帝のかしづき思したゝなるに、心驕し給ふらんかし。おはしまさましかば、猶此事堰かれしも、し給はざらましや。」など聞ゆ。(中君)「いさや、樣の者と人笑はれなる心地せましも、なか〳〵にやあらまし。見果てぬに付けて、心憎くもある世にこそはと思へど、かの君は如何なるにかあらん。怪しきまで物忘れせず、故宮の御後の世をさへ思ひやり深く、後見ありき給ふめる。」など、心美しう語り給ふ。(中將)「かの過ぎにし御代りに尋ねて見んと、この數ならぬ人をさへなん、かの辨の尼君にはの給ひける。さもやと思ひ給へ寄るべき事には侍らねど、一本故にこそはと、忝けれど、哀になん思ひ給へらるゝ御心深さなる。」など云ふ序に、此君を持て煩ふ事、泣く〳〵語る。こまかにはあらねど、人も聞きけりと思ふに、少將の思ひ侮りける樣など仄めかして、(中將)「命侍らん限は、何か朝夕の慰めぐさにて見過しつべし。打ち捨て侍りなん後は、思はずなる樣に、散りぼひ侍ら

○故上　八宮の北の方。
○幼き御程にて　中君はなり。
○故宮　八宮。
○きろ山懷　宇治の山里を云ふ。
○故姫君　大君。
○蔭ども　父母を云ふ。
○此御事　大君に別れし事

○大將殿　薫君。
○おはしまさましかば　大君が。
○堰かれ　女二宮に。

○かの君　薫君。

○かの過ぎにし御代りに　大君の代りに。
○この數ならぬ人　浮舟。
○一本故に　古今集に「紫の一本故に武藏野の草にみながらあはれとぞ見る」とあり。大君のゆかりとおぼしめす故にとなり。

○かやうになりぬる人の云云　これは父無き子の習はしなりとなり。
○さりとても云々　さりながら捨て果てられねば。
○むげに云々　八宮が中君に宇治に籠る樣にと宣ひ置きし身だに斯くなりぬとたり。
○ねびにたる　年のよりたるをいふ。
○常陸殿とは見えける　卑しげなりとの意。
○浮島　常陸國信太の浮島の事か。或は鹽釜の前に浮きたる浮島か。
○我身一つの　古今集に「世の中は昔よりやは憂かりけん我身一つの爲になれるか」
○筑波山の有樣　常陸守の浮舟に疎き事を云ふ。
○彼處　常陸守の家。
○昔の人　大君。

んが悲しさに、尼になして、深き山にや仕据ゑて、さる方に世の中を思ひ絶えて侍らましなどなん思ひ給へ佗びては、思ひ寄り侍る。」など云ふ。(中君)「實に心苦しき御有樣にこそあゝなれど、何か人に侮らるゝ御有樣は、かやうになりぬる人の性にこそ。さりとても堪へぬ事なりければ、むげに其方に思ひおきて給へりし身をだに、かく心より外にながらふれば、まいていとあるまじき御事なり。嬰い給はんも、いとほしげなる御樣にこそ。」など、いと大人びての給へば、母君いと嬉しと思ひたり。ねびにたる樣なれど、由なからぬ樣して清げなり。いたく肥え過ぎにたるなん、常陸殿とは見えける。(中將)「故宮のつらう情なく思し放ちたりしに、いとゞ人げ無く、人にも侮られ給ふと見給ふれど、かう聞えさせ御覽ぜらるゝに付けてなん、古の憂さも慰み侍る。」など、年頃の物語浮島の哀なりし事も聞え出づ。(中將)「我身一つのとのみ、言ひ合する人も無き筑波山の有樣も、斯くあきらめ聞えさせて、何時もく〳〵いと斯くて侍はまほしく思ひ給へなり侍りぬれど、彼處には善からぬ怪しの者ども、如何に立ち騷ぎ索め侍らん。さすがに心あわたゞしく思ひ給へらるゝ。かゝる程の有樣に身を窶すは、口惜しき物になん侍りけると、身にも思ひ知らるゝを、此君は唯任せ聞えさせて、知り侍らじ。」など、かこち聞え掛くれば、實に見苦しからでもあらんと見給ふ。容貌も心樣も、え憎むまじうらうたげなり。物恥もおどろ〳〵しからず、樣好う子めいたる物から、才無からず、近く侍ふ人々にも、いと能く隱れて居給へり。物など言ひたるも、昔の人の御樣に、怪しきまで覺え奉りてぞあるや。かの人形求め給ふ人に見せ奉らばや、と打ち思ひ出で給ふ折しも、大將殿參り給ふと人聞ゆれば、例の御几帳引き繕ひ

○えこそ聞え定めぬ　匂宮と薫君との優劣定め難しとなり。
○向ひて　匂宮と薫君と相向ひて。
○容貌よき人は云々　いみじく容佳き人は人の美しさを消して醜く見えしむれば憎しとなり。
○御前には云々　匂宮は薫君に隱され給ふまじ。
○追ひのゝしりて　隨身の前呵するなり。
○宮の御代りに云々　匂宮の御代りに伺候仕りたりとなり。

て、心づかひす。この客人の母君、(中將)「いで見奉らん、仄に見奉りける人の、いみじきさや、えこそ聞え定めね。」と聞え合へり。(中君)「向ひておはせし樣、宮はいとなさけ無けに、見にくゝこそ見え給ひしか。取り放ちては、孰れもともかくも分れず。容貌よき人は人を消つこそ憎けれ。」との給へば、人々笑ひて、(人々)「されど御前には壓され奉り給はざゝめり。如何ばかりならん人か、宮をば消ち奉らん。」など云ふ程に、今ぞ車より下り給ふなりと、聞く程かしかましきまで追ひのゝしりて、頓にも見え給はず。待たれたる程に、歩み入り給ふ樣を見れば、實にあなめでた、をかしげとも、見えずながらぞ、なまめかしうあてに清げなるや。すゞろに見え苦しう恥かしくて、額髮なども引き繕はれて、心恥かしげに、用意多く際も無き樣ぞし給へる。內裏より參り給へるなるべし。御前どものけはひ數多して、(薫)「昨夜后の宮の惱み給ふ由承はりて、參りたりしかば、宮達の侍ひ給はざりしかば、いとほしく見奉りて、宮の御代りに、今まで侍ひ侍りつる。今朝もいと懈怠して參らせ給へるを、間無う御過に、推し量り聞えさせてなん。」と聞え給へば、(中君)「實に疎ならず、思ひやり深き御用意になん。」とばかりいらへ聞え給ふ。宮は內に泊り給ひぬるを見置きて、たゞならずおはしたるなゝめり。例の物語いと懷かしげに聞え給ふ。事に觸れて、唯古の忘れ難く、世の中の物憂くなり增さる由を、あらはには言ひ做さで、かすめ憂へ給ふ。さしも如何でか世を經て、心は離れずのみはあらん。猶淺からず言ひ初めてし事の筋なれば、名殘なからじとにやなど見なし給へど、人の御氣色は著き物なれば、見以て

○御禊　古今集に「繰せじと御手洗川にせし禊神は受けずもなりにけらしな」
○かの人形云々　浮舟の事を語り給ふなり。
○彼も云々　薫の心なり。

○見し人の云々　浮舟を形代に寄せて詠めり、大君の戀しさを無物に移して被はんとなり。
○禊河云々　薫君の心の頼み難き意を詠めり。
○引手數多に　古今集に「大ぬさの引手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」頼み難きを云ふ。
○終に寄る瀬は　古今集に「大祓の名にこそ立てれ流れても終に寄る瀬はありてふものを」
○いと憂たきやうなる云々　薫身を親じての給ふなり
○假初に物したる人　中將。

行く儘に、哀なる御心樣を、岩木ならねば思ほし知る。恨み聞え給ふ事も多かれば、いとわりなく打ち歎きて、かゝる御心を止むる御禊をせさせ奉らまほしく思すにやあらん。かの人形の給ひ出でゝ、いと忍びてこのわたりになんと、仄めかし聞え給ふを、彼もなべての心地はせず、ゆかしくなりにたれど、打ちつけにふと移らん心地、はたせず、（薫）「いでや其本尊願滿て給ふべくばこそ尊からめ。時々心疚しくば、なか〳〵山水も濁りぬべく。」との給へば、（中君）「果々はうたての御聖心や。」と、仄に笑ひ給ふも、をかしう聞ゆ。（薫）「いでさらば傳へ果てさせ給へかし。この御遁言こそ思ひ出づれば、ゆゝしく。」との給ひても、又涙ぐみぬ、

（薫）「見し人の、形代ならば、身に添へて、戀しき瀬々の、撫物にせん。」と例の戯言に言ひ做して、紛らはし給ふ。

（中君）「禊河、瀬々に出さん、撫物を、身に添ふ影と、誰か頼まん。引く手數多にとかや。さかしらなれど、いとほしくぞ侍るや。」との給へば、（薫）「終に寄る瀬は更なりや。いと憂たきやうなる水の泡にも爭ひ侍るかな。掻き流さるゝ撫物、いで誠ぞかし。如何で慰むべき事ぞ。」など言ひつゝ、暗うなるもうるさければ、（中君）「假初に物したる人も、怪しと思ふらんとつゝましきを、今夜は猶疾く歸り給へね。」と、こしらへ遣り給ふ。（薫）「されば其客人に、かゝる心の願年經ぬるを、うちつけになど、淺うは思ひなるまじうの給はせ知らせ給ひて、はしたなけなるまじうはこそ。いと初々しう習ひにて侍る身は、何事も嗚呼がましきまでなん。」と、語らひ聞え置きて出で給ひぬるに、此母君、

○天の川を渡りても　年に一度の逢ふ瀬にても。
○逢星　薫君を喩へて云ふ。

○藥王品などにも云々　法華經藥王品に「若有人聞是藥王菩薩本事品一隨喜讚善者、是人現世口中常出二青蓮花香一、身毛孔中常出二牛頭栴檀之香一」
○の給へる事　薫君が中君に。
○仄めかし給ふ　中君が中將。

○煩はしき心地す　女二宮のおはすればなり。
○鳥の音聞えざらん　古今集に「飛ぶ鳥の聲も聞えぬ奥山の深き心を人は知らなん」
○歌ならぬ身に云々　拾遺集に「歌ならぬ身には思の

いとめでたく思ふやうなる御樣かなと愛でゝ、乳母のゆくりかに思ひ寄りて、度々言ひし事を、あるまじき事に言ひしかど、此御有樣を見るには、天の川を渡りても、かゝる彦星の光をこそ待ち付けさせめ。我女はなのめならん人に見せんは、惜しげなる樣を、夷めきたる人をのみ見習ひて、少將を賢き者に思ひけるを悔しきまで思ひなりにけり。寄り居給へりつる槇柱も褥も、名殘匂へる移香、言へばいと殊更めきたるまで有り難し。時々見奉る人だに、度毎に愛で聞ゆ。（女房）「經などを讀みて、功德の勝れたる事あゝめるにも、かの譽しきをやんごとなき事に、佛のの給ひ置けるも道理なりや。藥王品などにも、取り別きての給へる牛頭栴檀とかや、おどろ〳〵しき物の名なれど、まづかの殿の近く振舞ひ給へば、佛は誠し給ひけりとこそ覺ゆれ。幼くおはしけるより、行もいみじくし給ひければよ。」など云ふもあり。また、（女房）「前の世こそゆかしき御有樣なれ。」など、口々愛づる言どもを、すゞろに笑みて聞き居たり。

君は忍びての給へる事を仄めかしの給ふ。（中君）「思ひ初めつる事執念きまで輕々しからずもなど思ひ寄り給へらんも同じ事に思ひ做して、試み給へかし。」との給へば、（中將）「つらき目見せず、人に侮られじの心にてこそ、鳥の音聞えざらん住居まで思ひ給へおきつれ。實に人の御有樣けはひを見奉り思ひ給ふるは、下仕の程などにも、かゝる人の御あたりに馴れ聞えんは甲斐ありぬべし。まいて若き人は、心付け奉りぬべく侍るめれど、數ならぬ身に物思の種をや、いとゞ蒔かせて見侍らん。貴きも卑きも、女と云ふ者は斯かる筋に

無かれかし人なみなみにぬるゝ袖かな」

○厳の中に　古歌に「如何ならん厳の中に住まばかは世のうきことも聞えこざらん」浮舟を尼にせんともとの意。
○此御方　浮舟。

○御前ども　匂宮の供人ども。
○殿こそ鮮なれ　此御所にて殿などとは過分なり。
○聞くも　中將が。
○此御方　浮舟。
○正身　浮舟。

てこそ、この世、後の世まで、苦しき身となり侍るなれ、と思ひ給へ侍ればなん、いとほしく思ひ給へ侍る。それも唯御心になん。ともかくも思し捨てず、物せさせ給へ。」と聞ゆれば、いと煩はしくなりて　（中君）「いさや來し方の心深きに打ち解けて、行く先の有樣は知り難きを。」と打歎きて、殊に物もの給はずなりぬ。

明けぬれば車など率て來て、守の消息など、いと腹立たしげに劫したれば、（中將）「辱く萬に頼み聞えさせてなん。猶誓し隱させ給ひて、巖の中にとも如何にとも思ひ給へ運らし侍る程、數に侍らずとも、思ほし放たず、何事をも敎へさせ給へ。」など、打ち泣きつゝ聞え置きて、此御方もいと心細く、習はぬ心地に、立ち離れん事を思へど、今めかしくをかしく見ゆるあたりに、暫しも見馴れ奉らんと思へば、さすがに嬉しく思ほえけり。車引き出づる程の少し明うなりぬるに、宮内裏より罷ゝで給ふ。若君覺束無く思ひ給ひければ、忍びたる樣にて、御車なども例ならでおはしますに、差合ひて推し留めて立てたれば、廊に御車寄せて下り給ふ。（匂）「何ぞの車ぞ。暗き程に急ぎ出づるは。」と、目留めさせ給ふ。かやうにてぞ忍びたる所には、紛れ出づるかしと、御心習に思し寄るもむくつけし。（召使）「常陸殿の罷ゝでさせ給ふ。」と申す。若やかなる御前ども、「殿こそ鮮なれ。」と、笑ひ合へるを聞くも、實にこよなの身の程やと悲しく思ふ。唯この御方の事を思ふ故にぞ、己も人々しくならまほしく覺えける。まして正身を、直々しく窶して見ん事は、いみじくあたらしく思ひなりぬ。宮入り給ひて、（匂）「常陸殿と云ふ人や此處に通はし給ふ。心ある朝朗に、急ぎ出でつる車ぞひなどこそ、殊更めきて見えつれ。」など、猶思し疑ひての給ふ。聞き

○大輔　中君の女房。

○無き名は立てゞ　後撰集に「思はんと頼めし事もあるものを無き名は立てゞたゞに忘れね」
○韻塞　人の目慣れぬ詩の韻字を隱して推し當つる遊。
○ゆする　髪を沐ふこと。

○九十月云々　昔は髪を沐ふにも月日を撰みたりき、九月十月は忌月にて髪を沐はず。

○帷子　几帳の帷子。
○心にもあらで云々　匂宮が見るともなしにふと見給ふなり。
○今參の云々　匂宮の浮舟を新參のよき女房とおぼしなり。
○坪前栽　狹き庭の前栽。

にくゝ傍痛しと思して、（中君）「大輔などが若くての頃、友だちにてありける人は、殊に今めかしうも見えざゝめるを、故々しげにもの給ひなすかな。人の聞き咎めつべき事をのみ、常に取做い給ふこそ、無き名は立てゞ。」と打背き給ふも、らうたげにをかし。明くるも知らず大殿籠りたるに、人々數多參り給へば、寢殿に渡り給ひぬ。后の宮は事々しき御惱にもあらで、怠り給ひにければ、心地よげにて、左の大殿の君達など、碁打ち韻塞などしつゝ遊び給ふ。

夕つ方宮こなたに渡らせ給へれば、女君は御泔の程などなりけり。人々も各々打休みなどして、御前には人も無し。小き童のあるして、（匂）「折惡しき御泔の程こそ見苦しかゝめれ。淋々しくてや眺めん。」と聞え給へば、（大輔）「實におはしまさぬ隙々にこそ例は濟ませ。怪しう日頃も物憂がらせ給ひて、今日過ぎば此月は日も無し。九十月如何でかはと、仕う奉らせつるを。」と、大輔いとほしがる。若君も寢給へりければ、其方にこれかれある程に宮は佇みありき給ひて、西の方に例ならぬ童の見えつるを、今參のあるかなど思して、さしのぞき給ふ。中の程なる障子の、細目に明きたるより見給へば、障子のあなたに、一尺ばかり引きさげて屏風立てたり。そのつまに、几帳簾に添へて立てたり。帷子一重を打掛けて、紫苑色の華やかなるに、女郎花の織物と見ゆる重りて、袖口差出でたり。屏風の一枚疊まれたるより、心にもあらで見ゆるなゝめり。今參の口惜しからぬなゝめりと思して、この廂に通ふ障子を、いと密に推し明け給ひて、やをら歩み寄り給ふも人知らず。こなたの廊の中の坪前栽のいとをかしう色々に咲き亂れたるに、遣水の邊の石高き

○捉へ給ひて　浮舟の手なり。
○むくつけくなりぬ　浮舟の心なり。
○さる物の面に　屏風など然る物の陰に。

程、いとをかしければ、端近く添ひ臥して眺むるなりけり。開きたる障子を、今少し押し開けて、屏風のつまよりのぞき給ふに、宮とは思ひも懸けず、例こなたに來馴れたる人にやあらんと思ひて、起き上りたる樣體、いとをかしう見ゆるに、例の御心は過し給はで、衣の裾を捉へ給ひて、此方の障子引き立て給ひて、屏風の狹間に居給ひぬ。怪しと思ひて、扇を差隱して、見返りたる樣いとをかし。扇を持たせながら、捉へ給ひて、「誰ぞ。名のりこそゆかしけれ。」との給ふに、むくつけくなりぬ。さる物の面に、顏を外樣に持隱して、いといたう忍び給へれば、この只ならず仄めかし給ふらん大將にや、かうばしきけはひなども思ひ渡さるゝに、いと恥かしく詮方無し。乳母人げの例ならぬを怪しと思ひて、あなたなる屏風を押し開けて來たり。(乳母)「これは如何なる事にか侍らん。怪しきわざにも侍るかな。」と聞ゆれど、憚り給ふべき事にもあらず。斯くうちつけなる御しわざなれど、言葉多かる御本性なれば、何やかやとの給ふに、暮れ果てぬれど、(匂)「誰と聞かざらん程は許さじ。」とて、剛れ〳〵しく臥し給ふに、宮なりけりと思ひ果つるに、乳母言はん方無くあきれて居たり。大殿油は燈籠にて、今渡らせ給ひなん、と人々云ふなり。御前ならぬ方の、御格子どもぞおろすなる。こなたは離れたる方に仕做して、高き棚厨子一具ばかり立て、屏風の袋に入り込めたる、所々に寄せ掛け、何かの荒らかなる樣にし放ちたり。かく人の物し給へばとて、通ふ道の障子一間ばかり開けたるを、右近とて、大輔が女の侍ふ來て、格子おろして、此處に寄り來なり。(右近)「あな暗や。まだ大殿油も參らざりけり。御格子を苦しきに、急ぎ參りて、闇に惑ふよ。」とて引き上ぐるに、宮もなま苦しと聞き給ふ。乳母はたいと

○渡らせ給ひなん　中君が御汀の方より常の方へなり
○御前　中君の御前。
○かく人の物し給へば云々　常には此處は道にてもなきを只今浮舟を住ませ給ふとて障子一間あけたるなり。

○探り寄る　右近がなり。
○あさましく片端に云々　中君に申さんは如何と人々は思へど匂宮は何とも思し騷ぎ給はずとなり。
○上　中君。
○遲くも渡り給へば　中君の方へなり。
○皆打ち解けてやすみ給ふ　侍ふ人々のさまなり。
○おずまし　おぞまし。
○少將　中君の女房。
○大宮　明石中宮。

苦しと思ひて、物隱せず、早りかに、悍き人にて、(乳母)「物聞え侍らん。此處にいと怪しき事の侍るに、見給へ困じてなん。え動き侍らでなん。」何事ぞと探り寄るに、往姿なる男の、いとかうばしくて、添ひ臥し給へるを、例の怪しからぬ御樣と思ひ寄りにけり。女の心合せ給ふまじき事と推し量らるれば、(右近)「實にいと見苦しき事にも侍るかな、右近は如何にか聞えさせん。今參りて御前にこそは、忍びて聞えさせめ。」とて起つを、あさましく片端に誰も〳〵思へど、宮は怖ぢ給はず。あさましきまであてにをかしき人かな。猶何人ならん。右近が言ひつる氣色もいとおしなべての今參にはあらざゝめりと、心得難く思されて、と言ひかく言ひ怨み給ふ。心づき無げに氣色ばみてももてなさねど、唯いみじう死ぬばかり思へるが、いとほしければ、情ありてこしらへ給ふ。右近上に　(右近)「しかぐこそおはしませ。いとほしく如何に思ほすらん。」と聞ゆれば、(中君)「例の心憂き御樣かな。かの母も如何に淡々しく、怪しからぬ樣に思ひ給はんとすらん。後安くと返すぐ言ひ置きつる物を。」と、いとほしく思せど、如何が聞えん。侍ふ人々も少し若やかに宜しきは、見捨て給ふ無く、怪しき人の御癖なれば、如何でかは思ひ寄り給ひけんと、あさましきに物も言はれ給はず。(右近)「上達部數多參り給ふ日にて、遊び戲れ給ひては、例もかゝる時は遲くも渡り給へば、皆打ち解けて休み給ふぞかし。さても如何にすべき事ぞ。かの乳母こそおずましかりけれ。つと添ひて、率て守り奉り、引きもかなぐり奉りつべくこそ思ひなりつれ。」と、少將と二人していとほしがる程に、內より人參りて、大宮この夕暮より御胸惱ませ給ふを、只今いみじく重く惱ませ給ふ由申さす。右近「心無き折の御惱かな、聞

○あべい　あるべきの音便。

○西面にて問へば　浮舟のおはす方近く呼びて問ふなり。宮にも聞かせ奉らんとなり。
○中務の宮　匂宮の御弟。
○大夫　中宮大夫。
○人の　中君の。

○降魔の相　不動尊の忿怒の相。

○かの殿　常陸守の家。
○いさかひ給ひけり　守と中將と。

えさせん。」とて立つ。少將「いでや今は甲斐なくもあンべい事を、嗚呼がましく、餘りな劫し聞え給ひそ。」と云へば、（右近）「否まだしかるべし。」と、忍びてさゝめきかはすを、上は、いと聞きにくき人の御本性にこそあゝめれ。少し心あらん人は、我あたりをさへ疎みぬべかゝめりと思す。參りて御使の申すよりも、今少しあわたゞしげに申し做せば、動き給ふべき樣にもあらぬ御氣色に、（匂）「誰か參りたる。例のおどろ〳〵しく劫す。」との給はすれば、（右近）「宮の侍に、平の重經となん名のり侍りつる。」と聞ゆ。出で給はん事のいとわりなく口惜しきに、人目も思されぬに、右近立ち出でゝ、この御使を西面にて問へば、申し次ぎつる人も寄り來て、（侍）「中務の宮も參らせ給ひぬ。大夫は只今なん參りつる。道に、御車引き出づる見侍りつ。」と申せば、實に俄に時々惱み給ふ折々もあるをと思すに、人の思すらん事もはしたなくなりて、いみじう恨み契り置きて出で給ひぬ。

恐ろしき夢の覺めたる心地して、汗に押し浸して臥し給へり。乳母打扇ぎなどして、（乳母）『かゝる御住居は萬に付けて、つゝましう便無かりけり。かくおはしまし初めて、更に宜き事侍らじ。あな恐ろしや。限無き人と聞ゆとも、安からぬ御有樣は、いと味氣無かるべし。餘所の差離れたらん人にこそ、善しとも惡しとも覺えられ給はめ。人聞も傍痛き事と思う給へて、降魔の相を出して、つと見奉りつれば、いとむくつけく、げす〳〵しき女と思して、手をいといたく抓ませ給へるこそ、直人の懸想だちて、いとをかしくも覺え侍りつれ。かの殿には、今日もいみじくいさかひ給ひけり。（守）「唯一所の上を見扱ひ給ふとて、我子どもをば思し捨てたり。客人のおはする程の御旅居見苦し。」と荒々しきまでぞ聞え給ひける。下人さへ聞き、いとほしがりけり。凡て此少將の君ぞ、いと愛敬なく覺え給ふ。此御事侍らざらましかば、內々安からずむつかしき事は折々侍りとも、なだらかに年頃の儘にて、おはしますべき物を。』など、打ち歎きつゝ云ふ。君は只今はともかくも思ひ運らされず、唯いみじくはしたなく、見知らぬ目を見つるに添へても、如何に思すらんと思ふに、佗しければ、うつぶし伏して泣き給ふ。いと苦しと見扱ひて、（乳母）「何か斯くおぼす。母おはせぬ人こそ、たづき無う悲しかるべけれ。餘所の覺は、父無き人はいと口惜しけれど、さがなき繼母に憎まれんよりは、これはいと安し。ともかくもし奉り給ひてん。なおほし屈せそ。きりとも長谷の觀音おはしませば、哀と思ひ聞え給はん。習はぬ御身に、度々頻りて詣で給ふ事は、人の斯く侮り樣にのみ思ひ聞えたるを、斯くもありけりと思ふばかりの御幸福おはしませとこそ念じ侍れば、我君は人笑はれにては止み給ひなんや。」と世を安げに言ひ居たり。

宮は急ぎて出で給ふなり。內近き方にやあらん、此方の御門より出で給へば、物の給ふ御聲も聞ゆ。いとあてに限も無く聞えて、心ばへある故事など打ち誦じ給ひて過ぎ給ふ程、すゞろに煩はしく覺ゆ。移馬ども引き出して、宿直に侍ふ人十餘人ばかりして參り給ふ。上いとほしくうたて思ふらんとて、知らず顏にて、（中君）「大宮惱み給ふとて參り給ひぬれば、今夜は出で給はじ。泄の名殘にや、心地も惱ましくて、起き居侍るを、渡り給へ。つれづれにも思さるらん。」と聞え給へり。（浮舟）「みだり心地のいと苦しう侍るを、ためらひて。」と、乳母して聞え給ふ。（中君）「如何なる御心地ぞ。」と、立ち返りとぶらひ聞え給へば、（浮舟）

○君　浮舟。
○如何に思すらん　中君が。

○我君　浮舟を指して云ふ。

○すゞろに煩はしく覺ゆ　浮舟の心の樣なり。
○移馬　移の鞍置きたる行裝の馬。
○上　中君。
○渡り給へ　浮舟に御出で遊ばせとなり。

○いと口惜しく心苦しき事かな　以下中の君の心中をいふ。
○斯くのみ亂りがはしくおはする人　匂宮を指す。
○此君　薫大將。
○言はでうしと思はんこと　古歌に「心には下行く水の沸き返り言はで思ふぞ言ふにまされる」
○年頃見ず知らざりつる人　浮舟を指す。
○此君　浮舟。
○思すらん　中君が。
○まめやかに苦しげに見えさせ給ふ　實なきことをまことしく苦み給ふとなり。
○さすがにこそ　さすがにこそ道理なれ。

「何心地とも覺えず、唯いと苦しく侍り。」と聞え給へば、少將右近、目瞬をして、傍痛くぞ思すらんと云ふも、只なるよりはいとほし。いと口惜しく心苦しき事かな。大將の心留めたる樣にの給ふめりしを、如何に淡々しく思ひ貶さん。斯くのみ亂りがはしくおはする人は、聞きにくゝ實ならぬ事をもくねり言ひ、又誠に少し思はずならん事をも、さすがに見容しつべうこそおはすめれ。此君は言はで憂しと思はん事、いと恥かしげに心深きを、愛無く思ふ事添ひぬる人の上なゝめり。年頃見ず知らざりつる人の上なれど、心ばへ容を見れば、え思ひ放つまじうらうたく心苦しきに、世の中は有り難くむつかしげなる物かな。我身の有樣は飽かぬ事多かる心地すれど、かく物はかなき目も見つべかりける身の、さは流離れずなりにけるにこそ、實に目安きなりけれ。今は唯この憎き心添ひ給へる人の、なだらかにて思ひ離れなば、更に何事も思ひ入れずなりなんと思ほす。いと多かる御髪なれば、頓にもえ乾し遣られず、起き居給へるも苦し。白き御衣一襲ばかりにておはする、細やかにをかしげなり。

此君は誠に心地も惡しくなりにたれど、乳母「いと傍痛し。事しも有り顏に思すらんを、唯大どかにて見え奉り給へ。右近の君などには、事の有樣初より語り侍らん。」と、責めて唆かし立てゝ、此方の御障子の下にて、（乳母）「右近の君に物聞えさせん。」と云へば、立ちて出でたれば、（乳母）「いと怪しく侍りつる事の名殘に、身も熱うなり給ひて、まめやかに苦しげに見えさせ給ふを、いとほしく見侍る。御前にて慰め聞えさせ給へとてなん。過もおはせぬ御身を、いとつゝましげに思ほし佗びにたゝめるも、さすがにこそ。些にても世

○二人　少將と右近と。
○物語いとなつかしくし給ひ　中君が。
○昔の御志のやうに　大君が中君を思ひ給ひしやうに。
○ことわり讀ませて　繪の上に書けることわり書を讀ませてなり。
○此處と見ゆる所無く　離無き樣なり。
○かれは限無く云々　大君を知り給へる人こそあれ。如何でかはと通理にいとほしく見奉る。」とて、掻き起して參らせ奉る。我にもあらず、人の思ふらん事も恥かしけれど、いと柔に大どき過ぎ給へる君にて、押し出でられて居給へり。額髮などのいたう濡れたるを持て隱して、火の方に背き給へる樣、上を類無く見奉るに、氣劣るとも見えず、あてにをかし。これに思しつきなば、めざましげなる事はありなんかし。いとかゝらぬをだに、珍しき人、をかしうし給ふ御心をと、二人ばかりぞ御前にて、え恥ぢ敢へ給はねば見居たりける。物語いとなつかしくし給ひて、（中君）「例ならずつゝましき所など、な思ひなし給ひそ。故姫君のおはせずなり給ひし後、忘らるゝ世無く、いみじく身も恨めしく類無き心地して過すに、いとよく思ひよそへられ給ふ御樣を見れば、慰む心地して哀になん。思ふ人も無き身に、昔の御志のやうに思さば、いと嬉しくなん。」など語らひ給へど、いと物つゝましくて、又鄙びたる心に答へ聞えん事も無くて、（浮舟）「年頃いと遙にのみ思ひ聞えさせしに、斯う見奉り侍るは、何事も慰む心地し侍りてなん。」とばかり、いと若びたる聲にて言ふ。繪など取出でさせて、右近にことわり讀ませて見給ふに、向ひて物恥もえし敢へ給はず、心に入れて見給へる火影、更に此處と見ゆる所無く、こまかにをかしげなり。額付、目見の薫りたる心地して、いと大どかなる貴さは、唯それとのみ思ひ出でらるれば、繪は殊に目も留め給はで、いと哀なる人の容かな。如何で斯うしもありけるにかあらん。故宮にいとよく似奉りたるなゝめりかし。故姫君は宮の御方樣に、我は母上に似奉りたりとこそは、古人ども言ふなりしか。實に似たる人はいみじき物なりけりと思し比ぶるに、涙ぐみて見給ふ。かれは限無くあてに

をいへるにて似たる中に大君と浮舟とかはりたる所あるをいへるなり。
○故々しき　物馴れたる。
○片端　不足。
○まほならねど　委しくあらねど。
○昨夜の心知りの人々　匂宮が浮舟に近づき給ひし事を知れる人々。
○持て離れてぞ云ひし　實事無き由を深く言ひしとなり。
○人　侍ふ人々。
○正身　中君。
○斯かる筋の物憎　嫉妬。
○貴人も無きものなり　上流も下流も差別無しとなり。
○艶の云々　艶の蹤しきが如く中將の此方彼方尻も据ゑず心も空なる樣を云ふ。
○綱目落こそ　艶と云ふ詞を承けて云へるなり、艶は人を見て怪しく疑ふ時はまかげさすなり。それを借りて中君に心置く氣色あるを云ふ。
○操　不變の意。
○傍痛う許無かりし筋は云々　浮身を八宮の御子と仰せられざる上は申す事も無し。
○其方ならでも云々　中將は中君の母の姪なれば云ふ。
○おほぞうならぬ所　靜なる所をいふ。
○誘ふ　中將が浮舟を。
○あさましう云々　中將はなり。
○戯ればみたる　蠱末なる。
○思ひ聞えしあたりを　中君の方を。

氣高きものから、懷かしうなよゝかに、片端なるまで、なよ〳〵と撓みたる樣し給へりしにこそ。これは未だ持做しの初々しけに、萬の事をつゝましうのみ思ひたる故にや、見所多かるなまめかしさぞ劣りたる。故々しきけはひだに持て付けたらば。大將の見給はんにも、更に片端なるまじなど、姉心に思ひ扱はれ給ふ。物語などし給ひて、曉方になりてぞ寢給ふ。傍に臥せ給ひて、故宮の御事ども、年頃おはせし御有樣など、まほならねど語り給ふ。いとゆかしうて見奉らずなりにけるを、いと口惜しう悲しと思ひたり。昨夜の心知りの人々は、（人々）「如何なりつらんな。いとらうたけなる御樣を、いみじう思すとも、甲斐あるべき事かは。いとほし。」と云へば、右近ぞ「さもあらじ。かの御乳母の引き据ゑて、すゞろに語り憂へし氣色持て離れてぞ云ひし。宮も逢ひても逢はぬやうなる心ばへにこそ、打ち嘯き口すさび給ひしか。いさや殊更にもやあらん、そは知らずかし。昨夜の火影のいと大どかなりしも、事あり顏には見え給はざりしを。」など、うちさゝめきていとほしがる。

乳母車請ひて常陸殿へ往ぬ。北の方に斯う〳〵と云へば、胸つぶれ騒ぎて、人も怪しからぬ樣に言ひ思ふらん。正身も如何が思すべき。かゝる筋の物憎は、貴人も無き物なりと、己が心習にあわたゞしく思ひなりて、夕つ方參りぬ。宮おはしまさねば心安くて、（中將）「怪しく心幼げなる人を參らせ置きて、後安くは賴み聞えさせながら、鼬の侍らんやうなる心地のし侍れば、好からぬ者どもに、惡み怨みられ侍る。」と聞ゆ。（中君）「いと然云ふばかりの幼げさにはあらざゝめるを、後めたげに氣色ばみたる御目蔭こそ、煩はしけれ。」とて笑ひ給へるが、心耻かしげなる御まみを見るも、心の鬼に耻かしくぞ覺ゆる。如何に思すらんと思へば、得も打出で聞えず、（中將）「かくて侍ひ給ふに、年頃の願ひの滿つ心地して、人の漏り聞き侍らんも目安く、面立たしき事になん思ひ給ふるを、さすがにつゝましき事になん侍りけるを、深き山の本意は、操になん侍るべきを。」とて、打ち泣くもいといとほしくて、（中君）「此處には何事か後めたく覺え給ふべき。とてもかくても疎々しく思ひ放ち聞えばこそあらめ。けしからずだちて、好からぬ人の、時々物し給ふめれど、其心を皆人見知りたゝめれば、心づかひして、便無うはもてなし聞えじと思ふを、如何に推し量り給ふにか。」との給ふ。（中將）「更に御心をば隔てありても思ひ聞えさせ侍らず。傍痛う許無かりし筋は、何にか掛けても聞えさせ侍らん。其方ならでも、思し放つまじき綱も侍るをなん、捉へ所に賴み聞えさする。」など、疎ならず聞えて、（中將）「明日明後日堅き物忌に侍るを、おほぞうならぬ所にて過して、又も參らせ侍らん。」と聞えて誘ふ。いとほしく本意なき事かなと思せど、え留め給はず、あさましう片端なる事に驚き騒ぎたれば、をさ〳〵物も聞えで出でぬ。

かやうの方違所と思ひて、小き家を設けたりけり。三條わたりに戯ればみたるが、まだ作りさしたる所なれば、はかゞしきしつらひもせでなんありける。（中將）「あはれ此御身一つを、萬に持て惱み聞ゆるかな。心に協はぬ世には、在り經まじき物にこそありけれ。自らばかりは、唯一向に品々しからず、人氣無う、只さる方に這ひ籠りて過しつべし。この御ゆかりは、心憂しと思ひ聞えしあたりを、睦び聞ゆるに、便なき事も出で來なば、いと人

○君は　浮舟は。

○さる傍痛き事　匂宮の浮舟に近寄り給ひし事。
○思の儘にぞ云々　中將は少し我意なりし人となり。
○かの家　常陸守の家。

○かの宮　匂宮。
○いと人氣無く見えし　少將が。

○今樣色　薄紅梅の色濃きなり。

笑なるべし。味氣無しや。異樣なりとも、此處を人にも知らせず、忍びておはせよ。自らともかくも仕う奉りてん。」と言ひ置きて、自らは歸りなんとす。君は打ち泣きて、世に在らんこと、處狹げなる身と思ひ屈し給へる樣、いと哀なり。親はたまして、あたらしく惜しければ、恙なくて思ふ如見做さんと思ひ、さる傍痛き事に付けて、人にも淡々しく思はれ言はれんが、安からぬなりけり。心地なくなどはあらぬ人の、なま腹立ち易く、思の儘にぞ少しありける。かの家にも隱ろへて据ゑたりぬべけれど、然隱ろへたらんを、いとほしと思ひて斯く扱ふに、年頃傍去らず、明暮見馴らひて、互に心細く、わりなしと思へり。

（中將）「此處はまだ斯くあばれて、危げなる所なゝめり。さる心し給へ。曹司々々に在る者どもゝ召し出でゝ使ひ給へ。殿居人の事など言ひ置きて侍るも、いと後めたけれど、かしこに腹立ち怨みらるゝが、いと苦しければ。」と、打泣きて歸る。

少將の扱を、守は又無き物に思ひ急ぎて、諸心に樣惡しく、營まずと怨ずるなりけり。いと心憂く此人に因り、斯かる紛れどもゝあるぞかしと、又無く思ふ方の事の掛かれば、つらく心憂くて、をさ〳〵見入れず。かの宮の御前にて、いと人氣無く見えしに、多く思ひ貶してければ、私物に思ひかしづかましをなど思ひし事は止みにたり。此處にては如何が見ゆると、まだ打ち解けたる樣見ぬにと思ひて、長閑に居給へる晝つ方、此方に渡りて物よりのぞく。白き綾のなつかしげなるに、今樣色の打目なども淸らなるを着て、端の方に前栽見るとて居たるは、何處かは劣る。いと淸げなゝめるは、と見ゆ。むすめ未だ片成に、何心も無き樣にて添ひ臥したり。宮の上の並びておはせし御樣どもの、思ひ出づれば、

○側遣　女房どものよきをいふ。

○事だに惜しき　拾遺集に「移ろはん事だに惜しき秋萩に折れるばかりも置ける露かな。」

○注連結ひし云々　浮舟に こそと堅く約せしを何故に妹に御心移し給ふぞとなり。
○宮城野の云々　浮舟を八宮の御子と知りたらば思ひ移るまじき物をとなり。

○如何で人と等しく云々　何とぞして浮舟を人並に幸あるやうにと思ひ扱ふなり。

口惜しの樣どもやと見ゆ。前なる御遣に物など言ひ戯れて、打ち解けたるは、いと見しやうに匂無く、人わろげにも見えぬを、かの宮なりしは、他少將なりけりと思ふ折しも云ふ事よ、（少將）『兵部卿の宮の萩の、猶殊に面白くもあるかな。如何でさる種ありけん。同じ枝さしなどのいと艶なるこそ、一日參りて出で給ふ程なりしかば、え折らずなりにき。「事だに惜しき。」と、宮の打ち誦じ給へりしを、若き人たちに見せたらましかばとて、我も歌よみ居たり。』いでや心ばせの程を思へば、人とも覺えず、出消えば、いとこよなかりける に、何事言ひ居たるぞとつぶやかるれど、いと心地無げなる樣は、さすがにしたらねば、如何が云ふとて、試に、

（中將）「注連結ひし、小萩が上も、迷はぬに、如何なる露に、移る下葉ぞ。」

とあるにいとほしく覺えて。

（少將）「宮城野の、小萩が下と、知らませば、露も心を、分かずぞあらまし。」

如何で自ら聞えさせあきらめん。」と云ひたり。故宮の御事聞きたるなゝめりと思ふに、いとゞ如何で人と等しくとのみ思ひ扱はる。間無う大將殿の御樣容ぞ、戀しう面影に見ゆる。同じうめでたしと見奉りしかど、宮は思ひ離れ給ひて、心も留らず。侮りて押し入り給へりけるを思ふも妬し。此君はさすがに尋ねおほす心ばへのありながら、うちつけにも言ひ掛け給はず、つれなし顏なるしもこそ痛けれ。萬に付けて思ひ出でらるれば、若き人は況て斯くや思ひ出で聞え給ふらん。我物にせんと、斯く憎き人を思ひけんこそ見苦しき事なるべかりけれなど、唯心に懸りて眺めのみせられて、とてやかくてやと、萬に善からんあら

○いと難し　成就せんこと難し。
○見奉り給へらん人は云々　藁の見奉り給へらん女二宮は浮舟より今少し斜ならずよき人なるべければ如何でかは浮舟に心を留め給はんとなり。
○此君　浮舟。
○族の宿り　三條の家をいふ。
○母君だつやと　誤寫なるべし。本居翁は　母君いかにやとの誤寫なるべしと云へり。
○ひたぶるに云々　此處を世を離れたる處と思はゞ一向に嫌しからんとなり。

まし事を思ひ續くるに、いと難し。やんごとなき御身の程御もてなし、見奉り給へらん人は、今少し斜ならず、如何ばかりにてかは心を留め給はん。世の人の有樣を見聞くに、劣り優り賤しう貴なる品に從ひて、容貌も心もあるべき物なりけり。我子どもを見るに、此君に似るべきやはある。少將を此家の內に、又無きものに思へども、宮に見比べ奉りしかば口惜しかりしに推し量らる。當代の御かしづきむすめを得奉り給へらん人の御目移しには、いとも〳〵恥かしく、つゝましかるべき物かな、と思ふもすゞろに心地もあくがれにけり。

旅の宿りは徒然にて、庭の草もいぶせき心地するに、怪しき東聲したる音どもばかりのみ出で入り、慰に見るべき前栽の花も無し。打ちあばれて、晴れ〴〵しからで明し暮すに、宮の上の御有樣思ひ出づるに、若い心地に戀しかりけり。生憎だち給へりし人の御けはひも、さすがに思ひ出でられて、何事にかありけん、いと多く哀げにの給ひしかな。名殘をかしかりし御移香も、まだ殘りたる心地して、恐ろしかりしも思ひ出でらる。母君だつやと、いと哀げなる文を書きておこせ給ふ。疎ならず心苦しう思ひ扱ひ給ふめるに、甲斐無う持て扱はれ奉る事と、打泣かれて、（中將消息）「いかに徒然に見習はぬ心地し給ふらん。暫し忍び過し給へ。」とある返事に、（浮舟消息）「徒然は何か、心安くてなん。

ひたぶるに、嬉しからまし、世の中に、あらぬ所と、思はましかば。」

幼げに言ひたるを、見る儘にほろ〳〵と打泣きて、斯う惑はしはふるゝ樣に持做す事と、いみじければ、

○憂き世には云々　我身は世を離れても個身の盛を見る由もあらばや。
○大將殿　藁君。
○物忘れせず　大君を忘れ給はず。
○故宮　八宮。
○今片つ方を云々　姫君達の住み給ひしかばなり。
○亡き人　八宮と大君と。
○長押に假初に居給ひて　藁君が。
○かの人　浮舟。
○宮　匂宮。

（中將）「憂き世には、あらぬ所を、求めても、君が盛りを、見る由もがな。」

と直々しき事どもを、言ひかはしてなん心を敍べける。

かの大將殿は、例の秋深く成り行く頃、習ひにし事なれば、寢覺々々に物忘れせず、哀にのみ覺え給ひければ、宇治の御堂造り果てつと聞き給ふに、自らおはしましたり。久しう見給はざりつるに、山の紅葉も珍しう覺ゆ。毀ちし寢殿、此度はいと晴れ〴〵しう造り做したり。昔いと事殺ぎて、聖だち給へりし住居を思ひ出づるに、故宮も戀しう覺え給ひて樣變へてけるも、口惜しきまで思さるれば、常よりも眺め給ふ。もと在りし御しつらひは、いと尊げにて、今片つ方を女しく、こまやかになど、一方ならざりしを、網代屏風、何かの粗々しきなどは、かの御堂の僧坊の具に、殊更に爲させ給へり。山里めきたる具どもを、殊更にせさせ給ひて、いたうも事殺がず、いと清げに故々しくしつらはれたる、遣水の邊なる岩に居給ひて、頓にも立たれず、

（藁）「絶え果てぬ、清水に何どか、亡き人の、面影をだに、留めざりけん。」

涙を拭ひつゝ、辨の尼君の方に立ち寄り給へれば、いと悲しと見奉るに唯顰みに顰む。長押に假初に居給ひて、簾のつまを引き上げて、物語し給ふ。几帳に隱ろへて居たり。事の序に、（藁）「かの人はさいつ頃宮にと聞きしを、さすがに初々しく覺えてこそ音づれ寄らね。猶これより傳へ果て給へ。」との給へば、（辨）「一日かの母君の文侍りき。忌違ふとて、此處彼處になんあくがれ給ふめる。此頃も怪しき小家に隱ろへ物し給ふめるも、いと心苦しく、少し近き程ならましかば、其處に渡して心安かるべきを、荒ましき山道に、

○人の聞き傳へばこそあらめ　人は知るまじき物をとなり。
○愛宕の聖だに云々　愛宕に山籠せし空也上人又は拾本僧正の如き聖だに利生の爲には出づることありけりとなり。
○人渡す事　衆生を濟度する事。
○ふりはへ云々　尼の身として殊更に斯かる事を取持ちたる樣に人に思はれんも恥かしとなり。
○伊賀姥　狐の名なり。借りて媒人を謂ふ。たばかること多ければなり。
○宮　女二宮。
○入道の宮　薫の母女三宮

たはやすくもえ思ひ立たでなんと侍りし。」と聞ゆ。（薫）「人々の斯く恐ろしく住める道に、麿こそ舊り難く分くれ。何ばかりの契にかと思ふは哀になん。」とて、例の涙ぐみ給へり。（薫）「さらば其の心安からん所に、消息し給へ。自らやは彼處に出で給はぬ。」との給へば、（辨）「仰言を傳へ侍らん事は易し。今更に京を見侍らん事は物憂くて、宮にだにえ參らぬを。」と聞ゆ。（薫）「などてかともかくも、人の聞き傳へばこそあらめ。愛宕の聖だに時に隨ひては出でずやはありける。深き誓を破りて、人の願を滿て給はんこそ、尊からめ。」との給へば、（辨）「人渡す事も侍らぬに、聞きにくき事もこそ出で參で來れ。」と、苦しげに思ひたれど、（薫）「猶好き折りなゝなるを。」と、例ならず强ひて、「明後日ばかり車奉らん。その旅の所尋ね置き給へ。ゆめ嗚呼がましく僻業すまじうを。」と、ほゝ笑みての給へば、煩はしく、如何に思す事ならんと思へど、奥無く淡々しからぬ御心樣なれば、自ら我御爲にも、人聞きなどはつゝみ給ふらんと思ひて、（辨）「さらば承はりぬ。近き程にこそ、御文などを見せさせ給へかし。ふりはへ賢しらめきて、心しらひのやうに思はれ侍らんも、今更に伊賀姥にや、つゝましくてなん。」と聞ゆ。（薫）「文は易かるべきを、人の物言いとうたてある物なれば、右大將は常陸の守の女をなん、婚ふなるなども取做してんをや。其守の主いと荒々しげなゝめり。」との給へば、打ち笑ひて、いとほしと思ふ。暗うなれば出で給ふ。下草のをかしき花ども、紅葉など折らせ給ひて、宮に御覽ぜさせ給ふ。甲斐無からずおはしぬべけれど、畏まり置きたる樣にて、いたうも馴れ聞え給はずぞあゝめる。内よりたゞの親めきて、入道の宮にも聞え給へば、いとやんごとなき方は、限なく思ひ聞え給へり。此

○いとやんごとなき方は云云　薫女二宮を限無く思ずなり。
○むつかしき私の心　浮舟を思ず心。
○の給ひし又早朝　の給ひし翌日早朝。
○付けよ　警護せよ。
○打假粧じて繕ひて乘りぬ　辨尼の樣なり。
○茶着きける　浮舟の住居になり。
○しるべの男　辨の尼の具したる人。
○初瀬の供　曩の初瀬詣の時の供。
○君　浮舟。
○さにやあらんと思へば　薫君にやあらんと辨の思へば。
○怪しと思ふ　乳母の心樣なり。
○斯うなりけりと　斯くて薫のおはしつるなりけりと

方彼方とかしづき聞え給ふ宮仕に添へて、むつかしき私の心の添ひたるも、苦しかりけり。の給ひし又早朝、睦しく思す下臈の侍一人、顏知らぬ牛飼作り出でゝ遣はす。（薫）「御莊の者どもの、田舍びたる召し出でゝ付けよ。」との給ふ。必ず出づべくの給へりければ、いとつゝましく苦しけれど、打假粧じ繕ひて乘りぬ。野山の氣色を見るに付けても、古よりの古事ども思ひ出でられて、眺め暮してなん來着きける。いと徒然に人目も見えぬ所なれば、心安く引き入れて、斯くなん參り來つると、しるべの男して言はせたれば、初瀬の供にありし若人出で來ておろす。怪しき所を眺め暮し明すに、昔語りもしつべき人の來たれば、嬉しく呼び入れ給ひて、親と聞えける人の御あたりの人と思ふに、睦しきなるべし。（辨）「哀に人知れず見奉りし後よりは、思ひ出で聞えぬ折無けれど、世の中かばかり思ひ給へ捨てたる身にて、かの宮だに參り侍らぬを、この大將殿の怪しきまでの給はせしかば、思ひ給へ起してなん。」と聞ゆ。君も乳母も、めでたしと見置き聞えてし人の御樣なれば、忘れぬ樣にの給ふらんも哀なれど、俄にかく思したばかるらんとは思ひも寄らず。宵打過ぐる程に、宇治より人參れりとて、門忍びやかに打叩く。さにあらんと思へば、辨あけさせたれば、車をぞ引き入るなる。怪しと思ふに、尼君に對面給はらんとて、この近き御莊の預りの名乘をせさせ給へれば、戸口にゐざり出でたり。雨少し打灑ぐに、風はいと冷に吹き入りて、言ひ知らず薫り來れば、斯うなりけりと、誰も〳〵、心時めきしつべき御けはひをかしければ、用意も無く怪しきに、まだ思ひ敢へぬ程なれば、心騷ぎて、如何なる事にかあらんと言ひ合へり。（薫）「心安き所にて、月頃の思ひ餘る事も、聞えさせんとてな

○かの殿　母中將の方。
○若き御どち云々　若き人人の御語らひはさやうに早く定るべくもあらずとなり。
○むく〳〵しく云々　藁君の心緣なり。
○佐野の渡りに家もあらなくに　萬葉集に「苦しくも降り來る雨か三輪が崎佐野の渡りに家もあらなくに」
○差留むる云々　斯く久しく我を待たせ給ふは若し隔つる人のあるにやとの意。
○御座引繕ひ　乳母がなり。
○押し出でたり　浮舟を藁の方へなり。
○飛驛の工匠　遣戸の隔てを謂ふ。
○疊無き物のはざまより云云　藁が曩に宇治にて浮舟を覗き見給ひし事を云ふ。
○人の樣云々　浮舟の樣を藁の思ずなり。
○おほどれたる聲　物質る

ん。」と言はせ給へり。如何に聞ゆべき事にかと、君は苦しけに思ひて居給へれば、乳母見苦しがりて、（乳母）「然おはしましたらんを、立ちながらやは返し奉り給はん。かの殿にこそ斯くなんと忍びて聞えめ、近き程なれば。」と云ふ。（辨）「初々しく何どてか然はあらん。若き御どち物聞え給はんは、ふとしも染み付くべくもあらぬを、怪しきまで、心のどかに物深うおはする君なれば、よも人の許無くて、打ち解け給はじ。」など云ふ程、雨やゝ降り來れば、空はいと暗し。宿直人の怪しき聲したる夜行打して、（宿直人）「家の巽の隅の崩れいと危し。此人の御車入るべくば、引き入れて御門さしてよ。かゝる人の供人こそ、心はうたてあれ。」など言ひ合へるも、むく〳〵しく聞き習はぬ心地し給ふ。「佐野の渡りに家もあらなくに」など、口ずさびて、里びたる簀子の端つ方に居給へり。

（藁）「差留むる、葎や繁き、東屋の、餘り程經る、雨そゝぎかな。」

と打拂ひ給へる追風、いと片端なるまで、東の里人も驚きぬべし。

と樣かう樣に聞え遁れん方無ければ、南の廂に御座引き繕ひて、入れ奉る。心安くも對面し給はぬを、これかれ押し出でたり。遣戸と云ふ物さして、聊開けたれば、（藁）「飛驛の工匠も怨めしき隔てかな。かゝる物の外には、まだ居習はず。」と憂へ給ひて、如何がし給ひけん、入り給ひぬ。かの人形の願もの給はで、唯覺無き物のはざまより見しより漫に戀しき事、さるべきにやあらん、怪しきまでぞ、思ひ聞ゆる、とぞ語らひ給ふべき。人の樣いとらうたげに大どきたれば、見劣もせず、いと哀とおほしけり。程も無う明けぬる心地するに、鳥などは鳴かで、大路近き所に、おほどれたる聲して、如何にとか

人などの大どけたる聲。
○蓬の轉寢　蓬生の宿に一宿すること。
○九月にもありけるを　九月は忌月なれば云ふ。
○明日こそ節分と云々　明日節に入るにて今日ば未だしとなり。
○宮の上云々　中君の聞き給ひて辨が斯く近き處まで來りて二條院へ參らぬ事を如何思し召さんとなり。
○人一人や侍るべき　誰にても一人浮舟の御供に參るべしとなり。
○若き人　侍從）
○羅の細長を云々　古男女同車の時に斯くする習なり。

聞きも知らぬ名乘をして、打ち群れて行くなどぞ聞ゆる。かやうの朝ほらけに見れば、物戴きたる者の、鬼のやうなるぞかし、と聞き給ふもかゝる蓬の轉寢に、習ひ給はぬ心地に、をかしうもありけり。宿直人も門明けて出づる音す。各入りて臥しなどするを聞き給ひて、人召して車妻戸に寄せさせ給ふ。搔き抱きて乘せ給ひつ。誰も〳〵怪しう、敢無きことを思ひ驚ぎて、九月にもありけるを、心憂の事や。如何にしつる事ぞ、と歎けば、尼君もいといとほしく、思の外なる事どもなれど、（辨）「自ら思す樣あらん。後めたうな思ひ給ひそ。九月は明日こそ節分と聞きしか。」と云ひ慰む。今日は十三日なりけり。尼君（辨）「此度はえ參らじ。宮の上聞し召さん事もあるを、忍びて行き歸り侍らんも、いとうたてなん。」と聞ゆれど、まだき此事聞かせ奉らんも、心耻かしく覺え給ひて、（藁）「それは後にも罪去り申し給ひてん。彼處も知緣無くては、たつき無き所を。」と責めての給ふ。（藁）「人一人や侍るべき。」との給へば、此君に添ひたる侍從と乘りぬ。乳母尼君の供なりし童なども後れて、いと怪しき心地して居たり。

近き程にやと思へば、宇治へおはするなりけり。牛など引代ふべき心設し給へり。河原過ぎ法性寺のわたりおはしますに、夜は明け果てぬ。若き人はいと仄に見奉りて、愛で聞えてすゞろに戀ひ奉るに、世の中のつゝましさも覺えず。君ぞいとあさましきに、物も覺えで、うつぶし臥したるを、石高き邊は苦しき物をとて、抱き給へり。羅の細長を、車の中に引き隔てたれば、華やかに差し出でたる朝日景に、尼君はいとはしたなく覺ゆるに付けて、故姫君の御供にこそ、かやうにても見奉りつべかりしか。在り經れば思ひ懸けぬ

○容異にて　尼の姿にて。
○君　薫君。
○見る人　浮舟。
○來し方の戀しさ增さりて　大君を思ひ出し給ふなり。
○形見ぞと見るに付けても　浮舟を大君の形見と見るに付けても。
○空しき空にも云々　古今集に「我戀はむなしき空に滿ちぬらし思ひやれども行く方の無き」
○羹　羹して。
○空しき空にも云々　古今集に「我戀はむなしき空に滿ちぬらし思ひやれども行く方の無き」

事をも見るかなと、悲しう覺えて隱むとすれど、打顰みつゝ泣くを、侍從はいと憎く物の初に容異にて乘り添ひたるをだに思ふに、何ぞ斯くいやめなると、憎く嗚呼にも思ふ。老いたる者は、すゞろに涙脆にある物ぞと、疎そかに打ち思ふなりけり。君も見る人は憎からねど、空の氣色に付けても、來し方の戀しさ增さりて、山深く入る儘に、霧立ち渡る心地し給ふ。打ち眺めて寄り居給へる。袖の重なりながら長やかに出でたりけるが、川霧に濡れて、御衣の紅なるに、御直衣の花のおどろ〳〵しう移りたるを、落懸の高き所に見付けて、引き入れ給ふ。

（薫）「形見ぞと、見るに付けても、朝霧の、所狹きまで、濡るゝ袖かな。」

と心にもあらず、獨言ち給ふを聞きて、いとゞ萎るばかり、尼君の袖も泣き濡らすを、若き人、怪しう見苦しき世かな。心行く道に、いとむつかしき人添ひたる心地す。忍び難けなる鼻すゝりを聞き給ひて、我も忍びやかに打ちかみ給ひて、さすがに如何が思ふらんといとほしければ、（薫）「數多の年頃、此道を行きかふ度重るを思ふに、そこはかと無く物哀なるかな。少し起き上りて、此山の色も見給へ。いと埋れたりや。」と、强ひて搔起し給へば、をかしき程に差隱して、つゝましげに見出したる目見などは、いとよく思ひ出でらるれど、おいらかに餘り大どき過ぎたるぞ、心許なかゝめる。いと甚う見めいたる物から、用意の淺からず物し給ひしはやと、猶行く方無き悲しさは、空しき空にも滿ちぬべかゝめり。

おはし着きて、哀亡き魂や宿りて見給ふらん。誰によりて、かくすゞろに惑ひありく物に

○女の御髮　浮舟の御髮。
○この有樣　此宇治の御所の有樣。
○もてはやしたる造樣　新しく造りたる寢殿の樣を云ふ。
○殿　薫君。
○母宮　女三宮。
○姫宮　女二宮。
○打解けたる御有樣　薫のなり。
○好くと思ひてし　浮舟の母が好くと思ひて。
○宮の　女二宮の。
○かの宮　女三宮。
○普聞　世の聞え。

あらなくにと、思ひ續け給ひて、下りては少し心しらひて立ち去り給へり。女は母君の思ひ給はん事など、いと歎かしけれど、艶なる樣に心深く哀に語らひ給ふに、思ひ慰めて下りぬ。尼君は此方に殊更に下りて、廊にぞ寄するを、態と思ふべき住居にもあらぬを、用意こそ餘なれと見給ふ。御莊より例の人々、騷がしきまで參り集る。女の御臺は尼君の方より參る。道は繁かりつれど、この有樣はいと晴れ〴〵し。河の氣色も山の色も、もてはやしたる造樣を見出して、日頃のいぶせさ慰みぬる心地すれど、如何にもてない給はんとするにかと、浮きて怪しう覺ゆ。殿は京に御文書き給ふ。（薫消息）「まだ成り合はぬ佛の御飾など見給へ置きて、今日宜しき日なりければ急ぎ物し侍りて、みだり心地の惱ましきに、物忌なりけるを思ひ給へ出でゝなん、今日明日此處に愼み侍るべき。など、母宮にも姫宮にも聞え給ふ。

打ち解けたる御有樣今少しをかしくて、入りおはしたるも恥かしけれど、持て隱すべくもあらで居給へり。女の御裝束など色々に好くと思ひてし重ねたれど、少し田舍びたる事も打雜りてぞ、昔のいと萎えばみたりし御姿の、あてになまめかしかりしのみ思ひ出でられて、髮の裾のをかしげさなどは、こま〴〵とあてなり。宮の御髮のいみじくめでたきにも劣るまじかりけりと見給ふ。且は此人を如何にもてなしてあらせんとすらん。只今物々しげにてかの宮に迎へ据ゑんも、普聞便無かるべし。さりとてこれかれある列にて、おほぞうに交らはせんは本意無からん。暫し此處に斯くしてあらん、と思ふも、見ずば淋々しかるべく、哀に覺え給へば、疎ならず語らひ暮し給ふ。故宮の御事もの給ひ出でゝ、昔物語を

○誤りて云々　態とならず自然に斯く初々しきは悪しからず。教へ直して見ん。
○形代不用ならまし　大君の形代にも用ゐるには足らざるべし。
○誰も〳〵　八宮も大君も。
○親王　八宮。
○何どてさる所に　御身は何どてさる田舎に。
○いとよく思ひ出でられて　大君の姿がなり。
○斯樣の事　琴などの事。
○これは少し仄めい給ひたりや　琴は少し彈き習ひ給へりや。
○我が妻と云ふ琴　吾妻琴を取做して云ふ。
○大和詞　歌の意。和琴の緣にて言ひ給へり。
○楚王の云々　古詩に「班女閨中秋扇色、楚王臺上夜琴聲」
○かの弓たのみ引くあたり　吾妻琴の緣にて常陸武士を取做して云ふ。
○扇の色も云々　班女の秋扇は寵愛へし時の歎なるに侍從は之を思ひ知らで楚王の琴の聲とあるを偏に愛で聞えたりとなり。
○事こそあれ云々　藁詩を誦して後悔する心中なり。是れ浮舟の不幸の前兆となるを思せばなり。
○菓物急ぎにぞ云々　作者の說明句なり。歌に目を留め給へば菓物に心の移る如く見ゆとなり。
○宿木は云々　此處に住み給ふは大君ならねど藁の宿り給ふに昔覺ゆとなり。
○里の名も云々　里の名も昔に變らねど見し人はそれならで月も面變りして見ゆとなり。

かしう濃に言ひ戯れ給へど、唯いとつゝましげにて、ひた道に恥ぢたるを、淋々しうおぼす。誤りて、斯うも心許なきはいと好し。教へつゝも見てん。田舍びたる戯心もてつけて、品々しからず、早りかならましかばしも、形代不用ならまし、と思ひ直し給ふ。此處にありける琴、箏の琴召し出でゝ、斯かる事はた、まして得せじかしと口惜しければ、獨調べて、宮亡せ給ひて後、此處にて斯かる物に、いと久しう手觸れざりつかしと、珍しく我ながら覺えて、いと懷かしく弄りつゝ眺め給ふに、月差出でぬ。宮の御琴の音のおどろおどろしくはあらで、いとをかしく哀に彈き給ひしはやと思し出でゝ、(藁)「昔誰も〳〵おはせし世に、此處に生ひ出で給へらましかば、今少し哀はまさりなまし。親王の御有樣は、餘所の人だに哀に戀しくこそ思ひ出でられ給へ。何どてさる所には年頃經給ひしぞ。」との給へば、いと耻かしくて白き扇を弄りつゝ、添ひ臥したる傍目、いと隈無う白うて、なまめいたる額髮の隙など、いとよく思ひ出でられて哀なり。まいて斯樣の事はつき無からず敎へなさばや、と思して、(藁)「これは少し仄めい給ひたりや。あはれ我が妻と云ふ琴はさりとも手馴らし給ひけん。」など問ひ給ふ。(浮舟)「その大和詞だに、つき無く慣らひにければ、況てこれは。」と云ふ。いと片端に心後れたりとは見えず。此處に置きて、え思ふ儘にも來ざらん事を思すが、今より苦しきは、斜には思さぬなるべし。琴は押し遣りて、「楚王の臺の上の夜の琴の聲」と、誦じ給へるも、かの弓をのみ引くあたりに習ひて、いとめでたく思ふ樣なりと、侍從も聞き居たりけり。然るは扇の色も、心置きつべき閨の古をば知らねば、偏に愛で聞ゆるぞ、後れたるなめるかし。事こそあれ、怪しく言ひつるかなとおぼす。尼君の方より菓物參れり。箱の蓋に、紅葉蔦など折り敷きて、故無からず取りまぜて、敷きたる紙に、太つかに書きたるもの、隈無き月にふと見ゆれば、目留め給ふ程に、菓物急ぎにぞ見えける。

(辨)「宿木は、色變りぬる、秋なれど、昔覺えて、め澄る月かな。」

と古めかしく書きたるを、恥かしくも哀にもおぼされて、

(藁)「里の名も、昔ながらに、見し人の、面變りせる、閨の月影。」

態と返事とは無くての給ふを、侍從なん傳へけるとぞ。

○宮猶云々　匂宮が或夕中君の方にて浮舟を見出し給ひし事をなり。
○女君　中君。
○いと苦しうて　中君の心中なり。
○浅はかならぬ方に云々　薫が。
○さて聞き過し云々　匂宮の御本性なり。
○見苦しき事云々　薫との事ともならんとの意。
○防ぐべき云々　顧み給ふべき御本性ならねば。
○異樣に附々しく　虚言など言ひて附々しく。
○かの人　薫君。

浮舟

此巻は薫君二十七歳の正月より三月末までの事を叙べたり。巻名は歌に「橘の小島は色もかはらじをこの浮舟ぞよるべ知られぬ」とあるに取れり。

宮猶かの仄なりし夕を思し忘るゝ世なし。事々しき程にはあるまじげなりしを、人柄のまめやかにをかしうもありしかな、と仇なる御心には、口惜しくて止みにし事と、妬う思さるゝ儘に、女君をも斯うはかなき事故、あながちに斯かる筋の物憎みし給ひけり。思はずに心憂しと、恥かしめ怨み聞え給ふ折々は、いと苦しうて、ありの儘にや聞えてましと思せど、やんごとなき樣にはもてなし給はざゝなれど、浅はかならぬ方に心留めて、人の隱し置き給へる人を、物言ひ祥なく聞え出でたらんにも、さて聞き過し給ふべき御心樣にもあらざゝめり。侍ふ人の中にもはかなう物をもの給ひ觸れんと思し立ちぬる限は、あるまじき里までも尋ねさせ給ふ御樣よからぬ本性なるに、さばかり月日を經て思し染むめるあたりは、まして必ず見苦しき事取り出で給ひてん。外より傳へ聞き給はんは如何がはせん。何方樣にもいとほしくこそはありとも、防ぐべき人の御心樣ならねば、餘所の人よりは聞き憎くなどばかりぞ覺ゆべき。とてもかくても我が怠にては、持て損はじと思ひ返し給ひつゝ、いとほしながらも聞え出で給はず。異樣に附々しくはえ言ひ做し給はねば、押し籠めて物怨じしたる世の常の人になりてぞおはしける。

かの人はたとしへ無く長閑に思し掟てゝ、待遠なりと思ふらんと、心苦しうのみ思ひ遣り給

○神の諫むよりも　伊勢物語に「戀しくば來ても見よかし千早振神のいさむる道ならなくに」

○宮の御方　中君。

○渡すべき所　浮舟を渡すべき所。

○これこそは　以下中君の心中なり。

○ねびまさり給ふまゝに　薫君の樣を云ふ。

○内々の御心を云々　宇治にてよりの薫と中の君との内々の御親睦を深く知らぬ人はとなり。

○さりとても云々　薫の樣なり。

ひながら、所狹き身の程を、さるべき序無くて、かやすく通ひ給ふべき道ならねば、神の諫むるよりもわりなし。されど今いとよく持做さんとす。山里の慰めと思ひ掟てし心あるを、少し日數も經ぬべき事ども作り出でゝ、長閑やかに行きても見ん。さて暫しは人の知るまじき住所して、やう〳〵さる方に、かの心をものどめ置き、我爲にも人のもどきあるまじく、斜にてこそ善からめ。俄に何人ぞ、何時よりなど、聞き咎められんも物騷がしく、初の心に違ふべし。又宮の御方の聞き思さん事も、元の所を際々しう率て離れ、昔を忘れ顏ならんも、いと本意なし、など思し鎭むるも、例のいと長閑けさ過ぎたる心からなるべし。渡すべき所思し設けて忍びてぞ造らせ給ひける。少し暇無きやうにもなり給ひにたれど、宮の御方には、猶たゆみ無く心寄せ仕う奉り給ふこと同じやうなり。見奉る人も怪しきまで思へど、世の中をやう〳〵思し知り、人の有樣を見聞き給ふ儘に、これこそは誠に昔を忘れぬ心長さの名殘さへ淺からぬためしなゝめれと、哀も少からず、ねびまさり給ふ儘に、人柄も世の覺も、樣異に物し給へば、宮の御心の餘り賴もしげ無き時々は、思はずなりける宿世かな。故姫君の思し掟てし儘にもあらで、斯く物思ひ憚るべき方にしも掛り初めけんよと、思す折々多くなん。されど對面し給ふことは難し。年月も餘り昔を隔て行き、内々の御心を深う知らぬ人は、直々しきたゞ人こそさばかりのゆかり尋ねたる睦びをも忘れぬに、附々しけれ。なか〳〵斯う限ある程に、例に違ひたる有樣ぞなど、言ひ思はんもつゝましければ、宮の絶えず思ひ疑ひたるを、愈苦しう思ひ憚り給ひつゝ、自ら疎き樣に成り行くを、さりとても絶えず、同じ心の變り給はぬなりけり。宮も仇なる御本性

○およすけ給ふ　成長し給ふ。

○包文　文を薄樣にて包みたるを云ふ。浮舟の文なり。

○立文　杉原鳥の子などの全紙を用ゐるを云ふ。右近の文なり。

○女君　中の君。

○大輔の殿　中君の女房。

○御顏の赤みたれば　中君の樣なり。

○さすがに云々　匂宮の心中なり。

○さば見んよ　然らば開けて見ん。

○これ若君の御前に　浮舟より若君へ卯槌を參らする由なり。

○怪しう侍るめれど　下に參らんを省きたり。

こそ、見まほ憂き節も雜れ。若君のいと美しうおよすけ給ふ儘に、外にはかゝる人も出で來まじきにやと、やんごとなき物に思して、打解け懷かしき方には、人に優りてもてなし給へば、ありしよりは少し物思靜まりて過し給ふ。

正月の一日過ぎたる頃渡り給ひて、若君の年增さり給へるを、玩びうつくしみ給ふ晝つ方、小き童、綠の薄樣なる包文の大きやかなるに、小き鬚籠を小松に附けたる、又直々しき立文取り副へて、奥無く走り參る。女君に奉れば、(匂)宮「それは何處よりぞ。」との給ふ。(童)「宇治より大輔の殿にとて、持て煩ひ侍りつるを、例の御前にてぞ御覽ぜんとて、取り侍りぬる。」と云ふも、いとあわたゞしき氣色にて、(童)「この籠は金を造りて、色どりたる籠なりけり。松もいと能う似て造りたる枝ぞよ。」と、笑みて言ひ續くれば、宮も笑ひ給ひて、(匂)「いで我も持て映してん。」と召すを、女君いと傍痛く思して、(中君)「文は大輔許遣れ。」との給ふ。御顏の赤みたれば、宮大將の然りげ無くし做したる文にや、宇治の名告も附々しと思し寄りて、此文を取り給ひつ。さすがにそれならん時にと思すに、いと眩ければ、(匂)「開けて見んよ。怨じやし給はんとする。」との給へば、(中君)「見苦しう。何かは其女どちの中に、書き通はしたらん打解文をば御覽ぜん。」との給ふが、騷がぬ氣色なれば、(匂)「さば見んよ。女の文書は、如何がある。」とて開け給へれば、いと若やかなる手にて、(浮舟消息)「覺束なくて、年も暮れ侍りにける。山里のいぶせさこそ、峰の霞も絶間なくて。」とて、端に、「これ若君の御前に、怪しう侍るめれど。」と書きたり。殊に勞々じき節も見えねど、覺無きを御目立てゝ、此立文を見給へば、實に女の手にて、(右近消息)「年改りて

○御私にも　公には勿論私にも。
○つゝましく云々　匂宮の近寄り給ひし事をなり、浮舟の樣を云ふ。
○大き御前　匂宮。
○かの山里　宇治を指す。
○おしなべて云々　なべての官仕の者とは見えぬ文の樣となり。
○またぶり　木の枝に山橘の造花をつけて卯槌を枝に貫きたるをいふ。
○まだ舊りぬ云々　若君も此松の千年を經べきが如くあらなんと深き心を以て態と此まだ舊りぬ枝に附けて參らするなりと知り給へとなり。まだふりぬはまたぶりを掛け、待つは松を掛けたり。
○女君少將等して　中君が女房の少將等と共に語り給ふなり。
○幼き人　文を取り次ぎたる童を云ふ。

何事か侍ふ。御私にも、如何に頼もしき御悅多く侍らん。此處にはいと愛でたき御住居の心深きを、猶ふさはしからず見奉る。斯くてのみつくゞくと眺めさせ給ふよりは、時々は渡り參らせ給うて、御心も慰めさせ給へと思ひ侍るに、つゝましく恐ろしき物に思し懲りてなん、物憂き事に歎かせ給ふめる。若君の御前にとて、卯槌參らせ給ふ。大き御前の御覽ぜられん程に、御覽ぜさせ給へとてなん。」と細々と、言忌もえ爲敢へず、物歎かしげなる樣の頑しげなるも、打返し〳〵、怪しと御覽じて、（匂）「今はの給へかし。誰がぞ。」との給へば、（中君）「昔かの山里に在りける人の女の、さる樣ありて、此頃彼所に侍るとなん聞き侍りし。」と聞え給へば、おしなべて仕う奉るとは見えぬ文書をと心得給ふに、かの煩はしき事とあるに思し合はせつ。卯槌をかしう、徒然なりける人の仕業と見えたり。杈樁に山橘作りて、貫き添へたる枝に、

（浮舟）「まだ舊りぬ、物にはあれど、君が爲、深き心に、待つと知らなん。」

と、異なる事無きを、かの思ひ渡る人のにやと思し寄りぬるに、御目留りて、（匂）「返事し給へ。なさけ無し。隱い給ふべき文にもあらざゝめるを、何ど御氣色の惡しき。罷りなんよ。」とて立ち給ひぬ。女君少將などして、（中君）「いとほしくもありつるかな。幼き人の取りつらんを、人は如何でか見ざりつるぞ。」など、忍びての給ふ。（少將）「見給へましかば、如何でかは參らせまし。凡て此兒は心地無う差過して侍り。生先見えて、人は大どかなるこそ、をかしけれ。」など憎めば、（中君）「あなかま。幼き人な腹立てそ。」との給ふ。去年の冬人の參らせたる童の顏はいと美しかりければ、宮もいとらうたくし給ふなりけり。

○秋御方におはしまして　匂宮が。
○大將　薫大將。
○御文の事　御學問の事。
○集　詩集。
○三昧堂　念佛三昧を修する堂。
○京よりもいと忍びて云々　三條の宮よりも御心添へのありしをいふ。
○今建てられたるになん　今新に建築せられたる寢殿になん。

我御方におはしまして、怪しうもあるかな。宇治に大將の通ひ給ふ事は、年頃絶えずと聞く中にも、忍びて夜泊り給ふ時もありと人の言ひしを、いと餘りなる人の形見とて、さるまじき所に、旅寢し給ふらん事と思ひつるは、かやうの人隱し置き給へるなるべしと、思し得る事もありて、御文の事に付け使ひ給ふ大內記なる人の、かの殿に親しき便を思し出でゝ、御前に召す。參れり。韻塞すべきに、集ども撰り出でて、此方なる厨子に積むべき事などの給はせて、（匂）「右大將の宇治へいますること猶絶え果てずや。寺をこそいと畏く造りたゝなれ。如何でか見るべき。」との給へば、（內記）『いと畏く嚴しく造られて、不斷の三昧堂など、いと尊く掟てられたりとなん聞き給ふる。通ひ給ふ事は、去年の秋頃よりは、ありしよりも屢物し給ふなり。下の人々の忍びて申しゝは、「女をなん隱し居ゑさせ給へる。けしうはあらず思す人なるべし。あのわたりに領じ給ふ所々の人、皆仰にて參り仕う奉る。宿直に差し當てなどしつゝ、京よりもいと忍びて、さるべき事など問はせ給ふ。如何なる幸人のさすがに心細くて居給へるならん。」となん、唯この十二月の頃ほひ申すと、聞き給へし。』と聞ゆ。いと嬉しくも聞きつるかなと思ほして、（匂）「確に其人とは云はずや。彼所に元よりある尼ぞ訪ひ給ふと聞きし。」（內記）「尼は廊になん住み侍りける。この人は今建てられたるになん、穢げ無き女房なども數多して、口惜しからぬけはひにて率て侍る。」と聞ゆ。をかしき事かな。何の心ありて、如何なる人をかはさて居ゑ給ひつらん。猶いと氣色ありて、なべての人に似ぬ御心なりや。左の大臣など此人の餘り道心に進みて山寺に夜さへともすれば泊り給ふなる、輕々しさと、もどき給ふ、と聞きしを、實に

○隈ある構よ　人の氣のつかぬ所をたくむ人よと誘りていへるなり。
○此人は　大内記は。
○このわたりには云々　中君に疎からぬは如何なる事にか。
○心をかはして　中君と熟とが。
○賭弓　匂宮卷にも出でたり。
○内宴　正月二十一日文人博士達祝の詩を作りて御前にて講ずるなり。
○司召　在京諸司を任補する儀式。
○些人に知らるまじき構云云　少しも人に知られぬやうにして宇治へ通ふべき謀は如何がすべきぞとなり。

何どか然しも佛の道には忍びありくらん。猶かの故郷に心を留めたるとなん聞きしは、かゝる事こそはありけれ。何ら人よりは忠實なると賢しがる人しも、殊に人の思ひ到るまじき隈ある構よ。」との給ひて、いとをかしと覺えたり。此人はかの殿にいと睦しく仕う奉る家司の聟になんありければ、隱し給ふ事も聞くなるべし。御心の中には、如何にして此人を、見し人かとも見定めん。かの君の然ばかりにて居ゐたるは、なべての宜しき人にはあらじ。このわたりには、如何でか疎からぬにかあらん。心をかはして隱し給へりけるも、いと妬う覺ゆ。

唯其事を此頃は思し染みたり。賭弓内宴など過して心長閑なるに、司召など云ひて、人の心盡すめる方は何とも思さねば、宇治へ忍びておはしまさん事をのみ思し運らす。この内記は、望む事ありて、晝夜如何で御心に入らんと思ふ頃、例よりは懷かしう召し使ひて、

(匂)「いと難き事なりとも、我が言はん事はたばかりてんや。」などの給ふ。畏まりて侍ふ。

(匂)「いと便無き事なれど、かの宇治に住むらん人は、早う仄に見し人の、行方も知らずなりにしが、大將に尋ね取られにけりと、聞き合する事こそあれ。確には知るべき樣も無きを、唯物より覗きなどして、それかあらぬかと見定めんとなん思ふ。些人に知らるまじき構は、如何がすべき。」との給へば、あな煩はしと思へど、(内記)「おはしまさん事は、いと荒き山越になん侍れど、殊に程遠くは侍はずなん。夕つ方出でさせおはしまして、亥子の時にはおはしまし着きなん。さて曉にこそは歸らせ給はめ。人の知り侍らん事は、唯御供に侍ひ侍らんこそは。それも深き心は如何でか知り侍らん。」と申す。(匂)「然かし。昔も一度二度通ひし道なり。輕々しきもどき負ひぬべきが、物の聞えのつゝましきなり。」とて返すゞ〳〵あるまじき事に、我御心にも思せど、斯うまで打出で給ひつれば、得思ひ留め給はず。御供に、昔も彼所の案内知れりし者二三人、この内記、さては御乳母子の藏人より爵得たる若き人、睦しき限を選り給ひて、大將今日明日よもおはせじなど、内記に能く案内聞き給ひて、出で立ち給ふに付けても、古を思し出づ。怪しきまで心を合せつゝ、率てありきし人の爲に、後目痛きわざにもあるかなと、思し出づる事も樣々なるに、京の内だにむげに人知らぬ御ありきは、さは云へどえし給はぬ御身にしも、怪しき樣の窶れ姿して、御馬にておはする心地も物恐ろしく疚しけれど、物のゆかしき方は進みたる御心なれば、山深うなる儘に、何時しか如何ならん、見合する事も無くて歸らんこそ、淋々しく怪しかるべけれ、と思すに、心も騷ぎ給ふ。法性寺の程までは御車にて、それよりぞ御馬には奉りける。

急ぎて、宵過ぐる程におはしましぬ。内記、案内よく知れるかの殿の人に問ひ聞きたりければ、宿直人ある方には寄らで、葦垣し籠めたる西面を、やをら少し毀ちて入りぬ。我もさすがにまだ見ぬ御住居なれば、辿々しけれど、人繁うなどしあらねば、寢殿の南面にぞ火仄暗う見えて、そよ〳〵と音する。參りて、(内記)「まだ人は起きて侍るべし。これよりおはしまさん。」と案内して、入れ奉る。やをら上りて、格子の隙あるを見付けて寄り給ふに、伊豫簾はさら〳〵と鳴るもつゝまし。新しう清げに造りたれど、さすがに粗々しくて隙ありけるを、誰かは來て見んと打解けて、穴も塞がぬなるべし。几帳の帷子打ち懸けて

○輕々しきもどき　輕々しきとの批難。
○乳母子の云々　六位藏人の叙爵したるにて出世權守時方をいふ。
○やゝまし　やまし。
○葦垣し籠めたる　葦垣を廻らして籠めたる。
○そよ〳〵と音する　人のけはひなり。
○伊豫簾　簾の一種。

○うちつけ目かと　率爾に見し故に斯く見ゆるかと。
○君　浮舟を指す。
○對の御方に云々　中君に能く似給へり。
○かくて渡らせ給ひなば京の母君の方へ渡り給ひなば。
○折しも　薫君が自然御出ありたらん折しも出遭ひ給ひてはとなり。
○又或は　又一人の女房の云ふには。
○おだしく　穏に。
○此殿の云々　此乳母が母君に言ひ勸めて俄に石山詣を急ぎ給ふなりとなり。
○實に憎き者云々　匂宮中君の御所にて浮舟に近づき給ひし時つと守り居たりし乳母の事を思ひ合せ給ふなり。
○宮の上　中君。
○左の大臣　夕霧。

推し遣りたり。火明う點して、物縫ふ人三四人居たり。童のをかしげなる、絲をぞ縒る。これが顔まづかの火影に見給ひし、それなり。うちつけ目かと猶疑はしきに、右近と名のりし若き人もあり。君は肘を枕にて、火を眺めたる目見、髪のこぼれ掛りたる額つき、いとあてやかになまめきて、對の御方にいと能う覺えたり。この右近物折るとて、(右近)「かくて渡らせ給ひなば、頓にしも得歸り渡らせ給はじを、殿はこの司召の程過して、朔頃には必ずおはしましなんと、昨日の御使も申しけり。御文には如何が聞えさせ給へりけん。」と云へど、いらへもせず、いと物思ひたる氣色なり。(右近)「折しも這ひ隱れさせ給へる樣ならんが、見苦しさ。」と云へば、向ひたる人、(女房)「それは斯くなん渡り給ひぬると、御消息聞えさせ給ひつらんこそ宜からめ。輕々しう如何でかは、音無くては這ひ隱れさせ給はん。御物詣の後は、やかで渡りおはしましねかし。斯くて心細き樣なれど、心に任せて安らかなる御住居に習ひて、なか〳〵旅心地すべしや。」など云ふ。又或は、(女房)「猶誓し斯くて待ち聞えさせ給はんぞ、長閑やかに樣よかるべきや。京へなど迎へ奉らせ給へらん後、おだしくて親にも見え奉らせ給へかし。此殿のいと急に物し給ひて、俄に斯う聞え做し給ふなゝめりかし。昔も今も物念じして、長閑なる人こそ、幸は見果て給ふなれ。」など云ふなり。右近「何どて此乳母を留め奉らずなりにけん、老いぬる人は、むづかしき心のあるにこそ。」と惡むは、乳母やうの人を譏るなゝめり。實に憎き者ありきかしと思し出づるも、夢の心地ぞする。傍痛きまで、打ち解けたる事どもを言ひて、(右近)「宮の上こそいとめでたき御幸なれ。左の大臣のさばかりめでたき御勢にて嚴しう罵り給ふなれど、

○殿　薫。
○かの御事云々　中の君の事は言ふこと勿れとなり。
○彼　中君。
○此　浮舟。
○宜しう云々　以下匂宮の性を謂ふ。
○御車　母君より御迎の車。
○しさしたるものども　縫ひかけたるものども。
○殿　薫君。

若君生れ給ひて後は、こよなくぞおはしますなる。かゝる賢しら人どものおはせで、御心長閑に賢うもてなして、おはしますにこそはあゝめれ。」と云ふ。(女房)「殿だにまめやかに思ひ聞え給ふ事變らずば、劣り聞え給ふべき事かは。」と云ふを、君少し起きあがりて、(浮舟)「いと聞きにくき事。よその人にこそ劣らじとも如何にとも思はめ、かの御事な掛けても言ひそ。漏り聞ゆる樣もあらば、傍痛からん。」など云ふ。何ばかりの親族にかはあらん。いとよくも似通ひたるけはひかな、と思ひ比ぶるに、心恥かしげにて、あてなる所は彼はいとこよなし。此は唯らうたげに、こまかなる所ぞいとをかしき。宜しう成り合はぬ所を見付けたらんにてだに、さばかりゆかしと思し染めたる人を、それと見てさて止み給ふべき御心ならねば、まして隈も無く見給ふに、如何でか之を我物にはなすべきと、わりなく思し惑ひぬ。物へ行くべきなゝめり。親はあるべし。如何で此處ならで、又は尋ね逢ふべき。今宵の程には又如何がすべきと、心も空になり給ひて、猶守り給へば、右近「いとねぶたし。昨夜もすゞろに起き明してき。つとめての程にも、これは縫ひてん。急がせ給ふとも、御車は日たけてぞあらん。」と云ひて、しさしたる物ども取り具して、几帳に打ち懸けなどしつゝ、轉寢の樣に寄り臥しぬ。君も少し奥に入りて臥す。右近北面に行きて誓しありてぞ來たる。君の跡近く臥しぬ。ねぶたしと思ひければ、いと疾う寢入りぬる氣色を見給ひて、又せん樣も無ければ、忍びやかに此格子を叩き給ふ。右近聞き付けて、「誰ぞ」と云ふ。聲づくり給へば、あてなる咳と聞き知りて、殿のおはしたるにやと思ひて、起きて出でたり。(匂)「まづこれ開けよ。」との給へば、(右近)「怪しう覺無き程にも侍

○物へ渡り給ふべかなり云云　匂宮の薫のまねして斯くの給ふなり。
○仲信　薫君の家司。
○我　右近。
○近う寄りて　浮舟の居所になり。
○御供の人云々　薫の御供の人々は辨の尼の方に控ふる例なれば此處には知らぬなり。
○斯かる御有樣を云々　薫の斯く深切なる御志の程を浮舟君は知り給はぬようとなり。薫君と思ひて云ふなり。
○かの上　中の君。

るかな。夜は甚う更けて侍らん物を。」と云ふ。(匂)「物へ渡り給ふべかゝなりと、仲信が云ひつれば、驚かれつる儘に出で立ちて、いとこそわり無かりつれ。先づ開けよ。」との給ふ聲、いと能う眞似び似せ給ひて、忍びたれば、思ひも寄らず搔い放つ。(匂)「道にていとわりなく恐ろしき事のありつれば、怪しき姿になりてなん。火暗う爲せ。」との給へば、あないみじとあわて惑ひて、火は取り遣りつ。(匂)「我人に見すなよ。來たりとて、人驚かすな。」と、いと勞々じき御心にて、本より仄に似たる御聲を、唯かの御けはひに眞似びて入り給ふ。忌々しき事の樣との給へる、如何なる御姿ならんと、いとほしくて、我も隱ろへて見奉る。いと細やかになよ〳〵と裝束きて、かのかうばしき事も劣らず、近う寄りて、御衣ども脫ぎ、馴れ顏に打ち臥し給へば、(右近)「例の御座にこそ。」など云へど、物もの給はず。御衾參りて、(女房ニ)「哀なる夜のおはしまし樣かな。斯かる御有樣を御覽じ知らぬよ。しなど、さかしらがる人もあれど、(右近)「あなかま給へ。夜聲はさゝめくしもぞ、かしかまし き。」など云ひつゝ寢ぬ。女君はあらぬ人なりけりと思ふに、あさましういみじけれど、聲をだにせさせ給はず。いとつゝましかりし所にてだに、わりなかりし御心なれば、ひたぶるにあさまし。初よりあらぬ人と知りたらば、聊言ふ甲斐もあるべきを、夢の心地するに、やう〳〵其折のつらかりし事、年頃思ひ渡る樣の給ふに、此宮と知りぬ。愈恥かしく、かの上の思さん事など思ふに、又猛き事無ければ、限無う泣く。宮もなか〳〵にて、容易く相見ざらん事などを思すに、泣き給ふ。

○何事も生ける限の爲こそあれ　拾遺集に「戀ひ死なん後は何せん生ける身の爲こそ人は見まくほしけれ」
○男ども　供の者ども。
○時方　匂の宮の家司出雲の權守、前にいへり。
○怪しかりし折　二條院にての事なり。
○惚れ果てにければ　恍惚として本性もなきをいふ。
○御返り　母君への返答。
○この音なふ人　大内記。
○かたはならんとを　たは强め辭なり。

夜は唯明けに明く。御供の人來て聲作る、右近聞きて參れり。出で給はん心地も無く、飽かずあはれなるに、又おはしまさん事も難ければ、京には求め騷がるとも、今日ばかりは斯くてあらん。何事も生ける限の爲こそあれ。只今出でおはしまさば、誠に死ぬべく思さるれば、この右近を召し寄せて、(匂)「いと心地無しと思はれぬべけれど、今日は得出づまじうなんある。男どもは、このわたり近からん所に、よく隱ろへて侍へ。時方は京へ物して、山寺に忍びてなんと、附々しからん樣に、答などせよ。」との給ふに、いとあさましく呆れて、心も無かりける夜の過を思ふに、心地も惑ひぬべきを思ひ鎭めて、今は萬に溺ほれ騷ぐとも、甲斐あらじ物から無禮げなり。怪しかりし折に、いと深う思し入れたりしも、斯う遁れざりける御宿世にこそありけれ。人のしたる業かはと思ひ慰めて、(右近)「今日御迎にと侍りしを如何にせさせ給はんとする御事にか。斯う遁れ聞えさせ給ふまじかりける御宿世はいと聞えさせ侍らん方無し。折こそいとわりなく侍れ。今日は出でおはしまして、御志侍らば、のどかにも。」と聞ゆ。およすけても言ふかな、と思して、(匂)「我は月頃物思ひつろに惚れ果てにければ、人のもどかんも知らず、ひたぶるに思ひなりにたり。少しも身の事を思はゞ、斯からん人の斯かるありきは思ひ立ちなんや。御返りには、今日は物忌など云へかし。人に知らるまじき事を、誰が爲にも思へかし。他事は甲斐なし。」との給ひて、此人の世に知らず、哀に思さるゝ儘には、萬の譏も忘れ給ひぬべし。右近出でゝ、この音なふ人に、(右近)「かくなんの給はするを、猶いと片端ならんとを申させ給へ。あさましう珍らかなる御有樣は、さ思し召すとも、かゝる御供の人どもの御心にこそあらめ。如何

○時方と云々　右近の御供人の中にて時方を尋ぬるなり。
○さなんと傳ふ　匂宮の仰をしかゝと傳へしなり。
○身を捨てゝなん　御供つかまつれり。
○木幡山　京より此處に來る途中にある山。
○石山に今日詣でさせんとて云々　前に物行かんとありし註なり。
○此人々　御達。
○清まはりて　潔齋して。
○其許に云々　其許先づ手水を使へ給へとなり。其許は浮舟を指しての給ふ。

で斯う心幼うは率て奉り給ひしぞ。無禮なる事を聞えさする山賤なども侍らましかば、如何ならまし。」と云ふ。內記は實にいと煩はしくもあるかなと思ひ立てり。（右近）「時方と仰せらるるは誰にか。」さなんと傳ふ。笑ひて、（時方）「勘へ給ふ事どもの恐ろしければ、然らずとも逃げて罷ンでぬべし。まめやかには疎ならぬ御氣色を見奉れば、誰も〳〵身を捨てゝなん。よし〳〵宿直人も皆起きぬなり。」とて、急ぎ出でぬ。右近人に知らすまじうは、如何がはたばかるべきと、わりなう覺ゆ。人々起きぬるに、（右近）「殿は然る樣ありて、いみじう忍びさせ給ふ氣色見奉れば、道にていみじき事のありけるなゝんめり。御衣どもなど、よさり忍びて持て參るべくなん仰せられつる。」など云ふ。御達（御達）「あなむくつけや。木幡山はいと恐ろしかゝなる山ぞかし。例の御先も追はせ給はず、窶れておはしましけんよ。あないみじや。」と云へば、（右近）「あなかま〳〵。下衆などの塵ばかりも聞きたらんに、いといみじからん。」と云ひ居たる、心地おそろし。生憎に殿の御使のあらん時、如何に云はんと、初瀨の觀音、今日事無くて暮し給へと、大願をぞ立てける。

石山に今日詣でさせんとて、母君の迎ふるなりけり。この人々も皆精進し、清まはりてあるに、（御達）「さらば今日は得渡らせ給ふまじきなゝめりな。いと口惜しき事。」といふ。日高くなれば、格子など上げて、右近ぞ近く仕うまつりける。母屋の簾は皆おろし渡して、物忌など書かせて附けたり。母君もや自らおはするとて、夢見騷がしかりつと言ひ做すなり。御手水など參りたる樣は、例の樣なれど、まかなひ目覺ましう思されて、（匂）「其許に洗はせ給はゞ。」との給ふ。女いと樣好う心憎き人を見習ひたるに、時の間も見ざらんは死

○かの上　中の君。
○知らぬを　匂宮は浮舟の俗姓を知り給はぬをなり。
○迎の人來たり　母君の方より石山へ行く迎の人の來たるなり。
○此人々　女房たち。
○返事　母君への返事。
○人々　母君よりの迎の人。
○見れども〳〵飽かず　古今集に「春霞たなびく山の櫻花見れども飽かぬ君にぞありける」
○對の御方　中君。
○大殿の君　六君。

ぬべしと思し焦るゝ人を、志深しとは斯かるを謂ふにやあらんと思ひ知らるゝにも、怪しかりける身かな。誰も物の聞えあらば、如何に思さんと、先づかの上の御心を思ひ出で聞ゆれど、（匂）「知らぬを、返す〳〵いと心憂し。猶あらん儘にの給へ。いみじき下衆と云ふとも、愈なん哀なるべき。」と、わり無う問ひ給へど、その答は絶えてせず。他事はいとをかしく氣近き樣にいらへ聞えなどして、靡きたるを、いと限無うらうたしとのみ見給ふ。日高くなる程に、迎の人來たり。車二、馬なる人々の例の荒らかなる七八人、男ども多く、品々しからぬけはひ、囀りつゝ入り來たれば、人々傍痛がりつゝ、あなたに隱れよと言はせなどす。右近、如何にせん。殿なんおはすると言ひたらんに、京に然ばかりの人のおはしおはせず、自ら聞き通ひて、隱れ無き事もこそあれ、と思ひて、此人々にも殊に言ひ合せず、返事書く。（右近消息）「昨夜より穢れさせ給ひていと口惜しき事を思ひ歎くめりしに、今宵夢見騷がしく見えさせ給へれば、今日ばかり愼ませ給へとてなん、物忌にて侍る。返す〳〵口惜しく、物の妨のやうに見奉り侍る。」と書きて、人々に物など食はせて遣りつ。尼君にも今日は物忌にて、渡り給はぬと言はせたり。

例は暮し難くのみ、霞める山際を眺め佗び給ふに、暮れ行くは、佗しくのみ思し入らるゝ人に引かれ奉りて、いとはかなう暮れぬ。紛るゝ事無く、のどけき春の日に、見れども〳〵飽かず、其事ぞと覺ゆる隈なく、愛敬づき懷かしくをかしげなり。然るは、かの對の御方には劣りたり。大殿の君の盛に匂ひ給へるあたりにては、こよなかるべき程の人を、類なく思さるゝ程なれば、まだ知らずをかしとのみ見給ふ。女は又大將殿をいと清げに、又斯か

○硯引き寄せて云々　匂宮が。
○心より外に得見ざらん程は　我心には切々通ひ見んとは思へど若し心にまかせて見る能はざらん時はとなり。
○涙落ちぬ　匂宮の樣なり
○明日知らぬ命なりけり　戀ひも死ぬべければとなり
○萬に謀らん程　今より後通ひ給はん事に就て宣ふなり。
○心をば云々　命のみ定め無くて心は變らぬ世の習ならば君の御心をも疑ひ歎くまじ。
○大將　薫大將。
○大夫　時方。
○后の宮　明石中宮。
○内　帝を申すなり。
○身の爲　我身(中宮)の爲

かる人あらんやと見しかど、こまやかに匂ひ清らなる事は、こよなくおはしけりと見る。硯引き寄せて手習などし給ふ。いとをかしげに書きすさび、繪などを見所多く書き給へれば、若き心地には、思も移りぬべし。(匂)「心より外に得見ざらん程は、之を見給へよ。」とて、いとをかしげなる男女(をとこをんな)、諸共に添ひ臥したる形(かた)を畫(か)き給ひて、(匂)「常に斯くてあらばや。」などの給ふも、涙落ちぬ。

(匂)「長き世を、賴めても猶、悲しきは、唯明日知らぬ、命なりけり。いと斯う思ふこそゆゝしけれ。心に身をも更に得任せず、萬に謀(たばか)らん程、誠に死ぬべくなん覺ゆる。つらかりし御有樣を、なか〳〵何に尋ねけん。」などの給ふ。女濡し給へる筆を執りて、

(浮舟)「心をば、歎かざらまし、命のみ、定め無き世と、思はましかば。」

とあるを、變らんをば怨めしう思ふべかりけりと見給ふにも、いとらうたし。(匂)「如何なる人の心變りを見習ひて。」など、ほゝゑみて、大將の此所に渡し初め給ひけん程を、返す返すゆかしがり給ひて問ひ給ふを、苦しがりて、(浮舟)「え言はぬ事を、斯うの給ふこそ。」と打怨じたる樣も若びたり。自(おのづか)らそれは聞き出でんと思す物から、言はせまほしきぞわりなきや。

夜さり京へ遣しつる大夫參りて、右近に逢ひたり。(時方)『后の宮よりも御使參りて、「左の大臣もむつかり聞えさせ給ひて、人に知られさせ給はぬ御ありきは、いと輕々しく無禮(なめ)なる事もあるを、凡て内などに聞し召さん事も、身の爲なんいとからき。」と、いみじく申させ給ひけり。東山に聖(ひじり)御覽じにとなん、人には物し侍りつる。』など語りて、(時方)「女こそ罪深うおはするものにはあれ。すゞろなる見處(けさう)の人をさへ惑はし給ひて、空言(そらごと)をさへせさせ給ふよ。」と云へば、(右近)「聖の名をさへ付け聞えさせ給ひてければ、いと善し。私の罪もそれにて滅し給ふらん。誠にいと怪しき御心の、實に如何で習はせ給ひけん。豫て斯うおはしますべしと、承はらましにも、いと添ければ、たばかり聞えさせてまし物を、奥(おく)無き御ありきにこそは。」と扱ひ聞ゆ。參りて然(さ)なんとまねび聞ゆれば、實に如何ならんと思し遣るに、(匂)「處狹き身こそわびしけれ。輕らかなる程の殿上人などにて、暫しあらばや。如何がすべき。斯う包むべき人目も得憚り敢ふまじくなん。大將も如何に思はんとすらん。さるべき程とは云ひながら、怪しきまで、昔より睦しき中に、かゝる心の隔ての知られたらん時、恥かしう、又如何にぞや。世の喩に言ふ事もあれば、待遠(まちどほ)なる我が怠をも知らず、怨みられ給はんをさへなん思ふ。夢にも人に知られ給ふまじき樣にて、此處ならぬ處に率(ゐ)て離れ奉らん。」とぞの給ふ。今日さへ斯くて籠り居給ふべきならねば、出て給ひなんとするにも、袖の中にぞ留め給へらんかし。明け果てぬ先にと、人々欺(しはぶ)き驚かし聞ゆ。妻戸に諸共に率ておはして、得出で遣り給はず。

(匂)「世に知らず、惑ふべきかな、先に立つ、涙も道を、搔(くら)き昏しつゝ。」

女も限無く哀と思ひけり。

(浮舟)「涙をも、程無き袖に、堰き兼ねて、如何に別を、止(とど)むべき身ぞ。」

風の音もいと荒(あら)ましう、霜深き曉に己がきぬ〴〵も、冷(ひや)になりたる心地して、御馬に乘

○見處の人　側あたりの人
○聖の名をさへ云々　聖御覽じにと言ひしに付けて斯く言ふなり。
○奥無き　遺慮無き。
○處狹き身こそ云々　以下浮舟にの給ふなり。
○さるべき程　親密なるべき仲。
○待遠なる云々　薫が絶間勝に捨て措きし怠を思ひ知らで御身に斯る事あるを怨み給ふべしとなり。
○袖の中にぞ　古今集に「飽かざりし袖の中にや入りにけん我が魂のなき心地する」
○涙をも云々　涙をすら狹き袖に堰き兼ぬれば此歎ならぬ身は如何にして別を止めん。
○已がきぬ〴〵も　古今集

に「しのゝめのほがら〳〵と明けゆけば己がきぬ〴〵なるぞわびしき」
○五位二人　大内記と時方と。

り給ふ程、引き返すやうにあさましけれど、御供の人々、いと戯れにくしと思ひて、唯急がしに急がし出づれば、我にもあらで出で給ひぬ。この五位二人なん、御馬の口には侍ひける。さかしき山越え果てゝぞ、各馬には乘る。汀の氷を踏み鳴らす馬の足音さへ、心細く物悲し。昔もこの道にのみこそは、かゝる山ぶみはし給ひしかば、怪しかりける里の契かなとおぼす。

二條院におはしまし着きて、女君のいと心憂かりし御物隱しもつらければ、心安き方に大殿籠りぬるに　寢られ給はず。いと淋しきに、物思増されば、心弱く對に渡り給ひぬ。何心も無く、いと清げにておはす。珍しくをかしと見給ひし人よりも、又これは猶有り難き樣はし給へりかしと、見給ふ物から、いとよく似たるを思ひ出で給ふも、胸塞がれば、痛く物思したる樣にて、御帳に入りて大殿籠る。女君も率て入り聞え給ひて、(匂)「心地こそいと惡しけれ。如何ならんとするにかと、心細くなんある。麝はいみじく哀と見置い奉るとも、御有樣はいと斯くは變りなんかし。人の本意は必ず叶ふなればとの給ふ。怪しからぬ事をも、まめやかにさへの給ふかなと思ひて、(中君)「かう聞きにくき事の漏り聞えたらば、如何やうに聞え做したるにかと、人も思ひ寄り給はんこそあさましけれ。心憂き身には、すゞろなる事も、いと苦しく。」とて背き給へり。宮もまめだち給ひて、(匂)「誠につらしと思ひ聞ゆる事もあらんは、如何が思さるべき。麝は御爲には疎なる人かは、人も有り難しなど咎むるまでこそあれ。人にはこよなう思ひ貶し給ふべかゝめり。それも然るべきにこそはと、ことわらるゝを、隔て給ふ御心の深きなん、いと心憂き。」との給ふにも、宿

○對　中の君の居所なり。
○人　薫を指す。

○まめやかなるを云々　以下中君の心中なり。
○物はかなき樣にて云々　中君は宮に逢ひ給ひし時も假初なる樣なりければ薫君へも心輕からんと宮の推し量り給ふにやとなり。
○其心寄せを云々　薫の志の深切なるを思ひ知りて親しくし始めたる過ばかりに宮に疑はれて覺め劣るとなり。
○かの人　浮舟。
○ありや無しやを聞かぬ間は　匂宮の心中なり。薫君と中君との間の事の實否を聞かぬ間は。
○大宮　明石中宮。

世の疎ならで、尋ね寄りたるぞかし、と思し出づるに、涙ぐまれぬ。まめやかなるをいとほしう、如何やうなる事を聞き給へるならんと、驚かるゝに、答へ聞え給はん事も無し。物はかなき樣にて見初め給ひしに、何事をも輕らかに推し量り給ふにこそはあらめ。すゞろなる人を導にて、その心寄せを思ひ知り始めなどしたる過ばかりに、覺え劣る身にこそ、と思し續くるも、萬悲しくて、いとゞらうたげなる御けはひなり。かの人見付けたりとは、暫し知らせ奉らじと思せば、異樣に思はせて怨み給ふを、唯此大將の御事を、まめまめしくの給ふとおぼすに、人や空言を確なるやうに聞えたらんなどおぼす、ありや無しやを聞かぬ間は、見え奉らんも恥かし。内裏より大宮の御文あるに、驚き給ひて、猶心解けぬ御氣色にて、あなたに渡り給ひぬ。(大宮消息)「昨日の覺束無さを、惱ましく思されたゝなる、宜しくは參り給へ。久しうもなりにけるを。」などやうに聞え給へれば、騷がれ奉らんも苦しけれど、誠に御心地も違ひたるやうにて、其日は參り給はず。上達部など數多參り給へど、御簾の内にて暮し給ふ。

夕つ方右大將參り給へり。「こなたにを。」とて、打解けながら對面し給へり。(薫)「惱ましげにおはしますと侍りつれば、宮にもいと覺束無く思し召してなん。如何やうなる御惱にか。」と聞え給ふ。見るからに心騷のいとゞ増されば言少にて、聖だつと云ひながら、ことなかりける山伏心かな。さばかり哀なる人を然て置きて、心長閑に、月日を待ち佗びさすらんよ、と思す。例は然しもあらぬ事の序にだに、我はまめ人と持て做し、名のり給ふを妬がり給ひて、萬にの給ひ破るを、斯かる事見顯はいたるを、如何にの給はまし。されど

○こなたにを　をは強め辭にて、薫に此方へ入り給へとなり。
○聖だつと云ひながら　以下匂宮の心中に薫君を謂ひ給ふなり。

○恥かしげなる人なりかし　匂宮の葉を然思すなり。
○我有樣を如何に思ひ比べけん　浮舟はなり。
○此人　浮舟。
○石山　石山詣。
○御文　匂宮の浮舟に遣はす文なり。
○更返りて懇がる　更に元に返りて親しく物言ふ。
○月立ちぬ　正月も過ぎて二月となれるなり。

○此處　浮舟の住居。

○女　浮舟。
○如何で云々　以下浮舟の心中なり。
○あながちなりし人　匂宮を指す。
○如何に聞きて思さん　我今葉君に逢はゞ匂宮聞きて如何思さん。

さやうの戯言も掛け給はず、いと苦しげに見え給へば、(葉)「いと不便なる事かな。おどろ〳〵しからぬ御心のさすがに日數經るは、いと惡しき事に侍る。御風よく繕はせ給へ。」など、まめやかに聞え置きて出で給ひぬ。恥かしげなる人なりかし。我有樣を如何に思ひ比べけん、など、樣々なる事に付けつゝも唯此人を、時の間忘れず思し出づ。

彼所には石山も止りて、いと徒然なり。御文には、いみじき事を書き集め給ひて遣はす。それだに心安からず。時方と召しゝ大夫の從者の、心も知らぬしてなん遣りける。右近が舊く知れりける人の、殿の御供にて尋ね出でたる、更返りて懇がると、友だちには言ひ聞かせたり。萬右近ぞ空言し習ひける。月も立ちぬ。斯う思しいらるれど、おはします事はいとわりなし。斯うのみ物を思はゞ、更に得ながらふまじき身なゝめりと、心細さを添へて歎き給ふ。

大將殿少しのどかになりぬる頃、例の忍びておはしたり。寺に佛など拜み給ふ御誦經せさせ給ふ。僧にもの給ひなどして、夕つ方此處には忍びたれど、これはわりなく窶し給はず。烏帽子直衣の姿、いとあらまほしく清げにて、歩み入り給ふより、恥かしげに用意殊なり。女如何で見え奉らんとすらんと、空さへ恥かしく恐ろしきに、あながちなりし人の御有樣、打思ひ出でらるゝに、又此人に見え奉らんを、思ひ遣るなんいみじう心憂き。

(匂)「我は年頃見る人をも、皆思ひ變りぬべき心地なんする。」との給ひしを、實にその後御心地苦しとて、何處にも〳〵、例の御有樣ならで、御修法など騷ぐなるを聞くに、又如何に聞きて思さんと思ふもいと苦し。此人はた、いと氣はひ異に、心深く、なまめかしき樣して、久しかりつる程の怠などの給ふも、言多からず。戀し悲しと下り立たねど、常に相見ぬ戀の苦しさを、樣よき程に打の給へる、いみじく言ふには勝りて、いと哀と人の思ひぬべき樣を占め給へる人柄なり。艶なる方はさる物にて、行末長く人の賴みぬべき心ばへなど、こよなく優り給へり。思はずなる樣の心ばへなど、漏り聞かせたらん時、斜ならずいみじくこそあゝべけれ。怪しう現心も無う、思しいらるゝ人を哀と思ふも、それはいとあるまじく輕き事ぞかし。此人に憂しと思はれて、忘れ給ひなん心細さは、いと深う沁みにければ、思ひ亂れたる氣色を、月頃にこよ無う物の心知り、ねび增さりにけり。徒然なる住處の程に、思ひ殘す事はあらじかしと見給ふも、心苦しければ、常よりも心留めて語らひ給ふ。(葉)「造らずる所やう〳〵宜しうし做してけり。一日なん見しかば、此處よりは氣近き水に、花も見給ひつべし。三條宮も近き程なり。明暮覺束無き隔ても、自ら有るまじきを此春の程に、さりぬべくは渡してん。」と思ひの給ふも、かの人の長閑なるべき所、思ひ設けたりと、昨日もの給へりしを、かゝる事も知らで、さ思すらんよと、哀ながらも其方に靡くべきにはあらずかしと思ふからに、ありし御樣の面影に覺ゆれば、我ながらもうたて心憂の宮と、思ひ續けて泣きぬ。(葉)「御心ばへの斯からでおいらかなりしこそ、長閑に嬉しかりしか。人の如何に聞え知らせたる事のある。少しも疎ならん志にては、斯うまで參り來べき身の程、道の有樣にもあらぬを。」など、ついたち頃の夕月夜に少し端近く臥して眺め出し給へり。男は過ぎにし方の哀をも思し出でゝ、女は今より添ひたる身の憂さを歎き加へて、互に物思はし。山の方は霞隔てゝ、寒き洲崎に立てる鷺の姿も、處からはいと

○下り立たねど　口に出してはの給はねど。

○思はずなる樣の云々　匂宮の御事なり。以下浮舟の思し遣らす心樣なり。
○怪しう現心もなく思しいらるゝ人　匂宮。
○月頃に云々　葉が浮舟の樣を見給ひての心中なり。
○造らする所　京へ渡さんとての京の家作をいふ。
○かの人の　匂宮が。以下浮舟の心中なり。
○其方　匂宮の方。

○ついたち頃　二月のはじめなり。三四日ころなるべし。

○見給ふ度毎に　薫の見給ふ度毎になり。
○戀しき人　大君。
○危ぶむ　橋の緣語詔むを含ませたり。
○絶間のみ云々　朽ちせじと仰せらるれど絶間のあるは危しとの意。
○今更なり　立留りては今更に遠慮無きなり。
○心安き樣にてこそ　京へ浮舟を移らせて心安くて見んとなり。
○いと能うも云々　薫の浮舟を譽めたる心中なり。
○此宮　匂宮。
○折に合ひたる　時節に相應したる。
○物參りなどして　物食しなどし給ひて。
○嗣は文無しと云々　薫君の樣を云ふ。古今集に「春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠くるゝ」
○衣片敷き今宵もや　古今集に「さむしろに衣片敷き今宵もや我を待つらん宇治の橋姫」
○事しもこそあれ　さては薫も大方には思はざるよとなり。
○文　前夜題を賜はりて翌朝奉り給ふ詩。
○かの君も同じ程にて　薫君も同じ年頃にて。
○本　手本。
○公々しき方　政道の方。
○宮　匂宮。
○如何なる心地にて云々　繼に憶れたる折から如何にして詩を作り出しけんと。
○かの人御氣色にも云々　薫の浮舟を繼ふる氣色に驚き給ひければ。
○おはしましたり　匂宮が宇治へなり。
○友待つばかり消え殘りたる雪　春の雪の樣なり。
○何方も云々　内記も式部少輔も共に重要の官たり。
○彼處　浮舟の方。
○右近に消息したり　大内記匂宮の御使を右近に言ひ遣りたるなり。
○君も　浮舟も。

をかしう見ゆるに、宇治橋の遙々と見渡さるゝに、柴積船の所々に行きちがひたるなど、外にては目馴れぬ事どものみ、取り集めたる所なれば、見給ふ度毎に、猶そのかみの事の唯今の心地して、いと斯からぬ人を見かはしたらんだに、珍しき中の哀多く添ひぬべき程なり。況て戀しき人によそへられたるもこよなからず。やう〳〵物の心知り、都馴れ行く有樣のをかしきも、こよなく見優したる心地し給ふに、女は掻集めたる心の中に催さるゝ涙、ともすれば出で立つを、慰めかね給ひつゝ、

（薫）「宇治橋の、長き契は、朽ちせじを、危ぶむ方に、心騷ぐな。今見給ひてん。」との給ふ。

（浮舟）「絶間のみ、世には危き、宇治橋を、朽ちせぬ物と、猶頼めとや。」

前々よりもいと見捨て難く、暫しも立ち留らまほしく思さるれど、人の物言の安からぬに、今更なり。心安き樣にてこそ、など思し做して、曉に歸り給ひぬ。いと能うも大人びたりつるかなと、心苦しく思し出づること、ありしに增さりけり。

二月の十日の程に、内に文作らせ給ふとて、此宮も大將も參り合ひ給へり。折に合ひたる物の調どもに、宮の御聲はいとめでたくて、梅が枝など謠ひ給ふ。何事も人よりは、こよなう勝り給へる御樣にて、すゞろなる事思しいらるゝのみなん、罪深かりける。雪俄に降り亂れ、風など烈しければ、御遊疾く止みぬ。此宮の御宿直所に、人々參り給ふ。物參りなどして、打休み給へり。大將人に物の給はんとて、少し端近く出で給へるに、雪やう〳〵積り、星の光におぼ〳〵しきを、闇は文無しと覺ゆる匂有樣にて、「衣片敷き今宵もや」と打誦じ給へるも、はかなき事を口ずさびにの給へるも、怪しく哀なる氣色添へる人樣にて、いと物深げなり。事しもこそあれと、宮は寢たる樣にて、御心騷ぐ。疎には思はぬなゝめりかし。片敷く袖を我のみ思ひ遣る心地しつるを、同じ心なるも哀なり。佗しくもあるかな。かばかりなる本つ人を措きて、我方に優る思ひは、如何でか付くべきぞと、妬うおぼさる。

翌朝雪のいと高う積りたるに、文奉り給はんとて、御前に參り給へる御容、此頃いみじく盛りに清げなり。かの君も同じ程にて、今二三增さるけぢめにや、少しねび增される氣色用意などぞ、殊更にも作りたらんやうに、あてなる男の本にしつべく物し給ふ。帝の御聟にて飽かぬ事無しとぞ、世の人もことわりける。才なども、公々しき方も、後れずぞ、おはすべき。文講じ果てゝ、皆人罷んで給ふ。宮の御文を勝れたりと誦じ罵れど、何とも聞き入れ給はず、如何なる心地にて、かゝる事をも爲出づらんと、空にのみ思はし惚れたり。かの人の御氣色にも、いとゞ驚かれ給ひければ、あさましう謀りて、おはしましたり。京には友待つばかり消え殘りたる雪、山深く入る儘に、やゝ降り積みたり。常よりも、わりなき稀の細道を分け給ふ程、御供の人も、泣きぬばかり恐ろしう、煩はしき事さへ思ふ。しるべの内記は、式部の少輔をなん兼けたりける。何方も〳〵、事々しかるべき職ながら、いと附々しく引きあげなどしたる姿も、をかしかりけり。

彼處には、おはせんとありつれど、斯かる雪にはと、打解けたるに、夜更けて右近に消息したり。あさましう哀と、君も思へり。右近如何になり果て給ふべき御有樣にかと、且は

○若き人の云々　侍従なり。
○かの人　薫君。
○搔抱きて　匂宮の浮舟をなり。
○奉る　浮舟の御供になり。
○つと付きて　浮舟が匂宮になり。
○橘の云々　浮舟君我身を浮舟に寄せて詠めり。

苦しけれど、今宵はつゝましさも忘れぬべし。言ひ返さん方も無ければ、同じやうに、睦しく思いたる若き人の、心様も奥無からぬを語らひて、（右近）「いみじくわりなき事、同じ心に持て隠し給へ。」と云ひてけり。諸共に入れ奉る。道の程に濡れ給へる御衣の香の、處狹う匂ふも、持て煩ひぬべけれど、かの人の御氣はひに似せてなん、持て紛らはしける。夜の程に立ち歸り給はんも、なか〳〵なるべければ、此處の人目もいとつゝましさに、時方に謀らせ給ひて、河より遠なる人の家に、率ておはせんと構へたりければ、先立てゝ遣したりける。夜ふくる程に參れり。（時方）「いと能く用意して侍ふ。」と申さす。こは如何にし給ふ事にかと、右近もいと心あわたゞしければ、寢おびれて、起きたる心地もわなゝかれて、怪しき童部の雪遊したる氣はひの様にぞ慄ひ上りける。如何でかなども言ひ敢へさせ給はず、搔抱きて出で給ひぬ。右近は此處の後見に留りて、侍従をぞ奉る。いとはかなげなる物と明暮見出す小き船に乘り給ひて、さし渡り給ふ程遙ならん岸にしも漕ぎ離れたらんやうに、心細く覺えて、つと付きて抱かれたるも、いとらうたしと思す。有明の月澄み昇りて、水の面も曇無きに、（舟人）「これなん橘の小島。」と申して、御船誓しさし留めたるを見給へば、大きやかなる岩の様して、ざれたる常磐木の影繁れり。（匂）「かれ見給へ。いとはかなけれど、千年も經べき緑の深さを。」との給ひて、

（匂）「年經とも、變らん物か、橘の、小島の崎に、契る心は。」

（浮舟）「橘の、小島は色も、變らじを、此浮舟ぞ、行方知られぬ。」

○人の様　浮舟の艶なる様
○抱き給ひて　匂宮自身浮舟をなり。
○何人を斯く云々　此家の人々の心中に思ふなり。
○人の　浮舟の。
○女　浮舟。
○懷かしき程なる　着馴れたる。
○常に見給ふ人　中君又は大君。
○これさへ斯かるを云々　右近に恥かしきに又侍従にさへ殘無く知らるゝふとなり。
○我名漏すな　古今集に「犬上のとこの山なるいさら川いざと答へて我名もらすな」
○いと愛でたしと　侍従の心中なり。
○處得顔に居たり　時方がなり。
○聲引き縮め　宿守の様なり。
○答も得せず　時方の様なり。
○かの人　薫君。

折柄人の様に、をかしくのみ何事もおぼし做す。かの岸にさし着きて、おり給ふに、人に抱かせ給はんは、いと心苦しければ、抱き給ひて、助けられつゝ入り給ふを、いと見苦しく、何人を斯く持て騒ぎ給ふらんと見奉る。時方が叔父の因幡の守なるが、領ずる庄に、はかなう造りたる家なりけり。まだいと粗々しきに、網代屏風など、御覽じも知らぬしつらひにて、風も殊に障らず。垣の下に雪むら消えつゝ、今も搔曇りつゝ降る。日差出でゝ軒の垂氷の光り合ひたるに、人の御容もまさる心地す。宮も處狹き道の程に、輕らかなるべき程の御衣どもなり。女も脱ぎ滑させ給ひてしかば、細やかなる姿付、いとをかしげなり。引き繕ふ事も無く、打解けたる様を、いと恥かしく眩きまで清らかなる人に、差向ひたるよと思へど、紛れん方も無し。懷かしき程なる白き限を五つばかり、袖口裾の程までなまめかしく、色々に數多襲ねたらんよりも、をかしう着做したり。常に見給ふ人とても、斯くまで打解けたる姿などは、見習ひ給はぬを斯かるさへぞ珍らかにをかしう思されける。侍従もいと目安き若人なりけり。これさへ斯かるを殘無う見るよと、女君はいみじと思ふ。宮も（匂）「これは又誰ぞ。我名漏すなよ。」と口固め給ふを、いと愛でたしと思ひ聞えたり。此所の宿守にて住みける者、時方を主と思ひてかしづき歩けば、このおはします遣戸を隔てゝ處得顔に居たり。聲引き縮め畏まりて、物語しけるを、答も得せずをかしと思ひけり。（時方）「いと恐ろしく占ひたる物忌に因り、京の内をさへ去りて謹むなり。外の人寄すな。」と云ひたり。人目も絶えて心安く語らひ暮し給ふ。かの人の物し給へりけんに、斯くて見えけんかしと思し遣りて、いみじく怨み給ふ。二の宮をいとやんごと

○かの耳留め給ひし云々　葉君が「衣片敷き今宵もや」と誦し給ひし事は語り給はずとなり。
○客人の主　時方を指しての給ふ。
○然てな見えそや　然樣に主人顔して、宮仕する樣を宿守に見らるな。
○大夫　時方。

○木幡の里に馬はあれど君を思へば辛勞する意なり。拾遺集に「山城の木幡の里に馬はあれどかちよりぞ來る君を思へば」
○この中空を咎め給ふ　浮舟の意の一方ならぬを宮の怨み給ふなり。

○獨物忌云々　匂宮は獨物忌とたばかりて京を出で給ひしなるべし。
○濃き衣　紫の衣。
○君　浮舟。
○姫君　女一宮。
○之　浮舟。

○いとやんごとなききはの人多かれど　女一宮に仕ふる官女どもの中になり。

なくて、持ち奉り給へる有樣なども語り給ふ。かの耳留め給ひし一言は、の給ひ出でぬぞ憎きや。時方御手水御菓子など、取り次ぎて參るを御覽じて、(匂)「いみじくかしづかるめる客人の主、然てな見えそや。」と戒め給ふ。侍從色めかしき若人の心地に、いとをかしうと思ひて、この大夫とぞ物語して暮しける。雪の降り積れるに、我が住む方を見遣り給へば、霞の絶えぐに梢ばかり見ゆ。山は鏡を懸けたるやうに、きらきらと夕日に輝きたるに、昨夜分け來し道のわりなきなど、哀多う添へて語り給ふ。

(匂)「峯の雪、汀の氷、踏み分けて、君にぞ惑ふ、道は惑はず。」

(浮舟)「降り亂れ、汀にこほる、雪よりも、中空にてぞ、我は消ぬべき。」

と書き消ちたり。この「中空」を咎め給ふ。實に憎くも書きてけるかなと、恥かしくて引き破りつ。さらでだに見る甲斐ある御樣を、愈々あはれにいみじと、人の心に染められんと、盡し給ふ言の葉氣色言はん方なし。

御物忌二日とたばかり給へれば、心のどかなる儘に、互に哀とのみ深く思し增さる。右近は萬に例の言ひ紛らはして、御衣など奉りたり。今日は亂れたる髮少し梳らせて、濃き衣に紅梅の織物など、あはひをかしく着更へて居給へり。侍從も怪しき褶着たりしを鮮ぎたれば、その裳を取り給ひて、君に着せ給ひて、御手水參らせ給ふ。姫君に之を奉りたらば、いみじき物にし給ひてんかし。いとやんごとなき際の人多かれど、かばかりの樣したるは難くやと見給ふ。かたはなるまで遊び戲れつゝ暮し給ふ。忍びて率て隱してん事を、返す

○かの人に見えたらば　葉君に見えたらば惡しからん
○恨みても泣きても　古今集に「恨みても泣きても言はん方ぞ無き鏡に見ゆる影ならずして」
○いみじく思すめる人　葉君を指す。

○彼處にも　宇治にも。

○我心にも　浮舟の心なり。
○あながちなる人　匂宮。
○山路思し絶えて　匂宮の宇治へおはする寄思し絶えて。
○親の養ふ靈は云々　御母中宮の嚴しく誡め給ふに因りて斯く思すなり。拾遺集に「垂乳根の親のかふこの繭ごもりいぶせくもあるか妹に逢はずて」
○空さへ昏るゝ　涙に昏るるに空さへ昏るゝ。

〳〵の給ふ。其程かの人に見えたらばと、いみじき事どもを誓はせ給へば、いとわりなき事と思ひて、答もやらず、涙さへ墮つる氣色、更に目の前にだに思ひ移らぬなゝめりと、胸痛うおぼさる。恨みても、泣きても、萬にの給ひ明して、夜深く率て歸り給ふ。例の抱き給ふ。(匂)「いみじく思すめる人は、斯うはよもあらじよ。見知り給ひたりや。」との給へば、實にと思ひて、うなづきて居たる、いとらうたげなり。右近妻戸放ちて入れ奉る。やがてこれより別れて出で給ふも、飽かずいみじと思さる。

かやうの歸さは、猶二條院にぞおはします。いと惱ましうし給ひて、物なども絶えて聞し召さず、日を經て青み瘠せ給ふ御氣色變るを、內裏にも何處にも思ほし歎くに、いとゞ物騷がしくて、御文だに細には得書き給はず。彼所にもかの賢しき乳母、女の子產む所に出でたりける、歸り來にければ、心安くも得見ず。かく怪しき住居を、唯かの殿のもてなし給はん樣を、ゆかしく待つ事にて、母君も思ひ慰めたるに、忍びたる樣ながらも、近く渡してんことを思しなりにければ、いと目安く嬉しかるべき事に思ひて、やうやう人求め、童の目安きなど迎へておこせ給ふ。我心にもそれこそはあるべき事に、初より待ち渡れとは思ひながら、あながちなる人の御事を思ひ出づるに、恨み給ひし樣、の給ひし事ども、面影につと添ひて、聊まどろめば、夢に見え給ひつゝ、いとうたてあるまで覺ゆ。

雨降り止まで、日頃多くなる頃、いとゞ山路思し絶えて、わりなく思されければ、親の養う靈は處狹き物にこそ、と思すも忝なし。盡きせぬ事ども書き給ひて、

(匂)「眺め遣る、其方の雲も、見えぬまで、空さへ昏るゝ、頃のわびしさ。」

○いと重くなどはあらぬ　浮舟の性質なり。
○斯かる憂き事云々　匂宮の密通の事を薫の聞き給ひて。
○かゝを程こそあらめ　今こそかくあれ後々はかくもあらじとなり。
○かの上　中君。
○かの人　薫君。
○かの殿　薫君。
○言多かりつるを　言多かりつる匂宮の御文をなり。
○移りにけり　浮舟は匂宮に心移りたりとなり。
○猶この御事　匂宮との密通の事。
○心一つに云々　右近は已が心一つにては心細かりしに侍従と語らふ程に空言言はんにも便ありとなり。

筆に任せて書き亂り給へるしも、見處あり、をかしげなり。殊にいと重くなどはあらぬ若き心地に、いと斯かる心を思ひもまさりぬべけれど、初より契り給ひし樣も、さすがに彼は猶いと物深う、人柄のめでたきなども、世の中を知りにし初なればにや。斯かる憂き事聞きつけて、思ひ疎み給ひなん世には、如何でかあらん。何時しかと思ひ惑ふ親にも、思はずに心づき無しとこそは持て煩はれめ。かく心いられし給ふ人はた、仇なる御心の本性とのみ聞きしかば、かゝる程こそあらめ。又斯うながらも京に隱し据ゑ給ひ、ながらへても思し數まへんに付けては、かの上の思さん事、萬隱れ無き世なりければ、怪しかりし夕暮のしるべばかりにだに、かう尋ね出で給ふめり。況て我が有樣のともかくもあらんを聞き給はぬ樣はありなんや、と思ひ廻るに、我心も疵ありて、かの人に疎まれ奉らん、猶いみじかるべし、と思ひ亂るゝ折しも、かの殿より御使あり。これかれと見るもいとうたてあれば、猶言多かりつるを見つゝ臥し給へれば、侍從右近見合せて、猶移りにけりと言はぬやうにて言ふ。（侍從）「道理ぞかし。殿の御容を、類おはしまさじと見しかど、この御有樣はいみじかりけり。打亂れ給へる愛敬よ。麿ならばかばかりの御思を見る〳〵、得かくてあらじ。后の宮にも參りて、常に見奉りてん。」と云ふ。（右近）「うしろめたの御心の程や。殿の御有樣に優り給ふ人は誰かはあらん。容などは知らず、御心ばへ氣はひなどよ。猶この御事は、いと見苦しきわざかな。如何がならせ給はんとすらん。」と、二人して語らふ。心一つに思ひしよりは、空言も便出で來にけり。後の御文には、（薫消息）「思ひながら日頃になる事、時々はそれよりも驚かい給はんこそ、思ふ樣ならめ。疎なるにやは。」

○宮はいと多かるを　匂宮の御文はいと言多かるをなり。
○彼　匂宮への御返事。
○里の名を　憂しをの意。
宇治憂し音近ければ云ふ。
○外に絶え籠りて云々　薫君に迎へられて匂宮には絶えて已みなんも口惜しからんとなり。
○まじりなば　古歌に「白雲の晴れぬ雲井にまじりなば何れをそれと君は尋ねん」
○まめ人　薫君を謂ふ。
○徒然と云々　徒然と淋しき雨中に身の上の來し方行く先を思ひ續くれば愈涙も袖に落ち增さるとなり。
○女宮　女二宮。
○年經ぬる人　浮舟を指す
○例の人ならで　田家して
○眺　長雨を掛けたり。

など、端書に、

（薫）「水增さる、遠の里人、如何ならん、晴れぬ眺に、搔き暮す頃。

常よりも、思ひ遣り聞ゆる事增さりてなん。」と、白き色紙にて、立文なり。御手もこまかにをかしげならねど、書き樣故々しく見ゆ。宮はいと多かるを、小く結び做し給へる、樣々をかし。先づ彼を人見ぬ程にと聞ゆ。（浮舟）「今日は得聞ゆまじ。」と、羞らひて、手習に、宮の書き給へりし繪を、時々見て泣かれけり。ながらへてあるまじき事ぞと、と樣かう樣に思ひ做せど、外に絶え籠りて已みなんは、いと哀に覺ゆべし。

（浮舟）「搔き昏し、晴れせぬ峰の、雨雲に、浮きて世を經る、身をも爲さばや。

まじりなば。」と聞えたるを、宮はよゝと泣かれ給ふ。さりとも戀しと思ふらんかしと思し遣るにも、物思ひて居たらん樣のみ、面影に見え給ふ。まめ人は長閑に見給ひつゝ、哀如何に眺むらんと思ひ遣りて、いと戀し。

（浮舟）「徒然と、身を知る雨の、小止まねば、袖さへいとゞ、水嵩增さりて。」

とあるを、打も置かず見給ふ。

女宮に物語など聞え給ひての序に、（薫）「無禮しともや思さんと、包ましながら、さすがに年經ぬる人の侍るを、怪しき所に捨て置きて、いみじく物思ふなるが心苦しさに、近う呼び寄せてと思ひ侍る。昔より異樣なる心ばへ侍りし身にて、世の中を總て例の人ならで見過してんと思ひ侍りしを、かく見奉るに付けて、ひたぶるにも捨て難ければ、ありと人に

○造りたる所に云々　藁の思ふ心をいふなり。
○内記が知る人の親　内記の妻の父。
○宮　匂宮。
○かくい　かくしの音便。
○斯くなんと思ふ　浮舟に内意を告げ給ふなり。
○聞ゆ　浮舟より匂宮になり。
○さそふ水らば　古今集に「わびぬれば身を浮草の根を絶えてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ」
○少將の妻　常陸守の女。

も知らせざりし人の上さへ、心苦しう罪得ぬべき心地して。」など、聞え給へば、(二宮)「如何なる事に心置く物とも知らぬを。」と、いらへ給ふ。(藁)「内になど、悪し樣に聞し召さする人や侍らんと、世の人の物言ぞ、いと味氣無く怪しからず侍るや。されどそれは、さばかりの數にだに侍るまじ。」など聞え給ふ。

造りたる所に渡してんと思し立つに、かゝる料なりけりなど、華やかに言ひ做す人やあらんなど苦しければ、いと忍びて障子貼らすべき事など、人しもこそあれ、この内記が知る人の親、大藏の大夫なる者に、睦しく心安き儘に、の給ひ付けたりければ、聞き次ぎて、宮には隱れ無く聞えけり。繪師どもなども、御隨身どもの中にある睦しき殿人などを撰りて、さすがに態となんせさせ給ふ、と申すに、いとゞ思し騷ぎて、我御乳母の遠き受領の妻にて下る家、下つ方にあるを、(匂)「いと忍びたる人暫し隱いたらん。」と、語らひ給ひければ、如何なる人にかはと思へど、大事と思したるに、忝ければ、(受領)「さらば」と聞えけり。之を設け給ひて、少し御心のどめ給ふ。此月の晦方に下るべければ、やがて其日渡さんと思し構ふ。斯くなんと思ふ。ゆめ〳〵、と言ひ遣り給ひつゝ、おはしまさん事はいとわりなくある中に、此處にも乳母いと賢しければ、難かるべき由を聞ゆ。

大將殿は、卯月の十日となん定め給へりける。さそふ水あらばとは思はず、いと怪しく如何にし做すべき身にかあらんと、浮きたる心地のみすれば、母の御許に暫し渡りて、思ひ運らす程あらんと思せと、少將の妻、子産むべき程近くなりぬとて、修法讀經など隙無く騷げば、石山にも得出でたつまじ。母ぞこち渡り給へる。乳母出で來て、(乳母)「殿より人

○乳母が心一つには　乳母が一存にて用意せんには。
○君　浮舟。
○八重立つ山に籠るとも　古歌に「白雲の八重立つ山に籠るとも思ひ立ちなば尋ねざらめや」
○石山にも云々　櫻姫などにはあらざるべし、月の障とて石山詣も止り給ひにければとの意。
○伏目なり　浮舟の態なり
○尼君　辨尼。
○故姫君　大君。
○宮の上　中君。
○かく渡り云々　藁君が浮舟を迎へ給ふ由なれば。

々の裝束なども、こまかに思し遣りてなん。如何で清げに、何事もと思ひ給ふれど、乳母が心一つには、怪しくのみぞ爲出で侍らんかし。」など、言ひ騷ぐが心地よげなるを見給ふにも、君は怪しからぬ事どもの出で來て、人笑へならば、誰も〳〵如何に思はん。あや憎にの給ふ人はた、八重立つ山に籠るとも、必ず尋ねて、我も人も徒になりぬべし。猶心安く隱れなん事を思へど、今日もの給へるを、如何にせん、と心地悪しく臥し給へり。何どか斯く例ならず、甚く靑み瘠せ給へる、と驚き給ふ。(乳母)「日頃怪しくのみなん。はかなき物も聞し召さず、惱ましげにせさせ給ふ。」と云へば、(母)「怪しき事かな。靈氣などにやあらん。」と、如何なる御心地ぞと思へど、「石山も止り給ひにきかし。」と云ふも、傍痛ければ、伏目なり。暮れて月いと明し。有明の空を思ひ出づる涙のいと留め難きは、いと怪しからぬ心かなと思ふ。母君昔物語などして、あなたの尼君呼び出でゝ、故姫君の御有樣心深くおはして、さるべき事も思し入れたりし程に、目に見す〳〵消え入り給ひにし事など語る。(辨)「おはしまさましかば、宮の上などのやうに、聞え通ひ給ひて、心細かりし御有樣どもの、いとこよなき御幸にぞ侍らましかし。」と云ふにも、我女は他人かは。思ふやうなる宿世のおはしはてば、劣らじを、など思ひ續けて、(母)「世と共に此君に付けては、物をのみ思ひ亂れし氣色の、少し打弛びて、かく渡り給ひぬべかゝめれば、此處に參り來ること必ずしも、殊更には思ひ立ち侍らじ。かゝる對面の折々に、昔の事も心のどかに、聞え承らまほしけれども。」など語らふ。(辨)「忌々しき身とのみ思ひ給へ沁みにしかば、こまやかに見え奉り聞えさせんも、何かはとつゝましくて、過し侍りつるを、打捨てゝ渡

○かく尋ね聞えさせ給ふしも云々　薫君の斯く尋ね聞え給ふは輕々しき業なる事にはあらずと隨分御仲人を申したりとなり。
○御しるべ　御媒。
○包まし き事　匂宮の浮舟に心を懸け給ひし事を云ふ。
○此宮　匂宮。
○上　中君。
○さりや況て　大輔の女すら中君を憚るに況て我身は。
○帝の御女を云々　帝の御女を持ち給へる薫君に我女を奉るは過分なれど。
○よそ〳〵にて　他人なれば。
○引き出で給へらましかば　浮舟が。
○また見奉らまし　浮舟を勸當せんとなり。
○いとゞ心膽もつぶれぬ　浮舟はなり。
○我身行方も知らずなりなば　浮舟の此川に身を投げんと思ひ給ふなり。

らせ給ひなば、いと心細くなん侍るべけれど、かゝる御住居は、心許なくのみ見奉るを、嬉しくも侍るべかゝめるかな。世に知らず重々しくおはしますべかゝめる殿の御有樣にて、かく尋ね聞えさせ給ふしも、おぼろげならじと聞え置き侍りにし、浮きたる事にやは侍る。」など云ふ。（母）「後は知らねど、只今は斯く思し離れぬ樣にの給ふに付けても、唯御しるべをなん思ひ出で聞ゆる。宮の上の忝く哀に思したりしも、包まし き事などの自ら侍りしかば、中空に處狹き御身なりと、思ひ歎き侍りて。」と云ふ。尼君打笑ひて、（辨）「此宮のいと騷がしきまで、色におはしますなれば、心ばせあらん若き人、侍ひにくげになん。大方はいとめでたき御有樣なれど、さる筋の事にて、上の無禮しと思さんなんわりなきと、大輔が女の語り侍りし。」と云ふにも、さりや、況てと、君は聞き臥し給へり。（母）「あなむくつけや。帝の御女を持ち奉り給へる人なれど、よそ〳〵にて、惡しくも善くもあらんは如何はせんと、おほけなく思ひ做し侍る。善からぬ事を引き出で給へらましかば、凡て身には悲しくいみじと思ひ聞ゆとも、復見奉らざらまし。」など、言ひかはす事どもに、いとゞ心膽もつぶれぬ。猶我身を失ひてばや。遂に聞きにくき事は出で來なん、と思ひ續くるに、この水の音の恐ろしげに響きて行くを、（母）「斯からぬ流もありかし。世に似ず荒ましき所に、年月を過し給ふを、哀と思しぬべきわざになん。」など、母君したり顔に言ひ居れり。昔より此河の早く恐ろしき事を言ひて、（人々）「さいつ頃渡守が孫の童、棹さしはづして落ち入り侍りにける。凡て徒になる人多かる水に侍り。」と、人々も言ひ合へり。君はさても我身行方も知らずなりなば、誰も〳〵敢無くいみじと誓しこそ思ひ給はめ。な

○手洗川に云々　古今集に「繼せじと手洗川にせしみそぎ神は受けずもなりにけらしな」
○復母見でもこそ　復母君に逢はで死ぬる事もこそあれ。
○この人々　彼處の人々。
○武生の國府に云々　何處におはすとも參るべしとの意。催馬樂道の口の歌「みちのくち武生の國府に我はあり〳〵親には申したれ心あひの風をさきんだちや」
○風の　かん方も　古歌に「浦風に　きにけりな里の蜑のたく藻の煙心弱さに」

がらへて人笑へに憂き事もあらんは、何時か其物思の絶えんとする、と思ひ懸くるには、障り所も有るまじう、爽やかに萬思ひ做さるれど、打返しいと悲し。親の萬に思ひ言ふ有樣を、寢たる樣にてつく〴〵と思ひ亂る。惱ましげにて瘠せ給へるを、乳母にも言ひて、（母）「さるべき御禱などせさせ給へ。祭祓などもすべきやう。」など云ふ。手洗川に禊せまほしげなるを、斯くも知らで萬に言ひ騷ぐ。（母）「人少なゝめり。よく然るべからん邊を尋ねて、今參は留め給へ。やんごとなき御仲らひは、正身こそ何事もおいらかにおぼさめ。よからぬ仲となりぬるあたりは、煩はしき事もありぬべし。搔い潛めて、さる心し給へ。」など、思ひ到らぬ事無く言ひ置きて、彼所に煩ひ侍る人も覺束なし、とて歸るを、いと物思はしく萬心細ければ、復相見でもこそ、と思へば、（浮舟）「心地の惡しく侍るにも、見奉らぬがいと覺束なく覺え侍るを、暫しも參り來まほしくこそ。」と慕ふ。（母）「さなん思ひ侍れど、彼處もいと物騷がしく侍り。この人々もはかなき事など得し遣るまじく、狹くなど侍ればなん。武生の國府に移ろひ給ふとも、忍びては參り來なんを、直々しき身の程は、かかる御爲こそいとほしく侍れ。」など、打泣きつゝの給ふ。

殿の御文は今日もあり。惱ましと聞えたりしを、如何がと訪ひ給へり。（薫消息）「自らと思ひ侍るを、わりなき障多くてなん。此程の暮し難さこそ、なか〳〵苦しく。」などあり。宮は（匂消息）「昨日の御返りも無かりしを、如何に思し漂ふぞ。風の靡かん方も後目痛くなん。いとゞ惚れ增さりて眺め侍る。」など、これは多く書き給へり。雨降りし日、來合ひたりし御使どもぞ、今日も來たりける。殿の御隨身かの少輔が家にて、時々見る男なれば、

○此守の君　出雲權守。(時方)
○左衞門の大夫　時方。
○式部の少輔　大内記。
○劣の下司　匂宮の使者。
○后の宮。明石中宮。
○此人　取次の人。
○殿も云々　薫君も樣ありと推し給ふなり。
○宮　明石中宮。
○政官　太政官の被官。
○宮　匂宮。
○大臣　夕霧。
○この君　薫。

(隨身)「眞人は何しに此處には度々參るぞ。」と問ふ。(使)「私に訪ふべき人の許に、詣で來るなり。」と云ふ。(隨身)「私の人にや艶なる文は差取らする。氣色ある眞人かな。物隱しは何ぞ。」と云ふ。(使)「實は此守の君の御文、女房に奉り給ふ。」と云へば、事違ひつゝ怪しと思へど、此處にて定め言はんも、異樣なるべければ、各々參りぬ。かど〳〵しき者にて、共にある童を、(隨身)「此男に然りげ無くて目附けよ。左衞門の大夫の家にや入る。」と見せければ、(童)「宮に參りて、式部の少輔になん。御文は取らせ侍りつる。」と云ふ。さまで尋ねん物とも、劣の下司は思はず、事の心をも深う知られざりければ、舍人の人に見顯されにけんぞ口惜しきや。殿に參りて、今出で給はんとする程に、御文奉らす。直衣にて、六條院に后の宮出でさせ給へる頃なれば、參り給ふなりけり。事々しく御前なども數多も無し。御文參らする人に、(隨身)「怪しき事の侍りつる。見給へ定めんとて、今まで侍ひつる。」と云ふを、仄聞き給ひて歩み出で給ふ儘に、(薫)「何事ぞ。」と問ひ給ふ。此人の聞かんもつゝましと思ひて、畏まりて居り。殿も然見知り給ひて出で給ひぬ。

宮例ならず惱ましけにおはすとて、宮達も皆參り給へり。上達部など多く參り集ひて、騷がしけれど、異なる事もおはしまさず。かの內記は政官なれば、後れてぞ參れる。この御文も奉るを、宮臺盤所におはしまして、戸口に召し寄せて取り給ふを、大將御前の方より出で給ひ、側目に見通し給ひて、切に思すべかゝめる文の氣色がなと、をかしさに、立ち留り給へり。引き開けて見給ふ。紅の薄樣に、こまやかに書きたるべしと見ゆ。文に心入れて頓にも向き給はぬに、大臣も立ちて、外樣におはすれば、此君は曹司より出で給

○御紐さし給ふ　直衣の紐を差して打解けたける樣を引繕ひ給ふなり。
○御前　薫君の前驅の者。
○下人　目付の童。
○かど〳〵しとおぼせど　隨身をなり。
○田舍びたるあたりにて云云　宇治は都を離れたる所なればかゝる事はあらじと油斷せしこそ愚なれとなり。

ふとて、大臣出で給ふと打咳きて、驚かい奉り給ふ。引き隱し給へるにぞ、大臣さしのぞき給へる。驚きて御紐さし給ふ。殿もつい居給ひて、(夕霧)「まかゝで侍りぬべし。例の御邪氣の久しく起らせ給はざりつるを、恐ろしき事なりや。山の座主只今請じに遣さん。」と、いそがしげにて立ち給ひぬ。夜更けて皆出で給ひぬ。大臣は宮を先に立て奉り給ひて、數多の御子どもの上達部君達引き續けて、あなたに渡り給ひぬ。この殿は後れて出で給ふ。隨身氣色ばみつる、怪しと思しければ、御前など下りて、火點す程に、隨身召し寄す。

(薫)「申しつる事は何事ぞ。」と問ひ給ふ。(隨身)「今朝かの宇治に、出雲の權守、時方の朝臣の許に侍る男の紫の模樣にて、櫻に付けたる文を、西の妻戸に寄りて、女房に取らせ侍りつる、見給へ付けて、云々問ひ侍りつれば、事違ひつゝ、空言のやうに申し侍りつるを、如何に申すぞとて、童して見せ侍りつれば、兵部卿の宮に參り侍りて、式部少輔道定の朝臣になん、その返事は取らせ侍りける。」と申す。君怪しとおぼして、(薫)「その返事は如何やうにして出しつるぞ。」(隨身)「それは見給へず。異方より出し侍りにける。下人の申し侍りつるは、赤き色紙の、いと清らなるとなん、申し侍りつる。」と聞ゆ。思し合はするに、違ふ事無し。さまで見せつらんを、かど〳〵しとおぼせど、人々近ければ、委しくものの給はず。道すがら、猶いと恐ろしく隈無くおはする宮なりや。如何なりけん序に、さる人ありと聞き給ひけん。如何で言ひ寄り給ひけん。田舍びたるあたりにて、かやうの筋の紛れはえしもあらじと思ひけるこそ幼けれ。さても知らぬあたりにこそ、然るすき事をもの給はめ。昔より隔て無くて、怪しきまで導し率てありき奉りし身にしも、うしろめたく思

○對の御方　中君。

○此頃云々　匂宮の臨み給ふ。

○さやうの事に思し亂れて云々　さては浮舟故に惱み給へるかとなり。

○えおはせざりし程の　昔匂宮の中君の許に得通ひ給はざりし時の。

○女　浮舟。

○退く　遠のく。

○やんごとなく云々　本妻とせんには疵とも思はるれど、となり。

○人の爲　浮舟の爲。

○さやうに思す人こそ　匂宮は初は深く思して後に飽き給ふ人なればこそ。

○出で立ちたらんと　浮舟が宮仕になり。

○道定　大内記の名なり。

○このありけん男　匂宮の使せし男。

○微にて居たる人なれば　浮舟は微に暮して居たる人なれば。

し寄るべしや、と思ふに、いと心づき無し。對の御方の御事を、いみじく思ひつゝ、年頃過すは、我心の重さはこよなかりけり。さるは、それは今始めて樣惡しかるべき程にもあらず。元よりの便にも因れるを、唯心の中の隈あらんは、我爲も苦しかるべきに因りこそ、思ひ憚るも、嗚呼なるわざなりけれ。此頃斯く惱ましくし給ひて、例よりも人繁き紛れに如何で遙々と書き遣り給ひつらん。おはしや初めにけん。いと遙なる懸想の道なりや。怪しくて、おはし所尋ねられ給ふ日もありと聞えきかし。さやうの事に思し亂れて、そこはかと無く惱み給ふなるべし。昔を思し出づるにも、えおはせざりし程の歎は、いといとほしげなりきかしと、つくゞくと思ふに、女いたく物思ひたる樣なりしも、片端心得初め給ひては、萬思し合はするに、いと憂し。有り難き物は、人の心にもあるかな。らうたげに大どかなりとは見えながら、色めきたる方は添ひたる人ぞかし。この宮の御具にては、いとよきあはひなりと、思ひも讓りつべく退く心地し給へど、やんごとなく思ひ初めし人ならばこそあらめ。猶然る物にて置きたらん、今はとて見ざらんはた、戀しかるべしと、人わろく色々心の中に思す。我荒まじく思ひ成りて、捨て置きたらば、必ずかの宮呼び取り給ひてん。人の爲後のいとほしさも、殊に辿り給ふまじ。さやうに思す人こそ、一品の宮の御方に二三人參らせ給ひたゝなれ。さて出で立ちたらんを見聞かん、いとほしくなど、猶捨て難く、氣色見まほしくて、御文遣はす。例の御隨身人間に召し寄せたり。(蕨)「道定の朝臣は、猶仲信が家にや通ふ。(曙身)「さなん侍る。」と申す。(蕨)「宇治へは常にや、このありけん男は遣るらん。微にて居たる人なれば、道定も思ひ懸くらんかし。」と、うちう

○波越ゆる云々　古今集に「君を措きて仇し心を我が持たば末の松山波も越えなん」とある歌に由りて詠めり。

○掛けても見及ばぬ心ばへよ　斯程のあへしらひは思ひ寄らざりきとなり。

○殿　蕨。

○文見つらん　右近が。

○語りたる　右近に。

○後朝　宇治。

めき給ひて、(蕨)「人に見えで罷れ。嗚呼なり。」との給ふ。畏りて、少輔が常に此殿の御事案内し、彼處の事問ひしも思ひ合すれど、物慣れて得申し出でず。君も下司にくはしくは知らせじと思せば、問はせ給はず。彼處には御使の例より繁きに付けても、物思ふこと樣々なり。唯斯くぞその給へる。

(蕨)「波越ゆる、頃とも知らず、末の松、待つらんとのみ、思ひけるかな。

人に笑はせ給ふな。」とあるを、いと怪しと思ふに、胸もふたがりぬ。御返事を心得顔に聞えんも、いとつゝましく、僻事にてあらんも怪しければ、御文はもとの樣にして、(浮舟消息)「所違の樣に見え侍ればなん。怪しく惱ましくて、何事も。」と書き添へて奉りつ。見給ひて、さすがにいたくもしたるかな。掛けて見及ばぬ心ばへよと、ほゝゑまれ給ふも、憎しとは得思し果てぬなゝめり。

まほならねど仄めかし給へる氣色を、彼處にはいとゞ思ひ添ふ。遂に我身は怪しからず、怪しく成りぬべきなゝめりと、いとゞ思ふ所に、右近來て、(右近)「殿の御文は、何ぞて返し奉らせ給ひつるぞ。ゆゝしく忌み侍るなる物を。」と云へば、(浮舟)「僻事のあるやうに見えつれば、處違かとて。」との給ふ。怪しと見ければ、道にて開けて見けるなりけり。善からずの右近が樣やな。見つとは言はで、(右近)「あないとほし。苦しき御事どもこそ侍れ。殿は物の氣色御覽じたるべし。」と云ふに、面さと赤みて物もの給はず。文見つらんとは思はねば、他ざまにてかの御氣色見る人の語りたるにこそは、と思ふに、誰か然言ふぞなども問ひ給はず。この人々の、見思ふらん事もいみじく恥かし。我心以てあり初めし事ならぬ

○程々に付けては　身分の貴からぬ程々の間にては。
○今の方　後の夫。
○さて我も云々　此事に因りて右近の姉も夫婦離別せりとなり。
○乳母　右近の姉の乳母。
○上　母君。
○それより此方にと聞えさせ給ふ御事　薫君の御迎より先に我方へと匂宮のの給ひし御事。
○いと忝く　匂宮の御志を云ふ。
○人　薫君。

ども、心憂き宿世かなと、思ひ入りて寢たるに、侍從と二人して、（右近）「右近の姉の常陸にて、人二人見侍りしを、程々に付けては、唯斯くぞかし。これも劣らぬ志にて、思ひ惑ひて侍りし程に、女は今の方に、今少し心寄せ優りてぞ侍りける。それに妬みて、遂に今のをば殺してぞかし。さて我も住み侍らずなりにき。國にもいみじきあたら兵士一人失ひつ。又この過したるも善き郎等なれど、かゝる過したる者を、如何でか使はんとて、國の内をも追ひ拂はれぬ。凡て女の怠々しきぞとて、館の内にも置い給へらざりしかば、東の人になりて、乳母も今に戀ひ泣き侍るは、罪深くこそ見給ふれ。ゆゝしき序のやうに侍れど、上も下も、かゝる筋の事は、思し亂るゝは、いと惡しきわざなり。御命まではあらずとも、人の御程々に付けて侍る事なり。死ぬるに增さる恥なる事も、善き人の御身には、なか〳〵侍るなり。一方に思し定めてよ。宮も御志勝りて、まめやかにだに聞えさせ給はゞ、そなたざまにも靡かせ給うて、物な甚く歎かせ給ひそ。瘠せ衰へさせ給ふも、いと益無し。さばかりの上のいたづき聞えさせ給ふ物を、乳母が此御いそぎに心を入れて、惑ひ居て侍るに付けても、それより此方にと聞えさせ給ふ御事こそ、いとゞ苦しくいとほしけれ。」と云ふに、今一人、（侍從）「うたて恐ろしきまでな聞えさせ給ひそ。何事も御宿世にてこそあらめ。唯御心の中に、少し思し靡かん方を、然るべきに思しならせ給へ。いでや、いと忝く、いみじき御氣色なりしかば、人のかく思し急ぐめりし方に心も寄らず、暫時は隱ろへても、御思の優らせ給はんに寄らせ給ひね、とぞ思ひ侍る。」と、宮をいみじく賞で聞ゆる心なれば、ひたみちに言ふ。（右近）「いさや。右近は、とてもかくても、事無く過さ

○大將殿　薫君。
○内舍人　宇治の殿の警衛を掌る家職。
○宮はわりなく云々　匂宮の御出の時をいふ。
○いみじく焦られ給ふ　匂宮の御樣なり。
○今はと持て離れんと思はぬに因りこそ　薫君に別れじと思へばこそかく物思ひ亂るれとなり。
○心知りたる限　右近等を指す。
○かゝる人御覽ぜよ　此童

せ給へと、初瀨石山などに願をなん立て侍る。此大將殿の御莊の人々と云ふ者は、いみじき不調の者どもにて、一類この里に充ちて侍るなり。大方この山城大和に、殿の領じ給ふ所々の人なん、皆この内舍人と云ふ者のゆかり掛けつゝ侍るなる。これが聟の右近の大夫と云ふ者を本として、萬の事を掟て仰せられたゝなるなり。善き人の御中どちは、情なき事し出でよと思さずとも、物の心得ぬ田舍人どもの宿直人には、代り〴〵侍へば、己が番に當りて、些なる事もあらせまじなど、過もし侍りなん。ありし夜の御ありきは、いとこそむくつけく思ひ給へられしか。宮はわりなく包ませ給ふとて、御供の人も率ておはしまさず、寵れてのみおはしますを、さる者の見付け奉りたらんは、いといみじくなん。」と言ひ續くるを、君、猶我を宮に心寄せ奉りたると思ひて、この人々の言ふ、いと恥かしく、心地は孰れとも思はず、唯夢のやうに呆れて、いみじく焦られ給ふをば、何ど斯くしもとばかり思へど、賴み聞えて、年頃になりぬる人を、今はと持て離れんと思はぬに因りこそ、斯くいみじと物も思ひ亂るれ。實によからぬ事も出で來らん時と、つく〴〵と思ひ居たり。（浮舟）「麿は如何で死なばや。世づかず心憂かりける身かな。かく憂き事ある例は、下衆などの中にだにも多くやはある。」とて、うつぶし臥し給へば、（右近）「かくな思し召しそ。安らかに思ひ做せとてこそ聞えさせ侍れ。思しぬべき事をも、さらぬ顏にのみ、長閑に見えさせ給へるを、この御事の後、いみじく心いられをせさせ給へば、いと怪しくなん見奉る。」と、心知りたる限は、皆かく思ひ亂れ騷ぐに、乳母己が心を遣りて、物染め營み居たり。今參童などの目安きを呼び取りつゝ、（乳母）「かゝる人御覽ぜよ。怪しくてのみ臥

女御氣に召すか見給へとの意。

○斯くておはします程に浮舟が斯く此處におはしますす間は。

○さりや云々　右近が浮舟に申すなり。

○身の代り　代人。

○君　浮舟。

○苔の亂るゝ　新勅撰集に「君に逢はん其日や何時と松の木の苔の亂れて物をこそ思へ」

○忘草摘みてん　物歎を忘れ給ふべしとの意。

○悍かるべき事　荒々しく怖ろしき事。

○認めず　始末せず。

○哀なる御仲　匂宮との御仲を含めていふ。

○何かむづかしく云々　惱ましげなる故のやうに言ひなし給ふなり。

○人の御爲　匂宮の御爲。

○漏り聞き給はん　薫君が。

○心細き事を云々　以下浮舟の心中なり。

○二十日あまり　三月の二十日過なり。

させ給へるは、靈氣などの妨け聞えさせんとするにこそ。」と歎く。

殿よりは、かのありし返事をだにの給はで日頃經ぬ。このおどし、內舍人と云ふ者ぞ來たる。實にいと荒々しく、太つかなる樣したる翁の聲嗄れ、さすがに氣色ある、「女房に物取り申さん。」と言はせたれば、右近しも逢ひたり。（內舍人）『殿に召し侍りしかば、今朝參り侍りて、只今なん罷り歸り侍りつる。雜事ども仰せられつる序に、斯くておはします程に、夜中曉の事にも、某等かくて侍ふと思はして、宿直人態と差し奉らせ給ふ事も無きを、此頃聞し召せば、女房の御許に、知らぬ所の人通ふやうになん聞し召す事ある、怠々しき事なり。（薫）「宿直に侍ふ者どもは、その案內問ひ聞きたらん。知らでは如何が侍ふべき。」と問はせ給へるに、承らぬ事なれば、（內舍人）「某は身の病重く侍りて、宿直仕う奉る事は、月頃怠りて侍れば、案內も得知り侍らず。さるべき男どもは、懈怠もなく催し侍はせ侍るを、然る如き非常の事に侍はんをば、如何では承らぬやうは侍らん。」となん申させ侍りつる。用意して侍へ。便なき事もあらば、重く勘當せしめ給ふべき由なん、仰言侍りつれば、如何なる仰言にかと、恐れ申し侍る。』と言ふを聞くに、梟の鳴かんよりも、いと物恐ろし。いらへも遣らで、（右近）「さりや聞えさせしに違はぬ事ども聞し召せ。物の氣色御覽じたるなゝめり。御消息も侍らぬよ。」など歎く、乳母は仄打聞きて、（乳母）「いと嬉しく仰せられたり。盜人多かゝなるわたりに、宿直人も初のやうにもあらず。皆身の代りぞと云ひつゝ、怪しき下衆をのみ參らすれば、夜行をだにせぬに。」と喜ぶ。君は實に只今いと惡しくなりぬべき身なゝめりと思すに、宮よりは如何に〳〵と、苔の亂るゝわりなさをの給ふ。いと煩はしくなん。とてもかくても、一方々々に付けて、いとうたてある事は出で來なん。我身一つの無くなりなんのみこそ目安からめ。昔は懸想する人の有樣の、何れとなきに思ひ煩ひてだにこそ、身を投ぐる例もありけれ。ながらへば、必ず憂き事見えぬべき身の、亡くならんは、何か惜しかるべき。親も暫しこそ歎き給はめ。數多の子ども扱に自ら忘草摘みてん。在りながら持て損ひ、人笑なる樣にてさすらへんは、優る物思なるべし、など思ひなる。兒めき大どかに、たを〳〵と見ゆれど、氣高う世の有樣をも知る方少くて、生し立てたる人にしあれば、少し悍かるべき事を、思ひ寄るなりけんかし。むつかしき反古など破りて、おどろ〳〵しく一度にも認めず、燈臺の火に燒き、水に投げ入れさせなど、やう〳〵失ふ。心知らぬ御達は、物へ渡り給ふべければ、徒然なる月日を經て、はかなく集め給へる手習などを破り給ふなゝめりと思ふ。侍從などぞ見付くる時は、（侍從）「など斯くはせさせ給ふ。哀なる御仲に御心留めて書きかはし給へる文は、人にこそ見せさせ給はざらめ。物の底に置かせ給ひて御覽ずるなん、程々に付けては、いと哀に侍る。さばかり賞でたき御紙遣ひ、辱き御言の葉を盡させ給へるを、斯くのみ破らせ給ふ、情無き事っ」と云ふ。（浮舟）「何かむづかしく、長かるまじき身にこそあゝめれ。落ち留りて、人の御爲もいとほしからん。さかしらに之を取り置きけんよなど、漏り聞き給はんこそ恥かしけれ。」などの給ふ。心細き事を思ひ以て行くには、又得思ひ立つまじきわざなりけり。親を置きて亡くなる人は、最罪深くなる物をなど、さすがに仄聞きたる事をも思ふ。二十日餘にもなりぬ。かの家の主、二十八日に下るべし。宮は、（匂）「その夜必ず迎へん。

○さてあるまじき樣にて云云　以下浮舟の心中なり。

○斯くのみ言ふこそ云々　匂宮へ心寄せたる樣に言はるゝは心憂しとなり。

○の給へば　匂宮が。

○かの人の云々　薫君が浮舟に然るべきやうに言ひ聞かせて。

○空しき空に滿ちぬる　古今集に「我戀は空しき空に滿ちぬらん思ひ遣れども行く方の無き」

○立退きて　時方の樣なり

下人などに、能く氣色見ゆまじき心づかひし給へ。此方ざまよりは、夢にも聞えあるまじ。疑ひ給ふな。」などの給ふ。さてあるまじき樣にて、おはしたらんに、今一度物をも聞えず、覺束なくし返し奉らん事よ。又時の間にても、如何で此處には寄せ奉らんとする。甲斐無く恨みて歸り給はん樣などを思ひ遣るに、例の面影離れず、堪へず悲しくて、この御文を顏に押し當てゝ、誓しは包めども、いといみじく泣き給ふ。右近、(右近)「あが君、斯かる御氣色遂に人見奉りつべし。やう〳〵怪しなど思ふ人も侍るべかゝめり。斯うかゝづらひ思はさで、さるべき樣に聞えさせ給ひてよ。右近侍らば、おほけなき事も、謀り出し侍らば、斯ばかり小き御身一つは、空よりも率て奉らせ給ひなん。」と云ふ。とばかりためらひて、(浮舟)「斯くのみ言ふこそいと心憂けれ。さもありぬべき事と、思ひ懸けばこそあらめ。あるまじき事と皆思ひ取るに、わりなく、かくのみ賴みたるやうにの給へば、いかなる事をし出で給はんとするにか、など思ふに付けて、身のいと心憂きなり。」とて、返事も聞え給はずなりぬ。

宮斯くのみ猶承引く氣色も無くて、返事さへ絶え〴〵になるは、かの人のあるべき樣に言ひ認めて、少し心安かるべき方に、思ひ定りぬるなゝめり。道理と思す物から、いと口惜しく妬く、さりとも我をば哀と思したりし物を、相見ぬ跡絶に、人々の言ひ知らする方に寄るならんかし、など眺め給ふに、行く方知らず、空しき空に滿ちぬる心地し給へば、例のいみじく思し立ちて、おはしましぬ。蘆垣の方を見るに、例ならず、(番衆)「あれは誰ぞ。」と云ふ聲々寢聽氣なり。立退きて、心知りの男を入れたれば、それをさへ問ふ。前々

○斯くのみ言ふこそ云々　匂宮へ心寄せたる樣に言はるゝは心憂しとなり。

○の給へば　匂宮が。

○いと煩はしく云々　右近の心中なり。

○かど〳〵しき人　才覺ある人。

○綱前　浮舟。

○人氣色云々　番衆が見付けなば。

○すゞろならんもの　思ひがけなきもの。

○髮脇より搔い越して　髮の脇の下より手に執りたる侍從の樣なり。

のけはひにも似ず、煩はしくて、(時方)「京より頓の御文あるなり。」と云ふ。右近が從者の名を呼びて逢ひたり。いと煩はしくいとゞ覺ゆ。(右近)「更に今宵は不用なり。いみじく辱きこと。」と言はせたり。宮、何ど斯く持て離るらん、と思すに、わりなくて、(匂)「先づ時方入りて、侍從に逢ひて、さるべき樣にたばかれ。」とて遣す。かど〳〵しき人にて、とかく言ひ構へて尋ねて、逢ひたり。(侍從)「如何なるにかあらん。かの殿のの給はす事ありとて、宿直にある者どもの、さかしがり立ちたる頃にて、いとわりなきなり。御前にも、物をのみいみじく思したゝめるは斯かる御事の忝きを思し亂るゝにこそはと、心苦しくなん見奉る。更に今宵は人氣色見侍りなば、なか〳〵にいと惡しかりなん。やがて然も御心づかひせさせ給ふべからん夜、此處にも人知れず思ひ構へてなん聞えさすべかゝめる。」乳母の寢聽き事なども語る。大夫、(時方)「おはします道のおぼろげならず、あながちなる御氣色に、敢無く聞えさせん事なん、怠々しき。さらば、いざ給へ。共に委しく聞えさせ給へ。」と誘ふ。いとわりなからん、と言ひしろふ程に、夜もいたく更け行く。

宮は御馬にて少し遠く立ち給へるに、里びたる犬どもの出で來て訇るも、いと恐ろしく、人少にいと怪しき御ありきなれば、すゞろならん者の走り出で來たらんも、如何さまにかと、侍ふ限り心をぞ惑はしける。猶疾く〳〵參りなんと言ひ騷がして、この侍從を率て參る。髮脇より搔い越して、樣體いとをかしき人なり。馬に乘せんとすれど、更に聽かねば、衣の裾を取りて、立ち添ひて行く。我沓をはかせて、自らは供なる人の怪しき物をはきたり。參りて斯くなんと聞ゆれば、語らひ給ふべき樣だに無ければ、山賤の垣根の、棘蓬

○斯かる道　好色の道。

○心弱き人　侍從を指す。
○いみじき仇を鬼に作りたりとも云々　匂宮の美しさに鬼なりとも見捨つまじとなり。

○逐ひ放け　逐ひ遣ざけ。

○白雲の掛からぬ山も云々　拾遺集に「何處とも處定めぬ白雲の掛からぬ山はあらじとぞ思ふ」とある歌に因りて詠み、さて無くを泣くに言掛けたり。
○此人　侍從。
○君　浮舟。
○入り來て　侍從がなり。
○枕のやう〳〵浮きぬる涙堰き敢へぬなり。
○如何に見るらん　此人々が。
○ありし繪　匂宮の畫きて置き給ひし繪。

の陰に、障泥と云ふ物を敷きて、下し奉る。我御心地にも怪しき有樣かな。斯かる道に損はれて、はかぐしくは得あるまじき身なゝめりと思し續くるに、泣き給ふこと限無し。心弱き人は、ましていといみじく悲しと見奉る。いみじき仇を鬼に作りたりとも、疎に見捨つまじき人の御有樣なり。ためらひ給ひて、(匂)「唯一言もえ聞えさすまじきか。如何なれば、今更に斯かるぞ。猶人々の言ひ做したる樣なるべし。」との給ふ。有樣委しく聞えて、(侍從)「やがて然思し召さん日を、豫てさゝべき樣に謀らせ給へ。かく辱き事どもを見奉り侍れば、身を捨てゝも、思ひ給へ謀り侍らん。」と聞ゆ。我も人目をいみじく思せば、一方に怨み給はん樣も無し。夜はいたく更け行くに、この物咎めする犬の聲絶えず。人々逐ひ放けなどするに、弓引き鳴らし、怪しき男どもの聲して、火危しなど云ふも、いと心あわたゞしければ、歸り給ふ程、言へば更なり。

(匂)「何處にか、身をば捨てんと、白雲の、掛からぬ山も、泣く〳〵ぞ行く。さらば早や。」とて、此人を返し給ふ。御氣色なまめかしく、あはれに、夜深き露にしめりたる御香のかうばしさなど喩へん方なし。泣く〳〵ぞ歸り來たる。

右近は言ひ切りつる由言ひ居たるに、君は愈々思ひ亂るゝこと多くて、臥し給へるに、入り來て、ありつる樣語るに、答もせねど、枕のやう〳〵浮きぬるを、且は如何に見るらんとゝまし。つとめても、怪しからんまみを思へば、無期に臥したり。物はかなげに帶打掛けなどして、經讀む。親に先だちなん罪失ひ給へとのみ思ふ。ありし繪を取り出でゝ見て、書き給ひし手つき、顏の匂などの、向ひ聞えたらんやうに覺ゆれば、昨夜一言をだに聞え

○憂き樣に云々　死後樣々に惡しく謂はれんも恥かしけれどとなり。

○宮の上　中君。

○羊の歩　屠所の羊の歩なり。歩々死地に近づくを謂ふ。

○いみじき事どもをの給へり　匂宮より御文ありてなり。

○かの殿　薫君。

○いと騷がしくて云々　病に罹れる夢を見たるなるべし。
○人の忌むと云ふ事なん云云　浮舟の病死したる夢なるべし。

ずなりにしは、猶今一重增さりていみじと思ふ。かの心長閑なる樣にて見んと、行末遠かるべき事をの給ひ渡る人も、如何が思さんといとほしう、憂き樣に言ひ做す人も有らんこそ、思ひ遣り恥かしけれど、心淺く怪しからず、人笑へならんを聞かれ奉らんよりはと、思ひ續けて、

「歎きわび、身をば捨つとも、亡き影に、浮名流さん、事をこそ思へ。」

親もいと戀しく、例は殊に思ひ出でぬ兄弟の醜やかなるも戀し。宮の上を思ひ出で聞ゆるにも、總べて今一度ゆかしき人多かり。人は皆各物染め急ぎ、何やかやと言へど、耳にも入らず。夜となれば、人に見付けられず、出でゝ行くべき方を思ひ設けつゝ、寢られぬ儘に、心地も惡しく皆違ひたり。明け立てば、川の方を見遣りつゝ、羊の歩よりも程無き心地す。

宮はいみじき事どもをの給へり。今更に人や見んと思へば、この御返事をだに、思ふ儘にも書かず。

(浮舟)「骸をだに、憂き世の中に、留めずば、何處をはかと、君も恨みん。」

とのみ書きて出しつ。かの殿にも、いまはの氣色見せ奉らまほしけれど、處々に書き置きて、離れぬ御中なれば、遂に聞き合せ給はん事いと憂かるべし。凡べて如何になりけんと、誰にも覺束なくて止みなんと思ひ返す。京より母の御文持て來たり。(母消息)「寢ぬる夜の夢に、いと騷がしくて見え給ひつれば、誦經所々にせさせなどし侍る。やがて其夢の後寢られざりつる故にや、只今晝寢して侍る夢に、人の忌むと云ふ事なん見え給ひつれ

●時々立ち割らせ給ふ人　稟君。
○御ゆかりもいと恐ろしく　稟君の御ゆかり（女二宮）の怨念あるべしとなり。
○いみじく言はれ　常陸守に甚しく恨まれ。
○その近き寺　宇治の聖の寺。
○其料の物　誦經の料。
○後に復云々　此夢の世を去りて後の世復相見んことを期せんとの意。
○音を添へて　我が泣く音を添へて。
○君に　母君に。
○卷數　經卷。
○心走。胸騒ぎ。
○さかしがるめれど云々　浮舟の心中なり。
○先づ驚かされて先だつ涙　涙が言に先だち先づ備さるゝなり。
○何方と思し定りて　何れか一方に思ひ定め給ひて。
○萎えたる衣を云々　浮舟の樣なり。

ば、驚きながら奉る。能く慎ませ給へ。人離れたる御住居にて、時々立ち寄らせ給ふ人の御ゆかりも、いと恐ろしく、惱ましげに物せさせ給ふ折しも夢の斯かるを、萬になん思ひ給ふる。參り來まほしきを、少將の方の猶いと心許無げに、靈氣だちて惱み侍れば、片時も立ち去る事と、いみじく言はれ侍りてなん。その近き寺にも、御誦經せさせ給へ。」とて、其料の物、文など書き添へて持て來たり。限と思ふ命の程を知らで、斯く言ひ續け給へるも、いと悲しと思ふ。寺へ人遣りたる程、返事書く。言はまほしき事多けれど、つゝましくて唯、

（浮舟）「後に復、相見んことを、思はなん、此世の夢に、心惑はで。」

誦經の鐘の風につきて聞え來るを、つくぐと聞き臥し給へり。

（浮舟）「鐘の音の、絶ゆる響に、音を添へて、我世盡きぬと、君に傳へよ。」

卷數持て來たるに書き付けて、（母の使）「今宵は得歸るまじ。」と云へば、物の枝に結ひつけて置きつ。乳母「怪しく心走のするかな。夢も騒がしくとの給はせたりつ。宿直人よく侍へ。」と言はするを、苦しと聞き臥し給へり。（乳母）「物聞き召さぬ、いと怪し。」御湯漬など萬づに言ふを、さかしがるめれど、いと見悪く老いなりて、我亡くば何處にかあらん、と思ひ遣り給ふも、いと哀なり。世の中にえ在り果つまじき樣を、仄めかして言はんなど思ずには、先づ驚かされて先だつ涙を包み給ひて、物も言はれず。右近程近く臥すとて、（右近）「かくのみ物を思ほせば、物思ふ人の魂は、あくがるなる物なれば、夢も騒がしきならんかし。何方と思し定りて、如何にも〳〵おはしまさなん。」と打歎く。萎えたる衣を顔に押し

當てゝ、臥し給へりとなん。

○人々おはせぬを云々　浮舟の君の身を投げし跡の事にて、人々覓め騒ぐなり。

○かの心知れるどち　右近侍従等をいふ。

○物へ　薫君の方へ。

○昨夜の御返り　浮舟の昨夜書き置きたる返事。

○さればよ云々　以下右近の心中なり。

○足摩　あがくこと。

蜻蛉

此巻は薫君二十七歳の三月より秋までの事を記す。巻の名は詞に「かげろふの物はかなげに飛びちがふを云々」又歌に「ありと見て手には取られず見れば又行方も知らず消えしかげろふ」とあるに因れるなり。

彼處には人々おはせぬを覓め騒げど、甲斐なし。物語の姫君の人に盗まれたらん朝のやうなれば、委しくも言ひ續けず。京よりありし使の歸らずなりにしかば、覺束なしとて又人おこせたり。まだ鳥の鳴くになん、出し立てさせ給へる、と使の云ふに、如何に聞えんと、乳母より始めて、あわて惑ふこと限なし。思ひ得る方なくて、唯騒ぎ合へるを、かの心知れるどちなん、いみじく物を思ひ給へりし樣を思ひ出づるに、身を投げ給へるとは思ひ寄りける。泣く〳〵此文を開けたれば、（母消息）「いと覺束無さに、まどろまれ侍らぬ故にや、今宵は夢にだに打解けても見えず、物におそはれつゝ、心地も例ならずうたて侍るを、猶いと恐ろしく、物へ渡らせ給はん事は近くなれど、其程此處に迎へ奉りてん。今日は雨降り侍りぬべければ。」などあり。昨夜の御返りをも開けて見て、右近いみじく泣く。さればよ、心細き事は聞え給ひけり。我に何どか聊の給ふ事の無かりけん。幼かりし程より、露心置かれ奉ること無く、塵ばかり隔て無くて習ひたるに、今は限の道にしも、我を後らかし、氣色をだに見せ給はざりけるが、つらき事と思ふに、足摩と云ふ事をして泣く樣、若き子どもの樣なり。いみじく思したる御氣色は、見奉り渡れど、掛けても斯くなべてならず、おどろ〳〵しき事、思し寄らん物とは、見えざりつる人の御心樣を、猶如何にしつる事に

○宮　匂宮。
○いと例ならぬ氣色ありし御返り　浮舟より「鏡をだに憂き世の中に留めずば何處をはかと君も恨みん」とありし歌をいふ。
○夢と覺えて　以下匂宮の心中なり。
○下人の罷り出づるをも見とがめ問ひ侍るなれば　匂宮の宇治へおはせし夜時方が下部をも番の者の咎めしことありしを云ふ。
○思し合はする　薫君が。

かと、覺束無くいみじ。乳母はなか〳〵物も覺えで、唯「如何さまにせん〳〵」とぞ言はれける。

宮にもいと例ならぬ氣色ありし御返り、如何に思ふならん。我をさすがに、相思いたる樣ながら、仇なる心なりとのみ深く疑ひたれば、外へ行き隱れんとにやあらんと、思し騷ぎて御使あり。在る限泣き惑ふ程に、來て、御文もえ奉らず。(使)「如何なるぞ。」と下衆女に問へば、(下女)「上の今宵俄に亡せ給ひにければ、物も覺え給はず。賴もしき人もおはしまさぬ折なれば、侍ひ給ふ人々は、唯物に當りてなん惑ひ給ふ。」と云ふ。心も深く知らぬ男にて、委しうも問はで參りぬ。斯くなんと申させたるに、夢と覺えて、いと怪し。いたく煩ふとも聞かず　日頃惱ましとのみありしかど、昨日の返事はさりげも無くて、常よりをかしげなりし物をと、思し遣る方無ければ、(匂)「時方往きて氣色見、確なる事問ひ聞け。」との給へば、(時方)「かの大將殿如何なる事か聞き給ふこと侍りけん。宿直する者疎なりなど、警め仰せらるゝとて、下人の罷り出づるをも、見咎め問ひ侍るなれば、言傳くる事無くて、時方罷りたらんを、物の聞え侍らば思し合はする事などや侍らん。さて俄に人の亡せ給ひつらん所は論無う騷がしく、人繁く侍らんを。」と聞ゆ。(匂)「さりとていと覺束無くてやあらん。猶とかく然るべき樣に構へて、例の心知れる侍從などに逢ひて、如何なる事を斯く云ふぞと案內せよ。下衆は僻事も言ふなり。」との給へば、いとほしき御氣色も忝くて、夕つ方往く。

か易き人は疾く行き着きぬ。雨少し降りやみたれど、わりなき道に窶れて、下衆の樣にて來れば、人多く立ち騷ぎて、(人々)「今宵やがて斂め奉るなり。」と云ふを聞く心地もあさましく覺ゆ。右近に消息したれども、え逢はず。(右近)「只今物覺えず。起き上らん心地もせでなん。さるは今宵ばかりこそ、斯くも立ち寄り給はめ。え聞えぬ事」と言はせたり。(時方)「さりとて斯く覺束無くては、如何が歸り侍らん。今一所だに。」と切に言ひたれば、侍從ぞ逢ひたりける。(侍從)「いとあさましく、思しも敢へぬ樣にて亡せ給ひにたれば、いみじと言ふにも飽かず夢のやうにて、誰も〳〵惑ひ侍る由申させ給へ。少し心地ものどめ侍りてなん、日頃も物思したりつる樣、一夜いと心苦しと思ひ聞えさせ給へりし有樣なども、聞えさせ侍るべき。此穢らひなど、人の忌み侍る程過して、今一度立ち寄り給へ。」と云ひて、泣くことといみじ。內にも泣く聲々のみして、乳母なるべし。(乳母)「あが君や、何方にかおはしましぬる。歸り給へ。空しき骸をだに見奉らぬが甲斐なく悲しくもあるかな。明暮見奉りても、飽かず覺え給へ。何時しか甲斐ある御樣を見奉らんと、朝夕に賴み聞えつるこそ、命も延び侍りつれ。打捨て給ひて、斯く行方も知らせ給はぬ事。鬼神もあが君を人にまれ鬼にまれ、返し奉れ。亡き御骸をも見奉らん。」と言ひ續くるが、心得ぬ事ども雜るを怪しと思ひて、(時方)「猶の給へ。若し人の隱しも聞え給へるか。確に聞し召さんと、御身の代に出し立てさせ給へる御使なり。今はとてもかくても甲斐なき事なれど、後にも聞し召し合はする事の侍らんに、違ふ事雜らば、參りたらん御使の罪になるべし。又さりともと賴ませ給ひて、君達に對面せよと仰せられつる御心ばへも辱しとはおぼされずや。

○歛め奉る　葬り奉る。
○今一所　侍從を指して云ふ。
○一夜いと心苦しと思ひ聞えさせ給へりし有樣　匂宮の一夜浮舟の許に來り給ひて空しく歸り給ひし時の事なり。
○得領し奉らじ　得取り奉らじ。
○人のいみじく惜む人をば云々　昔物語などにある事なるべし。
○心得ぬ事どもまじるを云云　今宵歛め奉つらんと聞くに乳母は屍をだに見ぬと歎くを聞きて不審に思ふなり。
○さりともと云々　下衆こ

を僻事をも言はめ、右近侍從などは僞あらじと宮の顧させ給ふとなり。
○斯かる事　匂宮の如き事。
○實にいと云々　侍從の心中なり。
○かの殿の云々　薫君より「渡越ゆる頃とも知らず末の松云々」とありし事を云ふ。
○初より知り初めたりし方　薫君の方。
○此御事　匂宮の御事。
○心と身を亡くなし給へる　自ら身を亡し給へる。自書し給へる。
○御自ら　匂宮御自身。
○斯く世づかず亡せ給へる由を　浮舟の亡せ給へる樣の普通ならぬ由を。
○とかくそゝのかし遣りつ　時方を還し遣りたるなり。
○これは　斯く殿をだに見ぬは。
○斯かる事ども　匂宮の通ひ給ひし事ども。

女の道に惑ひ給ふ事は、人の御門にも、古き例ども有りけれど、又斯かる事、此世にはあらじとなん見奉る。」と云ふに、實にいと哀なる御使にこそあれ。隱すとすとも、斯くて例ならぬ事の樣、自ら聞えなん、と思ひて、（侍從）「何どか些にても、人や隱い奉り給ふらんと、思ひ寄るべき事有らんには、斯くしも在る限惑ひ侍らん。日頃いといみじく物を思し入るめりしかば、かの殿の煩はしげに仄めかし聞え給ふ事などもありき。御母に物し給ふ人も、斯くのゝしる乳母なども、初より知り初めたりし方に渡り給はんとなん急ぎ立ちて、此御事をば人知れぬ樣にのみ、辱く哀と思ひ聞えさせ給へりしに、御心亂れけるなるべし。あさましうて、心と身を亡くなし給へる樣なれば、斯く心の惑に僻々しく言ひ續けらるゝなゝめり。」と、さすがにまほならず仄めかす。心得難く思ひて、（時方）「さらば長閑に參らん。立ちながら侍るも、いと事殺ぎたる樣なり。今御自らもおはしましなん。」と云へば、（侍從）「あな忝、今更人の知り聞えさせんも、亡き御爲はなか〳〵愛でたき御宿世見ゆべき事なれど、忍び給ひし事なれば、復漏させ給はで、已ませ給はんなん、御志に侍るべき。」此處には斯く世づかず亡せ給へる由を、人に聞かせじと、萬に紛らはすを、自然に事どもの氣色もこそ見ゆれと思へば、とかくそゝのかし遣りつ。

雨のいみじかりつる紛れに、母君も渡り給へり。更に言はん方も無く、目の前に亡くなしたらん悲しさは、いみじくとも世の常にて、類あることなり。これは如何にしつる事ぞと惑ふ。斯かる事どもの紛れありて、いみじう物思ひ給ふらんとも知らねば、身を投け給へらんとも思ひも寄らず。鬼や喰ひつらん、狐めく者や取りもて往ぬらん。昔物語の怪しき

○かの恐ろしと思ひ聞ゆる邊　女二宮の御邊。
○斯う迎へ給ふべし　薫君が浮舟をなり。
○亡き影に「歎きわび身をば捨つとも亡き影に浮名流さん事をこそ思へ」
○やさしき程ならぬを　恥かしからぬ事なれば。
○おはしましにけん方を尋ねて　浮舟の流れ行きたる方を尋ねて。

物の事の譬にか、さやうなる事も云ふなりしと思ひ出づ。さてはかの恐ろしと思ひ聞ゆる邊に、心など惡しき御乳母やうの者や、斯う迎へ給ふべしと聞きて、めざましがりて、謀りたる人もや有らんと、下衆なども疑ひ、今參の心知らぬやあると問へば、（女房）「いと世離れたりとて在り習はぬ人は、此處にてはかなき事もえせず、今疾く參らんと言ひつゝなん、その急ぐべき事どもなど取り具しつゝ歸り出で侍りにし。」とて、舊より在る人だに片方は無くて、いと人少なる折になんありける。侍從などこそ、日頃の御氣色思ひ出で、身を失ひてばやなど泣き入り給ひし折々の有樣、書き置き給へる文をも見るに、「亡き影に」と書きすさび給へる物の硯の下に在りけるを見附けて、河の方を見遣りつゝ、響き訇る水の音を聞くにも、疎ましく悲しと思ひつゝ、さて亡せ給ひけん人を、とかく言ひ騷ぎて、何處にも〳〵、如何なる方になり給ひにけんと、思し疑はんも、いとほしき事と言ひ合せて、忍びたる事とても、御心より起りてありし事ならず、親にて亡き後に聞き給へりとも、いとやさしき程ならぬを、有の儘に聞えて、斯くいみじく覺束なき事どもをさへ、方々思ひ惑ひ給ふ樣は、少し諦めさせ奉らん。亡くなり給へる人とても死骸を置きて持て扱ふこそ世の常なれ。世づかぬ氣色にて日頃も經ば、更に隱れあらじ。猶聞えて今は世の聞えをだに繕はん、と語らひて、忍びてありし樣を聞ゆるに、言ふ人も消え入りえ言ひ遣らず。聞く心地も惑ひつゝ、然は此いと荒ましと思ふ河に流れ亡せ給ひにけりと思ふに、いとゞ我も落ち入りぬべき心地して、（母）「おはしましにけん方を尋ねて、骸をだにはかゞしく斂めん。」との給へど、（右近等）「更に何の甲斐侍らじ。行方も知らぬ大海の原にこそお

○大夫　右近大夫。
○殿　薫君。
○燒かす　死骸なきを火葬の樣にし做すなり。
○必ず思ほし疑ふこともあらん　必ず人の取りたろかと疑ひ給ふとなり。

はしましにけめ。さる物から、人の言ひ傳へん事はいと聞き憎し。」と聞ゆれば、と樣かう樣に思ふに、胸の塞き上る心地して、如何にも〳〵すべき方も覺え給はぬを、この人々二人して、車寄せさせて、御座ども、氣近く使ひ給ひし御調度ども、皆ながら脱ぎ置き給へる御衾などやうの物を取り入れて、乳母子の大德、それが叔父の阿闍梨、その弟子の睦ましきなど、舊より知りたる老法師など、御忌に籠るべき限して、人の亡くなりたる氣はひに眞似びて、出し立つるを、乳母母君は、いといみじくゆゝしと伏し轉ぶ。大夫内舍人など、おどし聞えし者どもゝ參りて、（内舍人）「御葬送の事は、殿に事の由申させ給ひて、日定められて、嚴しうこそ仕う奉らめ。」など云ひけれど、（右近等）「殊更に今宵過すまじ。いと忍びてと思ふ樣あればなん。」とて、此車を向の山の前なる原に遣りて、人も近くも寄せず、此案内知りたる法師の限して燒かす。いとはかなくて　煙は果てぬ。田舍人どもは、なか〳〵斯かる事を事々しくし做し、事忌など深くする物なりければ、いと怪しう、例の作法などある事どもゝし給はず、下衆々々しく、敢無くてせられぬる事かなと謗りければ、片方おはする人は、「殊更に斯くなん、京の人はし給ふなる。」など、樣々になん安からす言ひける。斯かる人どもの、言ひ思ふ事だに包ましきを、況て物の聞えは隱れ無き世の中に、大將殿わたりに、骸も無く亡せ給ひにけりと聞かせ給はゞ、必ず思ほし疑ふ事も有らんを、宮はた同じ御仲らひにて、さる人のおはしおはせず、暫しこそ忍ぶともおほさめ、遂には隱れあらじ。又定めて宮をしも疑ひ聞え給はじ。如何なる人か率て隱しけんなどぞ思し寄せんかし。生き給ひての御宿世は、いと氣高くおはせし人の、實に亡き影に、

○長らへては誰にも　時經て後には薫君にも。
○いとほしかるべき　浮舟の爲にいとほしとなり。
○入道の宮　女三宮。
○御庄の人なん參りて云々　御庄の人石山へ參りてしか〳〵と告げ申しゝなり。
○昨夜の事　浮舟葬送の事
○とじめの事をしも云々　葬送は一生の終の大事の禮なるに浮舟の葬送につきて聽しき人々の譏を受くるが若きは我爲にも辛しとなり
○大藏の大夫　薫君の家司伊信。
○思はずなる筋の紛れあるやうなりしも云々　宇治に

いみじき事をや疑はれ給はんと思へば、此處の内なる下人どもにも、今朝のあわたゞしかりつる惑に、氣色も見聞きつるには、口固め、案内知らぬには聞かせじなどぞ謀りける。長らへては誰にも靜やかに、ありし樣をも聞えてん。只今は悲しさ醒めぬべき事ふと人傳に聞し召さんは、猶いとほしかるべき事なるべしと、此人二人ぞ、深く心の鬼添ひたれば持て隱しける。

大將殿は、入道の宮の惱み給ひければ、石山に籠り給ひて、騷ぎ給ふ頃なりけり。さていとゞ彼處は覺束無う思しけれど、はか〴〵しう然なんと言ふ人は無かりければ、斯かるいみじき事にも、先づ御使の無きを、人目も心憂しと思ふに、御庄の人なん參りて、しか〴〵と申させければ、あさましき心地し給ひて、御使その翌の日、まだつとめて參りたり。（藁消息）「いみじき事は聞くまゝに、自ら物すべきに、斯く惱み給ふ事により、愼みて、斯かる所に日を限りて籠りたればなん。昨夜の事は何どか此許に消息して、日を延べても然る事はする物を、いと輕らかなる樣にて急ぎせられにける。とてもかくても、同じ言ふ甲斐無さなれど、とぢめの事をしも、山賤の譏をさへ負ふなん、此許の爲も辛き。」など、かの睦ましき大藏の大夫しての給へり。使の來たるに附けても、いとゞいみじきに、聞えん方無き事どもなれば、唯涙に溺ほれたるばかりを託言にて、はか〴〵しうも答へずなりぬ。殿は猶いと敢無く、いみじと聞き給ふにも、心憂かりける所かな。鬼などや住むらん。何どて今までさる所に据ゑたりつらん。思はずなる筋の紛れある樣なりしも、斯く放ち置きたるに心安くて、人も言ひ侵し給ふなりけんかし、と思ふにも、我がたゆく世

づかぬ心のみ悔しく、御胸痛く覺え給ふ。惱ませ給ふあたりに、斯かる事おほし亂るゝもうたてあれば、京におはしぬ。宮の御方にも渡り給はず。（薫消息）「事々しき程にも侍らねど、ゆゝしき事を近う聞き侍れば、心の亂れ侍る程も、忌々しくてなん。」と聞え給ひて、盡せず儚くいみじき世を歎き給ふ。ありし樣容いと愛敬づき、をかしかりしけはひなどの、いみじく戀しく悲しければ、現の世には、何ど斯くしも思ひ入れずのどかにて過しけん。只今は更に思ひ鎭めん方無き儘に、悔しき事の數知らず、かゝる事の筋に附けて、いみじう物思ふべき宿世なりけり。樣異に志したりし身の、思の外に、かく例の人にてながらふるを、佛などの憎しと見給ふにや、人の心を起させんとて、佛のし給ふ方便は、慈悲をも隱して、かやうにこそはあゝなれと、思ひ續け給ひつゝ、行をのみし給ふ。

かの宮はた、まして二三日は物も覺え給はず。現心も無き樣にて、如何なる御靈氣ならんなど騷ぐに、やう〳〵涙盡し給ひて、思し鎭まるにしもぞ、ありし樣は戀しういみじく思ひ出でられ給ひける。人には唯御病の重き樣をのみ見せて、斯く漫なるいやめの氣色知らせじと、賢く持て隱すと思しけれど、自らいと著かりければ、如何なる事に斯く思し惑ひ、御命も危きまで沈み給ふらん、と云ふ人も有りければ、かの殿にもいとよく、この御氣色を聞き給ふに、さればよ。猶よその文通はしのみにはあらぬなりけり。見給ひては必ず然思しぬべかりし人ぞかし。ながらへましかば、たゞなるよりは、我爲に嗚呼なる事も出で來なまし、と思すになん、焦るゝ胸も少し冷むる心地し給ひける。

宮の御訪に、日々に參り給はぬ人無く、世の騷となれる頃、事々しき際ならぬ思に籠り

置きればこそ、匂宮の言ひ寄り給ひつれと後悔するなり。
○たゆく　油斷ありて。
○惱ませ給ふあたり　女三宮のなり。
○宮の御方　女二宮の御方。
○忌々しくてなん　母宮に憚あれば參らずとなり。
○人の心を起させんとて　我に發心せしめんとて。
○いやめの氣色　涙勝の樣子。
○かの殿　薫君。
○さればよ　以下薫君の心中なり。
○見給ひては云々　浮舟は匂宮の見給ひては必ず御心の迷ひぬべき人たり。
○宮　匂宮。
○式部卿宮　源氏の君の御弟にて宇治八宮の御父。
○見え給はんも　匂宮が薫君に對面し給はんも。
○内　父帝。
○宮　母中宮。
○いとはしたなけれど云々　紛はし難けれど浮舟の事故と薫の如何で覺るべき。
○さりや　以下薫君の心中なり。
○此君　薫君。
○こよ無くも疎なるかな　薫君の浮舟を慕ふことのなり。以下匂宮の心中なり。

居て、參らざらんも僻みたるべし、と思して參り給ふ。其頃式部卿宮と聞ゆるも、亡せ給ひにければ、御叔父の服にて、薄鈍なるも、心の中に哀に思ひ寄へられて、附々しく見ゆ。少し面瘠せて、いとゞなまめかしき事增さり給へり。人々罷ゞでゝ、しめやかなる夕暮なり。

宮伏し沈みてのみはあらぬ御心地なれば、疎き人にこそ逢ひ給はね、御簾の内にも例入り給ふ人には、對面し給はずもあらず。見え給はんも愛無くつゝましく、見給ふに附けても、いとゞ涙の先づ堰き難さを思せど、思ひ鎭めて、（匂）「おどろ〳〵しき心地にも侍らぬを、皆人は愼むべき病の樣なりとのみ物すれば、内にも宮にも思し騷ぐが、いと苦しく、實に世の中の常無きをも、心細く思ひ侍る。」との給ひて、押し拭ひ紛らはし給ふと思す涙の、やがて滯らず降り落つれば、いとはしたなけれど、必ずしも如何でか心得ん。唯女々しく心弱きとや見ゆらん、と思すも恥かし。さりや、唯この事をのみ思すなりけり。何時よりなりけん。我を如何にをかしと物笑し給ふ心地に、月頃思し渡りつらん、と思ふに、此君は悲しさは忘れ給へるを、こよ無くも疎なるかな。物の切に覺ゆる時は、いと斯からぬ事に附けてだに、空飛ぶ鳥の鳴き渡るにも、催されてこそ悲しけれ。我が斯くすゞろに心弱きに附けても、若し心を得たらんに、さ云ふばかり、物の哀も知らぬ人にもあらず。世の中の常無き事を沁みて思へる人しも、つれなきと、羨ましくも、心憎くも思さるゝ物から、槇柱は哀なり。これに向ひたらん樣も、おほし遣るに、形見ぞかしと打守り給ふ。やうやう世の物語聞え給ふに、いと籠めてしもはあらじと思ひて、（薫）「昔より心に籠めて、暫しも聞えさせぬ事殘し侍る限は、いといぶせくのみ思う給へられしを、今はなか〳〵の上薦に

○槇柱は哀なり　薫君は浮舟のゆかりなれば哀と思ふとの意。古歌に「吾妹子が來ては寄り添ふ槇柱そも睦しやゆかりと思へば」と

なりにて侍り。まして御暇無き御有様にて、心長閑におはします折も侍らねば、宿直など に、其事と無くては、え侍はず、そこはかと無くて過し侍りてなん。昔御覽ぜし山里に、はかなくて亡せ侍りにし人の同じゆかりなる人、覺えぬ所に侍りと聞き附け侍りて、時々さて見つべくやと思ひ給へしに、閒無く人の譏も侍りぬべかりし折なりしかば、この怪し き所に置きて侍りしを、をさ〳〵罷りて見る事も無く、又彼も、某一人を相頼む心も殊に無くてやありけんとは見給へつれど、やんごとなく物々しき筋に思ひ給へばこそはあらめ。見るにはた、異なる咎も侍らずなどして、心安くらうたしと思ひ侍りつる人の、いとはかなくなり侍りにける。なべて世の有様を思ひ給へ續け侍るにも、悲しくなん。聞し召すやうも侍るらんかし。」とて、今ぞ泣き給ふ。これもいと斯うは見え奉らじ、嗚呼なり、と思ひつれど、零れ初めては、いと止め難し。氣色の聊亂り顏なるを、怪しくいとほしと思せど、つれなくて、(匂)「いと哀なる事にこそ。昨日仄に聞き侍りき。如何にとも聞ゆべく思う給へながら、態と人に聞かせ給はぬ事と聞き侍りしかばなん。」と、つれなくの給へど、いと堪へ難ければ、言少にておはします。(薫)「さる方にても、御覽ぜさせばやと思ひ給へりし人になん。自ら然もや侍りけん。宮にも參り通ふべき故侍りしかば。」など、少しづゝ氣色ばみて、(薫)「御心地例ならぬ程は、すゞろなる世の事聞し召し入れ、御耳驚くも愛無きわざになん。よく謹ませ給へ。」など、聞え置きて出で給ひぬ。

いみじくも思したりつるかな。いと儚かりけれど、さすがに高き人の宿世なりけり。當時の帝、后のさばかりかしづき奉り給ふ御子、顏貌より始めて、只今の世には類おはせざ

あり。
○今はなか〳〵の云々　薫君自ら戲れて言ふなり。
○宿直などに侍ふ　匂宮に見ゆるごとを歎して云ふ。
○亡せ侍りにし人　大君。
○同じゆかりなる人　浮舟。
○やんごとなく云々　本妻として見ばこそはあらめ、さなくて見るに。
○これも　薫君も。
○亂り顏　惱ましげなるを云ふ。
○如何とも云々　弔ひ申さんと思ひしかども。
○さる方　好色の方。
○いみじくも云々　浮舟をなり。以下薫君の心中なり。

○いと儚かりけれど云々　浮舟を謂ふなり。
○當時の云々御子　匂宮は當時の云々御子にて。
○見給ふ人　匂宮と契り給ふ人。
○之に　浮舟に。
○此人を思すゆかりの云々　浮舟を思す故の御煩となり。
○人木石にあらざればみな情あり　白氏文集に「人非二木石一皆有レ情、不レ如不レ逢二傾城色一」とあり。
○後の認なども云々　薫送の疎略なりしを。
○兄弟あるはなど　兄弟ある人は後に殘りたる人の爲に薫送の事などを簡略にすると言ひ習はせるなり。
○宿に通はゞ　古今集に「亡き人の宿に通はゞ時鳥かけて音にのみなくと告げなん。
○北の宮　二條院。
○此處に渡り給ふ日なりければ　今日は匂宮が二條院におはする日なれば。
○忍音や云々　時鳥の啼くを哀と聞き給はゞ君も忍音に泣き給ふらん。浮舟の事を含めて仄めかしたるなり
○二所　匂宮と中君と。

めり。見給ふ人とても斜ならず、樣々に附けて、限なき人を措きて、之に御心を盡し、世の人立ち騷ぎて、修法讀經祭祓と、道々に騷ぐは、此人を思すゆかりの御心地の謬にこそはありけれ。我も斯ばかりの身にて、時の帝の御女を持ち奉りながら、此人のらうたく覺ゆる方は劣りやはしつる。況て今はと覺ゆるには、心をのどめん方無くもあるかな。然るは嗚呼なり、斯からじ、と思ひ忍ぶれど、樣々に思ひ亂れて、「人木石にあらざれば皆情有り」と、打誦じて臥し給へり。後の認なども、いとはかなくしてけるを、宮にも如何が聞き給ふらんと、いとほしく敢無く、母の直々しくて、兄弟有るはなど、さやうの人は云ふ事あゝなるを思ひて、事殺ぐなりけんかしなど、心づき無く思す。覺束無さも限なきを、ありけん樣も自ら聞かまほしと思せど、長籠し給はんも便無し。往きと往きて立ち歸らんも心苦し、など思し煩ふ。

月立ちて今日ぞ渡らましと、おぼし出で給ふ日の夕暮、いと物あはれに、御前近き橘の香の懷かしきに、杜鵑の二聲ばかり啼きて渡る。「宿に通はゞ」と、獨言ち給ふも飽かねば、北の宮に、此處に渡り給ふ日なりければ、橘折らせて聞え給ふ。

(薫「忍音や、君も泣くらん、甲斐も無き、しでの田長に、心通はゞ。」

宮は、女君の御樣のいとよく似たるを、哀とおぼして、二所眺め給ふ折なりけり。氣色ある文かなと見給ひて、

(匂)「橘の、薫るあたりは、時鳥、心してこそ、啼くべかりけれ。

煩はし。」と書き給ふ。女君この事の氣色は、皆見知り給ひてけり。哀にあさましき儚さの、

○橘の云々　薫君は橘の香に浮舟を偲び給へば橘の薫る邊は時鳥も心して啼け。

○例ならぬ御事の漾も云々　匂宮の御不例に、驚き惑ひ給ふ六條院（六君の方）にては。

○父大臣　六君の父夕霧。

○例の人々　時方等。

○入り來たれば　匂宮の御使が。

○思ほし焦るゝ　匂宮が。

○見奉れ　時方等が。

○この御忌果てゝ云々　浮舟の御忌果てゝ後、假初の物詣などに託けて出でんも似つかはしき頃になりて云云。

様々に付けて、心深き中に、我一人物思知らねば、今までながらふるにや。それも何時までと心細くおぼす。宮も隱れ無き物から、隔て給ふもいと苦しければ、ありし様など、少しは取り直しつゝ語り聞え給ふ。（中君）「隱し給ひしがつらかりし。」など、泣きみ笑ひみ聞え給ふにも、他人よりは睦ましく哀なり。事々しく麗しくて、例ならぬ御事の様も驚き惑ひ給ふ所にては、御訪の人繁く、父大臣兄の君達、隙無きもいとうるさきに、此處はいと心安くて懐かしくぞ思されける。

いと夢のやうにのみ、猶如何で、いと俄なりける事にかは、とのみいぶせければ、例の人々召して、右近を迎に遣はす。母君も、更に此水の音けはひを聞くに、我も轉び入りぬべく悲しく、心憂き事の止るべくもあらねば、いと佗しうて歸り給ひにけり。念佛の僧どもを頼もしき者にて、いと微なるに、入り來たれば、事々しく俄に立ち廻りし宿直人どもゝ見咎めず、あや憎に限の度しも、入れ奉らずなりにしよと、思ひ出づるもいとほし。然るまじき事を思ほし焦るゝ事と、見苦しく見奉れど、此處に來ては、おはしましゝ夜な〳〵の有様、抱かれ奉り給ひて、船に乘り給ひしけはひの、あてに美しかりし事などを思ひ出づるに、心強き人無く哀なり。右近逢ひていみじう泣くも道理なり。（時方）「斯くの給はせて、御使になん參り來つる。」と云へば、（右近）「今更に人も怪しと言ひ思はんも、包ましく、參りてもはかゞ〳〵しく聞し召し諦むばかり物聞えさすべき心地もし侍らず。この御忌果てゝ、あからさまに物になど、人に言ひ做さんも、少し似つかはしかりぬべき程になしてこそ、心よりの外の命侍らば、聊思ひ鎭まらん折になん、仰言無くとも參りて、實にいと夢のやうなりし事ども、語り聞えまほしき。」と云ひて、今日は動くべくもあらず。大夫も泣きて、（時方）「更にこの御中の事、こまかに知り聞えさせ侍らず。物の心も知り侍らずながら、類無き御志を見奉り侍りしかば、君達をも何かは急ぎてしも聞え承はらん。遂には仕う奉るべきあたりにこそ、と思ひ給へしを、言ふ甲斐無く悲しき御事の後は、私の志も、なか〳〵深さ增さりてなん。」と語らふ。（時方）「態と御車など思し運らして、奉れ給へるを、空しくてはいといとほしうなん。今一所にても參り給へ。」と云へば、侍從の君呼び出でゝ、（右近）「さば參り給へ。」と云へば、（侍從）「況て何事をかは聞えさせん。さても、この御忌の程には、如何でか忌ませ給はぬか。」と云へば、（時方）「惱ませ給ふ御響に、様々の御慎ども侍るめれど、忌み敢へさせ給ふまじき御氣色になん。又かく深き御契にては、籠らせ給ひてもこそおはしまさめ。殘の日幾許ならず。猶一所參り給へ。」と責むれば、侍從ぞ、ありし御様もいと戀しく思ひ聞ゆるに、如何ならん世にかは見ゆらん、かゝる折に、と思ひなして參りける。黑き衣ども着て、引き繕ひたる容もいと淸げなり。裳は只今、我より上なる人無きに打弛みて、色も更へざりければ、薄色なるを持たせて參る。おはせましかば、此道にぞ忍びて出で給はまし。人知れず心寄せ聞えし物を、など思ふにも哀なり。道すがら泣く〳〵なん來ける。

宮は此人參れりと聞し召すも哀なり。女君には、餘りうたてあれば聞え給はず。寢殿におはしまして、渡殿におろし給へり。ありけん様など委しう問はせ給ふに、（侍從）「日頃思し歎きし様、其夜泣き給ひし様、怪しきまで言少に、おぼ〳〵とのみ物し給ひて、いみじと

○君達をも何かは云々　御身等に何かは急ぎて慇懃を通ぜん。

○御車　右近の迎の車。

○今一所にても云々　右近ならずば侍從にても參り給へ。

○忌み敢へさせ給ふまじき　浮舟の御事故忌み敢へ給はずとなり。

○御様　匂宮の御様。

○黑き衣　喪服なり。

○おはせましかば　浮舟が。

○寢殿　正殿。

○之を見つけて　その入水するを見つけて。

○人　侍從を指す。

○我許にあれかし云々　我方に宮仕せよ中君もゆかり無きかは。

○かの御料　浮舟の御料。

○唯此人に云々　唯侍從に似合ひたる程となり。

○おはしたり　宇治になり

思す事をも、人に打出で給ふことは難く、物づゝみをのみし給ひし故にや、の給ひ置く事も侍らず。夢にも斯く心強き樣に思し懸くらんとは、思ひ給へずなん侍りし。」など、委しう聞ゆれば、ましていといみじう、さるべきにて、ともかくもあらましよりも、如何ばかり物を思ひ立ちて、さる水に溺れけん、と思し遣るに、之を見付けて塞き止めたらましかばと、涌き返る心地し給へど甲斐なし。(侍從)「御文を燒き失ひ給ひしなどに、何どて目を立て侍らざりけん。」など、夜一夜語らひ給ふに聞え明かす。かの卷數に書き付け給へりし母君の返事などを聞ゆ。何ばかりの者とも御覽ぜざりし人も、睦ましく哀に思さるれば、(匂)「我許にあれかし。あなたも持て離るべくやは。」との給へば、(侍從)「さて侍はんに付けても、物のみ悲しからんを思ひ給ふれば、今この御果など過して。」と聞ゆ。「又も參れ。」など、此人をさへ飽かずおぼす。曉に還るに、かの御料にとて、設けさせ給へりける櫛の箱一具、衣箱一具贈物にせさせ給ふ。樣々にせさせ給ふ事は多かりけれど、おどろ〳〵しかりぬべければ、唯此人に仰せたる程なりけり。何心も無く參りて、斯かる事どものあるを、人は如何が見んっすゞろにむつかしき事かな、と思ひわぶれど、如何がは聞え返さん。右近と二人忍びて見つゝ、徒然なる儘に、こまかに今めかしう、し集めたる事どもを見ても、いみじう泣く。裝束もいと麗しう、し集めたる物どもなれば、かゝる御服に、之を如何でか隱さんなど、持てぞ煩ひける。

大將殿も猶いと覺束なきに思し餘りておはしたり。道の程より、昔の事ども搔き集めつゝ、如何なる契にて、この父親王の御許に來初めけん、かゝる思ひ懸けぬ果まで思ひ扱

○思ひ知らするなンめり　佛の方便にて我に思ひ知らするなるべしとなり。

○尼君などにも云々　辨尼なども事の氣色を見知りたれば。

○更にあらじ　以下薫君の心中なり。

○こよなく言少に大どかなりし人　浮舟を謂ふ。

○本よりおぼす樣ならで云云　父宮の御許にて成長し給はで東國へ下り給ひし事などを指して云ふ。

ひ、このゆかりに付けては、物をのみ思ふよ、いと尊くおはせしあたりに、佛をしるべにて、後世をのみ契りしに、心穢き末の遠目に、思ひ知らするなゝめり、とぞ覺ゆる。右近召し出でゝ、(薫)「ありけん樣もはかゞしく聞かず。猶盡せずあさましう儚ければ、忌の殘も少くなりぬ。過してと思ひつれど、鎭め敢へず物しつるなり。如何なる心地にてか、俄に儚くなり給ひにし。」と、問ひ給ふに、尼君なども氣色見てければ、遂に聞き合せ給はん思ひ運らしつゝ習ひしか、斯くまめやかなる御氣色に差向ひ聞えては、豫て、と言はん斯く言はんと思ひ設けし詞をも忘れ、煩はしう覺えければ、ありし樣の事どもを聞えつ。あさましう思し懸けぬ筋なるに、物もとばかりの給はず。更にあらじと覺ゆるかな。なべての人の思ひ言ふことをも、こよなく言少に、大どかなりし人は、如何で然るおどろ〳〵しき事は思ひ立つべきぞ。如何なる樣に此人々もてなして言ふにかあらん、と御心も亂れ增さり給へど、宮も思し歎きたる氣色いと著し。此處の有樣も、然强顏作りたらん氣はひは自ら見えぬべきを、斯くおはしましたるに付けても、悲しくいみじき事を、上下の人集ひて泣き騷ぐをと聞き給へば、(薫)「御供に具して失せたる人やある。猶ありけん樣を確に言へ。我を疎なりと思ひて背き給ふ事はよもあらじ、となん思ふ。如何やうなる、忽に言ひ知らぬ事ありてか、然る事はし給はん。我なんえ信ずまじき。」との給へば、いといとほしく、さればよと煩はしくて、(右近)「自ら聞し召しけん。本より思す樣ならで生ひ出で給へりし人の、世離れたる御住居の後は、何時と無く物をのみ思すめりしかど、偶さかにも斯く

○世離れたる御住居　宇治の御住居をいふ。

○かの筑波山　母をいふ、母は常陸の妻なれば國の名所を取りて云へるなり。

○心得ぬ御消息　藥君より「波越ゆる頃とも知らで云云」とありし消息を云ふ。

○思ひ給へ寄るに堪へ侍らずなん　思ひ寄る方無し。

○顯證なる樣に　忍びたる事の自由ならぬ樣にもてなされたるといふ意。

○分くる方云々　浮舟の方に我より深き方あるが故と思はる。

○宮の御事よ　匂宮密通の事をいふ。

○確にこそは聞き給ひてけれ　藥君は匂宮の事をなり

右近の心中なり。

○眺めやすらひて　右近の少し思案したる體なり。

○此宮の上の御方　中君の御方。

○昔づれ聞えさせ給ひし匂宮よりなり。

○なか〳〵うたてあるやう御返事無くてはなり。

○深き谷をも求め出でまし　入水などの事は思ひ立つまじとの意。古今集に「世の中の憂きたび毎に身を投げば深き谷こそ淺くなりなめ」

○後の後見　葬送の事。

○如何に思ふらん　母の心を察し給ふなり。

○我がゆかりに如何なる事おはしますを待ち聞えさせ給ふに、本よりの御身の歎をさへ慰め給ひつゝ、心長閑なる樣にて、時々も見奉らせ給ふべきやうに　何時しかとのみ言に出でゝはの給はねど、思し渡るめりしを、その御本意叶ふべき樣に承はる事どもゝ侍りしに、斯くて侍ふ人どもゝ、嬉しき事に思ひ給へいそぎ、かの筑波山も辛うじて心行きたる氣色にて、渡らせ給はん事を營み思ひ給へしに、心得ぬ御消息侍りけるに、この宿直など仕う奉る者どもゝ、女房達亂がはしかゝりなど、戒め仰せらるゝ事など申して物の心得ず、荒々しき田舍人どもの、怪しき樣に取り做し聞ゆる事ども侍りしを、其後久しう御消息なども侍らざりしに、心憂き身なりとのみ、いはけなかりし程より思ひ知るを、人數に如何で見爲さんとのみ萬に思ひ扱ひ給ふ母君の、なか〳〵なる事の人笑はれになり果てば、如何に思ひ歎かん、などおもむけてなん、常に歎き給ひし。其筋より外に、何事をかと思ひ給へ寄るに堪へ侍らずなん。鬼などの隱し聞ゆとも、聊殘る所も侍るなる物を。」とて、泣く樣もいみじければ、如何なる事にかと、紛れつる御心も失せて、堰き敢へ給はず。（藥）「我は心に身をも任せず、顯證なる樣にもてなされたる有樣なれば、覺束無しと思ふ折も、今近くて人の心置くまじく、目安き樣にもてなして、行末長くをと思ひのどめつゝ過しつるを、疎に見做し給ひけんこそなか〳〵分くる方ありけると覺ゆれ。今は斯くだに言はじと思へど、又人の聞かばこそあらめ。宮の御事よ、何時よりありそめけん。さやうなるに付けてや、いと片端に人の心を惑はし給ふ宮なれば、常に逢ひ見奉らぬ歎に、身をも失ひ給へるとなん思ふ。猶言へ。我には更にな隱しそ。」との給へば、確にこそは聞き給ひてけれといといとほしくて、

（右近）「いと心憂き事聞し召しけるにこそは侍るなれ。右近も侍はぬ折は侍らぬ物を。」と、眺めやすらひて、（右近）「自ら聞し召しけん。此宮の上の御方に忍びて渡らせ給へりしをあさましく思ひ懸けぬ程に、入りおはしたりしかど、いみじき事を聞えさせ侍りて、出でさせ給ひにき。それにおぢ給ひて、かの怪しく侍りし所に渡らせ給へりしなり。その後音にも聞えじと思して已みにしを、如何でか聞かせ給ひけん。唯その二月ばかりより、音づれ聞えさせ給ひし御文はいと度々侍りしかど、御覽じ入るゝ事も侍らざりき。いと忝く、なかなかうたてある樣になどぞ、右近など聞えさせしかば、一度二度や聞えさせ給ひけん。それより外の事は、見給へず。」と聞えさす。斯うぞ言はんかし。强て問はんもいとほしくて、つくづくと打眺めつゝ、宮をめづらし哀と思ひ聞えても、我方をさすがに疎に思はざりける程に、いとあきらむる所無く、はかなけなりし心にて、この水の近きを便にて、かく思ひ寄るなりけんかし。我此處に差放ち据ゑざらましかば、いみじう憂き世に經とも、如何でか必ず深き谷も求め出でましと、いみじう憂き水の契かなと、此川の疎ましう思さるゝ事いと深し。年頃哀と思ひ初めたりし方にて、荒き山路を往き還りしに、今は又心憂くて、此里の名をだにえ聞くまじき心地し給ふ。宮の上のの給ひ始めし人形と付けたりしさへ忌々しう、唯我過に失ひつる人なりと、思ひ以て行くには、母の猶輕びたる程にて、後の後見もいと怪しく事殺ぎてし做しけるなゝめりと、心行かず思ひつるを、委しく聞き給ふになん、如何に思ふらん。然ばりの人の子にては、いとめでたかりし人を、忍びたる事は必ずしも得知らで、我がゆかりに如何なる事のありけるならん、とぞ思ふなるらんか

の云々　藁の方につらき事ありてかく入水せしならんなど母の思はんとなり。
○穢らひと云ふ事はあるまじ　實は此處にて亡せたる人ならねば。
○我も亦云々　我も此處に來て重ねて見る事あらじ、されば誰か此宿を忍ばん。
○あらましかば云々　浮舟のあらば歸らじものをとなり。
○うつぶし臥して侍る　古今集に「世を厭ひ木の下毎に立ち寄りてうつぶしをめの麻の衣なり」とあり。
○うつせ　うつせ貝。
○例の家にもえ行かず　穢れたりとて常陸が家にも行かぬなり。
○え寄らず　藁所へなり。

し、など萬にいとほしくおぼす。穢らひと云ふ事はあるまじけれど、御供の人目もあれば、上り給はで、御車の榻を召して、妻戸の前にぞ居給ひけるも見苦しけれど、いと繁き木の下に、苔を御座にてとばかり居給へり。今は此處を來て見ん事も、心憂かるべしとのみ見廻らし給ひて、

「我も亦、憂き舊里を、荒れ果てば、誰宿木の、蔭や忍ばん。」

阿闍梨今は律師なりけり。召して、この法事の事掟てさせ給ふ。念佛の僧の數添へなどせさせ給ふ。罪いと深くなるわざと思せば、輕むべき事をぞすべき。七日々々の經佛供養すべき由など、こまかにの給ひて、いと暗うなりぬるに歸り給ふも、あらましかば今夜歸らましやは、とのみなん、尼君に消息せさせ給へれど、(辨)「いとも〳〵ゆゝしき身をのみ思ひ給へ沈みて、いとゞ物を覺え給へられず、惚れ侍りてなん、うつぶし臥して侍る。」と聞えて出で來ねば、強ひても立ち寄り給はず。道すがら疾く迎へ取り給はずなりにける事悔しう。水の音の聞ゆる限は、心のみ騒ぎ給ひて、骸をだに尋ねずなりにける事、あさましくても止みぬるかな。如何なる樣にて、何れの底の虚貝に雜りけん、など遣る方無くおぼす。

かの母君は京に子產むべき女の事により愼み騒げば、例の家にもえ行かず、すゞろなる旅居のみして、思ひ慰む折も無きに、又これも如何ならんと思へど、無事に產みてけり。ゆゝしければえ寄らず。殘の人々の上も覺えず惚れ惑ひて過すに、大將殿より御使忍びてあり。物覺えぬ心地にも、いと嬉しくあはれなり。(藁消息)「あさましき事は先づ聞えんと思ひ給へ

○如何なる闇にか惑はれ給ふらん　後撰集に「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」とあるによれり。
○大藏大夫　仲信。
○をさなき人ども　常陸守の子どもなり。
○呼び据ゑたり　御使をなり。
○辱き一言　京へ渡してんとの。
○言ふ甲斐なく　浮舟の亡せしを云ふ。
○里　宇治。
○斑犀の帶　斑犀を飾りたる玉帶。
○すゞろなる事かな　思ひも寄らぬ事かなどの意。

しを、心ものどまらず、目も暗き心地して、まいて如何なる闇にか惑はれ給ふらんと、其程を過しつるに、はかなくて日頃も經にける事をなん。世の常無さも、いとゞ思ひのどめん方無くのみ侍るを、思の外にもながらへば、過ぎにし名殘とは、必ず然るべき事にも尋ね給へ。」など、こまかに書き給ひて、御使には、かの大藏大夫をぞ給へりける。「心長閑に萬を思ひつゝ。年頃にさへなりにける程、必ずしも志あるやうには見給はざりけん。されど今より後、何事に付けても、必ず忘れ聞えじ。又さやうにを人知れず思ひ置き給へ。幼き人どもゝあゝなるを、公に仕う奉らんにも、必ず後見思ふべくなん。」など、言にもの給へり。(母)「甚くしも忌むまじき穢らひなれば、深うも觸れ侍らず。」など言ひ做して、せめて呼び据ゑたり。御返り泣く〳〵書く。(母消息)「いみじき事に死なれ侍らぬ命を、心憂く思ひ給へ歎き侍るに、かゝる仰言見給ふべかりけるにやとなん。年頃は細き有樣を見給へながら、それは數ならぬ身の怠に思ひ給へ做しつゝ、辱き御一言を、行末長く賴み聞えさせ侍りしに、言ふ甲斐なく見給へ果てゝは、里の契もいと心憂く悲しくなん。樣々に嬉しき仰言に、命延び侍りて、今暫しながら侍らば、猶賴み聞え侍るべきにこそと、思ひ給ふるに付けても、目の前の涙に昏れ侍りて、え聞えさせ遣らず。」など書きたり。御使になべての祿などは、見苦しき程なり。飽かぬ心地もすべければ、かの君に奉んと志して持たりける佳き斑犀の帶、太刀のをかしきなど袋に入れて、車に乘る程、是は昔の人の御志なりとて贈らせてけり。殿に御覽ぜさすれば、(藁)「いとすゞろなる業かな。」との給ふ。詞には、「自ら會ひ侍りたうびて、いみじく泣く〳〵萬の事の給ひて、幼き者どもの事まで仰

○何故などは　浮舟のゆかり故などとは。
○實に異なる事なき云々　以下薫君の心中なり。
○世に舊りにたる　一度人の妻となりし女をいふ。
○彼處　三條の家。
○折しも　少將の妻の田產の頃にしも。
○何處になんおはする　浮舟は。
○知らせん　中將が常陸に
○斯かれば　浮舟亡せたれば。
○善き人畏くして云々　常陸の性質を謂ふ。權門、上臈などを事々しく思ふなり。
○いと氣高くおはする殿なり　薫君を謂ふ。
○さるは　以下薫君が浮舟の母に消息賜はりし理を叙ぶ。
○慰めん　母を。

せられたるが、いとも畏きに、又數ならぬ程は、なか〳〵いと耻かしう、人に何故などは知らせ侍らで、怪しき樣どもを皆參らせ侍りて侍はせんとなん物し侍りつる。」と聞ゆ。實に異なる事なきゆかり睦びにぞあるべけれど、帝にも然ばかりの人の女奉らずやはある。それに然るべきにて、時めかし思さんをば、人の謗るべき事かは。たゞ人はた、怪しき女、世に舊りにたるなどを、持ち居る類多かり。かの守の女なりけりと、人の言ひ做さんにも、我がもてなしの、それに汚るべくあり初めたらばこそあらめ。一人の子を徒になして、思ふらん親の心に、猶此ゆかりこそ面立たしかりけれと、思ひ知るばかり、用意は必ず見すべき事とおぼす。

彼處には常陸の守立ちながら來て、折しも斯くて居給へる事など腹立つ。年頃何處になんおはするなど、有の儘にも知らせざりければ、はかなき樣にておはすらんと思ひ言ひけるを、京になど迎へ給ひて後、面目ありてなど、知らせんと思ひける程に、斯かれば、今は隱さんも愛無くて、ありし樣泣く〳〵語る。大將殿の御文ども取り出でゝ見すれば、善き人畏くして、鄙び物愛でする人にて、驚き臆して打返し〳〵、(守)「いとめでたき御幸を捨てゝ、亡せ給ひにける人かな。己も殿人にて參り仕う奉れども、近く召し使ひ給ふ事無く、いと氣高くおはする殿なり。若き者どもの事仰せられたるは、賴もしき事になん。」など、喜ぶを見るにも、況ておはせましかばと思ふに、伏し轉びて泣かる。守も今なん打泣きける。さるは、おはせし世には、なか〳〵斯かる類の人しも、尋ね給ふべきにしもあらずかし。我が過にて失ひつるもいとほし。慰めんと思すに因りなん、人の譏懇に尋ねじと

○人の譏懇に尋ねじ　人の譏を顧みじとの意。
○六十僧の布施　六十人の僧に布施をするなり。大般若轉讀の時にかく召さるゝ例多し。
○宮　匂宮。
○殿の人ども　薫君の家人にて法事の奉行の人ども。
○宮の上　中君。
○七僧の前の事　七僧供養の事。
○宮に畏まり聞えて　女二宮に憚りて。
○二人の人　匂宮と薫君と。
○御思　匂宮の御思。
○試み給ふ　他の女をなり。
○かの殿　薫君。
○御輕服　御叔父式部卿宮の御輕服。
○猶斯くておはします　六條院になり。
○一品の宮　女一宮。

思しける。

四十九日のわざなどせさせ給ふにも、如何なりけん事にかはと思せば、とてもかくても罪得まじき事なれば、いと忍びて、かの律師の寺にてせさせ給ひける。六十僧の布施など大に捉てられたり。母君も來居て、事ども添へたり。宮よりは右近が許に、白銀の壺に黃金入れて賜へり。人見咎むばかり大なる業は得し給はず、右近が志にてしたりければ、心知らぬ人は、如何で斯くなん、など言ひける。殿の人ども、睦ましき限數多賜へり。怪しく音もせざりつる人の果を、斯く扱はせ給ふ。誰ならんと、今驚く人のみ多かるに、常陸の守來て、心も無く主人がり居るなん怪しと人々見ける。少將の子產ませて、嚴しき事せさせんと惑ひ、家の內に無き物は少く、唐土新羅の限をもしつべきに、限あれば、いと怪しかりけり。この御法事の忍びたるやうに思したれど、けはひこよなきを見るに、生きたらましかば、我身に竝ぶべくもあらぬ人の御宿世なりけり、と思ふ。宮の上も誦經し給ひ、七僧の前の事もせさせ給ひけり。今なん斯かる人、持給へりけりと、帝まで聞し召して、疎に二人の人の御心の中、舊りず悲しく、生憎なりし御思の盛りに搔き絕えてはいといみじけれど、仇なる御心は慰むやなど、試み給ふ事もやう〳〵ありけり。かの殿は斯く取り持ちて、何やかやと思して、殘の人をはぐゝませ給ひても、猶言ふ甲斐なき事を忘れ難くおぼす。后の宮の御輕服の程は、猶斯くておはしますに、二の宮なん式部卿になり給ひにける。重々しうて、常にしも參り給はず。此宮は淋々しく物哀なる儘に、一品の宮の御方

○小宰相の君　一品の宮の官女。
○此宮も云々　匂宮も小宰相を佳き人と思して、之に藁君の事を言ひ破り給へど。
○まめ人　藁君。
○かく物思したるさま云々　藁の浮舟の事を歎き給ふを見知りてなり。
○あはれ知る云々　あはれを知る心は人に劣らねど歌ならぬ身に思ひ消えて今まで申出さで日を經しとなり
○代へたらば　我身を浮舟に代へたらば。
○常無しと云々　我は人に死に別れて深く世の無常を感ずる憂身なれど、人の知るべき程には歎かず。然るに能く推量りて尋ぬ給へるは嬉しとの意。
○人柄も云々　小宰相のしかるべき身がらなるをいふ。
○斯く出で立ちけん　斯く宮仕に出でけん。
○御八講せらる　明石中宮法華八講を行ひ給ふなり。

を慰め所にし給ふ。佳き人の容をも、えまほに見給はぬ殘多かり。大將殿の辛うじていと忍びて語らひ給ふ小宰相の君と云ふ人、容なども清げなり。心ばせある方の人と思されたり。同じ琴を搔き鳴す爪音撥の音も、人には優り、文を書き物打言ひたるも、由ある節をなん添へたりける。此宮も年頃いと痛き者にし給ひて、例の言ひ破り給へど、何どか然しも珍らしげ無くはあらんと、心强く妬き樣なるを、まめ人は少し人より異なりと思すにんありける。かく物思したる樣も見知りければ忍び餘りて聞えたり。

（小宰相）「あはれ知る、心は人に、後れねど、數ならぬ身に、消えつゝぞ經る。代へたらば、」と故ある紙に書きたり。物哀なる夕暮、しめやかなる程を、いと能く推し量りて言ひたるも憎からず。

（藁）「常無しと、こゝら世を見る、憂き身だに、人の知るまで、歎きやはする。」

この喜、哀なりし折からも、いとゞなん、など、言ひに立ち寄り給へり。いと耻かしげに物々しげにて、なべて斯樣になども習し給はぬ。人柄もやんごとなきに、いと物はかなき住居なりかし。局など云ひて、狹く程なき遣戸口に寄り居給へる、傍痛く覺ゆれど、さすがに餘り卑下してもあらで、いと善き程に物なども聞ゆ。見し人よりも、これは心憎き氣添ひてもあるかな、何どて斯く出で立ちけん。然る物にて、我も置いたらましものを、とおほす。人知れぬ筋は掛けても見せ給はず。

蓮の花の盛に、御八講せらる。六條院の御爲、柴の上など、皆思し分けつゝ、御經佛など供養せさせ給ひて、嚴しく尊くなんありける。五卷の日などは、いみじき見物なりけれ

○六條院　源氏の君。
○五日　結願の日なり。
○姫宮　女一宮。
○物聽き困じて　說教などの聽聞に倦み疲れて。
○御前　女一宮の御前。
○馬道　母屋に行き通ふ緣側。
○氷　主水司より中宮に奉りたる氷。
○御前なる人は誠に土などの心地ぞする　女一宮に壓されて御前にある人は土塊などの若しとなり。
○この志の人　藁君の志し給ふ人。

ば、此方彼方女房に付きて參りて物見る人多かりけり。五日と云ふ朝座に果てゝ、御堂の飾り取り放け、御しつらひ更むるに、北の廂も障子ども放ちたりしかば、皆入り立ちて繕ふ程、西の渡殿に姫宮おはしましけり。物聽き困じて、女房も各局に在りつゝ、御前はいと人少なる夕暮に、大將殿直衣着更へて、今日罷ンづる僧の中に必ずの給ふべき事あるに因り鈎殿の方におはしたるに、皆罷ンでぬれば、池の方に涼み給ひて、人少なるに、斯く云ふ宰相の君など假初に几帳などばかり隔てゝ打休む上局にしたり。此處にやあらん、人の衣の音すると思して、馬道の方の障子の細く明きたるより、やをら見給へば、例さやうの人の居たるけはひには似ず、晴れ〴〵しくしつらひたれば、なか〳〵几帳どもの立て違へたる間より見通されて顯なり。氷を物の蓋に置きて割るとて、持て騷ぐ人々大人三人ばかりが童と居たり。唐衣も汗衫も着ず、皆打解けたれば、御前とは見給はぬに、白き羅の御衣着給へる人の、手に氷を持ちながら、かく爭ふを少し笑み給へる御顏、言はん方無く美しげなり。いと暑さの堪へ難き日なれば、こちたき御髮の苦しうおぼさるゝにやあらん、少し此方に靡かして引かれたる程、喩へん物無し。許多佳き人を見集むれど、似るべくもあらざりけりと覺ゆ。御前なる人は、誠に土などの心地ぞするを、思ひ鎭めて見れば、黃なる生絹の單衣、薄色なる裳着たる人の、扇打使ひたるなど、用意あらんはやと、ふと見えて、（小宰相）「なか〳〵物扱にいと苦しげなり。唯さながら見給へかし。」とて笑ひたるまみ、愛敬づきたり。聲聞くにぞ、この志の人とは知りぬる。心强く割りて、手毎に持たり。頭に打置き、胸に差當てなど、樣惡しうする人も有るべし。此人は紙に包みて、御前

○例の　佛の例の方便にて。

○この御許は　以下下萬女房の心中なり。
○左の大殿の君達　夕霧の御子達

○かの人　薫君。

○女宮　女二宮。

○あなた　女二宮の御方。
○大貳　女二宮の女房。
○この　女二宮の。

○凡俗　物々しからぬこと。
○只今は敢へなん　只今は人の見ぬ所なれば苦しからず。
○繪に畫きて云々　薫君の心中なり。李夫人の故事を指せるなるべし。

○一品宮　女一宮。
○上　今上。

○大宮　明石中宮。

○大宮に參り給ふ　薫君が
○例の宮　匂宮。
○女　女一宮。

にも斯くて參らせたれば、いと美しき御手を差遣り給ひて、拭はせ給ふ。（一宮）「否持たらじ。雫むつかし。」との給ふ御聲、いと仄に聞くも限無く嬉し。まだいと小くおはしまし〻程に、我も物の心も知らで見奉りし時、めでたの兒の御樣やと見奉りし。その後絶えて、この御けはひをだに聞かざりつる物を、如何なる神佛の斯かる折見せ給へるならん。例の安からず、物思はせんとするにやあらんと、且は靜心無くて守り立ちたる程に、此方の對の北面に涼みける下萬女房の、此障子は頓の事にて明けながら下りにけるを思ひ出で〻、人もこそ見付けて騷がるれと思ひければ、惑ひ入る。この直衣姿を見付くるに、誰ならんと心騷ぎて、己が樣見えん事も知らず簀子より唯來に來れば、ふと立ち去りて、誰とも見えじ、すき〴〵しき樣なり、と思ひて、隱れ給ひぬ。この御許は、いみじき業かな。御几帳をさへ顯に引きなしてけるよ。左の大殿の君達ならん。疎き人はた此處まで來べきにもあらず。物の聞え有らば、誰か障子明けたりしと必ず出で來なん。單衣も袴も生絹なゝめりと見えつる人の御姿なれば、え人も聞き付け給はぬならんかし、と思ひ困じて居り。かの人は、やう〳〵聖になりし心を、一節違へ初めて、樣々なる物思ふ人ともなるかな。その かみ世を背きなましかば、今は深き山に住み果てゝ、斯く心亂らましやは、など、思し續くるも安からず。何ど て年頃見奉らばやと思ひつらん。なか〳〵苦しう甲斐無かるへき業にこそ、と思ふ。

つとめて起き給へり。女宮の御容いとをかしげなゝめるは、これより必ず優るべき事かはと見えながら、更に似給はずこそありけれ。あさましきまであてに薫り、得も言はざりし御樣かな。片方は思做しか、折柄か、と思して、（薫）「いと暑しや。これより薄き御衣奉れ。女は例ならぬ物着たるこそ、時々につけてをかしけれ。」とて、あなたに參りて、大貳に、（薫）「羅の單衣の御衣、縫ひて參れと云へ。」との給ふ。御前なる人は、この御容貌のいみじき盛りにおはしますを、もてはやし聞え給ふと、をかしう思へり。例の念誦し給ふ。我御方におはしましなどして、晝つ方渡り給へれば、の給ひつる御衣御几帳に打掛けたり。（薫）「何ぞ此は奉らぬ。人多く見る折なん透きたる物着たるは凡俗に覺ゆる。只今は敢へなん。」とて、手づから着せ奉り給ふ。御袴も昨日の同じ紅なり。御髮の多さ、裾など劣り給はねど、猶樣々なるにや、似るべくもあらず。氷召して、人々に割らせ給ふ。取りて一つ奉りなどし給ふ心の中もをかし。繪に畫きて、戀しき人見る人は無くやはありける。況てこれは慰めんに、似ず無からぬ御程ぞかし、と思へど、昨日かやうにてわれ雜り居、心に任せて見奉らましかばと覺ゆるに、心にもあらず打歎かれぬ。（薫）「一品宮に御文は奉り給ふや。」と聞え給へば、（女二）「内に在りし時、上の然の給ひしかば、聞えしかど、久しく然もあらず。」との給ふ。（薫）「唯人にならせ給ひにたりとて、彼よりも聞えさせ給はぬこそは、心憂かゝなれ。今大宮の御前にて、恨み聞えさせ給ふと啓せん。」との給ふ。（女二）「如何が恨み聞えん。うたて。」との給へば、（薫）「下衆になりにたりとて思し貶すなゝめりと見れば、驚かし聞えぬ、とこそは聞えめ。」との給ふ。

其日は暮して、翌の朝に、大宮に參り給ふ。例の宮もおはしけり。丁子の深く染めたる羅の單衣を、こまやかなる直衣に着給へる、いと好ましげなり。女の御身形のめでたかりし

○覺え給へりと見るにも　匂宮の樣な女一宮によく似給ふと見るにも。
○あなた　女一宮の御方。
○大將も近く云々　薫君も中宮の御前になり。
○此里に物し給ふ皇女　女二宮。
○姫宮　女一宮。
○斯く品定り給へる　女二宮の只人となり給へるを云ふ。
○一夜の志の人　小宰相。
○實にいと云々　薫君の體なり。

にも劣らず、白く清らにて、猶ありしよりは面痩せ給へる、いと見る甲斐あり。覺え給へりと見るにも先づ戀しきを、いとあるまじき事と鎭むるぞ、たゞなりしよりは苦しき。繪をいと多く持たせて參り給へりける、女房してあなたに參らせ給ひて、我も渡らせ給ひぬ。大將も近く參り寄り給ひて、御八講の尊く侍りし事、古の御事少し聞えつゝ、殘りたる繪、見給ふ序に、(薫)「此里に物し給ふ皇女の、雲の上に離れて、思ひ屈し給へるこそいとほしう見給ふれ。姫宮の御方より御消息も侍らぬを、斯く品定り給へるに、思し捨てさせ給へるやうに思ひて、心行かぬ氣色のみ侍るを、かやうの物時々物せさせ給はなん。某が下して持て罷らん、はた、見る甲斐も侍らじかし、と聞え給へば、(中宮)「怪しく、何どてか捨て聞え給はん。内にては近かりしに付きて、時々も聞え通ひ給ふめりしを、所々になり給ひし折に、跡絶え初め給へるにこそあらめ。今そゝのかし聞えん。それよりも何どかは。」と聞え給ふ。(薫)「彼よりは如何でかは、本より數まへさせ給はざらんをも、斯く親しくて侍ふべきゆかりに寄せて、思し召し數まへさせ給はんこそ、嬉しくは侍るべけれ。況して然も聞え馴れ給ひにけんを、今捨てさせ給はんは、辛き事に侍り。」と啓せさせ給ふを、すきばみたる氣色あるかとは、思し掛けざりけり。

立ち出でゝ、一夜の志の人に逢はん、ありし渡殿も慰めに見んかし、と思して、御前を歩み渡りて、西ざまにおはするを、御簾の中の人々は、心殊に用意す。實にいと樣好く、限無き持做しにて、渡殿の方は、左の大殿の君達など居て、物言ふ氣はひすれば、妻戸の前に居給ひて、(薫)「大方にも參りながら、此御方の見參に入る事の難く侍れば、いと覺無く翁び果てにたる心地し侍るを、今よりはと思ひ起し侍りてなん。あり付かずと若き人どもぞ思ふらんかし。」と姪の君達の方を見遣り給ふ。(女房)「今より習はせ給ふこそ、實に若くならせ給ふならめ。」など、はかなき事を言ふ。人々の氣はひも、怪しう雅にをかしき御方の有樣にぞある。其事となけれど、世の中の物語などしつゝ、しめやかに例よりは居給へり。

○あり付かず　斯く女房達に物言ふは似合はしからず。
○あなた　明石中宮の御方
○大納言の君　女一宮の女房。
○人も用意無くて云々　女房等も用意して薫に見えよとおぼしたるなり。
○例の目馴れたる云々　世の常の男が女房の局に通ふ樣なる筋にはあらぬにや。
○宮をこそ　匂宮をこそ。
○宮も　明石中宮も。
○亡くなし給ひてし人　浮舟。
○御弟　御妹。
○その女君　浮舟。

姫君はあなたに渡らせ給ひけり。大宮(中宮)「大將の其方に參りつるか。」と問ひ給ふ、御供に參りたる大納言の君、「小宰相の君に物の給はんとこそは侍るめりつれ。」と聞ゆれば、(中君)「まめ人のさすがに心留めて物語するこそ、心地後れたらん人は苦しけれ。心の程も見ゆらんかし。小宰相などはいと後安し。」との給ひて、御兄弟なれど、この君をば猶恥かしく、人も用意無くて見えざらなんと思いたり。(大納言)「人よりは心寄せ給ひて、局などに立ち寄り給ふべし。物語こまやかにし給ひて、夜更けて出でなどし給ふ折々も侍れど、例の目馴れたる筋には侍らぬにや、宮をこそいと情無くおはしますと思ひて、御いらへをだに聞えず侍るめれ。辱き事。」と言ひて笑へば、宮も笑はせ給ひて、(中宮)「いと見苦しき御樣思ひ知るこそをかしけれ。如何で斯かる御癖止め奉らん。恥かしや、此人々も。」との給ふ。(大納言)「いと怪しき事こそ聞き侍りしか。この大將殿の亡くなし給ひてし人は、宮の御二條の北の方の御弟なりけり。異腹なるべし。常陸の前の守某が妻は、叔母とも母とも云ひ侍るなるは如何なるにか。その女君に、宮こそいと忍びておはしましけれ。大將殿や聞き付け給ひたりけん。俄に迎へ給はんとて守女添へなど、事々しくし給ひ

○宇治の宮の族　八宮の一族。
○宰相　小宰相。
○委しくは聞かせ奉らぬ　薫君にもなり。
○姫宮　女一宮。
○二宮　女二宮。
○おぼす　薫君がなり。
○をかしきども集めて云々　をかしき絵ども集めて女一宮へ奉らせ給ふ。
○芹川の大將　此物語今傳はらず。
○荻の葉に云々　夕風の別きて我身には沁みた姫宮は知り給はじとの意。
○昔の人　大君。以下薫君の心なり。
○斯かる事　皇女を賜ふ事。
○橋姫　大君を云ふ。
○宮の上　中君。
○あさましくて亡せにし人　浮舟。
○滞る所無かりける　遺産無かりし意。
○宮をも思ひ聞えじ　匂宮をも怨みじ。
○世づかぬ意　世事に疎なる懈怠。
○宮　匂宮。
○對の御方　中君。
○例の　例の如く。
○此二人　侍從と右近と。
○嬉しき瀬もやあると　嬉しく薫君に召し寄せらるゝ事もあらんかと。

ける程に、宮もいと忍びておはしましながら、え入らせ給はず、怪しき樣に、御馬ながら立たせ給ひつゝぞ歸らせ給ひける。女も宮を思ひ聞えさせけるにや、俄に消え失せにけるを、身投げたるなゝめりとてこそ、乳母やうの人どもは、泣き惑ひ侍りけれ。」と聞ゆ。宮もいとあさましと思して、（中宮）「誰か然る事は言ふぞとよ。いといとほしく心憂き事かな。然ばかり珍らかならん事は、自ら聞えありぬべきを、大將もさやうには言はで、世の中のはかなくいみじき事、かく宇治の宮の族の、命短かゝりける事をこそ、いみじう悲しと思ひての給ひしか。」との給ふ。（大納言）「いざや。下衆は確ならぬ事をも言ひ侍る物をと思ひ侍れど、彼處に侍りける下童の、唯此頃宰相が里に出で詣で來て、確なるやうにこそ言ひて、いみじく隱しける事どもとや、さて委しくは聞かせ奉らぬにやありけん。」と聞ゆれば、（中宮）「更に斯かる事、又まねぶな、と言はせよ。かゝる筋に御身を持て損ひ、人にも心づき無き者に思はれ給ふべきなゝめり。」と、いみじう思いたり。

其後姫宮の御方より、二宮に御消息ありけり。御手などの、いみじう美しげなるを見るにも、いと嬉しく、斯くてこそ疾く見るべかりけれとおぼす。數多をかしき繪ども多く大宮も奉らせ給へり。大將殿打優りてをかしきども集めて參らせ給ふ。芹川の大將の遠君の、女一宮思ひ懸けたる秋の夕暮に、思ひ佗びて出で往きたる繪、をかしく書きたるを、いとよく思ひ寄せらる。然ばかり思し靡く人の有らましかば、と思ふ身ぞ口惜しき。

（薫）「荻の葉に、露吹き結ぶ、秋風も、夕ぞ別きて、身には沁みける。」

と書きても添へまほしくおぼせど、さやうなる露ばかりの氣色にても漏りたらば、いと煩はしげなる世なれば、はかなき事もえ仄めかし出づまじ。かく萬に何やかやと、物を思ひ思ひの果ては、昔の人物し給はましかば、如何にも〳〵外樣に心分けましや。時の帝の御女を賜ふとも、え奉らざらまし。又さ思ふ人ありと聞し召しながらは、斯かる事も無からましを、猶心憂く我心亂り給ひける橋姫かな、と思ひ餘りては、又宮の上に取り懸りて、戀しうも辛くも、わりなき事ぞ嗚呼がましきまで悔しき。これに思ひ佗びての差繼にはあさましくて亡せにし人の、いと心幼く、滯る所無かりける輕々しさをば思ひながら、さすがにいみじと物を思ひ入りけん程、我氣色例ならずと、心の鬼に欺き沈みて居たりけん有樣を聞き給ひしも思ひ出でられつゝ、重りかなる方ならで、唯心安くらうたき語らひ人にてあらせんと思ひしには、いとらうたかりし人を、思ひ持て行けば、宮をも思ひ聞えじ、女を憂しと思はじ。唯我有樣の世づかぬ意ぞ、など眺め入り給ふ時々多かり。

心長閑に樣好くおはする人だに、斯かる筋には身も苦しき事自ら難るを、宮はまして慰めかね給ひつゝ、かの形見に飽かぬ悲しさをも、の給ひ出づべき人さへ無きを、對の御方ばかりこそは哀などの給へど、深くも見馴れ給はざりける打付の睦びなれば、いと深くしも如何でかはあらん。又思す儘に戀しやいみじやなどの給はんには、傍痛ければ、彼所に在りし侍從をぞ、例の迎へさせ給ひける。皆人どもは往き散りて、乳母と此二人なん、取り別きて思したりしも忘れ難くて、侍從は餘所人なれど、猶語らひて在り經るに、世づかぬ川の音も、嬉しき瀬もやあると頼みし程こそ慰めけれ。心憂くいみじく、物恐ろしくの

○思し使はん　匂宮が侍從を。
○心細く云々　侍從の心なり。
○參りぬ　中宮へ宮仕になり。
○穢げ無くて　品よくて。
○目留めて見れど　侍從が。
○見奉りし人　浮舟。
○兄　繼母の兄。
○契る　古馬頭になり。
○聞し召す　中宮がなり。
○兄　宮の君の兄。
○迎へ取らせ給ひてけり　中宮の御方へ宮の君たなり。
○姫宮の御具にて　女一宮の好き御伽にて。
○限あれば　今は宮仕の身なればとの意。
○父親王は兄弟ぞかし　八宮と式部卿宮とは兄弟なり。
○もどかしきまで云々　以下薫君の心中に宮の君の落魄を歎き給ふなり。

み覺えて、京になん怪しき所に此頃來て居たりける。尋ね出で給ひて、(匂)「斯くて侍へ。」との給へど、御心は然る物にて、人々の謂はん事も、さる筋の事まじりぬる邊は聞き憎き事も有らんと思へば、承引き聞えず。后の宮に參らんとなん趣けたれば、(匂)「いと宜かゝなり。さて人知れず思し使はん。」との給はせけり。心細く寄るべ無きも慰むやとて、知る便求めて參りぬ。穢げ無くて、宜しき下臈なりと許して、人も譏らず。大將殿も常に參り給ふを見る度毎に物のみ哀なり。いとやんごとなき者の姫君のみ參りつどひたる宮と人も謂ふを、やう〳〵目留めて見れど、猶見奉りし人に似たるは無かりけりと思ひありく。この春亡せ給ひぬる式部卿の宮の御女を、繼母の北の方殊に相思はで、兄の右馬の頭にて、人柄も異なる事無き、心懸けたるを、いとほしうなども思ひたらで、さるべき樣にん契ると、聞し召すたより有りて、(中宮)「いとほしう、父宮のいみじうかしづき給ひける女君を、徒なる樣にもてなさん事。」などの給はせければ、いと心細くのみ思ひ歎き給ふ有樣にて、「懷かしう斯く尋ねの給はする。」など、兄の侍從も云ひて、此頃迎へ取らせ給ひてけり。姫宮の御具にて、いとこよなからぬ御程の人なれば、やんごとなく心殊にて侍ひ給ふ。限あれば、宮の君など打言ひて、裳ばかり引き掛け給ふぞいと哀なりける。兵部卿の宮、この君ばかりや、戀しき人に思ひよそへつべき樣したらん。父親王は兄弟ぞかし、なれど例の御心は人を戀ひ給ふに付けても、人のかしき御癖止まで、何時しかと御心懸け給ひてけり。大將、もどかしきまでもある事かな、昨日今日と云ふばかり、春宮にやなどおほし、我にも氣色ばませ給ひきかし。かく儚き世の衰を見るには、水の底に身を沈めても、

○此院　六條院。
○左大臣殿　夕霧。
○此宮　匂宮。
○宮　明石中宮。
○此宮　匂宮。
○例の二所　匂宮と薫君と。
○何方にも〳〵寄りて　浮舟が二所の中何方にても一方に靡きておはせばとなり。以下侍從の心なり。
○宮　匂宮。
○今一所　薫君を指す。
○見附けられ奉らじ　侍從の心なり。
○暫し御果をも過さず　まだ服中なるを云ふ。

もどかしからぬ事にこそ、など思ひつゝ、人よりは心寄せ聞え給へり。
此院におはしますをば、内よりも廣く面白く住みよき物にして、常にしも侍はぬ人どもゝ、皆打解け住みつゝ、遙々と多かる對ども廊渡殿に滿ちたり。左大臣殿昔の御けはひにも劣らず、すべて限も無く營み仕う奉り給ふ。嚴めしうなりにたる御族なれば、なか〳〵古よりも、今めかしき事は優りてさへなんありける。此宮例の御心ならば、月頃の程に、如何なる好色事どもをし出で給はまし。こよなく鎭まり給ひて、人目には少し生ひ直りし給ふかなと見ゆるを、此頃ぞ又宮の君に、本性顯はれて、かゝづらひありき給ひける。
涼しくなりぬとて、宮内に參り給ひなんとすれば、秋の盛り紅葉の頃を見ざらんこそなど、若き人々は口惜しがりて、皆參りつどひたる頃なり。水に馴れ月を愛でて、御遊絶えず、常よりも今めかしければ、此宮ぞ斯かる筋は、いとこよ無く持映し給ふ。朝夕目馴れても、猶今見ん初花の樣し給へるに、大將の君は、いと然しも入り立ちなどし給はぬ程にて、恥かしう心弛無きものに皆思ひたり。例の二所參り給ひて、御前におはする程に、かの侍從は物より覗き奉るに、何方にも〳〵寄りて、めでたき御宿世見えたる樣にて、世にぞおはせましかし。あさましく、はかなく心憂かりける御心かな、など、人には其わたりの事、掛けて知り顏にも言はぬ事なれば、心一つに飽かず胸痛く思ふ。宮は内裏の御物語など、こまやかに聞えさせ給へば、今一所は立ち出で給ふ。見付けられ奉らじ。誓し御果をも過さず、心淺しと見え奉らじと思へば隱れぬ。東の渡殿に、明き合ひたる戸口に人々數多居て、物語など忍びやかにする所におはして、(薫)「某をぞ女房は睦ましく思すべき

○某　薫君の自稱。

○物はさこそは云々　世間の事はいづれも如此となり

○斯ばかり面無く云々　餘りなる物恥せんは斯る宮仕の身に似合はずして傍痛しとなり。

○片方は几帳のあるにすべり隱れ　女房等の薫を恥づるさまなり。

○女郎花云々　女房達を女郎花に寄せて詠めり。

○片側　取敢ず書きたるを見給へるばかりなれば片側なれどと云ひたるなり。

○いと氣鮮なる翁言　薫君の女郎花の歌を指して謂ふ。口巧に翁めきたる言の意。

○旅寢して云々　先づ試に此處に旅寢し給ひて露の仇名も立たずば、さてこそ君をまめ人と定め聞えんとの意。

○大方野邊の云々　野邊に付て大方にこそ申せ、如何で宿貸さんやとの意。

○中に就いて云々　白樂天の詩に「大抵四時心總苦。就中斷腸是秋天。」

○ありつる衣の音なひ云々　中將の君の入り來るなり

○宮　匂宮。

○此御ゆかり　匂宮のなり

○此わたり　女一宮の御方

○對の御方　中君。

○かの御有樣　匂宮の仇々しき御有樣。

○入り立ちて云々　此邊にはなり。

や。女だに斯く心安くはよもあらじかし。さすがに然るべからん事敎へ聞えぬべくもあり。やう〳〵見知り給ふべかゝめれば、いとなん嬉しき。」との給へば、いといらへにくゝのみ思ふ。中に辨の御許とて馴れたる大人、（辨）「そも睦ましく思ひ聞ゆべき故無き人の耻ぢ聞え侍らぬや。物は然こそはなか〳〵侍るめれ。必ず其故尋ねて打解け御覽ぜらるゝにしも侍らねど、斯ばかり面無く作り初めてける身に負はざらんも、傍痛くてなん。」と聞ゆれば、（薫）「恥づべき故あらじ、と思ひ定め給ひてけるこそ口惜しけれ。」など、の給ひつゝ見れば唐衣は脫ぎ滑し推し遣り、打解けて手習しけるなるべし。硯の蓋に据ゑて、心許なき花の末々手折りて、玩びけりと見ゆ。片方は几帳のあるに滑り隱れ、或は打背き、推し明けたる戸の方に紛らはしつゝ居たる頭つきどもをかしと見渡し給ひて、硯引き寄せて、

（薫）「女郎花、亂るゝ野邊に、まじるとも、露の仇名を、我に掛けめや。心安くはおぼさで。」と、たゞ此障子に、後したる人に見せ給へば、みじろきなどもせず、のどかにいと疾く、

（中將）「花と云へば、名こそ仇なれ、女郎花、なべての露に、亂れやはする。」と書きたる手、唯片側なれども由づきて、大方目安ければ、誰ならんと見給ふ。今參上りける道に塞げられて、滯り居たるなるべしと見ゆ。辨の御許は、（辨）「いと氣鮮なる翁言憎く侍り。」とて、

（辨）「旅寢して、猶試みよ、女郎花、盛りの色に、移り移らず。さて後定め聞えさせん。」と云へば、

（薫）「宿貸さば、一夜は寢なん、大方の、花に移らぬ、心なりとも。」

とあれば、（辨）「何か辱めさせ給ふ。大方野邊の賢しらをこそ聞えさすれ。」と云ふ。はかなき事を唯少しの給ふも、人は殘り聞かまほしくのみ思ひ聞えたり。（薫）「心無し。道明け侍りなんよ。別きても彼の御物恥の故必ずありぬべき折にぞあゝめる。」とて、立ち出で給へば、推並べて斯く殘無からんと思ひ遣り給ふこそ心憂けれ、と思へる人もあり。

東の勾欄に押凭りて、夕影になる儘に、花の繙く御前の叢を見渡し給ふ。物のみ哀なるに、「中に就いては腸を斷つは秋の天」と云ふ言を、いと忍びやかに誦じつゝ居給へり。ありつる衣の音なひ、著き氣はひして、母屋の御障子より通りて、あなたに入るなり。宮の歩みおはして、「これよりあなたに參りけるは誰ぞ。」と問ひ給へば、（女房）「かの御方の中將の君。」と聞ゆなり。猶怪しのわざや。誰にかと假初にも打ち思ふ人に、やがて斯くゆかしけなく聞ゆる名ざしよ、といとほしく、此宮には、皆目馴れてのみ覺え奉るべかゝめるも口惜し。下り立ちてあながちなる御もてなしに、女は然もこそ負け奉らめ。我が然も口惜しう、此御ゆかりには、妬く心憂くのみあるわざかな。如何で此わたりにも、珍らしからん人の、例の心入れて、騷ぎ給はんを語らひ取りて、我が思ひしやうに安からずとだに思はせ奉らん。誠に心ばせ有らん人は、我方にぞ寄るべきや。されど難い物かな、人の心は、と思ふに付けて、對の御方のかの御有樣をば、ふさはしからぬ物に思ひ聞えて、いと便無き睦びに成り行き、大方の覺をば苦しと思ひながら、猶さし放ち難き物に思し知りたるぞ、有り難く哀なりける。さやうなる心ばせある人、こゝらの中にあらんや。入り立ちて深く

○側の西の渡殿　女一宮の御方。
○あなた　中宮の御方。
○似るべき兄や侍るべき　源仙録に「氣調のいきざしは兄の如し」とあるに因りて斯く答へたるなり。
○例のあなたに云々　女一宮はなり。
○怪しと思ひ寄る人もこそ　女一宮に心あるかと人や思ひ寄らんとなり。
○心入れたる人　琴の音になり。
○我母宮　女三宮、
○后腹　女一宮は明石中宮の御腹なるを云ふ。
○此御邊　女一宮を指す。
○明石の浦は心憎かりける所かな　明石中宮の御幸おはすることないふ。
○竝べて持ち奉らば　女一宮を女二宮に竝べて持ち奉らば。
○是も亦同じ人ぞかし　此宮の君も亦王孫ぞかし。
○其方　宮の君の方へ。
○赫やかし　羞ぢたる樣なり。
○言より外を云々　心の深き思は言に顯はし難き故に言の外に求め知り給へとなり。
○いと思ほし懸けざりし御有樣　宮の君の今の御有樣を云ふ。
○故宮　故蜻蛉式部卿宮。
○御後言　薫君が宮の君の事をの給ふを云ふ。
○得こそ　下に「心寄せも申し侍らね」を省きたり。
○松も昔の云々　今は知る人も無しと思ひしにとの意、古今集に「誰をかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならなくに」とあり。
○有り難の世や　十分なる人は無しとの意。
○限なき人の云々　式部卿宮の愛でかしづき給ひし君ぞとなり。

見ねば知らぬぞかし。寢覺勝に徒然なるを、少しは好色も習はゞやなど思ふに、今は猶つき無し。

例の西の渡殿を、ありしに習ひて、態とおはしたるも怪し。姫君夜はあなたに渡らせ給ひければ、人々月見るとて、この渡殿に打解けて物語する程なりけり。箏の琴いと懐かしう、彈きすさぶ爪音をかしう聞ゆ。思ひ懸けぬに寄りおはして、（薫）「何ど斯く妬まし顔に搔き鳴し給ふ。」との給ふに、皆驚かるべかゝめれど、少し上げたる簾打下しなどもせず、起き上りて、「似るべき兄や侍るべき。」といらふる聲、中將の御許とか云ひつるなりけり。（薫）「麿こそは御母方の叔父なれ。」と、はかなき事をの給ひて、（薫）「例のあなたにおはしますべかゝめる。何事をか御里住の程に、せさせ給ふ。」など、味氣なく問ひ給ふ。（女房）「いづこにても何事をかは。唯かやうにこそは過させ給ふめれ。」と云ふに、をかしの御身の程や、と思ふに、すゞろなる歎の打ち忘れてしつるも、怪しと思ひ寄る人もこそ、と紛らはしに、差出でたる和琴を、唯然ながら搔鳴し給ふ。律の調は怪しく折に合ふと聞く聲なれば、聞きにくゝもあらねど彈き果し給はぬを、なか〳〵なりと心入れたる人は消え返り思ふ。我母宮も劣り給ふべき人かは、后腹と聞ゆばかりの隔てこそあれ。帝々の思しかしづきたる樣、殊異ならざりけるを、猶此御邊は、いと異なりけるこそ怪しけれ。明石の浦は心憎かりける所かな、など、思ひ續くる事どもに、我宿世はいとやんごとなしかし。況して竝べて持ち奉らば、と思ふぞいと難きや。

宮の君は、この西の對にぞ御方したりける。若き人々のけはひ數多して、月賞で合へり。いであはれ、是も亦同じ人ぞかし、と思ひ出で聞えて、親王の昔心寄せ給ひし物をと言ひなして、其方へおはしぬ。童のをかしき宿直姿にて、二三人出でゝありきなどしけり。見付けて入る樣どもゝ赫やかし。これぞ世の常と思ふ。南面の隅の間に寄りて、打聲作り給へば、少し大人びたる人出で來たり。「人知れぬ心寄せなど聞えさせ侍れば、なか〳〵皆人聞えさせ舊しつらん事を、初々しき樣にて眞似ぶ樣になり侍り。まめやかになん、言より外を求められ侍る。」との給へば、君にも言ひ傳へず、賢しだちて、「いと思ほし懸けざりし御有樣に付けても、故宮の思ひ聞えさせ給へりし事など、思ひ給へ出でられてなん。斯くのみ折々聞えさせ給ふなる御後言をも喜び聞え給ふめる。」と云ふ。並々の人めきて、心地無の樣やと物憂ければ、（薫）「本より思し捨つまじき筋よりも、今はまして然るべき事に付けても、思ほし尋ねんなん嬉しかるべき。疎々しう、人傳てなどにてもてなさせ給はゞ、得こそ。」との給ふに、實にと思ひ騷ぎて、君を引き搖がすめれば、「松も昔のとのみ眺めらるゝにも、本よりなどの給ふ筋は、まめやかに賴もしうこそは。」と、人傳ともなく言ひなし給へる聲、いと若やかに愛敬づき、優しき所添へたり。唯なべての斯かる住處の人と思はばいとをかしかるべきを、只今は如何で斯ばかりも、人に聲聞かすべき者と習ひ給ひけんと、なまうしろめたし。容貌もいとなまめかしからんかしと、見まほしき氣はひのしたるを、此人ぞ、又例のかの御心亂るべき端なゝめりと、をかしうも、有り難の世や、とか思ひ居給へり。これこそは、限なき人のかしづき生し立て給へる姫君、又斯ばかりぞ多くはあるべき。怪しかりける事は、さる聖の御あたりに、山の懷より出で來たる人々の、かたほな

るは無かりけるこそ、この儚しや輕々しやなど思ひ做す人も、かやうの打見る氣色は、いみじうこそ、をかしかりしかと、何事に付けても、唯かの一つゆかりをぞ思ひ出で給ひける。怪しう辛かりける契どもを、つくぐと思ひ續け眺め給ふ夕暮、蜻蛉の物はかなけに飛びちがふを、

「ありと見て、手には取られず、見れば又、行方も知らず、消えし蜉蝣。有るか無きかの」と、例の獨言ち給ふとかや。

○さる聖　八宮を云ふ。
○怪しう辛かりける契ども　大君浮舟の事ども。
○ありと見て云々　大君浮舟等の儚く亡せしを蜉蝣に思ひ寄せて詠めり。
○あるかなきかの　後撰集「あはれとも憂しともいはばかげろふのあるかなきかに消ぬる世なれば」

手習

此卷は薫君二十七歳の三月より二十八歳の夏までの事を叙べたり。卷名は詞を以て名づく。手習といふ詞卷の中に五ヶ所あり。

其頃横川に某僧都とか云ひて、いと尊き人住みけり。八十餘の母、五十許の妹ありけり。舊き願ありて、長谷に詣でたり。睦ましうやんなく思ふ弟子の阿闍梨を添へて、佛經供養する事行ひけり。事ども多くして歸る道に、奈良坂と云ふ山越えける程より、この母の尼君心地惡しうしければ、かくては如何でか殘の道をも、おはし着かんと持て騷ぎて、宇治のわたりに知りたりける人の家ありけるに留めて、今日ばかり休め奉るに、猶いたく煩へば、横川に消息したり。山籠の本意深く、今年は出でじと思ひけれど、限の樣なる親の、道の空にて亡くやならんと驚きて、急ぎ物し給へり。惜むべくもあらぬ人の樣を、自らも弟子の中にも驗あるして加持し騷ぐを、家主聞きて、御嶽精進しけるを、いたく老い給へる人の、重く惱み給ふは、如何がと後めたげに思ひて言ひければ、然も言ふべき事と、いとほしく思ひて、いと狹くむつかしくもあれば、やう〳〵率て奉るべきに、中神塞がりて、例住み給ふ方は忌むべかりければ、故朱雀院の御領にて、宇治の院と云ひし所、このわたりならんと思ひ出でゝ、院守、僧都知り給へりければ、一二日宿らんと言ひに遣り給へりければ、長谷になん昨日皆參りにけるとて、いと怪しき宿守の翁を呼びて率て來たり。(翁)「おはしまさばはや。徒なる院の寢殿にこそ侍るめれ。物詣の人は常にぞ宿り給

○横川　比叡山の塔中。
○奈良坂　奈良にあり。
○山籠　三年の山籠。
○御嶽精進　大和の金峯山に千日精進して祈るを云ふ
○後めたげに思ひて云々　大尼君此家にて亡くならば精進穢るゝが故になり。
○中神　天一神。惡しき方の神なり。
○例住み給ふ方　小野の里の方。

○公所　朱雀院の御領なれば云ふ。

○つきぐしき程の下萬法師に云々　かひぐしき下萬法師をつれて旅宿を先づ見まはるなり。

○印作りて　印を結びて。

○頭の髪あらば云々　頭に髪の毛あらば彌立ちて膨れぬべき心地するに。

○かの云々　かの尼君遠の此處へなり。

○怪しうて　僧都の心中なり。

○著くや思ふらん　明に見定めたるらん。

ふ。」と云へば、（僧都）「いと善かゝなり。公所なれど、人も無く心安きを。」とて見せに遣り給ふ。此翁、例も斯く宿る人を見習ひたりければ、疎略なるしつらひなどして來たり。先づ僧都渡り給ふ。いといたく荒れて、恐ろしげなる所かなと見給ひて、（僧都）「大德達經讀め。」などの給ふ。この長谷に添ひたりし阿闍梨と、同じやうなる今一人、何事のあるにか、つきぐしき程の下萬法師に、火ともさせて、人も寄らぬ後の方に往きたり。森かと見ゆる木の下を、疎ましげのわたりやと見入れたるに、白き物の廣ごりたるぞ見ゆる。かれは何ぞと立ち止りて、火を明くなして見れば、物の居たる姿なり。（僧）「狐の變化したるか。にくし。見顯さん。」とて一人は今少し歩み寄る。今一人は、（僧）「あな用無。善からぬ物ならん。」と云ひて、さやうの物退くべき印作りつゝ、さすがに猶守る。頭の髪あらば太りぬべき心地するに、この火點したる大德、憚も無く奥無き樣にて、近く寄りて其態を見れば、髪は長く艶々として、大なる木の根のいと荒々しきに寄り居ていみじう泣く。（僧）「珍しき事にも侍るかな。僧都の御坊に御覽ぜさせ奉らばや。」と云へば、「實に怪しき事なり。」とて、一人は詣でゝ、斯かる事なんと申す。（僧都）「狐の人に變化するとは昔より聞けど、まだ見ぬ物なり。」とて、態とおりておはす。かの渡り給はんとする事に因りて、下司ども皆はかぐしきは御厨子所など、あるべかしき事どもを、かゝるわたりには急ぐ物なりければ、居靜まりなどしたるに、唯四五人して此處なる物を見るに、かはる事も無し。怪しうて時の移るまで見る。疾く夜も明け果てなん、人か何ぞと見顯さんと、心に然るべき眞言を讀み、印を作りて語るに、著くや思ふらん。（僧都）「これは人なり。更に非常の怪しからぬ物にあらず。寄りて問へ。亡くなりたる人にはあらぬにこそあゝめれ。若し死にたりける人を捨てたりけるが、よみがへりたるか。」と云ふ。（僧）「何の然る人をか此院の内に捨て侍らん。縱令眞に人なりとも、狐木精やうの物の、欺きて取り持て來たらんにこそ侍らめ。いと不便にも侍りけるかな。穢らひあるべき所にこそ侍るめれ。」と言ひて、ありける宿守の男を呼ぶ。山彦の答ふるも、いと恐ろし。怪しの樣に、額押し上げて出で來たり。（僧）「此處には若き女などや住み給ふ。かゝる事なんある。」とて見すれば、（宿守）「狐の仕うまつるなり。此木の下になん、時々怪しきわざなんし侍る。一昨年の秋も此處に侍る人の子の二つばかりに侍りしを取りて詣で來たりしかども、見驚かず侍りき。」（僧）「さて其兒は死にやしにし。」と云へば、（宿守）「生きて侍りき。狐はさこそは人を脅せど、殊にもあらぬ奴。」と云ふ樣、いと馴れたり。かの夜深き參物の所に心を寄せたるべし。僧都「さらばさやうの物のしたるわざか。猶能く見よ。」とて、この物おぢせぬ法師を寄せたれば、（僧）「鬼か、神か、狐か、木精か。斯ばかりの天の下の驗者のおはしますには、え隱れ奉らじ。名のり給へ〳〵。」と衣を執りて引けば、顏をひき入れて愈泣く。（僧）「いであな祥無の木精の鬼や。豈に隱れなんや。」と云ひつゝ、顏を見んとするに、昔在りけん目も鼻も無かりける女鬼にやあらんと、むくつけきを、賴もしく嚴き樣を人に見せんと思ひて、衣を引き脫がせんとすれば、うつぶして聲立つばかり泣く。（僧）「何にまれ斯く怪しき事なべて世にあらじ。」とて、見果てんと思ふに、雨いたく降りぬべし、（僧）「かくて置いたらば、死に果て侍りぬべし。垣の下にこそ出さめ。」と云ふ。僧都「まことの人の形なり。その命絶えぬを、

○欺きて　たぶらかして。

○額押し上げて　烏帽子を上の方へ押上げたる樣なり。

○かの夜深き參物の云々　食物の事に心を入れて此事には取り合はぬとなり。

○雨いたく降りぬべし　この雨は浮舟の入水の翌日の夜の雨なり。蜻蛉の卷に雨の事の見えたる照應なり。

○垣の下　軒の下の意。

○領せられ　取られ。
○はかうごたれ　たばかられ。
○此大德　此物怖せぬ大德
○怠々しきことかな　無用の事かなの意。
○御車寄せて下り給ふ　大尼君がなり。
○妹の尼君　僧都の妹なり。
○己が寺にて云々　我鳥谷寺に籠りて鷲夢を祈りき。
○いと若う美しげなる女　是れ即ち浮舟なり。
○我が戀ひ悲む女　僧都の妹は右衛門督と云ふ人の妻なりしが女を失ひて戀の餘尼となりしなり。
○驗者の阿闍梨　長谷寺へ具したる阿闍梨。
○神などの御爲に云々　心經を神分とて加持の前に讀むなり。
○すゞろなる穢らひに籠りて云々　さて非分の穢に觸れて籠るべき事か。
○徒に爲さじと云々　死なせじと、居合ふ女房達も皆大切に看護せりとなり。

見る〳〵捨てん事はいみじき事なり。池に游ぐ魚、山に鳴く鹿をだに、人に捕へられて死なんとするを見つゝ、助けざらんはいと悲しかるべし。人の命久しかるまじき物なれど、殘の命日一日二日をも惜まずはあるべからず。鬼にも神にも領ぜられ、人に追はれ、人にはかりごたれても、是れ横樣の死をすべき物にこそあゝめれ。佛の必ず救ひ給ふべき際なり。猶試に誓し湯を飲ませなどして、助け試みん。遂に死ぬべくば言ふ限にあらず。」との給ひて、此大德して抱き入れさせ給ふを、弟子ども「怠々しき事かな。いたう煩ひ給ふ人の御あたりに、善からぬ物を取り入れて、穢らひ必ず出で來なんとす。」と、もどくも有り。又「物變化にもあれ、目に見す〳〵生ける人を、かゝる雨に打失はせんは、いみじき事なれば。」など、心々に云ふ。下衆などは、いと騷がしく、物をうたて言ひ做す物なれば、人騷がしからぬ隱れの方になん臥せたりける。

御車寄せて下り給ふ程、いたう苦しがり給ふとてのゝしる。少し鎭まりて、僧都「ありつる人は、如何がなりぬる。」と問ひ給ふ。(僧)「なよ〳〵として物も言はず。生きもし侍らず。何か物に氣取られにける人にこそ。」と云ふを、妹の尼君聞きて、「何事ぞ。」と問ふ。(僧都)「しか〴〵の事をなん。六十に餘る年、珍らかなる物を見給へつる。」との給ふ。打聞く儘に、(尼君)「己が寺にて見し夢ありき。如何やうなる人ぞ。先づ其樣見ん。」と泣きての給ふ。(僧)「唯この東の遣戸になん侍る。はや御覽ぜよ。」と云へば、急ぎ行きて見るに、人も寄り附かで捨て置きたりける。いと若う美しげなる女の、白き綾の衣一襲、紅の袴ぞ著たる。香はいみじう馨しくて、あてなる氣はひ限なし。たゞ我が戀ひ悲む女の歸りおはしたるなゝめりとて、泣く〳〵御達を出して抱き入れさす。如何なりつらんとも、有樣見ぬ人は、恐ろしからで抱き入れつ。生ける樣にもあらで、さすがに目を仄に見上げたるに、(尼君)「物の給へや。如何なる人か斯くては物し給へる。」と云へど、物覺えぬ樣なり。湯取りて手づから抄ひ入れなどするに、唯弱りに絶え入るやうなりければ、なか〳〵いみじき事かなとて、(尼君)「此人亡くなりぬべし。加持し給へ。」と、驗者の阿闍梨に云ふ。(僧)「さればこそ。怪しき御物扱なり。」とは云へど、神などの御爲に經讀みつゝ祈る。僧都もさし覗きて、(僧都)「如何にぞ。何の仕業ぞ、と能く調じて問へ。」との給へど、いと弱げに消えもて行くやうなれば、(僧)「得生き侍らじ。すゞろなる穢らひに籠りて煩ふべき事。さすがにいとやんごとなき人にこそ侍るめれ。死に果つとも、たゞにやは捨てさせ給はん。見苦しきわざかな。」と言ひ合へり。(僧都)「あなかま。人に聞かすな。煩はしき事もぞある。」など口固めつゝ、尼君は親の煩ひ給ふよりも、此人を生け果てゝ見まほしう惜みて、うちつけに添ひ居たり。知らぬ人なれど、眉目のこよ無くをかしければ、徒に爲さじと、見る限扱ひ騷ぎけり。さすがに時々目見上げなどしつゝ、涙の盡せず流るゝを、(尼君)「あな心憂や。いみじう悲しと思ふ人の代りに、佛の導き給へる、と思ひ聞ゆるを、甲斐無くなり給はゞ、なか〳〵なる事をや思はん。さるべき契にてこそ斯く見奉るらめ。猶聊物の給へ。」と言ひ續くれば、辛うじて、(浮舟)「生き出でたりとも、怪しき不用の人なり。人に見せで夜この河に落し入れ給ひてよ。」と息の下に言ふ。(尼君)「稀々物の給ふを嬉しと思ふに、あないみじや。如何なれば斯くはの給ふぞ。如何にして然る所にはおはしつ

○假の物　變化の物。
○二人の人　大尼君と此女（浮舟）と。
○故八宮の御女　浮舟。
○右大將殿　薫君。
○さやうの人の云々　僧都の心中なり。
○昨夜見遣られし火　浮舟の火葬の火。
○大將殿　薫君。
○宮の御女　大君。
○誰を謂ふにかあらん　人人浮舟の事は知らぬなり。
○姫宮　女二宮。
○老人　僧都の母。
○比叡坂本　比叡山の西坂下。

るぞ。」と問へども、物も言はずなりぬ。身に若し疵などや有らんとて見れど、此處はと見ゆる所無く美しければ、あさましく悲しく、試に人の心惑はさんとて、出で來たる假の物にや、と疑ふ。

二日ばかり籠り居て、二人の人を祈り加持する聲絶えず、怪しき事を思ひ騒ぐ。そのわたりの下衆などの僧都に仕うまつりける。斯くておはしますなりとて、訪ひ出で來るも物語などして言ふを聞けば、（下衆）「故八宮の御女、右大將殿の通ひ給ひしが、殊に惱み給ふ事も無くて、俄に隱れ給へりとて騒ぎ侍る。その御葬送の雜事ども仕う奉り侍るとて、昨日は得參り侍らざりし。」と云ふ。さやうの人の魂を、鬼の取り持て來たるにや、と思ふにも、且見る〳〵在る物とも覺えず、危く恐ろしとおぼす。人々「昨夜見遣られし火は、然事々しき氣色も見えざりしを。」と云ふ。（下衆）「殊更事殺ぎて、嚴しうも侍らざりし。」と云ふ。穢らひたる人とて、立ちながら追ひ返しつ。（人々）「大將殿は、宮の御女持ち給へりしは亡せ給ひて、年頃になりぬるものを、誰を謂ふにかあらん。姫宮を置き奉り給ひて、世に他心おはせじ。」など云ふ。

尼君宜しくなり給ひぬ。方も明きぬれば、斯くうたてある所に久しうおはせんも便無しとて歸る。此人は猶いと弱げなり。道の程も如何が物し給はん。いと心苦しき事、と言ひ合へり。車二つして、老人乘り給へるには、仕うまつる尼二人、次のには此人を臥せて、傍に今一人乘り添ひて、道すがら行きも遣らず、車停めて湯參りなどし給ふ。比叡坂本に、小野と云ふ所にぞ住み給ひける。其處におはし着く程いと遠し。中宿をぞ設くべかりける、

○法師のあたりにはよからぬ女人なればなり。
○置かせたるにや　捨て置かせたるにや。
○芥子燒く事　護摩を焚くこと。
○あが佛　僧都を指して云ふ。
○京に出で給はゞこそは云々　京に出で給はゞこそ惡しからめ。此處までは苦しかるまじ。

など言ひて、夜更けておはし着きぬ。僧都は親を扱ひ、女の尼君は此知らぬ人をはぐゝみて、皆抱きおろしつゝ休む。老の病の何時ともなきが、苦しと思ひ給ひし遠道の名殘こそかゝる人なん率て來たるなど、法師のあたりには善からぬ事なれば、見ざりし人には眞似ばす。尼君も皆口固めさせつゝ、若し尋ね來る人もやある、と思ふも靜心なし。如何でさる田舍人の住むあたりに、かゝる人落溢れけん。物詣などしたりける人の、心地など煩ひけんを、繼母などやうの人の謀りて、置かせたるにや、なとぞ思ひ寄りける。「河に流して よ。」と言ひし一言より外に、物も更にの給はねば、いと覺束なく思ひて、何時しか人にもなして見んと思ふに、つくぐ〳〵として起き上る世も無く、いと怪しくのみ物し給へば、遂に生くまじき人にやと思ひながら、打捨てんもいとほしういみじ。夢語りもし出でゝ、初より祈らせし阿闍梨にも、忍びやかに芥子燒く事せさせ給ふ。

うちはへて扱ふ程に、四五月も過ぎぬ。いと佗しう甲斐なき事を思ひ佗びて、僧都の御許に、（尼君消息）「猶おり給ひて、此人助け給へ。さすがに今日までもあるは、死ぬまじかりける人を、憑き染み、領じたる者の去らぬにこそあゝめれ。あが佛京に出で給はゞこそはあらめ、此處までは敢へなん。」など、いみじき事を書き續けて、奉れ給へれば、（僧都）「いと怪しき事かな、かくまでもありける人の命を、やがて打捨てゝましかば、さるべき契ありてこそは、我しも見附けゝめ。試に助け果てんかし。それに留らずは、業盡きにけりと思はんとて、下り給ひけり。悅び拜みて、月頃の有樣を語る。（尼君）「かく久しう煩ふ人は、む

○おほな〳〵　懇に。

○吾無慚の法師にて　僧都自ら卑下して云ふ。無慚は慚づべきを慚ぢぬこと。

○この修法の程に驗見えずば　行者の物を祈るには平生の修練の行を此時の顯に驗けて祈るなり。

○調ぜられ　調伏せられ。

○昔は行せし法師の云々　善相公の記にある紺青鬼に本づきて書けるなるべし。

○住き女の歌多住み給ひし所　宇治の聖の宮を云ふ。

○片方　大君を指す。

○此人　浮舟を指す。

づかしき事自らあるべきを、聊衰へず、いと清げにねぢけたる所なくのみ物し給ふ。さて限と見えながらも、かくて生きたる事なりけり。」など、おほな〳〵泣く〳〵の給へば、（僧都）「見附けしより、珍らかなる人の御有樣かな。いで。」とて、差覗きて見給ひて、（僧都）「實にいと驚策なりける人の御容面かな。功德の報にこそ、かゝる容貌にも生ひ出で給ひけめ。如何なる違目にて、かく害はれ給ひけん。若し然にやと聞き合せらるゝ事も無しや。」と問ひ給ふ。（尼君）「更に聞ゆる事も無し。何かは、初瀬の觀音の賜へる人なり。」との給へば、（僧都）「何か、其れ緣に隨ひてこそ導き給ふらめ。種なき事は如何でか。」などの給ひ、怪しがり給うて、修法始めたり。公の召にだに從はず、深く籠りたる山を出で給ひて、すゞろに斯かる人の爲になん行ひ騷ぎ給ふと、物の聞えあらん、いと聞きにくかるべし、と思し、弟子どもゝ云ひて、人に聞かせじと隱す。僧都「いであなかま。大德たち、吾無慚の法師にて、戒の中に、破る戒は多からめど、女の筋に附けて、まだ誹取らず、過つこと無し。齡六十に餘りて、今更に人のもどき負はんは、さるべきにこそはあらめ。」との給へば、（弟子）「善からぬ人の、物を便無く言ひ做し侍る時には、佛法の瑕となり侍る事なり。」と、快からず思ひて言ふ。（僧都）「この修法の程に驗見えずば。」と、いみじき事ども誓ひ給ひて、夜一夜加持し給へる曉に、人に假り移して、何樣の者斯く人を惑はしたるぞと、有樣ばかり言はせまほしうて、弟子の阿闍梨、取々に加持し給ふ。月頃は些も顯れざりつる靈氣、調ぜられて、（靈）「己は此處まで詣で來て、かく調ぜられ奉るべき身にもあらず。昔は行せし法師の、些なる世に恨を留めて、漂ひありきし程に、住き女の數多住み給ひし所に住み着きて、片方は失ひてしに、此人は心と世を恨み給ひて、我如何で死なんと云ふ事を、夜晝の給ひしに便を得て、いと暗き夜、一人物し給ひしを取りてしなり。されど觀音、と樣かう樣にはぐゝみ給ひければ、此僧都に負け奉りぬ、今は罷りなん。」との給へば、（僧都）「斯く言ふは何ぞ。」と問へば、憑きたる人、物はかなき故にや、はか〴〵しくも言はず。正身の心地は爽に、聊物覺えて見まはしたれば、一人見し人の顏は無くて、皆老法師、ゆがみ衰へたる者のみ多かれば、知らぬ國に來にける心地して、いと悲し。ありし世の事思ひ出づれど、住みけん所、誰と云ひし人とだに、確にはか〴〵しうも覺えず。唯我は限とて身を投げし人ぞかし。何處に來にけるにか、とせめて思ひ出づれば、いといみじと物を思ひ歎きて、皆人の寢たりしに、妻戸を放ちて出でたりしに、風烈しく川波も荒う聞えしを、一人物恐ろしかりしかば、來し方行く先も覺えで、簀子の端に足を差下しながら、行くべき方も惑はれて、歸り入らんも中空にて、心强く此世に失せなんと思ひ立ちしを、嗚呼がましうて、人に見付けられんよりは、鬼も何も食ひて失ひてよと言ひつゝ、つく〴〵と居たりしを、いと清げなる男の寄り來て、「いざ給へ、己が許へ。」と言ひて、抱く心地のせしを、宮と聞えし人のし給ふと覺えし程なり。心地惑ひにけるなゝめり。知らぬ所に据ゑ置きて、此男は消え失せぬと見しを、遂にかく本意の事もせずなりぬると思ひつゝ、いみじう泣くと思ひし程に、その後の事は絶えて如何にも〳〵覺えず。人の言ふを聞けば、多くの日頃も經にけり。如何に憂き樣を、知らぬ人に扱はれ見えつらんと、恥かしう、遂に斯くて生き返りぬるかと思ふも口惜しければ、いみじく覺えて、なか〳〵沈

○いと清げなる男　靈の人に現じて見えけるなり。

○宮　匂宮。

○本意の事　入水の事。

○ぬるみ　熱。

○心には猶如何で　以下浮舟の心なり。

○いとほしげなる云々　尼君の心中なり。

○おれ〳〵しき　柔和なる

○やめ「やすめ」とありし「す」の字の脱したるなるべし。

○一年足らぬ九十九髪多かる所　老人達ばかり居る所の意。伊勢物語老女の歌「百年に一年足らぬ九十九髪我を戀ふらし儲に見ゆ」に本づきて書けるなり。

○危き心地すれ　若し天人ならば直に失せ給ふべければなり。

○怪しかりし程　霊氣に取られたりし時を指す。

み給へりつる日頃は、現心も無き樣にて、物聊參る事も有りつるを、露ばかりの湯をだに參らず。（尼君）「如何なれば斯く賴もしげ無くのみはおはするぞ。うちはへぬるみなどし給へる事は冷め給ひて、爽に見え給へば、嬉しう思ひ聞ゆるを。」と、泣く〳〵弛む折無く添ひ居て扱ひ聞え給ふ。在る人々も、あたらしき御樣容を見れば、心を盡してぞ惜み守りける。心には猶如何で死なんとぞ思ひ渡り給へど、さばかりにて生きとまりたる人の命なれば、いと執念くて、やう〳〵頭もたげ給へば、物參りなどし給ふにぞ、なか〳〵面癖せもて行き、何時しかと嬉しう思ひ聞ゆるに、（浮舟）「尼に爲し給ひてよ。さてのみなん生く樣も有るべき。」との給へば、いとほしげなる御樣を、如何でか然は爲し奉らん。とて、唯頂ばかりを削ぎ、五戒ばかりを受けさせ奉る。心許無けれど、本よりおれ〳〵しき人の心にて、えさかしく强ひてもの給はず。僧都は「今は斯ばかりにて、勞はり休め奉り給へ。」と言ひ置きて、登り給ひぬ。

夢のやうなる人を見奉るかなと、尼君は喜びて、せめて起し据ゑつゝ、御髪手づから梳り給ふ。さばかりあさましう引き結ひて棄ち遣りつれど、いたうも亂れず、解き果てたれば、艶々と清らなり。一年足らぬ九十九髪多かる所にて、目もあやに、いみじき天人の天降れるを見たらんやうに思ふも、危き心地すれど、（尼君）「何どかいと心憂く、かばかりいみじく思ひ聞ゆるに、御心を隔てゝは見え給ふ。何處に誰と聞えし人の、さる所には如何でおはせしぞ。」とせめて問ふを、いと恥かしと思ひて、（浮舟）「怪しかりし程に皆忘れたるにやあらん。ありけん樣なども更に覺え侍らず。唯仄に思ひ出づる事とては、唯如何で此

○かぐや姫を見付けたりけん竹取の翁よりも云々　竹取物語を引けるなり、上にいみじき天人の天降れるを見たらんやうにと書けるに合せてかぐや姫を言ひ出せるなり。

○此主人　大尼君。

○上達部　右衞門督。

○善き君達　中將。

○昔の山里　宇治。

○引坂　鳴子。

○夕霧の御息所　夕霧の卷に見ゆる御息所の意。一條院御息所（朱雀院の更衣）

世にあらじと思ひつゝ、夕暮毎に端近くて眺めし程に、前近く大なる木のありし下より、人の出で來て、率て行く心地なんせし。それより外の事は、我ながら誰とも得思ひ出でられ侍らず。」と、いとらうたげに言ひ做して、「世の中に猶ありけりと、如何で人に知られじ。聞き付くる人もあらば、いといみじうこそ。」とて泣い給ふ。餘り問ふを苦しと思したれば、得問はず。かぐや姫を見付けたりけん竹取の翁よりも珍しき心地するに、如何なる物の隙に消え失せんとすらんと、靜心無くぞ思しける。此主人もあてなる人なりけり。女の尼君は、上達部の北の方にてありけるが、其人亡くなり給ひて後、女たゞ一人をいみじくかしづきて、善き君達を聟にして思ひ扱ひけるを、其女の君の亡くなりにければ、心憂しいみじと思ひ入りて、容をも變へ、かゝる山里には住み始めたるなりけり。世と共に戀ひ渡る人の形見にも、思ひよそへつべからん人をだに見出でゝしがなと、徒然と心細き儘に、思ひ歎きけるを、かく覺えぬ人の、容けはひも優り樣なるを得たれば、うつゝの事とも覺えず、怪しき心地しながら、嬉しと思ふ。ねびにたれど、いと清げに由ありて、有樣もあてはかなり。昔の山里よりは、水の音もなごやかなり。作り樣故ある所の木立面白く、前栽などもをかしく故を盡したり。秋に成り行けば、空の氣色も哀なるを、門田の稻苅るとて、處に付けたる物眞似しつゝ、若き女どもは歌謠ひ興じ合へり。引板引き鳴す音もをかしく、見し東路などの事なども思ひ出でられて、

かの夕霧の御息所のおはせし山里よりは、今少し入りて山に偏掛けたる家なれば、松陰繁く風の音もいと心細きに、徒然と行をのみしつゝ、何時となくしめやかなり。尼君ぞ、

○少將の尼君　小野の尼君に仕ふる人。

○手習に　浮舟此手習に歌書きしより手習の君と稱す。

○月の都に　都にの意。月を眺めて詠める歌なれば斯く言へるなり。

○親如何に云々　以下四句手習の心中なり。

○異樣にてあるも　宮仕ならぬをいふ。

○誰にも〳〵　薫君にも匂君にも。

月など明き夜は、琴など彈き給ふ。少將の尼君など云ふ人は、琵琶彈きなどしつゝ遊ぶ。

（尼君）「かゝるわざはし給ふや。徒然なるに。」など云ふ。昔も怪しかりける身にて、心のどかに、さやうの事すべき程も無かりしかば、聊をかしき樣ならずも、生ひ出でにけるかなと、斯く定過ぎにける人の心を遣るめる折々に付けては思ひ出づ。猶あさましく物はかなかりけると、我ながら口惜しければ、手習に、

（浮舟）「身を投げし、涙の河の、早き瀨を、簭掛けて、誰か留めし。」

思の外に心憂ければ、行末もうしろめたく疎ましきまで思ひ遣らる。月の明き夜な〳〵、老人どもは、艶に歌詠み、古思ひ出でつゝ、樣々の物語などするに、いらふべき方も無ければつくぐ〳〵と打眺めて、

（手習）「われ斯くて、憂き世の中に、めぐるとも、誰かは知らん、月の都に。」

今は限と思ひし程は、戀しき人多かりしかど、他人々は然しも思ひ出でられず。唯親如何に惑ひ給ひけん。乳母萬に如何で人並々になさんと思ひいられしを、如何に敢無き心地しけん。何處にあらん。我世に在る物とは如何でか知らん。同じ心なる人も無かりし儘に、萬隔つる事なく語らひ見馴れたりし右近なども折々は思ひ出でらる。若き人のかゝる山里に、今はと思ひ絶え籠るは、難きわざなりければ、唯いたく年經にける尼七八人ぞ、常の人にては在りける。それらが女孫やうの者ども、京に宮仕するも、異樣にてあるも、時々ぞ來通ひける。かやうの人に付けて、見しわたりに往き通ひ、自ら世にありけりと誰にも〳〵聞かれ奉らん事、いみじく恥かしかるべし。如何なる樣にてさすらへけん、など思ひ遣り、萬怪しかるべきを思へば、かゝる人々に掛けても見えず。唯侍從、こも君とて、尼君の我が人にしたりける二人をのみぞ、此御方に言ひ分けたりける。みめも心樣も、昔見し都鳥に似たる事無し。何事に付けても、世の中にあらぬ所はこれにやあらんとぞ、且は思ひ做されける。斯くのみ人に知られじと忍び給へば、誠に煩はしかるべき故ある人にも物し給ふらんとて、委しき事、在る人々にも知らせず。

尼君の昔の婿の君、今は中將にて物し給ひける弟の禪師の君、僧都の御許に物し給ひける。山籠したるを訪ひて、兄弟の君だち常に登りけり。横川に通ふ道のたよりに寄せて、中將此處におはしたり。先打追ひて、あてやかなる男の入り來るを見出して、忍びやかにておはせし人の御有樣けはひぞ、亮に思ひ出でらるゝも、いと心細き住居の徒然なれど、住み着きたる人々は、物清げにをかしうし做して、垣穗に植ゑたる瞿麥も面白く、女郎花桔梗など咲き始めたるに、色々の狩衣姿の男どもの若き數多して、君も同じ裝束にて、南面に呼び据ゑたれば、打眺めて居たり。年二十七八の程にて、ねび調ひ、心地無からぬ樣持て附けたり。尼君障子口に几帳立てゝ、對面し給ふ。先づ打泣きて、（尼君）「年頃の積には、過ぎにし方いとゞ氣遠くのみなん侍るを、山里の光に猶待ち聞えさする事の、打忘れず止み侍らぬを、且は怪しく思ひ給ふる。」との給へば、心の中あはれに、（中將）「過ぎにし方の事ども、思ひ給へられぬ折無きを、あながちに住み離れ顏なる御有樣に、怠りつゝなん。山籠も羨ましう、常に出で立ち侍るを、同じくはなど慕ひ纏はさるゝ人々に、妨げらるゝやうに侍りてなん。今日は皆省き捨てゝ物し侍りつる。」との給ふ。山籠の御羨は、な

○此御方に云々　浮舟の召使人に定めたるなり。

○昔見し都鳥に云々　都の人と云はんとて詞を飾れるなり、伊勢物語に「名にし負はゞいざ言問はん都鳥我が思ふ人は在りや無しやと」とあるに據りて我が思ふ人は在りや無しやと問はまほしけれど都鳥に似たる所も無ければ甲斐無しとの意を含めて斯く言へるなり。

○忍びやかにおはせし人　薫君。

○狩衣姿の男ども　中將の供人どもなり。

○同じくはなど　同じくは我をも伴なへなどと。

○妨げらるゝやうに　此處を訪ふ事はなり。

○水飯　今の常の飯なり。
○つゝみ無き心地　憚無き心地。
○問はず語り　手習君の事につきてなり。
○姫君　手習君。
○檜皮色　表黑ばみたる蘇芳に裏は縹なり。出家の人多く之を用ゐる。
○いらゝぎたる　角だちたる。
○故姫君　尼君の女。
○あないみじ　以下手習君の心中なり。
○客人　中將。
○少將　少將の尼。大尼君の弟子なり。
○仕うまつり馴れにし人にて　此少將の尼はなり。

かく〳〵今樣だちたる御物眞似びになん。昔を思し忘れぬ御心ばへも、世に靡かせ給はざりけると、疎ならず思ひ給へらるゝ折多く。」など云ふ。人々に水飯などやうの物食はせ、君にも蓮實などやうの物出したれば、馴れにしあたりにて、さやうの事もつゝみ無き心地して、村雨の降り出づるに留められて、物語しめやかにし給ふ。言ふ甲斐なくなりにし人よりも、此君の御心ばへなどの、いと思ふやうなりしを、餘所の物に思ひ做したるなん、いと悲しき。何ど忘れ形見をだに留め給はずなりにけん、と戀ひ忍ぶ心なりければ、たまさかに斯く物し給へるに付けても、珍しく哀に覺ゆべかゝめる儘に、問はず語りもし出でつべし。姫君は、我は我と思ひ出づる方多くて、眺め出し給へる樣、いと美し。白き單衣のいとなさけ無くあざやぎたるに、袴も檜皮色に習ひたるにや、光も見えず黑きを着せ奉りたれば、かゝる事どもゝ見しには變りて、怪しうもあるかなと思ひつゝ、强々しういらゝぎたる物ども着給へるしも、いとをかしき姿なり。御前なる人々、故姫君のおはしまいたる心地のみし給ふに、中將殿をさへ見奉れば、いとあはれにこそ。同じくは昔の樣にておはしまさせばや。いと好き御あはひならんかし、と言ひ合へるを、あないみじや、世に在りて、如何にも〳〵人に見えんこそ、それに付けてぞ昔の事思ひ出でらるべき。さやうの筋は、思ひ絶えて忘れなんと思ふ。

尼君入り給へる間に、客人、雨の氣色を見煩ひて、少將と云ひし人の聲を聞き知りて、呼び寄せ給へり。(中將)「昔見し人々は、皆此處に物せらるらんやと思ひながらも、かう參り來る事も難くなりにたるを、心淺きにや誰も〳〵見做し給ふらん。」などの給ふ。仕うまつり馴れにし人にて、哀なりし昔の事ども思ひ出でたる序に、(中將)「かの廊のつま入りつる程、風騷がしかりつる紛れに、簾の隙より、なべての樣にはあるまじかりつる人の、打垂髪の見えつるは、世を背き給へるあたりに誰ぞ、となん見驚かれつる。」との給ふ。姫君の立ち出で給へりつる後手を見給へりけるなゝめりと思ひて、況てこまかに見せたらば、心留り給ひなんかし。昔の人はいとこよなく劣り給へりしをだに、まだ忘れ難くし給ふめるを、と心一つに思ひて、(少將)「過ぎにし御事を忘れ難く、慰めかね給ふめりし程に、覺えぬ人を得奉り給ひて、明暮の見物に思ひ聞え給ふめるを、打解け給へる御有樣を、如何で御覽じつらん。」と云ふ。かゝる事こそはありけれ、とをかしくて、何人ならん、實にいとをかしかりつと、仄なりつるをなか〳〵思ひ出づ。こまかに問へど、其儘にも言はず。(少將)「自ら聞し召してん。」とのみ云へど、うちつけに問ひ尋ねんも、樣惡しき心地して、(供人)「雨も止みぬ。日も暮れぬべし。」と云ふに、唆かされて出で給ふ。前近き女郎花を折りて、「何匂ふらん」と口ずさみて、獨言ち立てり。人の物言ひを、さすがに思し咎むる事など、古代の人どもは物愛でをし合へり。いと清げにあらまほしくもねびまさり給ひにけるかな。同じくは昔の樣にても見奉らばや、とて、(尼君)「藤中納言の御あたりには、絶えず通ひ給ふやうなれど、心も留め給はず、親の殿勝になん物し給ふ、とこそ云ふなれ。」と、尼君もの給ひて、(尼君)「心憂く物をのみ思し隔てたるなんいとつらき。今は猶さるべきなゝめりと思し做して、晴れ〴〵しく持て做し給へ。この五年六年時の間も忘れず、戀し悲しと思ひつる人の上も、かく見奉りて後よりは、こよなく思ひ忘れにて侍る。思ひ聞

○打垂髪　世の常の女髪なり。
○昔の人　尼君の女。
○何匂ふらん　拾遺集に「此處にしも何にほふらん女郎花人の物いひさがにくき世に」
○いと清げに云々　以下中將の姿を見て尼君の思ず心中なり。
○心憂く物をのみ云々　尼君の手習君にいへる詞なり。
○思ひ聞え給ふべき人々